

研究紀要

第5号
2008.2

目 次

山形県における縄文時代中期後半の集落様相 —山形盆地西部を中心として—	菅原 哲文	1
大洞BC式に固有の「入組三叉文高坏」について	小林 圭一	17
縄文時代晩期後半の蓋形土器	佐藤 祐輔	81
山形県内の古墳時代前期土師器について —近年における発掘調査の成果—	吉田江美子	113
山形県内出土斎串の集成と分類	山内 七恵	135
庄内地方北部の10～11世紀代の土器群の様相	植松 晓彦	145
山形県酒田市亀ヶ崎城跡出土の備前焼について	高桑 登	169

山形県における縄文時代中期後半の集落様相

— 山形盆地西部を中心として —

菅 原 哲 文

1 はじめに

縄文時代中期の集落は、山形県村山市西海瀬遺跡に認められるような、広場を中心として、規則的に遺構群が重層して環状に配置される環状集落が典型的な様相として捉えられている側面がある。しかしながら、中期中葉の大型住居跡を中心とした大規模な環状の集落構成は、住居跡に複式炉が出現する中期後葉大木9・10式期になると姿を消し、集落構造における規則性が希薄となり、住居跡の小型化と規格化が進行するなど、環状構造や集落の構造に変化が生じることが指摘されている（小林2001）。

ここでは、県内の中期後半にかけての主な集落をとりあげ、集落の遺構群の変遷と配置、住居跡の形状と規模

の変化に注目し、集落の構成パターンと変遷、集落規模との関係について検討したい。なお、県内の縄文時代中期集落の調査事例は豊富であり、県内の事例の全てを網羅して検討するのは難しいため、今回は山形盆地西部の調査例を中心として検討を行うこととした。

2 時期区分の設定

集落の変遷を検討するにあたり、住居跡や他の遺構の時期を、出土土器の型式をもとに決定する手続きが必要である。特に、縄文時代中期後半の集落は、遺構数が多く、かつ遺構間の重複関係も頻繁に認められるので、土器型式を細分してより細やかな集落の変遷が把握できるよう努めた。

東北地方南部の中期後半の土器型式は、大木8b・9・



1 高瀬山遺跡(HO地区)中期集落地点 2 高瀬山遺跡(1期)中期集落地点 3 うぐいす沢遺跡
4 桐橋遺跡 5 向原遺跡 6 富沢 遺跡 7 橋上遺跡 8 山居遺跡

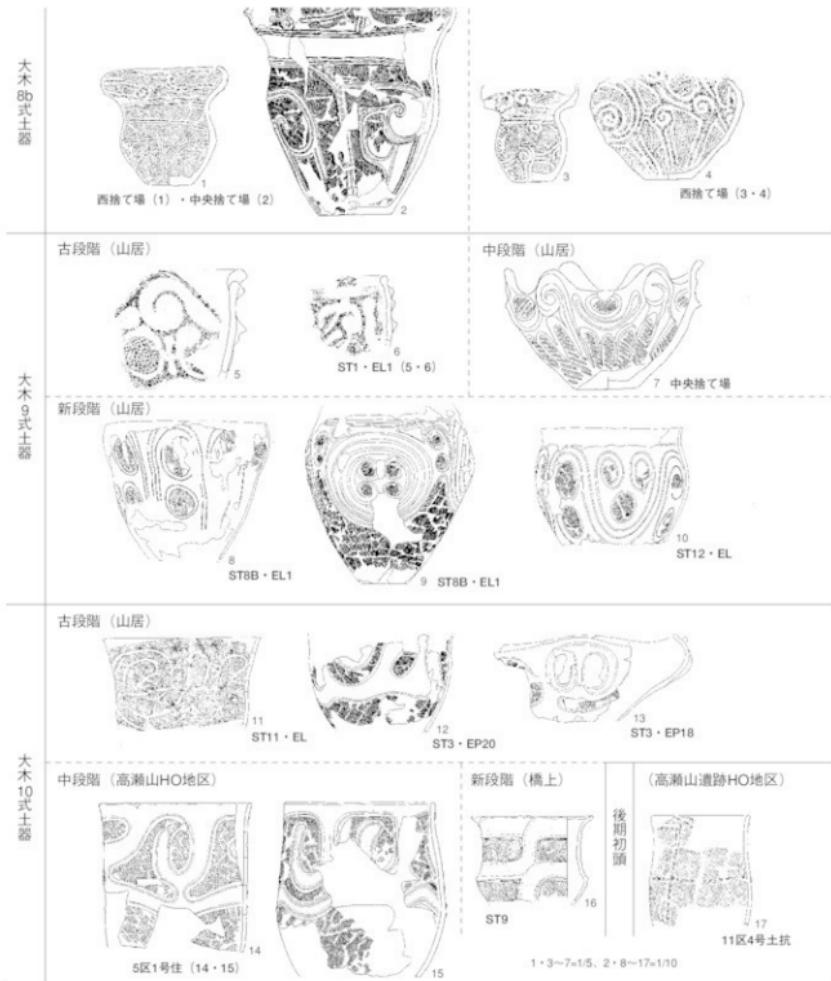
第1図 遺跡位置図 (S=1:150,000)

10式土器である。各土器型式の細分であるが、大木8b式は、古・新の2段階に、大木9・10式は、古・中・新の3段階に細分した¹⁾(第2図)。

3 中期集落の事例検討

山形県の中央部に位置する山形盆地では、盆地西部の

寒河江川流域や最上川流域において、高瀬山遺跡をはじめとした縄文時代の遺跡が、河岸段丘上に数多く分布している(第1図)。縄文時代中期の集落跡の調査事例も多い。ここでは、縄文時代中期後半を中心とする、最上川流域の高瀬山遺跡HO地区・SA地区、高瀬山遺跡1期地区、うぐいす沢遺跡、柴橋遺跡、寒河江川流域の山居



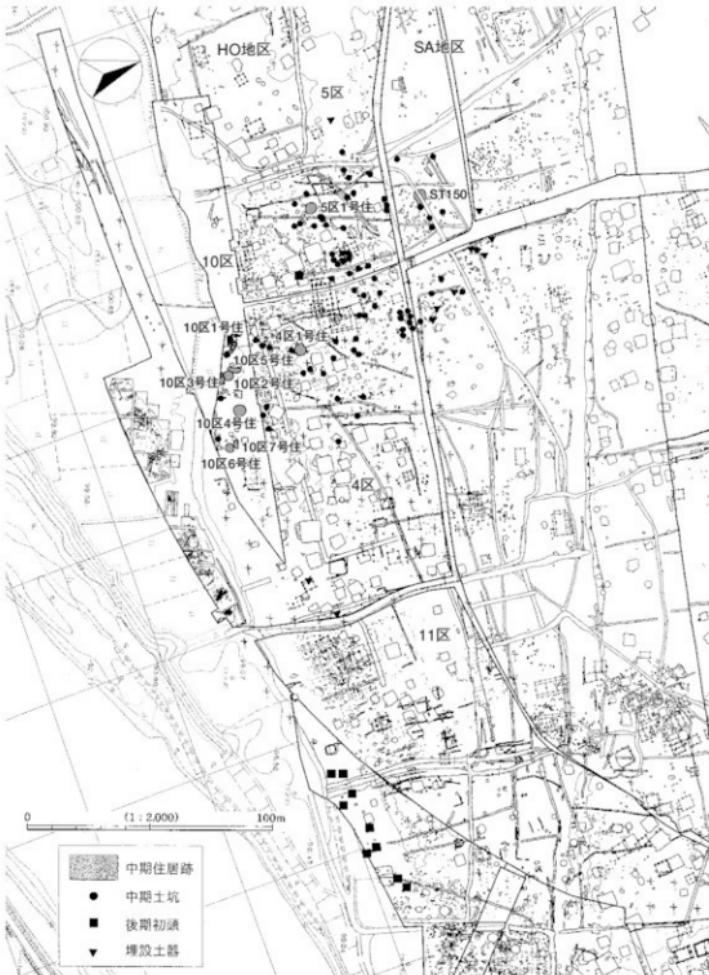
第2図 中期後半から後期初頭の土器

遺跡、最上川の支流となる月布川流域の橋上遺跡をとりあげ、集落の構成と変遷について検討をおこなうこととする。

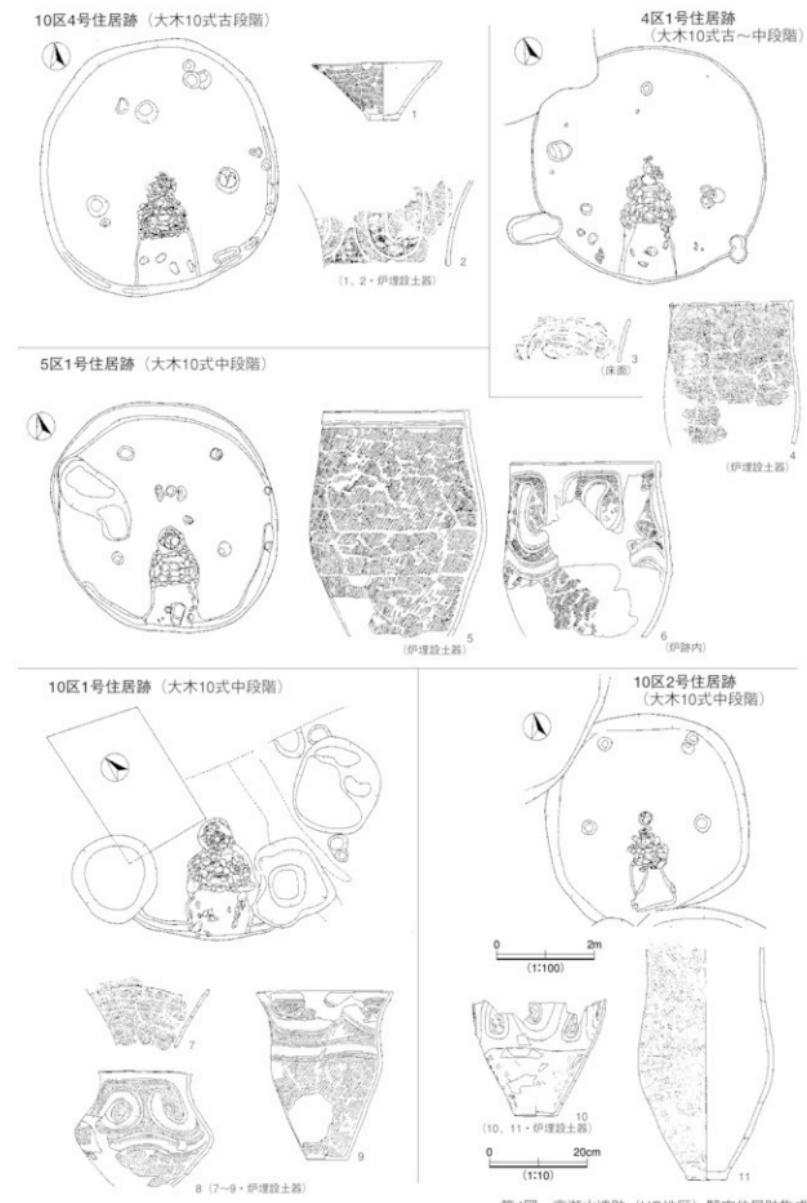
(1) 高瀬山遺跡HO地区・SA地区

高瀬山遺跡は、寒河江市街中心部から南西約2kmの地点に位置し、最上川左岸の小丘陵と3～4面からなる河成段丘上に立地する。東西約1.7km、南北約0.7km、規模は

約90haの広大な規模をもつ遺跡である。平成6年から平成9年の4カ年にわたり、山形県埋蔵文化財センターにより、東北横断自動車道建設事業にかかる約15haに及ぶ発掘調査が行われた。高瀬山遺跡1期・2期・SA地区である。また、同じく平成9年から平成13年には、最上川ふるさと公園整備事業にかかる、高瀬山遺跡HO地区の約9haの発掘調査が実施された。HO地区では、縄



第3図 高瀬山遺跡(HO地区・SA地区)遺構平面図(小林ほか2005)



第4図 高瀬山遺跡 (HO地区) 整穴住居跡集成図

時代後期と晩期の、トチの実のアケ抜き加工に関わる施設と考えられる木組造構などの水場造構が検出されたことが注目された。

中期集落は、高瀬山遺跡1期、高瀬山遺跡SA地区、高瀬山遺跡HO地区に確認された。

高瀬山遺跡SA地区では(伊藤2001)、大木10式中段階の堅穴住居跡が1棟(S-T150)、土器埋設造構が8基、大木10式期を中心とした土坑73基が検出されている。高瀬山遺跡HO地区では、中期中葉大木8a式期の堅穴住居跡が1棟、中期末葉大木10式期の堅穴住居跡が6棟、中期後葉(大木9・10式期)が1棟検出された。その他、大木10式期を中心とする土坑が80基以上、埋設土器3基が検出された(小林ほか2005)。両遺跡は同一の集落と考えられる(第3図)。

住居跡の時間的変遷を検討する。最も古い時期は大木8a式期で、10区6号住居跡の1棟だけである。平面は円形で、直径3.8mと小型であり、炉は検出されていない。

大木10式期の堅穴住居跡は、両遺跡で7棟確認されているが、複式炉の埋設土器や出土土器により構築に時期差がある。

HO地区10区4号住居跡は大木10式古段階である。4区1号住居跡は大木10式古段階もしくは中段階と考えられる。5区1号住居跡、10区1号・2号住居跡、SA地区S-T150住居跡は、大木10式中段階に相当する(第4図)。土坑群は、ほとんどが大木10式中段階に帰属すると考えられる。

大木10式期の住居群は、全体として半円状に分布する状況が認められる。集落規模は、報告によれば直径120~150mとされる。段丘縁辺部にかかる部分(10区)は、住居の分布密度が高い。また、住居群の分布域に重複しつつ、その内側には土坑群が分布する。また、墓壙と考えられる土器埋設造構の分布であるが、集落の北端にあたるSA地区では、住居分布域の内側に土坑群と重複して、まとまった分布範囲をもつ。HO地区では、集落から外れた4区東端に2基が、5区の遺構分布域から西側に外れた地点に1基が分布する。また、5区1号住居跡や、土坑にまとまった遺物の廃棄が認められ、これらの遺構が機能を失った後に捨て場に転用されている。

大木10式古・中段階の堅穴住居跡の形態は、いずれも平面形が円形で、複式炉を備えている(第4図)。柱穴配

置は、主柱穴が3本ないし4本構成で、規格的である。住居跡の規模は、直径が4.1~5m、面積が19.8~20.8m²で、格差はあまり認められず類似した様相を示すと考えられる。

大木10式新段階になると、調査区内に住居跡は認められない。少数ながらも5区25号土坑などから遺物の出土が認められる。後期初頭も、この集落域に住居跡は認められず、わずかに、5区12号土坑などから当期の遺物が出土する。11区には土坑の分布が認められ、中期最終末から後期にかけては、11区に集落の主体が移動すると考えられる。

このように、高瀬山遺跡HO地区・SA地区の縄文時代中期の集落は、中期大木8a式や10式期に、1型式に満たない短期間に営まれた集落であり、型式1段階の同時期並存の可能性のある住居跡は、多くても4・5棟程度であると推測される。住居跡の規模は均一で、ばらつきはないよう見受けられる。

高瀬山遺跡周辺の最上川の河岸段丘沿いには、大木9・10式期の集落跡が多く分布し、高瀬山遺跡HO地区・SA地区は、その中の派生的な小規模集落としての性格が想定される。

(2) 高瀬山遺跡(1期)

高瀬山遺跡1期地区は、山形県埋蔵文化財センターにより、平成6~9年にかけての4次にわたる、延べ53,850m²の発掘調査が実施された。縄文時代では、前期後葉から末葉にかけての大型住居跡を中心とした、直径120mの環状をなす集落が検出されたことが注目された(齊藤ほか2004)。

1期地区の中期の集落であるが(第5図)、HO地区の東へ約600mの地点に位置し、中期後葉を中心とした堅穴住居跡が7棟検出された。低位段丘の5区に4棟の堅穴住居跡と土器埋設造構が、前期環状集落の分布する中位段丘でも、2棟の堅穴住居跡が検出された。時期は、大木8a・8b・9・10式にわたる。以下時期毎の遺構の分布を述べる。

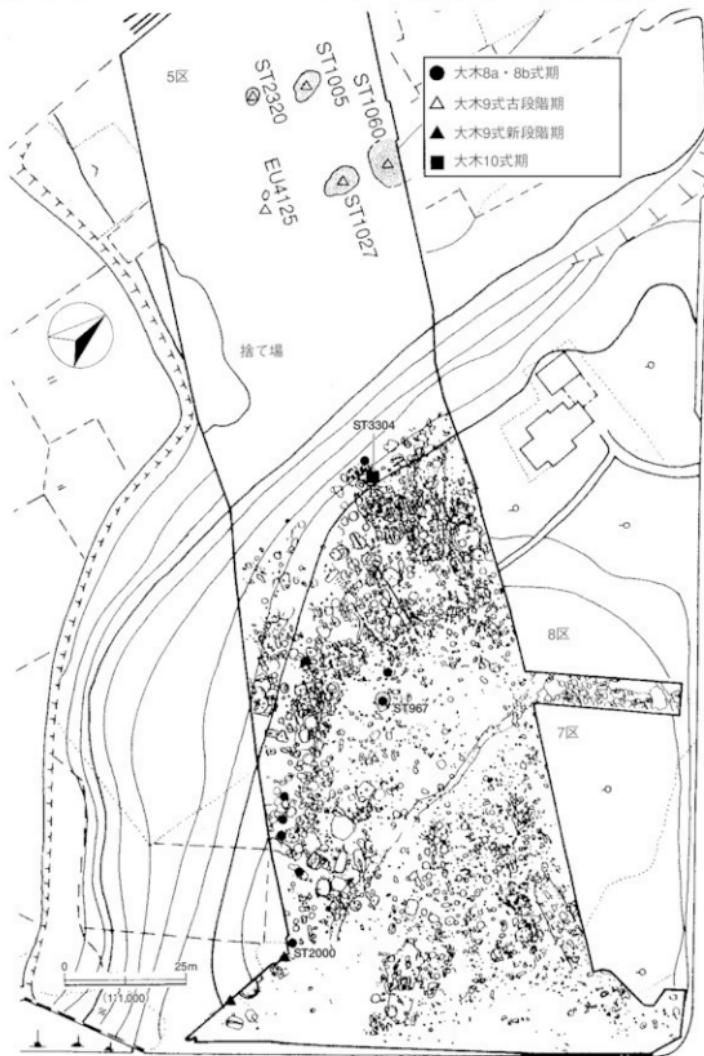
大木8a式期は、調査区内では中位段丘の縁辺に土坑のみが確認された。

大木8b式期は、前期集落の中心近くに、堅穴住居跡が1棟(S-T967)と、中位段丘の縁辺に、数基の土坑の分布が認められる。分布状況から考えると、調査区外の

中位段丘の縁辺に沿って遺構が分布すると考えられる。

大木9式古段階期は、低位段丘面の5区に4棟の住居跡と1基の土器埋設遺構（E U4125）が分布する。当期の住居跡は、5区 S T1005・S T1027・S T1060がある。

またS T2320は炉の形態より、同時期と考えられる。S T1005・S T1027は、平面形が楕円形を呈し、炉跡は、住居の壁側に寄った馬蹄形状の石圍炉で、住居の壁側には、前部と思われる張り出し部を伴っている(第6図)。

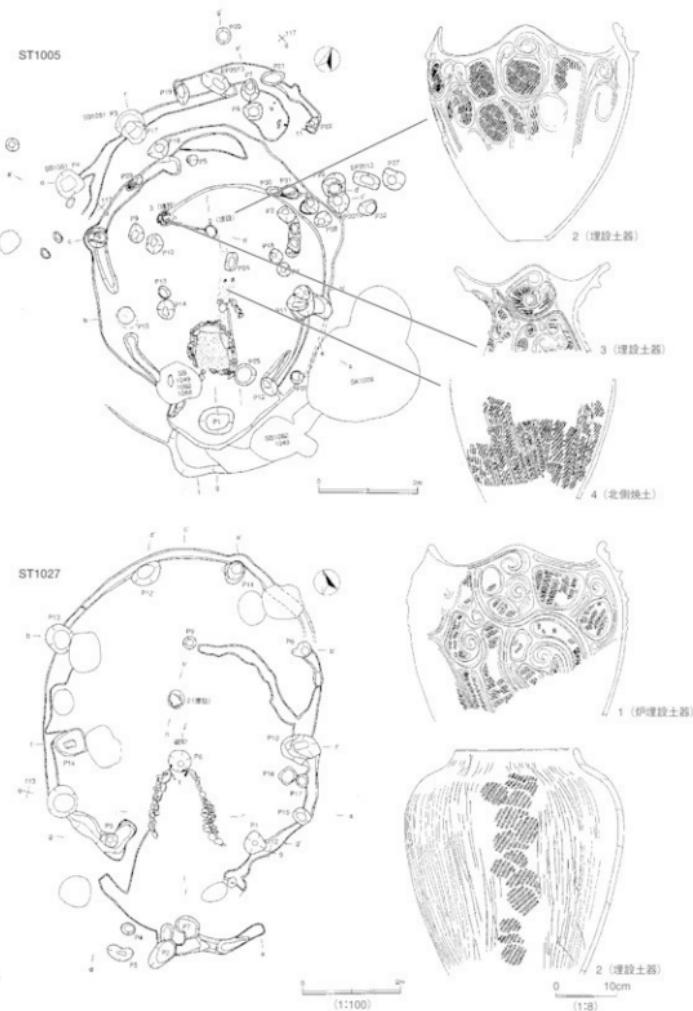


第5図 高瀬山遺跡（1期）遺構平面図

複式炉へと発展する前段階と考えられる炉跡である。また、ST1060、ST2320も平形は梢円形である。

ST1005は、北側で周溝が二重に検出され、石廻炉の他に、2ヶ所の炉跡と考えられる焼土が検出されており、建て替えもしくは拡張が考えられる。住居内に逆位に埋

設された埋甕が2基検出された。S T1027も、建て替えもしくは拡張が想定され、住居の中軸線上に正位に埋設された埋甕と考えられる埋設土器を伴う。住居の規模、面積であるが、長輪の長さが4~8.3m、面積12.9~32.2 m²とばらつきが認められる。また、当期の集落は、調査



区外の東側に広がる可能性が強い。また、集落北側の段丘の縁辺には捨て場が確認され、大木8b～10式期の遺物も出土している。

7区中位段丘面に分布する1棟(S T2000)は大木9式新段階期と考えられ、複式炉を伴う。南西側の調査区外に、同時期の住居跡がさらに分布する可能性がある。

大木10式期では、中位段丘縁辺に1棟(S T3304)が分布する。調査区内では、大木10式期の土坑は検出されていない。

当遺跡では、調査区外へ集落の範囲が広がることが想定される。しかし、土坑や墓壙の分布が希薄であることより、それに伴う住居群の規模も限られると考えられる。HO・SA地区のように、数棟規模の住居跡が散在していることが想定される。調査範囲では、中期の大木8a式から10式などの土器型式が長期にわたって確認されているものの、同地点で継続して集落を構えていたのではなく、1型式内の1段階などの短期間で、数棟単位である領域内を移動している状況が想定される。

(3) 寒河江市うぐいす沢遺跡

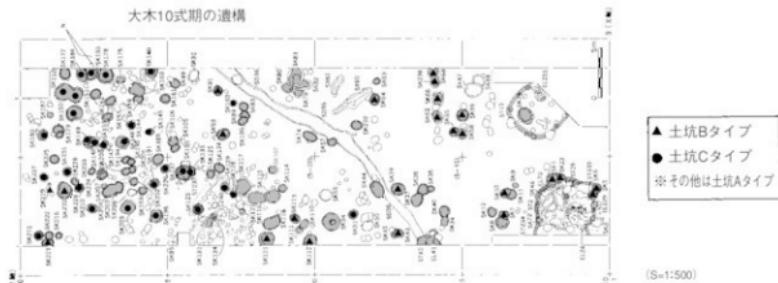
うぐいす沢遺跡は、最上川の右岸に位置し、最上川によって開拓された河岸段丘の上段の微高地上に立地している。昭和55年に山形県教育委員会により第1次調査が行われ、約1,150m²について精査が実施された(佐藤・渋谷1981)。遺跡の時期は、大木8b・9・10式期にかけての時期と考えられる。第1次調査で8棟の堅穴住居跡と、129基の土坑が検出されている。かなり遺構の重複が激しい(第7図)。

大木8b式期は、遺物の出土のみが確認され、大木9

式期では、堅穴住居跡1棟(S T237)、土坑3基と遺構数が少ないので、ここでは大木10式古・中段階の集落をとりあげる。

大木10式期の堅穴住居跡は7棟検出され、遺構の重複が激しい(第7図下段)。

当期の遺構の分布であるが、第1次調査区東側の、鷲沢川に近い地点に住居跡が分布し、西側にかけて土坑群が密集して分布する。報告書では、土坑をA・B・Cタイプに分類している。Aタイプは断面形が皿形をなし、性格は不明とされる。Bタイプは、タライ形の断面形で、堆積状況(覆土にブロックが混じり、レンズ状の堆積をなす)からみて墓壙とされている。Cタイプは袋状の断面をなし、貯蔵用の施設(貯蔵穴)とされている。報告でも指摘されているように、調査区東側の住居群の西側



第7図 うぐいす沢遺跡調査区・第1次発掘調査区遺構平面図

に、一部重複して墓壙とされるBタイプの土坑が分布する。また、調査区東から中央部を中心としてAタイプの土坑が分布し、調査区西側を中心として、貯蔵穴とされるCタイプの土坑が分布する。貯蔵穴は、大きさが直径100~120cm規模の小形のものが最も多い。

集落の構成であるが、平坦地東側の縁辺に沿って住居群が分布し、住居群と一部重なりながらも西側に墓壙群が分布し、さらに西側に貯蔵穴を中心とした土坑群が分布する、弧状の展開が想定される。土器埋設構造は、調査区内では検出されていない。他の地点に分布域を形成している可能性がある。

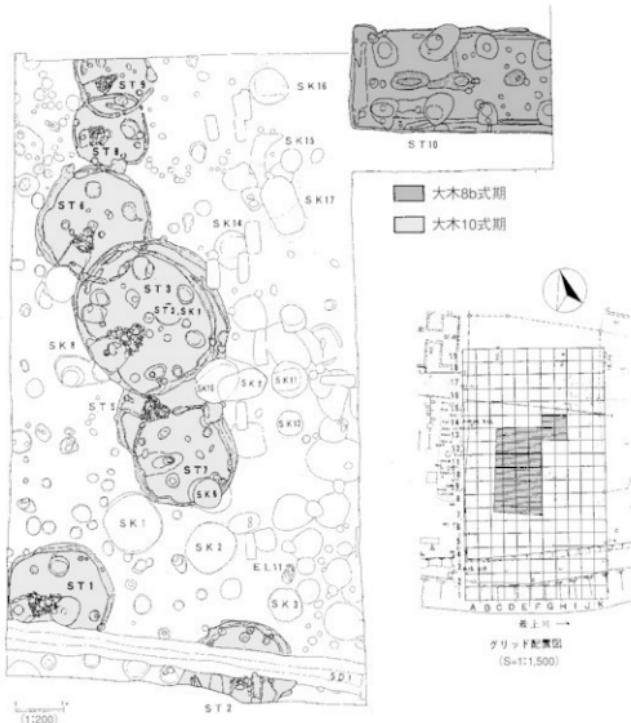
遺構や出土遺物に型式幅があること、大木10式期では土坑群が密集して分布すること、土坑墓が25基とまとまって分布する墓域が認められることより、2~3型式にわたって長期的に継続していた集落と考えられる。

(4) 寒河江市柴橋遺跡

柴橋遺跡は、最上川の北岸に隣接した氾濫原面に立地する。寒河江市教育委員会により昭和62年に調査が実施され(黒田ほか1989)、縄文時代中期の10棟の堅穴住居跡や、土坑が65基検出された(第8図)。

大木8b式期の遺構であるが、平面形が長方形のST10堅穴住居跡が該当する²⁾。長軸の残存長8.2m、短軸4.2mと大方形で、4基の地床炉が検出されている。また、当期の土坑群も存在し、深さが3mに及ぶような大型土坑(SK1等)は、8b式期に帰属する。

大木10式期の堅穴住居跡は9棟を占め、重複が顕著である。住居跡は全て複式炉を備える。大木10式期の細別時期は不明であるが、大木10式古・中段階が下限で、高瀬山遺跡H.O地区・S.A地区よりも前出の時期と考えられる。住居跡の柱穴配置は、すべて4本の主柱穴となり、

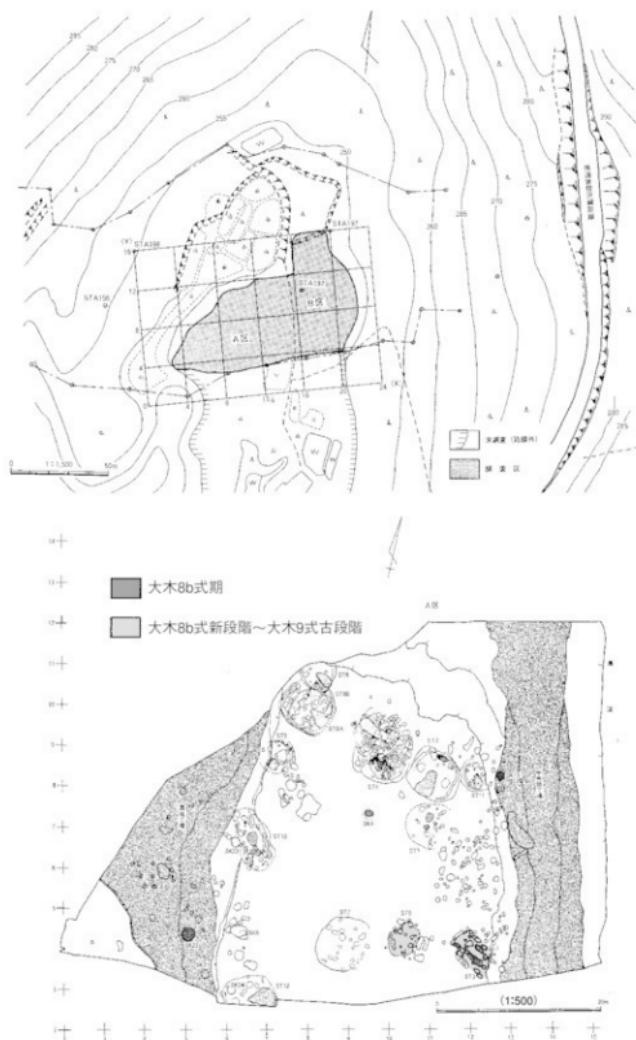


第8図 柴橋遺跡調査区・遺構平面図

かつ複式炉の前庭部に1本の補助柱穴を備える。住居跡の規模は、直径5m台が多く、最小が3.7m、最大が7.05m、住居面積は21~26m²が主体で、最小が10.74m²、最大が39.01m²である。高瀬山遺跡例と比較して、住居規模は

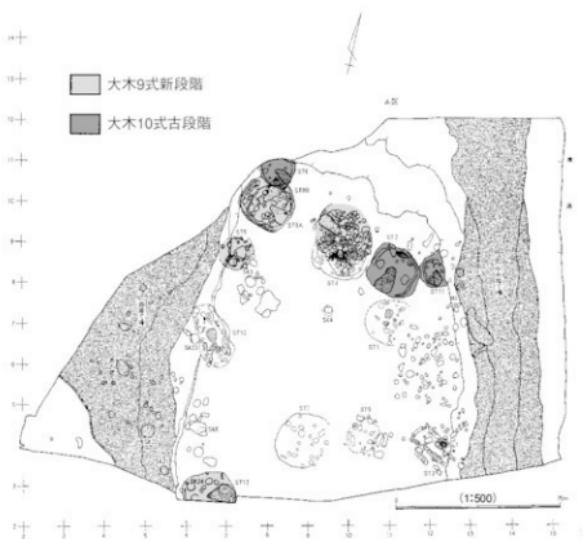
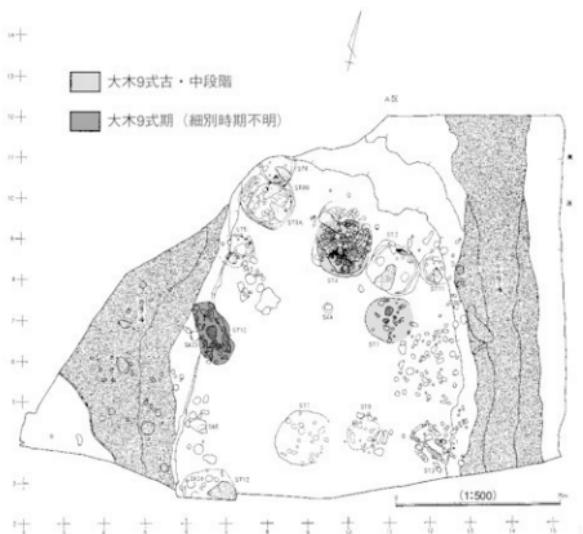
格差が認められる。遺物は、大木8b式・9式の遺物が混在しているため、この時期も同じ地点に集落が継続的に営まれていたと考えられる。

大木10式期の集落全体の様相は、住居跡の配置より、



調査区東側が中心部となる半円状もしくは環状の構成をとるものと推定される。住居群に伴う具体的な土坑は不

明であるが、住居群と重複もしくは、やや内側に分布すると思われる。遺構及び出土土器が数型式に及ぶこと、



第10図 山居遺跡・遺構平面図

住居跡の重複の多いこと、土坑等の分布も密であることから、大木8 b式・9式・10式前半にかけての中核的な集落の可能性があると考えられる。

(5) 西川町山居遺跡

西川町山居遺跡
山居遺跡は、西川町大字水沢字山居に所在し、寒河江川の支流である、水沢川左岸の小高い丘（舌状に張り出した台地）に立地する。平成6年に山形県埋蔵文化財センターにより、5,500m²の発掘調査が実施された（氏家・志田1998）。炉の作り替えも含めて、竪穴住居跡が22棟検出された（第9・10図）。竪穴住居跡が分布する台地の周囲には、捨て場が確認され、遺物総出土箱数は1,215箱と膨大である。出土土器による竪穴住居跡の時期区分は以下のように考えられる。

- ・大木8 b式新段階—大木9式古段階…2棟（ST 3・ST 9）
- ・大木9式古・中段階…4棟（ST 1・ST 4 E L 80・ST 4 E L 81・ST 4 E L 6 C）
- ・大木9式新段階…8棟（ST 4 E L 1 A・ST 4 E L 1 B・ST 4 E L 2・ST 5・ST 8 A・ST 8 B E L 1・ST 8 B E L 2・ST 12）
- ・大木9式期に位置づけられるが細別時期が不明…5棟（ST 4 E L 3・ST 4 E L 5・ST 4 E L 6 B・ST 10）³⁾
- ・大木10式古段階…3棟、炉跡1基（ST 2・ST 6・ST 11・SL 1）

捨て場からは、前期では大木5・6式、中期では大木7 b式以降の土器が出土している。
大木8 a式期の遺物は、捨て場から一定量出土する。それ以前の時期の捨て場からの出土遺物は僅かである。

大木8 b式新段階から大木9式古段階にかけての時期（第9図下）であるが、平面形が長方形のST 3、不整方形のST 9がある。炉は地床炉である。当期の遺物は、西捨て場・中央捨て場とも出土量が多い。

大木9式古・中段階（第10図上）であるが、集落に同時期に存在する可能性がある住居跡は、ST 1・ST 4である。ST 10は、平面形が長方形をなし、大木9式期とされるが、複式炉をもたない事から、当期もしくはそれ以前の可能性も考えられる。ST 4は、同じ地点に繰り返し重複して建て替えられており、特異なあり方を示している。石組部の敷石や埋設土器を伴わない初期的な

複式炉が認められる。捨て場からも当期の遺物が出土する。

大木9式新段階（第10図下）は、最も検出住居跡数が多い。ST 4を中心とし、ST 8・ST 5・ST 12が並存する可能性がある。住居跡は平面形が円形で、発達した複式炉を備える定型化した形態をとる。捨て場からの遺物は少ない。

大木10式古段階（第10図下）は、ST 2とST 11が重複するため、並存する可能性があるのはST 6・SL 1を含めて3棟である。この時期の捨て場からの遺物の出土は僅かである。

以上より、型式一段階内の同時期存在の可能性がある住居跡は2~4棟で、近接した位置に建てられている。また、これらの住居跡群の集積した配置は、台地の縁辺部に位置した環状の配置として認識される。台地中央に分布するのは少ない。土坑の分布であるが、居住域とその内側に分布が重複し、12基と少ない。台地中央は遺構が希薄で、広場が想定される。

また、祭祀遺物であるが、土偶が総数55点出土した。その内、西捨て場は36点、中央捨て場は11点と、大半が捨て場からの出土である。

調査された部分は遺跡範囲の三分の一程度であり、同時期の遺構はさらに未調査部分に分布することが予測される。地形的な制約で大規模集落とは言えないが、中期中葉から後葉かけて数型式にわたって存続した中核的な集落と考えられる。

(6) 大江町橋上遺跡

橋上遺跡
橋上遺跡は、最上川の支流となる月布川の南岸の河岸段丘に立地する。昭和59年、大江町教育委員会により、1,200m²が調査された（高山ほか1984）。

縄文時代の住居跡は14棟検出された。その他、土器埋設遺構（約50基）や土坑群、配石遺構で構成される。

報告遺物を見る限りでは、大木10式中・新段階から、後期初頭、後期前葉まで継続しているものと考えられる。また、大木9式土器の出土も報告されている。

大木10式期の集落は（第11図）、調査区北東のエリアに住居跡が弧状に展開する。このうち、ST 14は大木10式新段階に相当する。ST 6は覆土中から新段階の遺物が出土した。ST 9は、大木10式中段階に位置づけられると考えられる。

北区にも集落域が存在していたことが想定され、全体として、中央区から北区にかけて弧状に集落群が展開していた可能性が推定される。また、住居域よりも西側に大木10式期を中心とした埋設土器群が分布し、さらに西側は遺構の分布が希薄である。また、北区の南側の畠地48m²を、昭和51年に大江町教育委員会が調査した結果、

住居跡は検出されなかったが、縄文時代中期から後期前葉の遺物が出土し、配石遺構が検出されている。この地点は墓域と考えられる。

後期初頭や前葉の時期では、土坑や土器埋設遺構は確認されているが、住居跡は報告されていない⁴¹⁾。

集落の性格として、母体的な性格の集落であることが



第11図 橋上遺跡調査区・遺構配置図

想定されている（宇野1994）。後期前業を中心とした土偶などの祭祀遺物の出土、硬玉製大珠など特殊な遺物の出土、多数の埋設土器や配石遺構など大規模な墓域の形成などを考慮すれば妥当であると考えられる。また、土鍤が多く出土することから、月布川を漁場とした漁獲活動（サケ漁など）も盛んに行われていたと想定され、食糧採集のための要地であったことも、集落の拠点的性格に反映されていると考えられる。

4 まとめ

各遺跡の内容を述べてきた。

当地域では、大木8・b式期の集落構成が明確に把握できる調査事例はない。僅かに、柴橋遺跡と山居遺跡、高瀬山遺跡（1期）に住居跡が認められる。豎穴住居跡の形態は、平面形が円形のものと、長方形を基調としたものの二者が認められ、長方形の住居跡は、大型に限らず中型のものも存在する。

大木9～10式期の集落については、その内容を十分把握することができる。また、大木9式古段階から、大木10式古・中段階にかけての様相は、基本的には同じ構成で捉えられる。

これらの集落の立地は、河川沿いの河岸段丘上、特に縁辺部にかけて住居跡が集中する傾向がある。また、中規模集落と小規模集落と分けて話を進めるが、区分については、住居跡数および遺構分布の密度を考慮することは言うまでもないが、検出された住居跡が10棟以上となること、もしくは調査範囲が限定されている場合は、大規模な捨て場の形成と土偶等のまとまった祭祀遺物の出土、数十基規模の土坑墓や埋設土器群の分布が、中規模以上の集落の条件と考えられる。

集落の構造であるが、最も外側に住居群が分布し、住居域の内側に貯蔵穴を中心とした土坑群、さらに内側やその一角に埋設土器などの墓壙群、そして集落の中央は遺構の分布が希薄なエリア、いわゆる広場が認識される。捨て場は、大規模な場合は、住居域の外側の段丘斜面や窪地に形成される。貯蔵穴や廃絶された住居跡も小規模な捨て場として転用される。柴橋遺跡・山居遺跡は、土器型式にして2～3型式にわたる継続的な中規模以上の集落と考えられる。

また、うぐいす沢遺跡も、遺構群の状況から中規模以

上の集落であると考えられる。当遺跡も、全体に弧状の展開をもつ可能性があり、住居域の内側に墓壙群が、その内側に貯蔵穴を主体とした土坑群が分布し、他の遺跡と遺構配置をやや異なる。

高瀬山遺跡H.O地区・S.A地区は、一型式期に満たない短期間に営まれた集落で、同時期存在の住居跡は、多くても4～5棟と推測される小規模集落と考えられる。このような小規模な集落でも、やはり集落の基本的な構成は変わらない。

また、遺構変遷を検討した結果、同時並行と考えられる住居が環状の配置をとる例はなく、建て替えられた遺構の重複状況の総体がいわゆる環状の集落構成として検出されていることが認識された。

住居跡の形態の変化であるが、大木8・b式期に認められる平面形が長方形の住居跡は、山居遺跡の事例より、大木9式の前半頃までは残る可能性がある。また、高瀬山遺跡（1期）では、大木9式古段階の住居跡は、平面形が橢円形を呈する。中期中葉の、円形住居と長方形住居の両者存在から、複式炉を伴う円形住居へと規格化・統一化されてゆく過程での、住居形態の移行期と考えられる。ちょうどこの時期の炉跡は、石闇炉から複式炉への移行期である。炉形態の変化は、住居形態を変化させる要因の一つとして考えられるのではないか。

当地域の大木10式新段階の集落構造を判断できる遺跡は、橋上遺跡のみである。基本的には、住居群・土坑群・墓壙群・広場による環状もしくは弧状の構成をなすと考えられる。また当遺跡には、配石遺構が認められる。中期初か、後期初頭に伴うのか不明であるが、墓域を構成する新しい要素の出現と考えられる。

また、遺跡の存続傾向について補足しておく。山形盆地西部の当地域では、大木8・b・9・10式の前半期（古・中段階）まで継続する、もしくはその地点が断続的に利用される遺跡が中心的である。柴橋遺跡・山居遺跡、遺物の出土状況から考えてうぐいす沢遺跡なども該当しよう。

対照的に、大木10式新段階になると、前段階まで継続していた集落の多くは廃絶し、橋上遺跡など一定の規模をもつ集落は限定されてくる。また、後期初頭は、橋上遺跡・富沢I遺跡（佐藤・黒坂1996）、高瀬山遺跡など、住居跡以外の遺構や遺物の出土は認められるものの、住居

跡や集落の様相が把握できる事例は皆無に近い。

また、橋上遺跡は、後期も存続している拠点的集落と考えられるが、この遺跡の場合には、河川沿いの漁労活動等の食糧確保の要地という側面があるためであろう。

山形盆地西部の集落跡を検討したが、中期後葉の集落では、中規模以上の集落と小規模の集落が、基本的な構成においてほぼ同じ内容をもつことが明らかになった。また、長方形住居と円形住居から、円形住居への統一化という住居形態の変化は、石圓炉から複式炉へと変化する過渡期にあたり、大木9式古段階間に円形住居跡への

註

- 1) 大木9式・10式土器の細分については、以前『山形考古』で報告した編年案(菅原1999)に準じることにした。ただし、大木8b式土器については、以前は古段階と新段階、新段階でも新しいものと細分していたが、ここでは以前古段階と新段階とした類型を古段階に、新段階でも新しいものとした類型を新段階とした。新段階は、満巻文が互いに連結して区画化が進んだものである。なお、大木8b式土器の編年については、まだ再検討する余地を残している。大木9式であるが、古段階は、磨削繩文が未発達で、満巻文・横円文などの区画文を充填する文様が中心である。中段階は、満巻文の満巻部がオタマジャクシ形となり、発達して半円形に張り出しが特徴的で、磨削繩文もやや発達する。新段階では、磨削繩文が発達し、沈線文を主体とした満巻文・横円文・匂字文が施されるものである。大木10式土器であるが、古段階は、沈綱区画で繩文を充填し、アル

統一がはかられると考えられる。

今後の課題であるが、当領域を検討するにあたって、中期中葉の集落様相が把握できる条件を備えた遺跡は含まれていなかった。機会をみて他地域の調査例を検討したい。

本文を作成するにあたり、石井浩幸氏からは、柴橋遺跡や橋上遺跡の調査の状況を御教示いただいた。また、小林圭一氏からは、高瀬山遺跡H.O地区的縄文時代の集落についてまとめるにあたり、御教示いただいた。感謝申し上げたい。

ファベット状の文様を描くもの、中段階は、文様表現が稜線状の雷帯や隆沈線により、波諺文や雁文文様の文様を描くもの。新段階は、文様で無字部分が主体となり、玉抱文や連結S字文、方形区画文が描かれるものを基準とした。

- 2) 遺構の時期については、調査を担当された石井浩幸氏の御教示による。
- 3) 大木9式期で細別時期不明の、ST4EL3・ST4EL5・ST4EL6Bは、第10図上の、大木9式新段階のST4諸住居跡と重複するため、アミの表記を省略した。
- 4) 石井浩幸氏の御教示では、中央区の大木10式の住居跡群の南西側に検出された、ST1~5などの住居跡は、後期初頭の時期になる可能性も考えられるという。これらの住居跡には複式炉は認められない。

図版出典

- | | |
|--|------------------------|
| 第1図：国土地理院発行 1:50,000地形図「左沢・楯岡」を33%に縮小 | 第5図：(齊藤・須賀井ほか2004) を改変 |
| 第2図：1~13：(氏家・志田1998)、14・15・18：(小林ほか2005)、17：(高山ほか1984) | 第6図：(齊藤・須賀井ほか2004) |
| 第3図：(小林ほか2005) を改変 | 第7図：(長崎・阿部1982) を改変 |
| 第4図：(小林ほか2005) | 第8図：(黒田ほか1989) を改変 |
| | 第9・10図：(氏家・志田1998) を改変 |
| | 第11図：(高山ほか1984) を改変 |

引用文献

- 伊藤邦弘2001『高瀬山遺跡（S.A）第2・3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第94集
 氏家信行・志田純子1998『山居遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
 宇野修平1994『第二章第四節 堅穴住居と集落の構造』『寒河江市史 上巻』 pp.98~110 寒河江市
 黒田富善はか1989『柴橋遺跡発掘調査報告書』寒河江市埋蔵文化財調査報告書第7集
 小林圭一2001『山形県における縄文時代集落の諸様相』『列島における縄文時代集落の諸様相』pp.109~132 縄文時代文化研究会
 小林圭一ほか2005『高瀬山遺跡（H.O地区）発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集
 齊藤主税・須賀井明子ほか2004『高瀬山遺跡（1期）第1~4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集
 佐藤庄一1979『山形西高森地内遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第17集
 佐藤庄一ほか1992『山形西高森地内遺跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第173集
 佐藤庄一・黒坂雅人1996『富沢1遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
 佐藤正俊・渋谷孝雄1981『うぐいす沢遺跡第1次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第41集
 菅原智文1999『山形県における縄文時代中期の土器様相—中期後半の編年を中心として—』『山形考古』第6卷第3号 pp.37~55
 山形考古学会
 高山法彦はか1984『橋上遺跡発掘調査報告書』大町江埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
 長崎至・阿部明彦1982『うぐいす沢遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第60集

大洞BC式に固有の「入組三叉文高坏」について

小林圭一

1 はじめに

绳文時代晚期前業大洞BC式期の宮城県北部には、非常に特徴的な台付浅鉢が分布している。この浅鉢は、口縁部の入組三叉文の文様と、装飾的な高台に特徴付けられており、太くて高い脚部が付されることから、須藤降氏によって「高坏（C₂類型）」又は「台付鉢C₂類型」と呼称され、北上川下流域及び追田・江合川・鳴瀬川流域の湖沼地帯（仙北湖沼地帯）に、限定的な分布を示すことが指摘されている（須藤1984）。

「高坏（C₂類型）」は、須藤を中心とする東北大文学部考古学研究室（当時）によって調査された、宮城県大崎市（旧田尻町）中沢目貝塚の晚期2期（大洞BC式期）の土器群を構成する器種の一類型である（図1-3）。同土器群には、大洞B2式に特徴的な入組三叉文と、同BC式に固有の羊歯状文が併存することが指摘されており、特に「高坏（C₂類型）」は羊歯状文施文の土器を主体とした層準から出土し、口縁部に入組三叉文が施されることから、芹沢長介氏によって設定された「雨滝式」（芹沢1960）を表徵する資料と位置付けられている（須藤前掲）。

筆者は、大洞B式と同BC式を統括する「雨滝式」を否定的に受け止めている。しかし装飾意匠としての入組三叉文と羊歯状文がある時期併存の関係にあったことは疑いなく、従前の大洞B式と同BC式との過渡的な型式として、大洞BC1式を積極的に評価する立場にある（小林2005a）。即ち装飾意匠としての羊歯状文が確立し、入組三叉文が一部併存する時期が、大洞BC1式に相当すると考えている。上記の理解に立つならば、「高坏（C₂類型）」も細分される公算が高く、生成・変遷・消滅の過程が看取されるものと予察される。

本稿では、大洞BC式に固有の「高坏（C₂類型）」の消長について、型式学的検討を加えることを第一義とした。そして須藤降氏が指摘した限られた地域内で、当該土器を含む強い独自性を保っていた器種類型を明確にすることで、晚期前業における東北中部¹⁾の地域相にも言及してみたい。僅か一時期の考古学的単元を検討するに過ぎないが、複雑さに満ちた亀ヶ岡文化を理解するには、このような基礎的作業を積み重ねることが肝要と考えている。

なお、須藤によって「高坏（C₂類型）」又は「台付鉢C₂類型」に分類された台付浅鉢について、口縁部に展開した文様の特徴から、以下では表題通り「入組三叉文高坏」（須藤2003：5頁）と呼称する²⁾。

2 「仙北湖沼地帯」の概要

まずは、「入組三叉文高坏」が限定的に分布する「仙北湖沼地帯」について、概観してみたい。

A 地理的様相

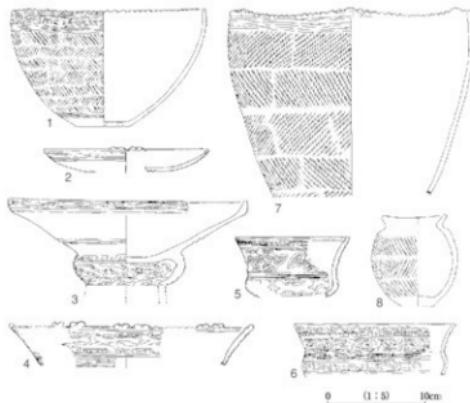


図1 宮城県中沢目貝塚2群土器（晚期2期）の器種構成と装飾意匠（須藤2003）

「仙北湖沼地帯」は、北上川とその支流である追川・江合川、そして直接石巻湾に注ぐ鳴瀬川が形成した、宮城県北部に展開する湖沼地帯の通称で、「仙北平野」とも呼ばれている（小池ほか編2005）。

岩手県北部に水源を発する北上川は、奥羽脊梁山脈と北上山地との間の緩谷である北上盆地（北上低地帯）を約90km南下する。その後南縁を限る丘陵地（磐井丘陵）を掘り込んだ約20kmの狭窄部（狐揮寺峡谷）を経て、石巻平野の最奥部へと流入し、平野の東縁を限る北上山地の直下を流れ、途上の登米市津山町柳津において、新・旧の北上川に分流する（図2・3）。

新北上川は、山地部をほぼ直線状に南流し、宮城県石巻市（旧河北町）飯野川付近から東に折れ、南三陸沿岸の追波湾に注ぐ。一方旧北上川は、平野のほぼ中央で追川、更に下流で大崎平野を流下した江合川を合流させ、屈曲を繰り返しながら石巻湾へと注ぐ。

北上川と追川が合流する沖積平野は、石巻平野（松本1984・2000）又は北上川下流沖積低地（伊藤1999）と呼称されている。石巻平野は北上川下流域に形成された、南北約45km、東西約10~20kmの広大且つ低湿な平野で、極めて低平で排水不良のため、その流域には広大な氾濫原が形成され、多数の湖沼地が存していた。しかし現在では、干拓や排水工事が急速に進行して、水田地帯へと変貌を遂げており、本来からは懸け離れた景観と化している。

平野の東縁は、北上山地へ連なる海拔300~500mの起伏の大きな山地で限られ、また平野の西・北縁部の輪郭線は複雑に入り組み、海拔100~200mの丘陵地で限られており、平野内部にも低い丘陵地が島状に分布している。丘陵地の周囲には、大小の湖沼が数多く点在しており、中でも北部に位置する伊豆沼や長沼は、秋季から冬季にかけて、ガン、カモ、白鳥等の渡り鳥が多数飛来することで知られている。

また、鳴瀬川及び江合川の中・下流部に形成された沖積平野は、大崎平野と呼称されている（松本1984）。大崎平野は、江合川と鳴瀬川に沿う東西約35kmの部分と、吉田川に沿う東西約25kmの部分からなっており、その間に大松沢丘陵が西から東に張り出している。平野の周囲は海拔100~200mの丘陵が取り囲み、盆地的景観を呈しており、江合川及び鳴瀬川の狭い河谷を通して石巻平野

に連続している（図2）。平野面は石巻平野と同様に低平な低湿地となっており、自然堤防の発達が著しく、後背湿地が広く展開し、吉田川沿いには嘗て品井沼という調査地が広がっていた。

上記したように仙北湖沼地帯と呼ばれる沖積地は、石巻平野と大崎平野とに区分されており、仙北湖沼地帯が地形区分として、一般的な呼称とは認め難いようである。しかし石巻平野の中央部から内陸部にかけた地域と大崎平野を一つの考古学的単元と見た場合、低湿な地形的特徴を表微した好適な呼称となっており、本稿では先学に準拠したい³⁾。

B 「仙北湖沼地帯」の晩期貝塚の様相

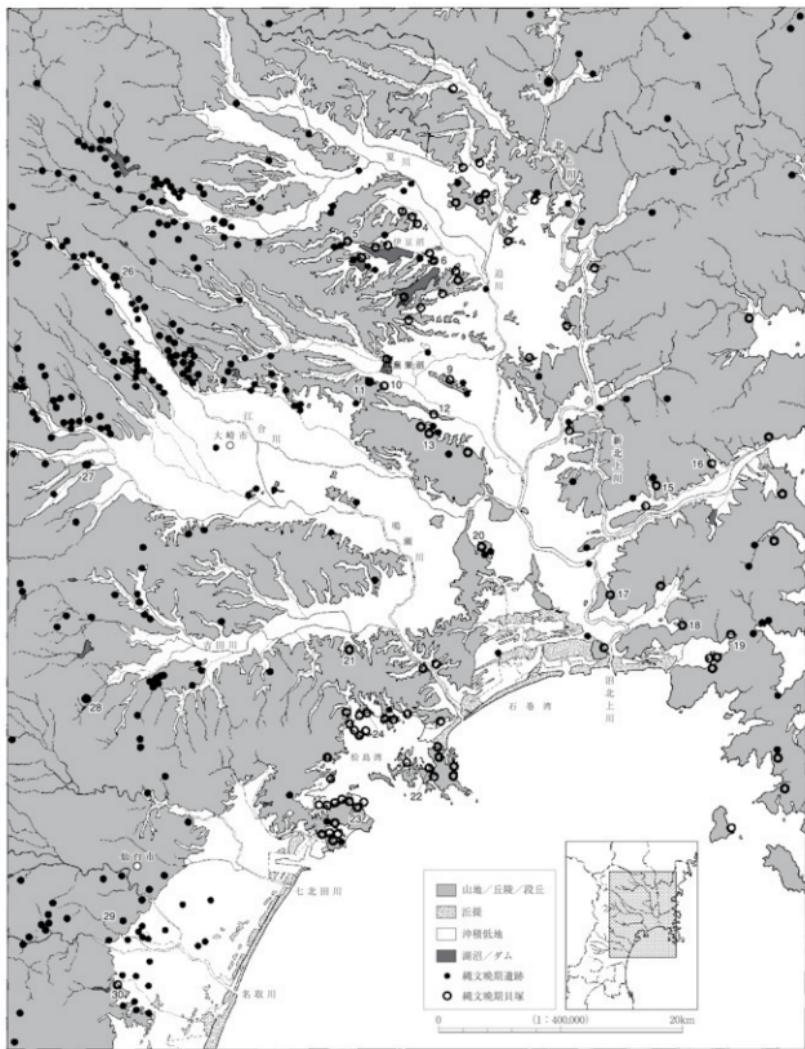
仙北湖沼地帯の丘陵上には、80ヶ所を超す縄文時代の貝塚が分布している（須藤編1984）。多くは淡水性貝類を主体とした主浜貝塚で、直径20m程度の小規模貝塚が殆どである。しかし縄文早期末葉～前期の貝塚には、鹹水性貝類で構成された比較的規模の大きな貝塚も存しておらず、海退の進む縄文中期以降は、淡水性貝類を主体とした貝塚が形成されるようになり、後期後葉以降一層の増加が認められる⁴⁾。

(1) 「仙北湖沼地帯」の貝塚の分布

仙北湖沼地帯の貝塚は、湖沼・沖積地周辺の丘陵に一様に分布するのではなく、幾つかの郷よりとして捉えられる。筆者が渉猟した該域（旧北上川と追川の合流点より上流）の晩期の貝塚は、33ヶ所を数える（図3）。

夏川流域 追川の支流である夏川は、磐井丘陵内に水源を発し、湖沼地帯北限の岩手・宮城県境を流下し、登米市中田町石森付近で追川と合流する。この流域には後・晩期の多数の人骨が出土した貝鳥貝塚や白浜貝塚、夏川を挟んだ対岸の独立丘陵（石越丘陵）には、入組三叉文高坏を多数出土した富崎貝塚や田上貝塚等が位置している。

伊豆沼・長沼周辺 湖沼地帯北部の伊豆沼・長沼周辺は、特に貝塚が密集した地域である。晩期の貝塚では、伊豆沼・内沼近辺に嘉倉・敷味・館・貝殻・唐木崎貝塚等が、また長沼近辺に倉崎・大多古・平貝貝塚等が位置している。館貝塚では合葬2例を含む人骨5体の検出をはじめ、入組三叉文高坏を含む後・晩期の遺物（宝ヶ峯式～大洞A式）が多数出土しており、敷味・倉崎・大多古の各貝塚では、入組三叉文高坏が出土している。また



1:中神道跡、2:貝鳥貝塚、3:富崎貝塚、4:飯貝塚、5:嘉倉貝塚、6:倉崎貝塚、7:大多古貝塚、8:長者原貝塚、9:網場貝塚、
10:中沢貝塚、11:恵比須田道跡、12:長根貝塚、13:ナガの沢貝塚、14:深山貝塚、15:熊貝塚、16:皇沢貝塚、17:南境貝塚、
18:沼津貝塚、19:尾田峯貝塚、20:宝ヶ峯道路、21:永根貝塚、22:里浜貝塚、23:二月田貝塚、24:西ノ浜貝塚、25:山王圓道跡、
26:根岸道路、27:香ノ木道路、28:拓获道路、29:芳ノ口道路、30:金剛寺貝塚

図2 宮城県北の縄文晩期遺跡分布図

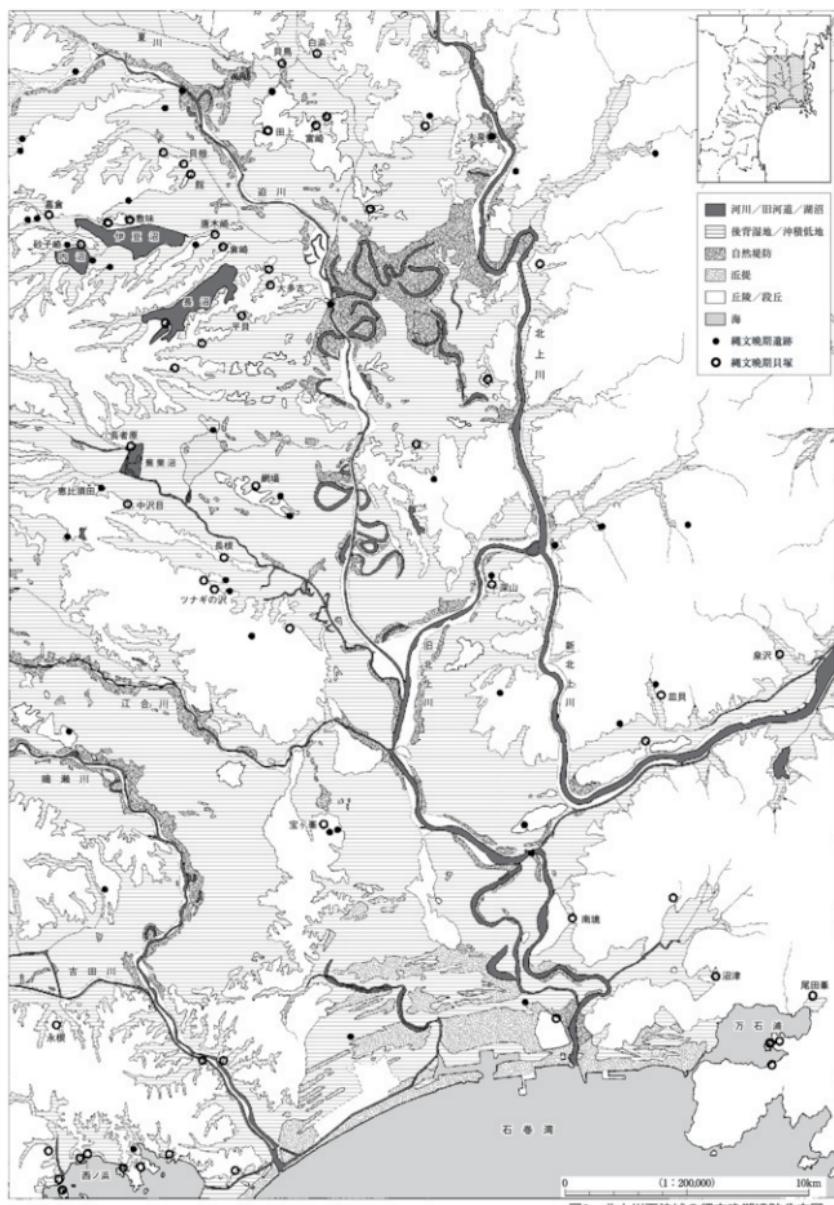


図3 北上川下流域の純文晩期分布図

貝塚は形成されていないが、内沼北岸に位置する砂子崎遺跡でも、入組三叉文高坏の略完成形資料（図7-2）が出土している。

燕栗沼周辺 湖沼地帯中央部の燕栗沼周辺の丘陵には、晩期の貝塚では中沢目・長根・長者原・網場・ツナギの沢貝塚等が、また貝塚以外では遮光器土偶で著名な恵比須田遺跡が位置している。嘗て燕栗沼は東西6km、南北4kmに及ぶ広大な沼沢地であったが、1940年代以降の追川の大規模な河川改修によって、水田地帯へと変貌を遂げており、現在では水田地帯の中央に周囲1km程の遊水池として残されているに過ぎない（須藤1992a）。

中沢目貝塚は、後期中葉～晩期終末にかけて營まれた燕栗沼に面した貝塚で、三つの地点に貝塚が形成されている。そのうち遺跡中央部のA貝塚は、貝層の広がりが径18m程度と小規模であるが、貝層の厚さは1.5mにも及び、後期後葉～大洞C1式の遺物を豊富に包含しており、付近の尾根上の平坦地では、後期後葉と晩期中葉の堅穴住居跡が3棟検出されている（図16）。A貝塚の西方130mにあるB貝塚は、熊野堂貝塚とも呼ばれ、浅い谷を挟んで北側の支丘上に対峙しているが、両貝塚は時期的に併存していたと推測されている。またC貝塚は、A貝塚の東方100mに形成された大洞C1式の地点貝塚である（須藤ほか1995：17頁）。

中沢目貝塚の北西方約1kmの同一丘陵（大貫丘陵）には、大洞BC2式の大型遮光器土偶（1943年採集、1981年

重要文化財指定：図4-3）を出土した恵比須田遺跡が位置している。旧追川を介して対岸の独立丘陵に位置する網場貝塚（中沢目貝塚の東方約5.5km）でも、同期の遮光器土偶（図4-2）や大洞C1式？の大型岩版（1961年重要文化財指定）等の優品が出土している。

中沢目貝塚の南東方約4.5km、大貫丘陵から伸びた支丘（長根丘陵）には、長根貝塚が立地している。同貝塚は東西300m、南北250mに及ぶ大規模な馬蹄形貝塚（伊東・藤沼・須藤ほか1969）であるが、後期末葉～晩期前半の貝層は、径20m程度の小規模であったと指摘されている⁵⁾。長根貝塚の南方の沖積地には、嘗て鹿飼沼と呼ばれた沼沢地が広がっていたが、その南岸の笠岳丘陵に位置するツナギの沢貝塚（長根貝塚の南方約1.5km）では、後～晩期の堅穴住居跡13棟と遺物包含層が検出されている（福山2001・04）。

北上川河口付近 北上川河口付近は、旧北上川と追川との合流点よりも下流に相当し、北上川の長大な自然堤防及びこれによって閉塞された広大な低湿地帯と、4列の浜堤列が発達した臨海部から成り立っている（松本1996、2000）。

旧北上川と追川の合流点付近には、ヤマトシジミを主体とした後・晩期の深山貝塚が位置している。同貝塚の内容から、この低湿地帯が汽水域であったと推察され、後・晩期の当該域は、主淡貝塚で構成された仙北湖沼地帯とは、やや地理的環境を異にしていたことが指摘され

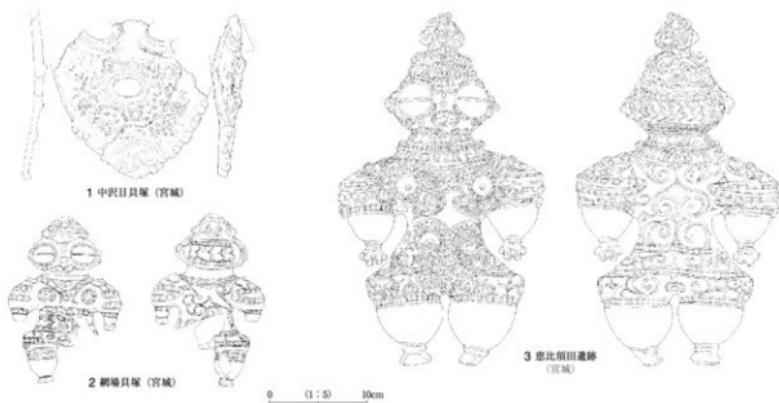


図4 仙北湖沼地帯出土の土製仮面と遮光器土偶（大洞BC2式期）

よう。

旧北上川左岸の臨海部の丘陵には、南境・尾田峯・沼津等の著名貝塚、やや内湾の北上川右岸の丘陵には、後期の標識遺跡である宝ヶ峯遺跡が位置している。また新北上川の河口付近には、大洞C1式を主体とした皿貝貝塚（須藤1992a、水見1997）や、同期の大型遮光器土偶を出土した泉沢貝塚（岡ほか2005）が位置している。皿貝貝塚を除くと、いずれも鹹水・汽水性貝類を主体とした比較的規模の大きな貝塚や遺跡であり、仙北湖沼地帯とは別段に扱うべき貝塚群となっている。

大崎平野 江合川と鳴瀬川の流域である大崎平野には、後・晚期の貝塚が非常に少ない。該域の丘陵に位置する貝塚の多くは、古石巻湾の海進が進んだ早中期業～前期初頭にかけて形成された主誠貝塚⁶⁾であり、海退が進む中期以降、汽水・淡水性貝類を主体とした貝塚へと変化している。後・晚期の貝塚としては、旧品井沼に北面する南境式～大洞C2式の永根貝塚（別称幡谷貝塚）が、主淡貝塚として知られるのみである（後藤ほか1989：364～398頁）⁷⁾。

なお大崎平野を貫流する河川を巡ると、江合川上流域には大洞BC～A式主体の根岸遺跡（謙谷ほか1981）、鳴瀬川上流域には大洞C2～A式主体の香ノ木遺跡（佐々木ほか1985）、吉田川上流域には後中期業～大洞A式主体の摺萩遺跡（柳沢ほか1990）が、晚期の有力遺跡として位置している（図2）。特に根岸遺跡が位置する江合川上流域の段丘から丘陵地（主：造丘陵）にかけては、晚期の遺跡が密集しており、活発な狩猟・採集活動が営まれていた様相を窺わせている。

（2）「仙北湖沼地帯」貝塚の動物遺存体の構成

上記したように仙北湖沼地帯には、幾つかの貝塚の中城が認められる。そのうち晚期で主体となるのは、「夏川流域」、「伊豆沼・長沼周辺」、「蕉葉沼周辺」の三地域であろう。

しかし当該域では、発掘調査が実施され、報告された貝塚が極めて少ないのが実情である。ここでは、詳細な分析結果が公表されている蕉葉沼南岸に位置する中沢貝塚（A貝塚）について概説したい。

貝類 貝塚を構成する貝類は、オオタニシ、イシガイ、スマガイが主体で、いずれも丘陵下に広がる湖沼に生息する淡水産貝類である。貝層の堆積状況は混土貝層

と混貝土層が主体で、純貝層を殆ど含まず、多くは脆弱な破碎貝で構成されている。数量的には少ないが、鹹水産のアサリも出土している。

魚類 貝類と同様に眼前の湖沼や河川に生息するコイ科やギバチが主体となっている。コイ科の内容は、フナが多数を占め、タナゴ属、ニゴイ、ウグイ属が続く。ウナギやドジョウ科等の淡水・半淡水性魚類も出土しており、マイワシ等の鹹水性魚類も僅かながら認められる。

哺乳類 ニホンジカやイノシシが捕獲対象物の主体で、次いでノウサギが捕獲されている。ニホンジカとイノシシの各部位の骨の出土量に、明確な偏りが認められないことから、狩猟地で一時的な解体を受けたとしても、殆ど全ての体躯が集落にもたらされたと想定されている。

鳥類 ガンカモ科とキジ科が顕著に認められる。ガンカモ科の内容は、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ヒシクイ等を中心に構成され、キジ科はキジ、ヤマドリである。水鳥と言われる鳥類の占める比重が大きい点に特徴がある。

（3）「仙北湖沼地帯」の生業活動

上記した動物遺存体や出土遺物から、中沢貝塚では以下のよう漁撈・狩猟・採集活動が復元されている（須藤編1984、須藤ほか1995）。

漁撈活動 中沢貝塚では、漁撈具としては骨角製の刺突具（図5～6～10）が主体を占めており、石鍬や釣針、精巧な作りの鉤等は少ない。従って漁撈活動は、湖沼や河川における簡単な構造のヤヌを用いた刺突漁が主体であり（須藤1992a:273頁）、湖沼や河川に生息する体長30cm超の大形のフナ、ニゴイ、ウグイ属は、刺突具を用いて捕獲されたと推定されている。一方体長10～前後の小形のフナ、ギバチの遺存体が、最も多く確認されており、これ等は漁網で捕獲されたと考えられている（須藤ほか1995:271頁）。

また骨角製釣針（大洞B1式期）の出土から、釣漁が行われていたことは確実である。ウナギやドジョウも少なからず出土しており、これ等の漁法には筌や築のよう仕掛けが用いられた可能性も推定されている。

上記した淡水魚は、体長組成や出土状況から周年捕獲されていたと想定されている。またサケ科の椎骨破片等も検出されており、秋季から冬季にかけて河川を週遊す

るサケなどが、北上川やその支流域で集中的に捕獲されていた様相を窺わせる。僅かではあるが、鹹水魚が検出されていることも注意されよう。

狩猟活動 中沢貝塚では、狩猟具として石鏃が多く出土しており、また骨鏃（図5-11～14）や根抜み（図5-1～5）も出土している。上記から、哺乳類や鳥類の捕獲は、弓矢猟が主体であったと判断される。しかし後者の捕獲には、出土遺物としては認められないが、網や罠が用いられたことも想定される。

鳥類では、湖沼域に飛来・生息するガンカモノ科や、草原・森林に生息するキジ科の鳥類が捕獲されていたが、特に前者の占める比重が高く、水鳥狩猟が重要な生業活動であったことが窺える。ガンカモノ科は冬季に集中して飛来する性質のものが多く、この季節を中心で捕獲されていたと考えられる。

哺乳類では、ニホンジカやイノシシが主体で、集落が立地する丘陵地帯や湖沼域周辺の草原が、狩猟場となっており、弓矢猟と共に、陷阱等の罠獵も併用されていたと想定される。いずれの遺存体とも極めて多くの層で検出され、片寄った集中が見られないことから、四季を通じて捕獲されていたと考えられている。当然食用だけではなく、その骨角・毛皮等も重要な生活資材となっていたであろう¹³⁾。

採集活動 丘陵地の植生は、ブナ、ナラ林が広がっていたと推定されており（須藤ほか1995:18頁）、トチノキ、ドングリ、クルミ、クリ等の植物質食料は、周囲の丘陵地帯から採集されていたと考えられる。

貝類の採集は、淡水性の貝類が多くの層から多量に出土している上に、四季折々に捕獲されたと見られる動物遺存体との共伴関係が認められることから、周年にわたって採集されていたと推定されている。また少數ではあるが、アサリも含まれている。鹹水性貝類は集中して検出されることが多く、季節的な採集活動が暗示される。

小 結 上記した生業活動は、飽くまで中沢貝塚における成果であり、当該域の全ての遺跡に該当する訳ではない。しかし同貝塚は当該域の基幹集落であり、また前記した該域の晩期の貝塚は、立地条件、規模、形成された時期、貝層の状態等の点で、いずれも中沢貝塚と



図5 中沢貝塚出土の大洞BC式期の骨角製品

類似した様相であることが指摘されている（須藤編1984:132頁）。因って中沢貝塚における生業活動を、湖沼域における典型と見なしても、大過はないようと思われる。

中沢貝塚の成果から仙北湖沼地帯では、沖積地に広がる広大な湖沼において、ブナ、ギバチ、ニゴイ、ウナギ、ドジョウ等の淡水魚を対象とした漁撈活動と、スマガイ、イシガイ、オオタニシ等の淡水性貝類を対象とした採貝活動、秋季から冬季に飛来する水鳥を対象とした狩猟活動が中心になっていたと考えられる。更に集落が立地する丘陵地帯では、ニホンジカ、イノシシ等の哺乳

類を捕獲する狩猟活動や、堅果類等の採集活動も盛んに行われていたことが想定される。

上記したように発掘調査の成果から、当該域では多角的な生業活動が営まれていた様相を窺うことができる。取り分け湖沼地帯という特異な環境に適応した生活様式であったことが、特筆されるであろう。後述する独自性のある土器群が当該域で製作された背景には、同質の地理的環境下における充実した生業活動が、存立基盤となっていたものと予察されている（須藤ほか1995:278頁）。

中沢貝塚では、アカガイ製貝輪やベンケイガイ製貝輪等の海産貝類の製品が多数出土している。またアサリの貝層も認められ、鹹水産の魚骨も出土している。このことは海岸部との交流によって、様々な物資がもたらされたことが暗示される一方で、同貝塚の構成員が季節的に内湾域まで進出して、採集・捕獲していた可能性を物語っている。同貝塚は海岸線まで10~15km程度と、満潮時には丸舟によって容易に移動できる距離にあったと推察され、海岸部の基幹集落であった沼津貝塚や南境貝塚とも、社会的紐帶で結ばれていた可能性が考えられる。

3 「入組三叉文高坏」の特徴

「入組三叉文高坏」は、台付浅鉢の範疇に含まれるが、体部の器高を凌ぐ高い台が付されることから、低い高台付きの浅鉢とは区別するため、「高坏」と呼称されている（須藤ほか1995:40頁）。

入組三叉文高坏は、口縁部に展開する入組三叉文と、脚部の複雑な透かし文様に特徴付けられる。しかし全形が窺える資料は、非常に少ないので実情である¹⁰。そこ

で主要分布域からは遠く離れることになるが、筆者が図化した青森県平内町楓ノ木遺跡出土の高坏を例にとって解説したい。

A 青森県楓ノ木遺跡出土の「入組三叉文高坏」

楓ノ木遺跡は、青森県東津軽郡平内町小湊字楓ノ木に所在する晚期前半期の拠点集落である。陸奥湾に突き出た夏泊半島の東南端に位置しており（図27）、太平洋沿岸と青森平野とを結ぶ要衝に営まれた遺跡と見なされている（小林2005b:247頁）。

1951年に慶應義塾大学、1965年に平内町教育委員会によって発掘調査が実施されているが、正式な報告書は刊行されていない。発掘調査直後に発刊された写真集（田中ほか1996）から、遺物の内容を窺うことができるが、大洞B2-C1式の優品が多数出土している。

図6が、楓ノ木遺跡出土の入組三叉文高坏である。現在平内町歴史民俗資料館に所蔵されているが、その出土の経緯については判然としない。当該高坏は上記の図録には収録されておらず、また1968年10月に青森県立図書館で開催された「青森県埋蔵文化財展」（青森県立図書館編1968:20頁46）において、個人所蔵品として展出されていたことから、上記の発掘調査の出土品でなかった可能性も考えられる¹¹。故地である仙北湖沼地からは、約250mの距離にあり、遠方からの搬入土器として、既に須藤氏の指摘したところであり（須藤ほか1995:40-73頁）、筆者は大洞BC2式に入組三叉文が残存した事例として、当該土器を紹介している（小林2005a:39-40頁）。

入組三叉文高坏の各部位の名称は、図6に示した通りである。

器体は浅い椭形の坏部と、器台となる長大化した脚部とに大別され、そのつなぎ目を接合部と呼称する。坏部は文様の施された狭小な口縁部と、幅広の体部とに二分される。脚部は接合部直下の膨みである凸彎部と、その下位の透かしが彫り込まれた脚柱部、更に下方に向かって開く裾部とに三分され、その先端の口縁部の口端に相当する部位を脚端と呼称する。

楓ノ木遺跡例（図6）は、脚部の先端である裾部を欠損しただけのほぼ完形品で、現存の器高は12.0cmを測る。体部は底部から30度前後の傾きで直線的に立ち上がりおり、口縁部が短く内折し、最大径は口縁部にあ

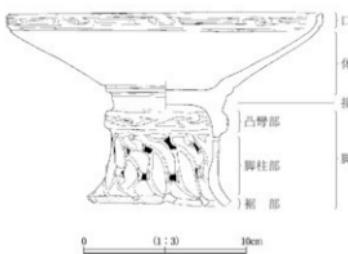


図6 入組三叉文高坏の部位（青森県楓ノ木遺跡出土）

る。口径は19.6cm、接合部の径は7.0cm、凸縁部の径は7.6cm、現存の裾部の径は9.0cm、器厚は4~5mmで、底面の器厚は9mmを測る。口端は平縁で、やや内削状に作出される。内面の底面付近には、稜が形成され一段低くなっている。また、その裏側に当たる脚部の天井面もフラットとなる。

口縁部文様帯の上下幅は約1cmと狭く、末端の入り組む矩形文様が10単位施され、下限は1条の沈線で限られる。体部は無文であるが、下端には平行沈線が回続され、その直下の接合部は幅8mm程度の無文帯となっている。

脚部は3段で構成される。接合部直下の上下幅約1.5cmの凸縁部には、7単位の入組三叉状の陰刻文様が展開するが、入組部の円形刺突は貫通しない。脚柱部には上下2段の矩形の透かしを基調とした意匠が、12単位(24孔)穿たれており、四隅から伸びた陰刻文様が縦位に連結する。脚柱部下端の界線と陰刻文様との交点には円孔が穿たれ、上端の一部にも円孔が加えられる。裾部は欠損しており、装飾は判然としないが、大きく外方へ開く形制であったと想定される。

器面には赤色顔料が塗布されており、全体に暗橙褐色を呈するが、下地は暗褐色で一部黒褐色を呈する。全面が丁寧に研磨されており、胎土は緻密で精選され、微砂粒や金雲母を少々含む。

B 「入組三叉文高坏」の型式学上の特徴

上記した楓ノ木遺跡例の特徴を踏まえて、資料を涉観すると、入組三叉文高坏を以下のように規定することができるであろう。

形 制 坂部と脚部の器高は、ほぼ同等又は後者の方が上回っており、脚部の占める割合が大きい点に特徴がある。

坂部は浅い椀形で、底部から体部にかけては内彎気味又は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は内彎又は内折して短く直上する。最大径は口縁端部乃至はその直下の内折した後にある。

脚部は、3段で構成される。接合部直下には上下幅1.5~3cm程の凸縁部が作出され、その下位の脚柱部は比較的長く、垂直から外に向かって下方に開き、裾部が強く外反した形制で、裾部の径が口径を上回ることははない。坂部と脚部との接合部は、楓ノ木遺跡例(図6)のよう

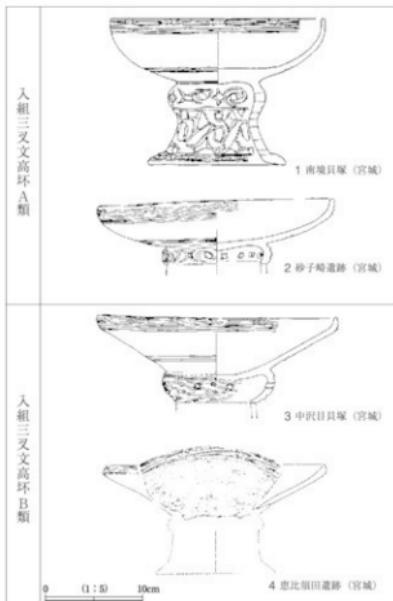


図7 「入組三叉文高坏」の形態分類

な無文帯を介する例は稀で、坂部と脚部が沈線で画され、その直下が凸縁部となり、脚部の天井面も中央が垂下し凸面状になる例が多い。

法 量 当該高坏の法量は、全形が窺える例が少なく、明確には指摘できない。計測可能な資料から判じて、口径は20~25cm程度、坂部の底径に相当する接合部の径は7~11cm程度、脚部の凸縁部の径は7.5~12cm程度、裾部の径は12~17cm程度、器高は10~15cm程度と推定される。口縁部から体部にかけての器壁は薄く作出されており、4~6mm程度が通例であろう。

口縁部 口端は平縁で、緩やかな丸味を持って仕上げられた例が多く、内削・平坦・尖鋸に作出された例も散見される。狄駄な口縁部文様帯の上限は、画されず口端に露出しており、下限は1~2条の沈線で画される。装飾としては、背向した主軸線が密着し伸長化した右上がりの入組三叉文や、それに類似した末端の入り組む細長い矩形文様が、1段で構成されており、6~10単位程度が展開する。

体 部 体部は無文が通例で、体部の下半から下端に

かけて、2条の沈線からなる平行沈線が閉続される。内面の底面は、平底乃至は弱い丸底となるが、楓ノ木遺跡例(図6)のように一段低く作出され、平底となる例も散見される。

脚部 接合部直下の凸脛部は、通常内面ごと外側に膨らむが、楓ノ木遺跡例(図6)のように隆脛となつて肥厚し、内面が彎曲しない例も存在する。凸脛部には円孔や円形刺突(未貫通)が穿たれ、文様の基点となつてゐる。装飾意匠としては、入組三叉文や末端の入り組む矩形文様、上下から入り組む弧線文が一般的で、咬合部が円形刺突乃至は円孔となる。特に、横幅の短い鼓形区画と入り組む弧線文を交互に配した例(図7-2)が多く見られ、入組三叉文の場合には、背向した主軸線が密着して乙字状の陽刻部を意識した構成となる(図6)。また、上下2段の文様で構成された例(図7-3、図31)も存在する。

脚柱部には、矩形を基本とした透かしが穿たれる。多くは矩形文様の四隅又は末端の一部が、陰刻で縦位や斜位に連結し、唐草文風の装飾が展開している。また、矩形文様が入り組み、陽刻部が横S字状又はZ字形(図7-1)となつたり、上下端が渦巻文となる例(図15-3・18・50)も見られる。この場合、咬合部は円孔となる。しかし、脚柱部全体の文様が窺える資料は限られており、詳細は判然としない。

裾部は、外反気味に強く開き、緩い角度を以て底面に接続するが、脚柱部に比しやや肉厚に作出された例が多い。裾部自体は狹小な文様帯をなしており、その上端は横脛で区画され、下端は画されない。脚端は丸足を持って仕上げられ、口端と同様に薄く作出された例も多い。装飾は通常左側上方に突き出た鉤爪状区画が連続して配され、区画内に截痕が加えられる(図15-50)が、凸脛部と同様に入組三叉文(図15-41)や入組矩形文(図15-32・34・36)、上下から入り組む弧線文と鼓形文様を交互に配した例(図15-31)も散見される。この場合、咬合部は円形刺突(未貫通)となる例が多い。

器質 色調は暗褐色～黒褐色を呈するが、灰色を帶びたり、楓ノ木遺跡例(図6)のように赤彩された例も存在する。胎土は緻密で、混和材の粒子も細かく、精選されている。器面は内外面とも丹念にヘラミガキが加えられており、光沢も認められるが、脚部の内面はナデの

痕跡のみで、ややざらついている。

4 「入組三叉文高坏」を構成する属性の検討

入組三叉文高坏は、図1に示したように中沢目貝塚の晩期2期(大洞BC式期)の土器群(中沢目貝塚II群土器又は中沢目貝塚3群土器)¹¹⁾を構成する器種類型である。以下では、入組三叉文高坏を構成する属性(形制・口縁部の装飾・脚部の装飾)について、型式学的な検討を加えてみたい。

A 「入組三叉文高坏」の形制について

入組三叉文高坏の器体は、坏部と脚部から構成され、太くて高い脚部が特徴となる。器高の割合は同等又は脚部の方が上回っており、口径と脚部直径では、前者の方が卓越する。

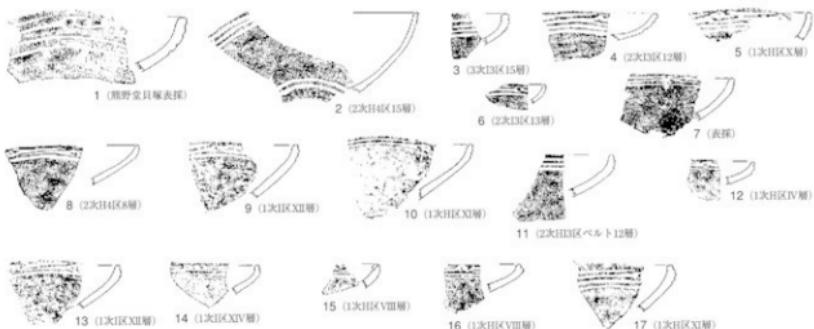
坏部は、口縁部が内彎するものと、内折して稜を形成するものとに二分される。本稿では、前者を**入組三叉文高坏A類**、後者を**入組三叉文高坏B類**と呼称したい。須藤隆氏は中沢目貝塚の層位的出土状況から、A類からB類への形態上の変遷を指摘している(須藤ほか1995:40・56・65・73・236-237頁)¹²⁾が、後述するように随從すべき卓見である。

(1) 入組三叉文高坏A類

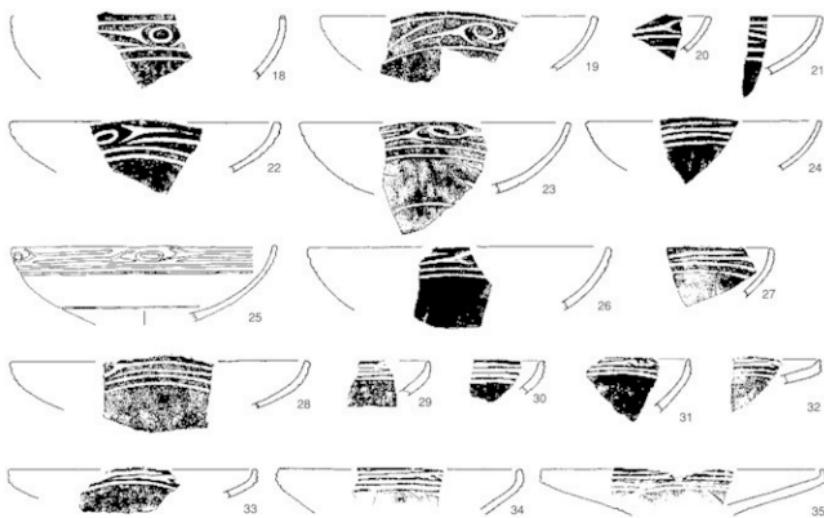
入組三叉文高坏A類は、須藤隆氏が「高坏C1p2類」(須藤ほか1995:40頁)とした類型に相当する。同氏の「C類 浅鉢・台付浅鉢・高坏」には、口径と器高の比率が「1:0.5未満で0.2以上」であり、器高が口径の1/3前後の比較的浅い鉢形土器が相当する。そのうち口縁部が軽く内彎した浅鉢が「C1類」で、更に丈の高い装飾的な高台が付され、口縁部が明瞭に内彎して稜を形成したもののが「C1p類」、強く内彎し稜を持たないものが「C1p2類」に分類されている。

入組三叉文高坏A類の典型となるのは、南境貝塚例(図7-1)と砂子崎遺跡例(図7-2)である。

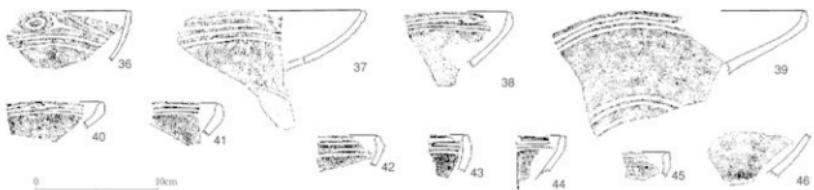
本類の体部は内彎気味に立ち上がりて、通常口縁部が強く内彎して直上乃至は外傾する。口縁部の屈曲点は文様帯下限の区画線付近又はそれよりも下位の部分にある例が多く、口縁部文様帯は通常緩く内彎する。しかし底部から体部にかけて内彎気味に立ち上がり、口縁部付近の内彎の度合いが弱く、外傾した例も存している(図8-2・4)。上記した形制は、大洞B2式の台付浅鉢(図



宮城県中沢貝塚出土の入組三叉文高環口縁部資料及び関連資料



宮城県富崎貝塚出土の入組三叉文高環口縁部資料及び関連資料



宮城県倉崎貝塚出土の入組三叉文高環口縁部資料及び関連資料

図8 仙北湖沼地帯出土の入組三叉文高環口縁部資料及び関連資料 (1)

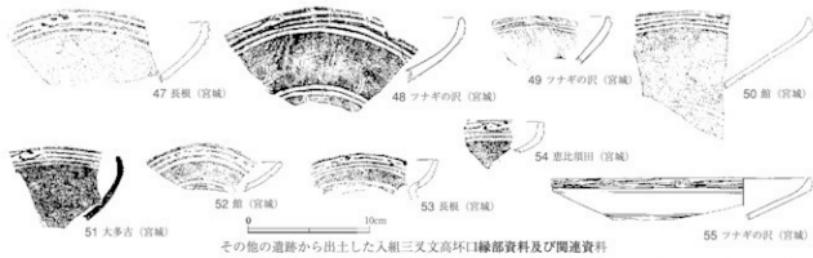


図9 仙北湖沼地帯出土の入組三叉文高環口縁部資料及び関連資料(2)

8-22-26)に一般的であることから、古的様相を留めていると見なせるであろう。

図8・9は、仙北湖沼地帯で出土した入組三叉文高環の口縁部及びその関連資料である。図8-2~10が大崎市(旧田尻町)中沢貝塚、図8-27~31が登米市石越町富崎貝塚、図8-37・38・43が同市迫町倉崎貝塚、図9-47・48・51・54がその他の遺跡から出土した入組三叉文高環A類である。口端は丸味を有する例が多いが、端部が薄く作出されたり(図8-6・29・31・38)、やや平坦に作出された例(図8-3・28・43、図9-47)も存している。底面から体部にかけては内彎気味に立ち上がり、体部外面の平行沈線は体部下半に開続され、内面の底面は丸底又は平底を呈する。

外面に明確な稜を持たずに内折したものには、A類とB類のいずれとも判断しかねる例も存在する(図8-8~10・29・31・38)。口縁部文様帶が狭小で、口端は薄く作出された例が多く、体部も直線的に立ち上がる。櫻ノ木遺跡例(図6)が典型となるが、その形制は後述するB類に近似しており、前記したA類とは別段に扱う必要があろう。因ってこの類型を、入組三叉文高環A2類として区別しておきたい。そうすると前記したA類は、入組三叉文高環A1類に分類されることになろう。しかし、区分が厳密でないことは否めない。

入組三叉文高環A類は、形制や口縁部文様から判じて、大洞B2式の台付浅鉢の系譜を引くことは明かである。同式では前記したように、底部から口縁部にかけて緩く内彎して立ち上がったり、口縁部が外傾した形制の台付浅鉢(図8-1・22-26・36、図22-14-16)が盛行しており、脚部の接合部直下に、凸彎部を有する例(図22-16)も認められる。当該土器の椀形の坏部が浅くなる

と共に、口縁部文様帶も狭小となり、脚部が著しい発達を遂げたことで、入組三叉文高環A類(A1類)が生成したと推定される。

(2) 入組三叉文高環B類

入組三叉文高環B類は、須藤隆氏が「高環C1p類」(須藤ほか1995:40頁)とした、口縁部が明瞭に内折して、外面に稜を形成した類型に相当する。

本類の典型となるのは、恵比須田遺跡例(図7-4)と中沢貝塚例(図7-3)である。

図8-11-17が中沢貝塚、図8-32-35が富崎貝塚、図8-39-42・44・45が倉崎貝塚、図9-49・50・55が仙北湖沼地帯のその他の遺跡から出土した入組三叉文高環B類である。口縁部文様帶はA類(A1類)よりも狭小となり、下限の区画線直上に明確な稜が形成される。口端は短く直上乃至は内傾しており、内面は屈折して外傾乃至は直上して、口端は薄く作出される。また内面が明瞭に屈折せずに緩く内彎して立ち上がり、口端が尖鋭となる例(図7-4、図8-32、図9-55)も認められる。本類で底面の形状が判明した資料は限られるが、多くは平底であったと推測され、底面から体部にかけては直線的に立ち上がる(図7-3)。また体部外面の平行沈線は、体部下半から下端にかけて開続される。

本類は口縁部直下の屈折に特徴付けられるが、口縁部の内彎した入組三叉文高環A1類が内折を強めたことで、同B類の成立に至ったと推測される。同様の口縁部形態の変化は、大洞BC2式~C1式の注口土器や壺形・鉢形土器にも認められており、器種間で呼応した経過が存していたと想定される。

図10-1は、山形県宮の前遺跡出土の大洞BC2式の注口土器A類(3段構成)である。注口土器の口縁部は、

大洞B1式～BC2式にかけて通常内彎して立ち上がり、橢形又は皿形を呈する。しかし1は、口縁部直下が屈折して口唇部が直立気味で立ち上がっており、屈折部の直下は無文となる。上記した特徴は、大洞BC2式新相の段階に萌芽が認められ、同式の終末段階に顕在化し、大洞C1式へと継承される（小林2003:30頁）。1は頭部の文様から判じて大洞BC2式に位置付けられるが、口端と肩部の突起列の特徴から、その中でも終末段階に位置付けられる（小林2006:53～54頁）。なお1の口縁部には、背向する主軸線を近接させた短小の入組三叉文が展開している。三叉状の陰刻は、Z字状の陽刻部を浮き出させるための副次的な役割へと変化しており、入組三叉文高坏の脚部（凸脛部・裾部）の描出手法とも共通する（図6、図15-41）。

図10-2は、岩手県手代森^{（こうじやま）}遺跡出土の大洞BC2式新相段階の注口土器である（小林2003:27頁）。口縁部は1と同様に内折しており、狭小な区内に両端の開いた入組三叉文が施される。三叉文は伸長化が著しく、後述する該域の大洞B2式装飾鉢類の入組三叉文の系譜を引くと考えられるが、当該高坏や装飾深鉢に多用された入組矩形文に由来する可能性も否定できない。

上記のように注口土器の口縁部には、内彎した形制から内折化への傾向が看取される。特に口縁部は、単位文様としての入組三叉文が大洞BC2式まで残存した部位となっており、入組三叉文高坏B類との親和性が指摘されよう。なお注口土器には、単体としての入組三叉文が大洞B1新式～BC2式にかけて、注口基部下面に一貫して存している（小林2003:37頁）。

また入組三叉文高坏B類の体部は、底部から直線的に外傾して立ち上がっている。同様の形制は、前記した入組三叉文高坏A2類にも認められており、口縁部の外折化と符合した変化であったと想定される。

以上のように、入組三叉文高坏A類からB類への推移が、型式学的に導出されるが、口縁部形態の他器種との類似性を考慮に入れるならば、後者が大洞BC2式に位置する公算が高く、形制が類似した入組三叉文高坏A2類も、同期に位置付けられよう。さればこれ等に先行したと見なされる同A1類は、大洞BC1式～BC2式（古相）に比定されることになろう。

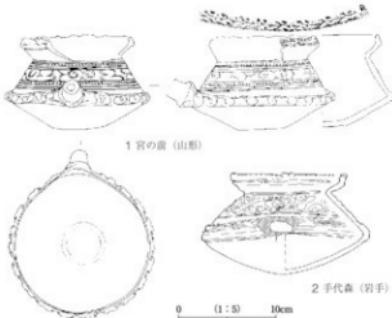


図10 注口土器の関連資料

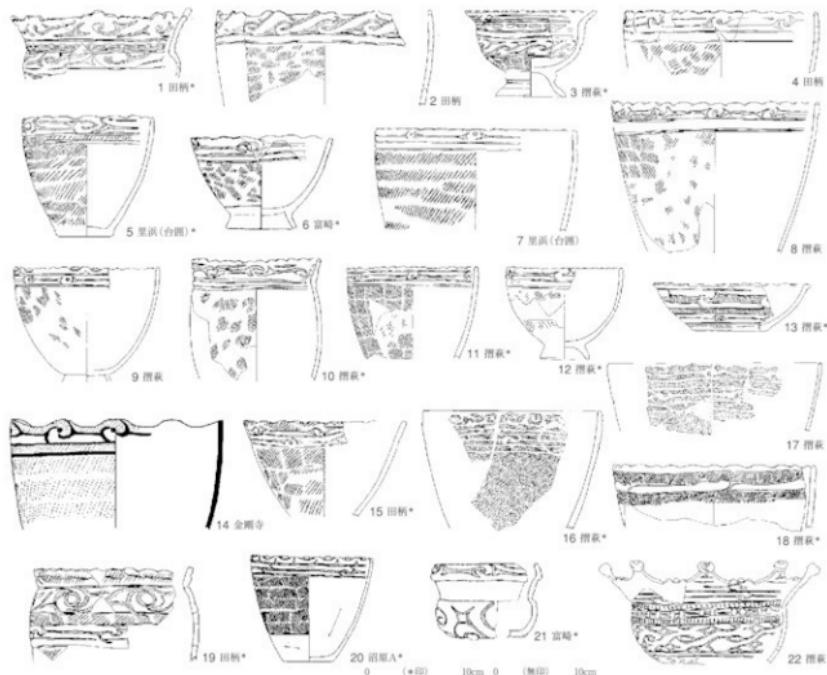
B 口縁部の文様について

入組三叉文高坏の口縁部文様帶には、A・B両類とも右上がりの入組三叉文又は末端が入り組む矩形文様（入組矩形文）が、6～10単位程度、1段のみ展開する。文様帶の上端は口端に露出し、下端のみが1～2条の沈線で画され、幅狭に作出される。

(1) 入組三叉文について

入組三叉文は、対向する三叉状の陰刻文様の一端が中央で入り組んで、ほぼ点対称に展開する文様構成であり、咬合部は接着するものと接着しないものとに二分される。山内清男氏の模型図（山内1930：第一圖）に象徴されるように、大洞B2式を特徴付ける文様であるが、東北北半では円文を囲う大きな咬合部の構成が古く、漸次円形刺突や筋錐形の小さな咬合部に取替される傾向が指摘されている。また大洞B2新式～BC1式にかけては、背向する三叉文の主軸線が密着する傾向が看取され、挟まれた陽刻部が強調されると共に、短沈線等の付加的要素も加味され、末端の咬み合の羊歯状文（羊歯状文1類）への発展が想定されている（小林2005a:35～40頁）。

大洞B2式の入組三叉文 図11は、宮城県北半^{（ほくはん）}から出土した、入組三叉文施文の大洞B2式（同BC1式を一部含む）の装飾深鉢・鉢形土器である。1～3は、咬合部で接着しない大洞B2式に典型的な入組三叉文で、1が入組三叉文2b類、2・3が入組三叉文2a類に相当する（小林2005a:36～37頁）。しかし宮城県北半では、このような入組三叉文以外にも、主軸線の伸長化の著しい三叉文が卓越している。三叉文の主軸線は水平に細長く陰刻され、両端が共に開いて、入り組んだ構成が特徴と

図11 宮城県北半出土の入組三叉文施文の装飾鉢類（大洞B₂式期）

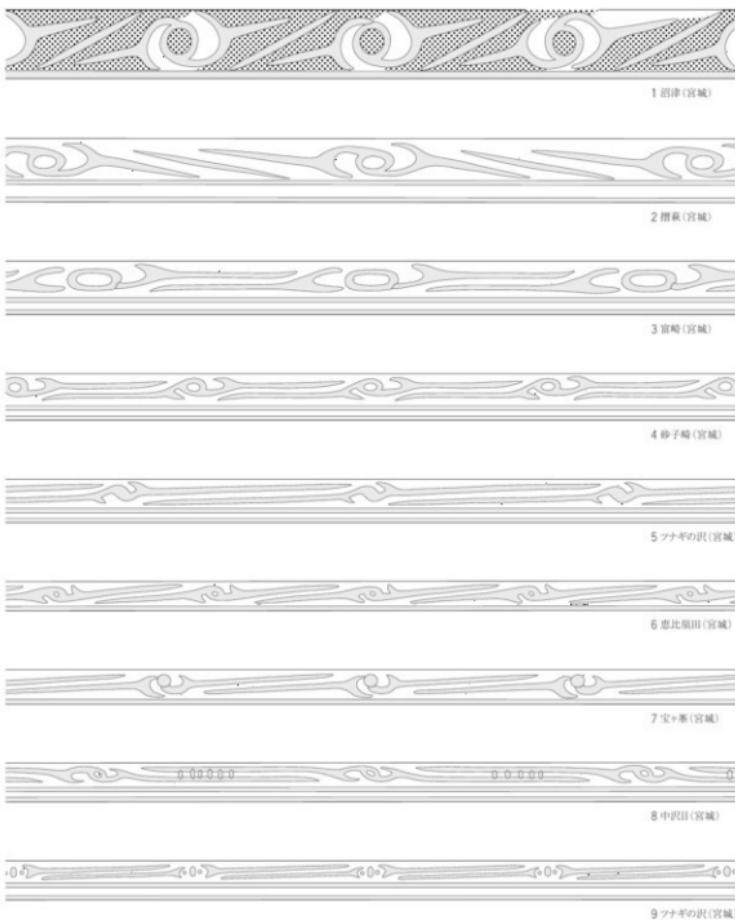
なる。

図11-7～20は、上記した三叉文が施された装飾鉢類である。咬合部が接着せずに入り組んだり(10)、円形刺突を挟んで対向した魚眼状三叉文(7・9)も認められるが、一方のみの三叉文が円形刺突を巻き込んだり(8・11・12)、咬合部が反転又は円形刺突を巻き込んで連結した入組三叉文(14～20)が卓越する。特に後二者には、三叉文の一端が上下端の区画沈線に接する傾向が看取される。図11-22は体部文様から判じて、大洞B₂式に位置する可能性が高いが、口頭部(II a 文様帶)には同様の三叉文が認められる。体部の方形の入組文は祖型的な羊齒状文と見なされる内容であり、後述する沼津貝塚第Ⅲアサリ層(図13-16)に共通する。

また両端が開いた構成以外にも、背向した主軸線が細長く平行した入組三叉文が認められる(図11-4・5・13)。4は入組三叉文2 b類、5は魚眼状三叉文である

が、先に入組三叉文の典型と指摘した図11-3の口頭部(II a 文様帶)にも、伸長化した入組三叉文が施文されている。この他に後述する主軸線の末端が入り組んだ三叉文が、該域固有の文様として指摘することができる(図32-44・52)。

上記の伸長化した入組三叉文には、縄文地文を有する例が顕著に認められる。縄文地文は通常、主軸線の上端(図11-14・15・18)や下端(図11-8・17)に施され、周縁が磨り消されるが、背向した主軸線間に充填された例(図11-13)も存在する。この縄文地文は、後期の口縁部の縄文帯や頭部文様帶の磨消文様の名残と捉えることができるであろう。書て筆者は、仙台湾周辺の貝塚群出土の後期末業～晩期初頭の土器を検討する中で、I 文様帶の消失する過程に大洞B₁新式段階を推定した(小林1999)が、大洞B₂式の口縁部に見られる縄文地文(図11-14・15)は、I 文様帶の痕跡であった可能性が想定



1：大洞B1新式、2・3：大洞B2式、4・5：大洞BC1式、6～9：大洞BC2式

純文地文

9 ツナギの沢(宮城)

図12 「入組三叉文高坏」に施された入組三叉文模様図

される。大洞B2式期の口頭部文様帶の繩文地文は、当該域の特徴となっており、後述する刻目技法装飾深鉢と共に、土器装飾における該域の保守性を象徴しているように見受けられる。当該域の大洞BC式期に、入組三叉文高坏が盛行した背景には、先行型式における上記した保守的な地域性が存していたことも、考慮に入れておく必要があろう。

大洞BC式の入組三叉文 宮城県北半の大洞B2式の装飾鉢類には、伸長化した入組三叉文が特徴的であるが、台付浅鉢の口縁部に施された文様については、大洞B1式以来の連續たる系統が存していたようである。

図12は、入組三叉文高坏とそれに関連する文様を模式化したものである。大洞BC式である当該高坏の口縁部に施された入組三叉文には、三叉文の主軸線の伸長・平

行・密着化の傾向が指摘される。いずれも狭い文様帶内に、細長い三叉文が密着して配されており、上端は口端に露出し、下端のみが沈線で画される。咬合部は接着した例が殆どであるが、未接着の例(図8-6)や魚眼状三叉文の例(図9-55)も、僅かに認められる。

図12-1は、大洞B1新式の小型の台付浅鉢である(図22-9)。入組三叉文は大きな円文を巻き込む構図で、三叉文の主軸線は比較的短く、背向した主軸線間に左側の斜線が挿入され、縄文地文が施される。晩期初頭の(台付)浅鉢に通有の装飾意匠であるが、黒色磨研の丁寧な作出であり、同例が入組三叉文高坏の母体の一翼を担っていたことは確実であろう。

図12-2は、大洞B2式の台付浅鉢である(図22-15)。右傾の入組三叉文であるが、1の系譜を引き右傾の斜線が挿入されており、文様帶の上下幅が狭まるのに符合して、主軸線が横位に伸長し、縄文地文も消失する。この文様が更に密着したのが、図12-3であろう(図8-25)。三叉文の主軸線はほぼ水平化して、斜線が消失しており、挟まれた陽刻部は幅狭となる。入組三叉文高坏成立前夜の様相を呈しており、大洞B2新式に位置付けられるであろう。

図12-4は、大洞BC1式の入組三叉文高坏である(図7-2)。3よりも更に密着の度合いが強まり、三叉状の陰刻と浮き出された陽刻部の幅がほぼ等しく、咬合部もより小さく作出される。図12-5は、同式の咬合部が反転した構成(図9-48)である。

図12-6~9は、大洞BC2式の入組三叉文高坏である。三叉状の陰刻を取り組ませた意匠では、先行型式との差異は殆ど見出せない。しかし口縁部の内折化と相俟って、文様帶の幅が狭小となり、文様が更に密着して、陰刻の幅よりも陽刻部の幅が細く作出された例も現出する。6は小さな咬合部を有する例(図7-4)、7は円形刺突で反転した例(図30-1)である。8は右傾の入組三叉文となるが、背向した主軸線の間に5~6個の刻み目が加えられており、羊歯状文の截痕に通じた装飾となる(図7-3)。9の文様の詳細は判然としないが、円形刺突を挟んで魚眼状三叉文となる特異な例(図9-55)となっている。

以上見てきたように、入組三叉文高坏の口縁部文様には、晩期初頭の台付浅鉢からの系統的な発展を見て取る

ことができる。即ち文様帶の上下幅が漸次狭まつたのに符合して、文様の密着の度合いが強まり、特徴的な入組三叉文に至った経過が観察されよう。大洞BC式の入組三叉文は、背向した三叉文の主軸線の伸長化と密着化に特徴付けられるが、その母体は先行する大洞B2式の台付浅鉢の入組三叉文に見出すことができ、陰刻を主とした文様から、陽刻部を意識した文様構成への変化として捉えることが可能となる。

沼津貝塚の層位的所見 上記した特徴を持った入組三叉文が、大洞BC1式に位置付けられる層位的事例として、宮城県石巻市沼津貝塚を挙げることができよう。

沼津貝塚は前記したように、旧北上川河口部(現河口より北東方約6.5km)に位置する大規模な主貝塚³⁰⁾であり、入組三叉文高坏の主要分布域である仙北湖沼地帯とは、至近の距離にある。1909~1930年にかけて、毛利總七郎・遠藤源七両氏によって発掘された骨角製品が著名であるが、1963年東北大学文学部考古学研究室(当時)によつて、遺跡東北端の北側斜面に、長さ15mのトレンチが開設された。そのうちD-0区において、比較的良好な堆積状況が認められたことから、須藤隆氏が出土土器を紹介している(須藤1984:24~28頁)。但し、貝層の堆積状況を示す断面図は公表されていない。

図13が、沼津貝塚D-0区出土の層位別の土器資料である。須藤氏に拠ると、沼津貝塚では8枚のアサリ層を基準に、18枚の包含層が認定されたとのことである。最上位の第Iアサリ層~第IIアサリ層(図13-1~15)にかけては晩期2期の土器群(大洞BC式)、第IIIアサリ層~第IVアサリ層(図13-16~22)にかけては晩期1期の土器群(大洞B2式)、第Vアサリ層以下(図13-42~46)は後期最終末に位置付けられ、第Vアサリ層~第VIアサリ層(図13-23~41)にかけてはその中間的様相を持つ土器群(大洞B1式)が出土したと報告されている。

破片資料であるが、土器の型式変化が整然と堆積した層序で示されており、興味深い事例となっている。この中で注目されるのは、第IIIアサリ層から出土した土器であろう。同層準では僅か2点の資料が図示されたに過ぎないが、「入組三叉文」(図13-17)と「羊歯状文の祖型」(図13-16)を施した土器が、層位的に共伴した状況を示している。須藤氏は同層準を大洞B2式の範疇で捉えており、この事例を論拠の一つに挙げて、羊歯状文が既に

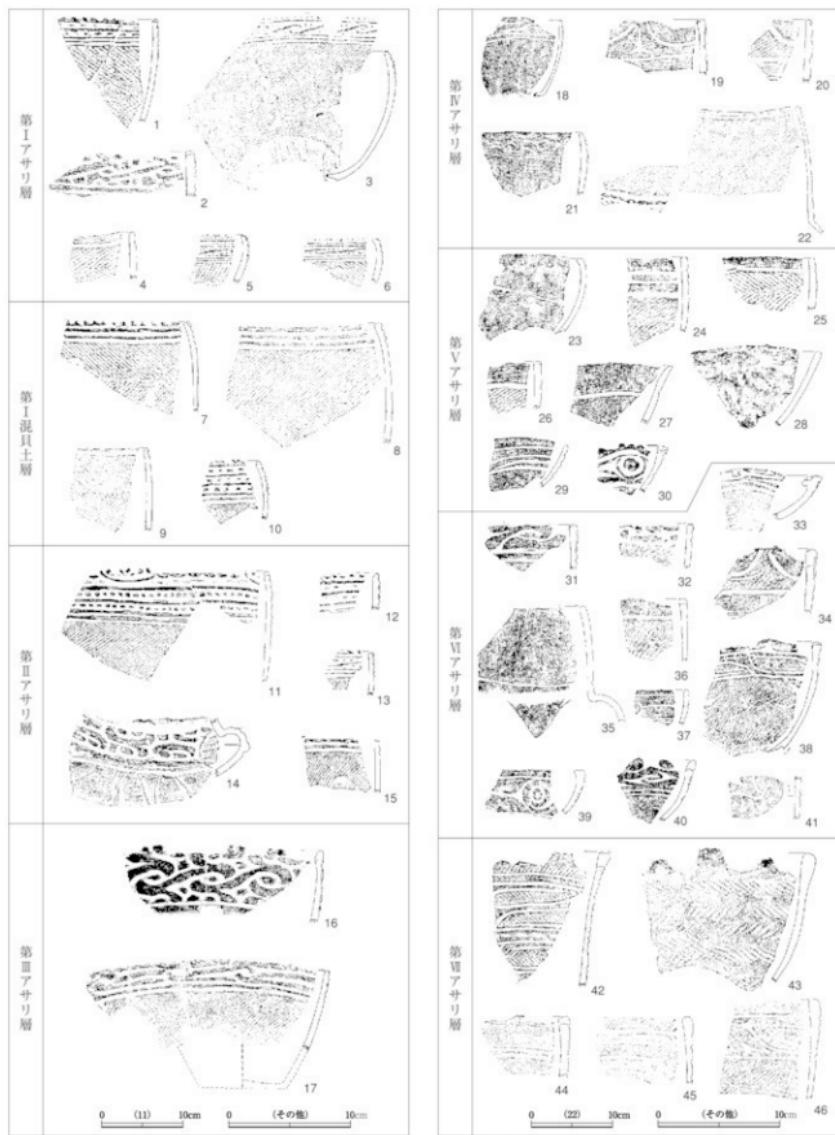


図13 宮城県沼津貝塚1963年調査トレンチD-0区出土土器（須藤1984）改変

晩期 1 b 期（大洞 B 2 式）に成立していたことを指摘している（須藤1992a：270頁、須藤ほか1995：67・230－232頁）。一方、いち早く大洞 B C 1 式の再評価を試みた金子昭彦氏は、大洞 B C 1 式に「方形入組文を持つ土器」と「入組三叉文を持つ土器」が層位的に共伴した論拠に挙げている（金子1992：6－7・27頁）。

図13-16は、祖型的な Z 字文が施された装飾鉢である。入組三叉文に横 S 字状沈線と短沈線を付加することで、Z 字状の陽刻部が形成されるが、刻まれた陰刻は細く、陽刻部が大きく作出されている。上記した特徴は、羊齒状文でも古的様相と見なされるもので、筆者は大洞 B C 1 式の指標に位置付けている（小林2005a：40－52頁）。

第Ⅲアサリ層では、この祖型的羊齒状文と共に入組三叉文の装飾鉢（図13-17）が出土している。17の口端は、施刻み目による小波状縁で古的様相を留めている（小林2005a：21頁）が、口頭部文様の入組三叉文は、背向した主軸線が伸長し、且つ密着した特徴を有している。東北北半ではこの特徴が、大洞 B C 1 式に顕在化しており（小林2005a：39－40頁）、前記した入組三叉文高坏の口縁部文様の描出手法とも、共通した内容となっている。入組三叉文の伸長化と密着化は、東北北部～中部にかけて、歩調を合わせた変化であったと受け止めることができ、筆者は第Ⅲアサリ層が当該域の大洞 B C 1 式の型式内容であったと理解している。

層位毎に沼津貝塚の資料を見てみると、上位の第Ⅰアサリ層と第Ⅰ混貝土層出土の土器（図13-1～10）は、大洞 B C 2 式に比定される内容である³¹⁾。第Ⅲアサリ層（図13-16・17）は、前記したように大洞 B C 1 式に位置付けられるが、その直上の第Ⅱアサリ層（図13-11～15）のうち、12・13は大洞 B C 2 式、14は大洞 B C 1 式に比定されよう。第Ⅲアサリ層より下位の第Ⅳ・V・VIアサリ層（図13-18～41）は、大洞 B 1 式と同 B 2 式が混在しており、両型式を層位的に区分することは困難である。更に下位の第Ⅷアサリ層（図13-42～46）は、須藤氏が指摘したように後期最終末に位置する内容である。

以上、沼津貝塚の第Ⅲアサリ層を基準に、伸長化と密着化した入組三叉文が、大洞 B C 1 式に位置付けられる可能性を指摘してきた。この層位的事例に立脚する限りでは、須藤氏が指摘したように図13-16を大洞 B 2 式の

範疇で捉えるならば、図13-17は大洞 B 2 式の入組三叉文の装飾鉢に比定されることになる。しかし文様描出手法における東北北半との共通性と、共伴した祖型的羊齒状文の装飾鉢（図13-16）を考慮に入れるならば、大洞 B C 1 式に位置する公算が高いと筆者は理解している。因って、同層準を大洞 B C 1 式の論拠に置く金子昭彦氏の見解を支持したい。

（2）「入組矩形文」について

「入組矩形文」は、横長の鼓形モチーフの末端が相互に入り組む文様構成で、入組三叉文の一種と見なすことができるであろう。櫻ノ木遺跡例（図6）で解説したように、入組三叉文高坏に屢々認められるが、後述するよう同時に装飾深鉢に多用された文様である。

文様は基本的に横位に長く伸びており、平行化した三叉文の主軸線が上下で密着し、主軸線の末端と三叉文の一端が連結した構成となる。当該文様が施された大洞 B 2 式の台付浅鉢は見出せず、大洞 B C 式の当該高坏の資料も僅少であることから、その系譜は判然としないが、筆者は「図14-1→2」への変遷を想定している。

図14-1は、大洞 B C 1 式相当の当該高坏の口縁部文様の模式図である（図9-47）。主軸線に囲まれた陽刻部の幅が陰刻よりも広く、咬合部もやや大きく作出されており、形制は口縁部の内側した入組三叉文高坏 A 1 類に相当する。図14-2は、大洞 B C 2 式の当該高坏である（図6）。文様帶の上下幅は狭まり、陰刻と陽刻部の幅はほぼ等しくなる。また文様は短小となり、單位数も増加しており、咬合部は小さく作出される。筆者は上記の型式変化を想定しているが、この経過は先の入組三叉文とも共通すると見えるであろう。

上記以外の事例を見てみると、入組三叉文高坏 A 1 類の典型である図7-1は、末端の開いた三叉状陰刻の直下に平行した沈線が付加されている。実測図から文様の仔細は判然としないが、矩形文様を意図していたことは確かであろう。図30-2は、矩形入組文が施された入組三叉文高坏 A 類（A 2 類）である。陰刻に挟まれた陽刻部は狭く作出され、入組矩形文装飾深鉢の文様（図38-32）に類似しており、大洞 B C 2 式に位置付けられよう。図9-52・53は、入組矩形文が施された当該高坏以外の器種である。52は拓影図から判じて口径が小さく、口縁部の内側の度合いも弱いことから、皿形の器形と考えら



1 長板具塙(宮城)



2 梁ノ木(青森)

1: 大洞BC1式、2: 大洞BC2式

図14 「入組三叉文高坏」に施された入組矩形文模式図

れる。53は注口乃至は壺形土器の口縁部として復元されているが、入組三叉文高坏A類に類似した口縁部資料である。いずれも口径の関係からか、入組三叉文高坏に比べ横幅が狭く描出されている。図示していないが、栗原市（旧若柳町）館貝塚では、下端の区画線を欠いた当該文様の入組三叉文高坏A類（亘理ほか1974：第57図7－拓影図、第58図7－実測図、第60図－写真）が出土している。同例の矩形文下端の描線が、区画沈線の代用をなしていたと想定される。

入組矩形文の系譜については、大洞B 2式台付浅鉢の伸長化した入組三叉文からの発展として捉えることが可能である。しかしながら、当該域の大洞B 2式の装饰鉢類の（口）頭部文様には、既に幅広の当該文様が存している（図11－13、図38－2？）。また後続する大洞B C 1式では、やや上下幅を有する横長の入組矩形文が盛行している（図37－2）。当該域の装饰鉢類に多用された文様であったことを勘案するならば、当該高坏への影響関係も無視できないであろう。

C 脚部の装饰について

入組三叉文高坏の脚部は、既に指摘したように3段で構成される。脚部は太くて坏部を凌ぐ高い器高と、透かし文様を伴う複雑な装饰に特徴付けられる。しかし脚部の多くは破片資料で、全形の窺える例は非常に少ない。従って、前記した坏部の形態と脚部の装饰との相關性については、判然としないのが実情である。

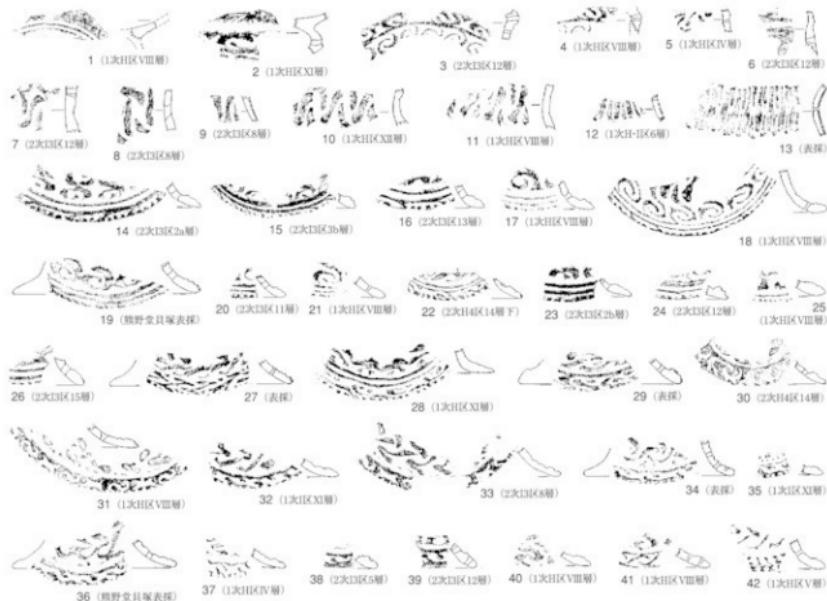
凸彎部 凸彎部の装饰は、透かしと陰刻文様で構成される。取り分け、円形刺突（未貫通）や円孔が、文様の基点となっており、それを取り囲んで入組三叉文や鼓形区画、弧線文等が配される。

凸彎部の資料としては、図6、図7－1～3、図15－2～4・43・60・61・72、図31が挙げられる。円孔を上から卷き込んだ弧線文と鼓形（矩形）文様を交互に配

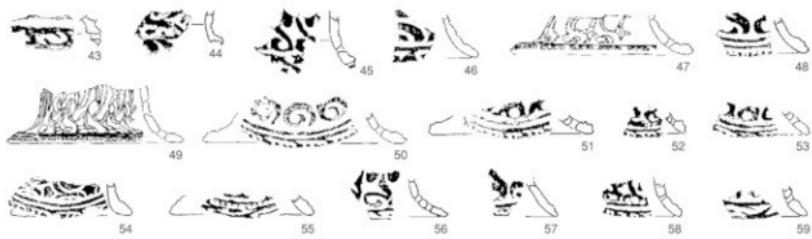
した例が殆どで、鼓形区画は陰刻文様となるか又は透かしが穿たれる（図7－1・2、図15－2～4・43・61・72）。弧線文と矩形文様の系列には、円孔を巻き込む弧線文が独立せず、鼓形区画の一端の延長として入り組む例も存在する（図7－3、図31）。その他に、背向した主軸線の短い入組三叉文で構成された例（図6）も見られるが、主軸線が密着しており、挟まれた陽刻部を意識した構成となっている。凸彎部は狭小な文様帶となっており、透かしの種類が制約されたためか、文様のバリエーションは限られている。

口縁部の形状が窺える例（図7－1～3）で比較すると、入組三叉文高坏A類（A 1類）である1・2の凸彎部は、円孔を巻き込む弧線文と鼓形区画の透かしが、交互にやや間隔を置いて配されている。一方同B類である3の凸彎部は、2帯の文様帶で構成される。同例の上段には、円形と矩形の透かしが交互に穿たれるが、円孔（円形刺突も含む）は2段で、矩形区画の末端から伸びた陰刻の入組部となる。下段は上下端の横帯から伸びた弧線が、円形刺突で入り組んでおり、文様の繁縝化が著しい。上記から型式学的に、やや簡素な文様構成から、繁縝化した構成への発展が導出される。1・2は大洞B C 1式～B C 2式古相、3が大洞B C 2式新相以降に位置すると推測されることから、凸彎部が2帯の文様で構成された宮の前遺跡例（図31）は、大洞B C 2式新相以降に相当しよう。

同様に典型資料で凸彎部の形状を見ると、入組三叉文高坏A類（A 1類）の図7－1・2の凸彎部は、ほぼ中央に最大径があり、球状に膨らむ。一方同B類の図7－3の凸彎部は、最大径が上部にあって、下方が窄まる。型式学的に丸味を持って球状に張り出す形制から、最大径の上方への移動即ち「上方退縮」の過程が看取できるであろう。また図6のように内面ごと膨らまず、隆化し



宮城県中沢目貝塚出土の入組三叉文高環脚部資料



宮城県富崎貝塚出土の入組三叉文高環脚部資料



0 10cm

その他の遺跡から出土した入組三叉文高環脚部資料

図15 仙北湖沼地帯出土の入組三叉文高環脚部資料

た例も存在する。当該高坏の凸部の形制は、注口土器の肩部と同様に、漸次縮小化と陸帯化の経過を辿ったものと想定される。

脚柱部 脚柱部の装飾で、全容が窺える資料は非常に少なく、完形品は図6と図7-1の2例に過ぎない。ある程度文様が判明した脚柱部の破片資料としては、図15-7-13・45・62が挙げられるが、その他に凸部資料(図15-3)や裾部資料(図15-14・18・19・27-29・31-34・36・47・49・50・54・56・63・64・77)から、裝飾の一部を理解することができる。

脚柱部は、透かし彫りを基調とした文様で構成される。中央付近には、矩形区画の透かしが穿たれ、その四隅又は末端の一部が、陰刻で綴位や斜位に連結しており、唐草文風の装飾が展開する。中には、細い陰刻が網目状に連結した例も存するが、その中央には円孔が穿たれている(図15-13)。古相と見なされる図7-1の脚柱部は、入り組む矩形文様で構成される。矩形の透かしと入組部にはやや大きな円孔が穿たれるが、陽刻部は太く作出されている。同様の矩形入組文で構成された例は、図15-47-49にも認められており、脚柱部装飾の繁縝化は、新しい様相と見なされるであろう。

脚柱部の上下端には、円孔が穿たれる例が多い。上下端の界線と上記した陰刻文様との交点に穿たれるが、矩形入組文で構成された場合、円形と矩形の透かしは、交互に穿たれる(図7-1、図15-47-49)。この場合、円孔は矩形文様の一端が伸びて連結したり、短い弧線が付加され巴状の文様となる。

脚柱部の下端に、菱形の透かしと円孔を巻き込む巴状の陰刻が交互に配され、巴状(C字状)の陽刻部が作出された例が認められる(図15-14・19・48・50)。菱形区画の末端は伸長して、下端の界線と連結しており、大洞BC式の装飾鉢類に多用されたC字文(C字文2類)と共に構成となる(小林2005a:52-57頁)。また上下端の円孔を上で巻き込んで、弧状に入り組む陽刻部が作出された例も存在する(図15-3・4・18)。この場合陽刻部は細く作出されており、繁縝化した印象を受ける。

矩形文様を入り組ませることで、末端の入り組んだ横S字状又はZ字状の陽刻部を描出した例も認められる(図15-27・29・32-34・42)。透かし自体は小さいが、陰

刻同士が複雑に連結して、狹小な陽刻部を作出しており、文様の繁縝化が著しい。図7-1からの発展が想定され、新しい様相と見なされるであろう。

一般に脚柱部の透かしは、大きく穿たれたものが古く、文様の繁縝化に伴って、次第に縮小し、多く穿たれる経過が推察される。従って文様構成が比較的簡素で、陽刻部が大きく作出され、透かしの少ない例は、古相に位置付けられるであろう(図15-46・63・72・77)。

裾 部 裾部は外反気味に強く開き、緩い角度をもって底面に接着する。上端は通常1~2条の沈線で区画されるが、その下端は画されず脚端に露出しており、狹小な文様帶をなしている。装飾は側面の視点では見ることができず、上面(正確には斜め上方)からの視点を意識した加飾となっており、通常1段のみで構成される。

裾部の装飾で最も一般的なのは、鉤爪状の区画が右側上方に突き出た意匠である。通常区画内には、1~2個の刻み目が加えられ、2~3個の陽刻部が作出される(図15-15・18・47・50-54・63・64・77)。4個以上の陽刻部が作出されたり(図15-16-65)、右側上方に突き出た例(図15-14)も僅かに認められる。

裾部に施された鉤爪状の装飾は、装饰鉢類の口端の「B突起4b類」(小林2004b:39頁)に類似している。B突起4b類は、B突起の中央から右下方向に沈線が伸びて、鉤爪状の区画が作出され、区画内の口端が刻み込まれることで、珠紋線を呈したもので、大洞BC式に特徴的な口端の装飾である。この意匠を180度反転させ、先端が左上方向に突き出ると、当該高坏裾部の装飾となるが、恰も口端を脚端に置き換えた内容と言えるかもしれない。

上記した文様の萌芽は、大洞B2式台付浅鉢の裾部に認めることができる。図23-16・17は、宮城県中沢目貝塚の大洞B2式の層準から出土した台付浅鉢である(図21-298-332)。両例とも、脚端から左側上方に突き出た幅広の鉤爪状区画が観察される。このような鉤爪状区画は、東北北半の大洞B2新式の装飾鉢類にも屢々認められており、末端の咬み合わない羊歛状文(羊歛状文2類)の母体になったと想定されている(小林2005a:45-48頁)。中沢目貝塚例の裾部が更に外側に張り出し、文様帶の幅が狭小になることで、入組三叉文高坏の裾部に至ったと想定される。

鉤爪状区画に次いで顕著なのは、凸彎部で多用される鼓形文様と円形刺突の交互文様である。凸彎部と同様に、円形刺突を巻き込む弧線文が独立した例(図15-31・33)と、鼓形文様の末端が入り組み、陰刻文様が連続した例(図15-32・34・36・37・71?)の二様態が存している。但し凸彎部の円文は貫通した例が多いのに対しで、根部では殆どが未貫通の円形刺突となる。なおこの系列の脚端には、通常細かな刻み目が加えられる。

この他には、鉤爪状区画の先端が反転して、界線を持たずに脚柱部の装飾と連続した例(図15-27)や、末端の咬み合わない羊歯状文(羊歯状文2類)で構成された例(図15-28)、上下から入り組む弧線文の例(図15-29・30)等が認められる。主軸線の短い入組三叉文の例も散見される(図15-41)が、同例の咬合部は円孔となる。

裾部の装飾のうち、鼓形文様と円形刺突を交互に配した系列や入組三叉文の系列が、凸彎部の装飾と共に共通する。共に狭小な文様帶に展開したため、装飾意匠が限定されたと推察される。

その他 入組三叉文高坏の脚部は、上記したように3帯の文様帶で構成されるが、文様帶の多帯化は大洞B C式の装飾鉢類の特徴でもある(小林2005a:68-69頁)。宮城県中沢目貝塚では、当該高坏の脚部の装飾と類似した装飾浅鉢が出土している(図1-6)。底部が欠損しており高台の有無は判然としないが、頭胴部界で屈折し、体部が強く内彎した形制で、屈折部より上段に2帯(口縁部・頭部)、下段の体部にも2帯の、計4帯の文様帶から構成される。上端の口縁部文様帶は末端が連結した矩形文様、最下段の体部文様帶は入組弧線文と鼓形文様が交互に配されており、丁度入組三叉文高坏の脚部を倒立させた構成となっている。両器種間の親和性を示す事例と言えるであろう。

D 小 結

入組三叉文高坏の形制、口縁部の装飾、脚部の装飾について検討を加えてきた。

形制においては、口縁部が内彎した入組三叉文高坏A類と、口縁部外面に棱が形成された同B類とに区分され、A類からB類への型式変化が想定される。体部も内彎した形制から直線的なものへと変化しており、他の器種との相関性から、入組三叉文高坏A類(A1類)は大洞B C式~B C 2式(古相)、同B類は大洞B C 2式

(新相~終末)に概ね位置付けられるであろう。入組三叉文高坏A類には、口縁部に明確な棱を持たず内屈し、体部が直線的となる類型(入組三叉文高坏A 2類)も存在しているが、体部の形制が直線的となることから、B類と同様に大洞B C 2式(新相~終末段階)に比定されるであろう。

口縁部には、大洞B 2式台付浅鉢の系譜を引く、伸長化と密着化の著しい入組三叉文が施文される。大洞B C式期を通して、文様モチーフに基本的な変化は見られないが、時期が下るに従い密着化の傾向が強まるよう窺える。また入組矩形文は、入組三叉文の陰刻が連結することで生じた文様と見なされるが、同様の文様が施された装飾深鉢からの影響も無視できないであろう。

脚部の装飾は、透かしの文様を基本としており、後期末業~晚期初頭の台付浅鉢からの系譜を考えられる。古相の入組三叉文高坏A類(A 1類)の脚部の装飾は、比較的の間隔を置いた構成であるのに対し、同B類や同A 2類では複雑な装飾で構成された例が多く、装飾が繁雑となる経過が観察される。また凸彎部は、球状に張り出した形制から最大径の上方への移動(上方退縮)や、隆帯化への経過が想定される。

体部の装飾について、詳細は触れてこなかった。繩文地文は持たず、体部下半から下端にかけて、平行沈線が開続されるのみであるが、後述のように先行する大洞B 2式の台付浅鉢では、通常1条の沈線が体部下半に巡らされる(図8-23・25、図22-15)。大洞B 2式台付浅鉢から同B C式入組三叉文高坏への変化を、1条沈線から平行沈線への変化として理解することも可能であろう。装飾鉢類(台付を含む)では、体部下半の平行沈線や接合部の截痕列は、大洞B C 2式の特徴とされており、大洞B 2式~B C 1式には1条沈線が卓越する(小林2005a:72頁)。図7-3の接合部は刻み目帯となっており、大洞B C 2式の特徴を顕現している。しかし、古相に位置付けられる入組三叉文高坏A類(A 1類)の体部にも、既に平行沈線が開続されており、装飾鉢類と当該高坏では、変化の歩調にずれが生じていた可能性が考えられる。

5 「入組三叉文高坏」の年代的変遷

A 須藤隆氏による「入組三叉文高坏」の細分案

須藤隆氏は、中沢目貝塚の層位的所見から、当該高坏



図16 宮城県中沢貝塚地形図(須藤編1986)改変

の「器形は下層では口縁部が内側してゆるやかにたちあがる形態をとり、上層で口縁部が強く屈折し、たちあがる形態に変化する」と指摘している(須藤1984:277頁)。以下では、中沢貝塚で示された層位の根拠を、具体的に検証してみたい。

(1) 中沢貝塚における層位的出土状況

中沢貝塚は、1973・79・84・86年の4次にわたって、須藤氏を中心とする東北大学文学部考古学研究室(当時)により、発掘調査が実施されてきた¹⁵⁾。層厚は約1.5mを測り、370枚を超す堆積層が入念に精査され、詳細な調査成果が公表されており、貝塚調査の範として、以降の研究に多大の影響を与えた遺跡として特記されるものである。

発掘調査の正式報告としては、第1次調査(須藤編1984)と第2~4次調査(須藤ほか1995)の2冊の大部の報告書、そして第3次調査の概報(須藤編1986)が公刊されている。また報告書以外にも須藤氏の論考の中で、中沢貝塚の成果が度々紹介されてきている(須藤

1984、須藤1992a・b)。しかし報告形態が多岐にわたっているため、層位名称や貝層断面図、図示された土器等に異同が存しているのが実情である。そこで本稿では、2冊の報告書に準拠して、堆積状況を明確に踏みけることが可能な斜面下端の「I 3区」(図16)に限って、層位的出土状況を検討してみたい。

I 3区では、第1次調査の10枚と第2次調査の38枚にのぼる包含層から、II群土器(大洞BC式相当)が出土している(須藤ほか1995:71頁)。第1次調査のVI層より下層から第2次調査の18層(19層?)より上位の堆積層が相当し、両次の調査を合わせると、層厚は約65cmを測り、10~20度の傾斜を以て堆積していた(図17)。

発掘区の断面図を見ると、第1次調査と第2次調査の境界面では、貝層の堆積状況に大きな変化が認められる。その変化が廃棄パターンの変化を反映したのか、発掘調査の精度・方法に起因したのかは判然としないが、第1次調査では均質な斜面堆積が認められ、比較的变化に乏しかったのに対し、第2次調査では貝層の堆積が薄

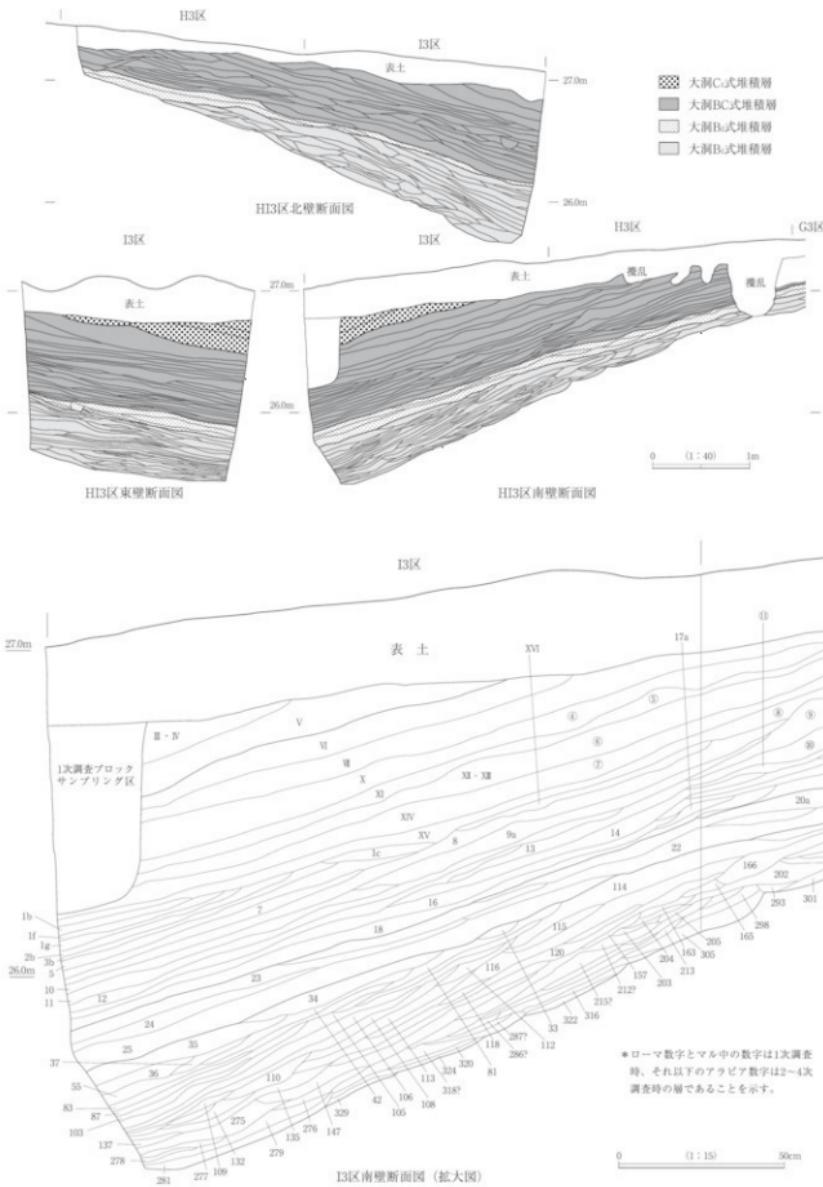


図17 宮城県中沢貝塚HI3区断面図（須藤ほか1995）改変

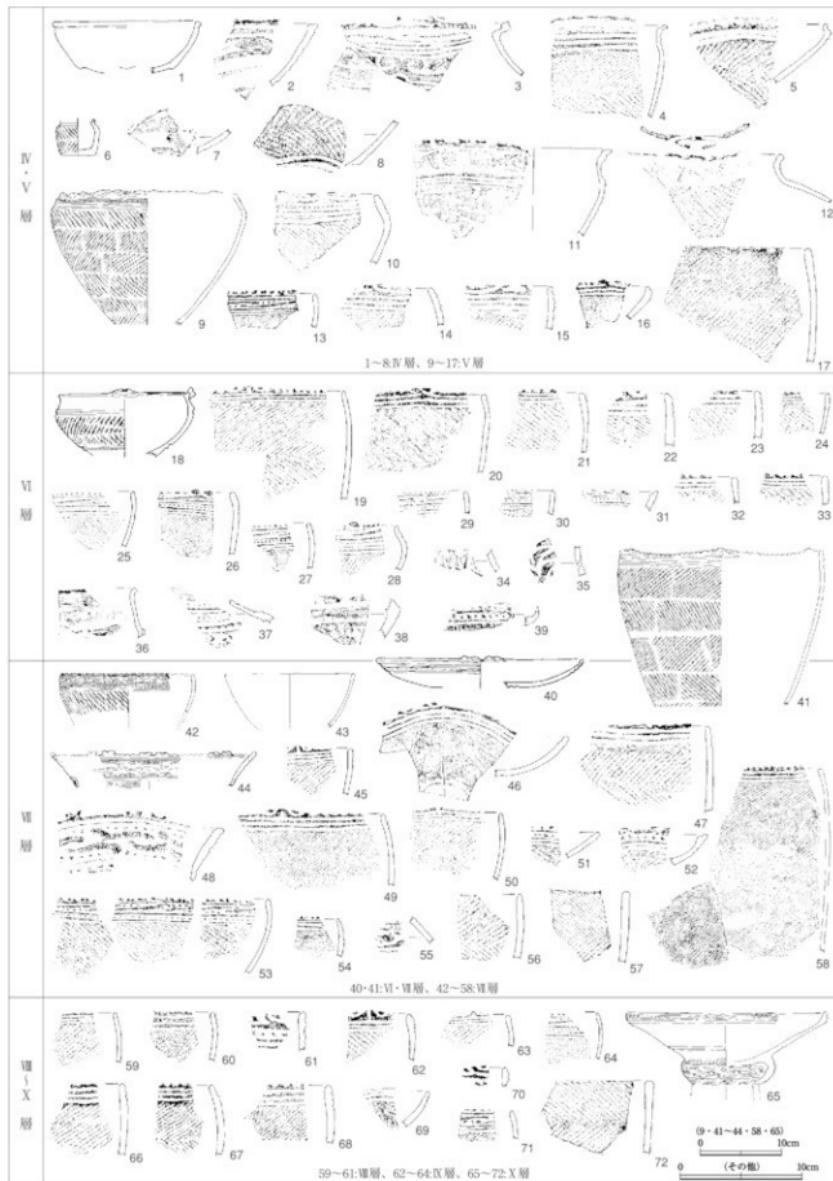


図18 宮城県中沢貝塚I-3区出土土器(1) 第1次調査

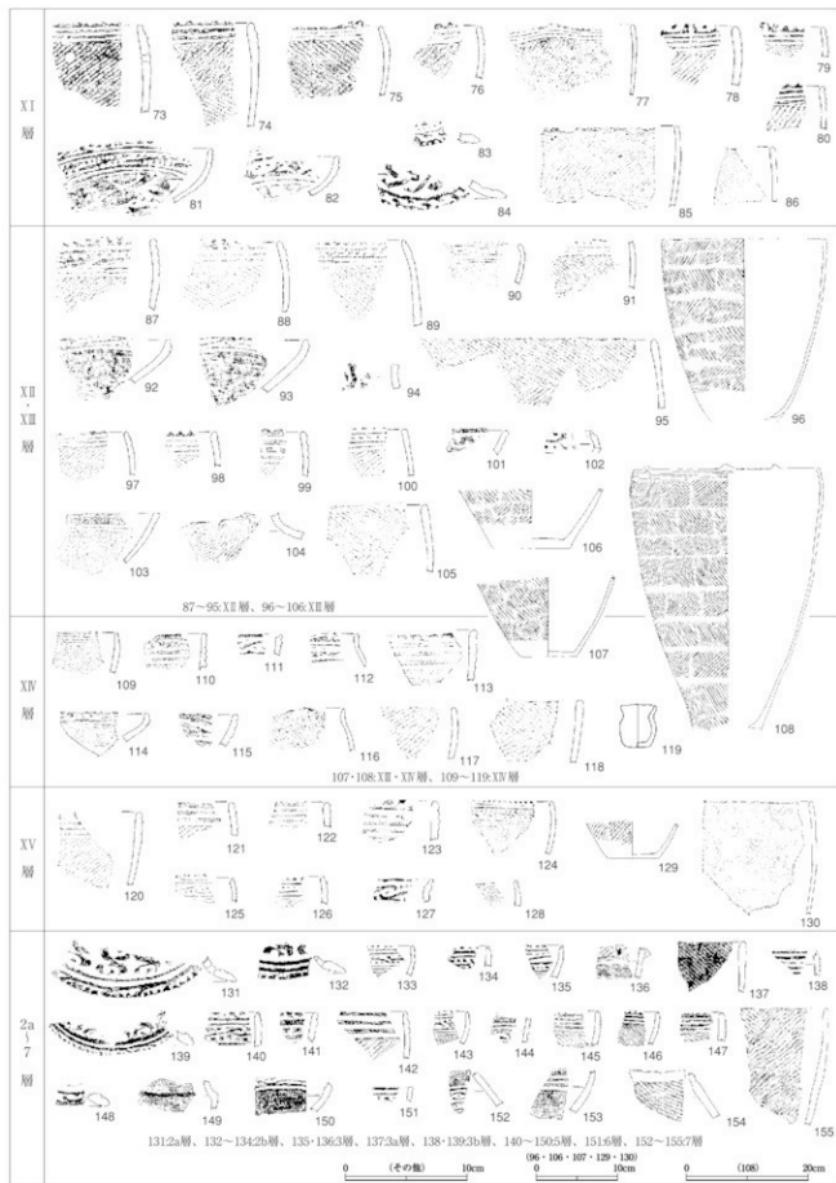


図19 宮城県中沢貝塚I3区出土土器(2)第1次・第2次調査

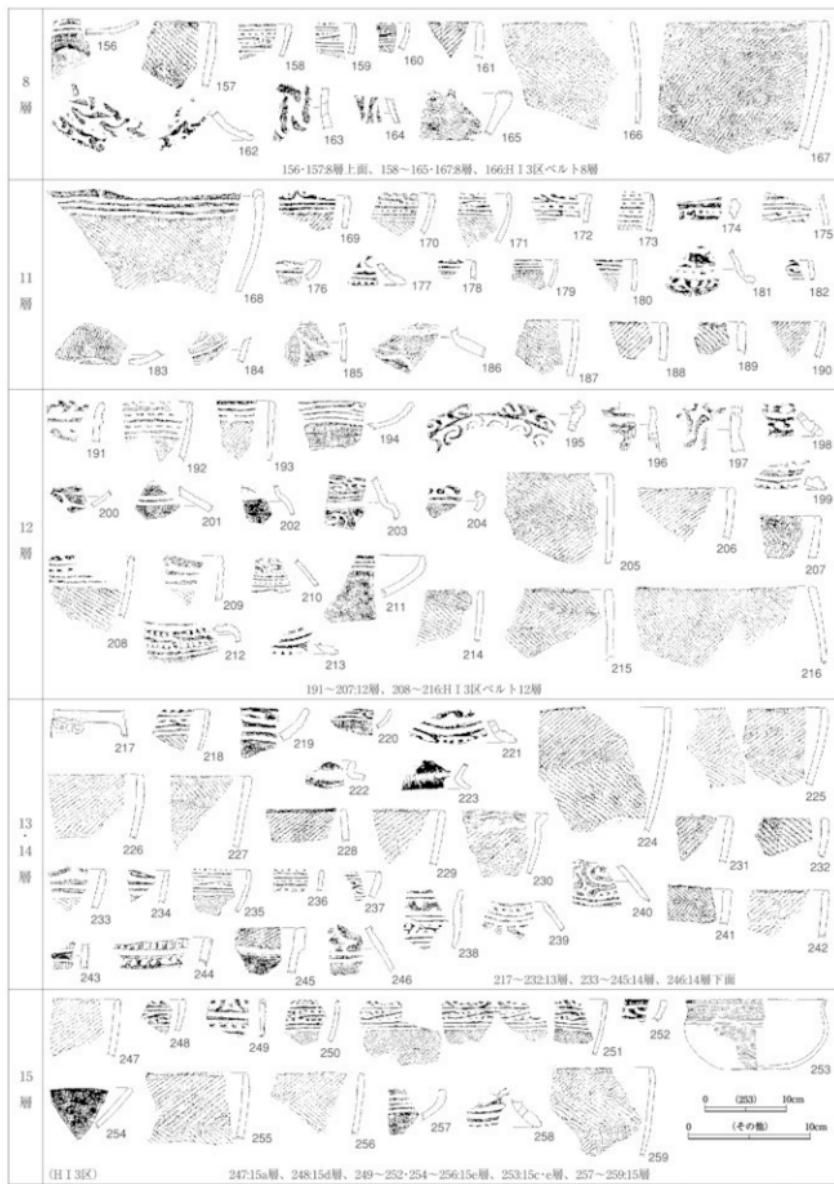


図20 宮城県中沢貝塚I 3区出土土器 (3) 第2次調査



図21 宮城県中沢貝塚Ⅲ区出土土器(4)第2次調査

く、細かな纏まりとして捉えられている。

堆積層の時期は、以下のように比定されている（須藤1992b：676頁、須藤ほか1995：34頁）。第1次調査のⅢ層～V層で出土した土器群は「中沢貝塚Ⅰ群土器」として晩期3期（大洞C 1式期）、第1次調査のVI層～XⅦ層と第2次調査の1a層～18層（19層？）にかけて出土した土器群は「中沢貝塚Ⅱ群土器」として晩期2期（大

洞B C式期）、第2次調査の19層（20a層？）～27層にかけて出土した土器群は「中沢貝塚Ⅲ群土器」として晩期1期新段階（晩期1b期：大洞B 2式期）、第3次調査以降の34層以下から出土した土器群は「中沢貝塚Ⅳ群土器」として晩期1期古段階（晩期1a期：大洞B 1式期）に、それぞれ位置付けられている。

大洞B 2式に相当する堆積層は薄く、層厚10～15cmを

測るのみで、堆積状況も変化に乏しい。一方、下層の大洞B 1式の堆積層は、層厚が厚く、廃棄単位として細かな纏まりが捉えられている。大洞B 2式の堆積層は、前後の型式に比べると貧弱な内容を示しており、投棄活動があまり活発でなかったことを窺わせている。

(2) 出土層位から見た「入組三叉文高坏」の変遷

図18~21は、中沢貝塚の第1次調査の報告書(須藤編1984)と第2次調査の報告書(須藤ほか1995)から、I 3区(第2次調査の15層以下はH I 3区)に限って資料を抜粋し、層位毎に図示したものである。

第1次調査のVI層より下層から第2次調査の19層までが、大洞BC式に相当する堆積層である(図18~18~図21~276)。断面図(図17)からは整然と堆積した状況が看取され、約65cmの層厚が40枚以上の包含層に区分されている。この堆積状況は、長い期間にわたって投棄が繰り返された営為の結果を反映したものと推測されよう。

両次の報告を合わせると、I 3区(一部H I 3区を含む)では、入組三叉文高坏の口縁部資料が9点出土している。第1次調査と第2次調査の境界面を基準に当該資料を見てみると、第1次調査の図18~65(X層)や図19~114(XIV層)は、口縁部が内折し、稜が形成されている。また、図19~92・93(XII層)も口縁部が狭小となり、入組三叉文高坏B類又は同A 2類に近似した様相を呈している。一方、第2次調査の図20~176(11層)・194(12層)・220(13層)・257(15層)は小破片であるが、口縁部が内彎して緩やかに立ち上がる入組三叉文高坏A 1類に相当しており、図20~211(H I 3区ベルト12層)だけが口縁部が内折し直上する。

上記の事例から、口縁部が内彎して緩やかに立ち上がる入組三叉文高坏A類(須藤氏の「高坏C 1 p 2類」)から、屈折が強くなる同B類(須藤氏の「高坏C 1 p類」)への漸移的な変化を跡づけることが可能となろう。また、口縁部形態の変化に符合して、体部も内彎気味に立ち上がる形制から、直線的となる変化が看取される。

須藤氏は中沢貝塚の層位の所見として、報告書とは別の論考の中で、「30層前後」を境に上層と下層では、形狀に差異が存することを指摘している(須藤1984:13頁)。旧稿の30層が報告書のどの層位に対比されるのか判然としないが、提示された土器から判する限りでは、図20の15層前後と推察される³⁰。しかし15層前後の資料は、前

記したように入組三叉文高坏A類に属するものであり、厳密な境界はより上位の層位に求めるべきであろう。ともあれ型式学的に導出された変化が、層位的にも追認されており、須藤氏の示した変遷觀は首肯できる内容となっている。但し当該高坏の脚部や平行線文装飾深鉢の型式変化については、中沢貝塚の層位的事例から有意な情報は導き出せない。

B 大洞B式期の三叉文施文の台付浅鉢

中沢貝塚の層位的事例から、口縁部の内彎した形制が古的様相であることを追認したが、その母体は大洞B式期の黒色磨研の台付浅鉢に求めることができる。該期の北上川中~下流域や、仙台湾~南三陸沿岸にかけた臨海地域には、口縁部に魚眼状・入組・波状三叉文³¹を施した黒色磨研の台付浅鉢が分布している。

以下では、後期末葉~大洞B 2式の三叉文施文の台付浅鉢について、検討を進めてみたい。

(1) 大洞B 1式の三叉文施文の台付浅鉢

大洞B 1式について筆者は、大洞B 1古式と同B 1新式とに二分している。しかし台付浅鉢について、その区分を明確に説明することは困難である。

口縁部資料 図22~1~13は、東北中部から出土した後期末葉~大洞B 1式の三叉文施文の台付浅鉢である。1は宮城県里浜貝塚風越地点(MIK35層)から出土したもので、層位的には後期末葉に位置付けられる(小井川2004)。5・6は中沢貝塚の大洞B 1式の層準(H I 3区255層)から出土したが、同式の堆積層でも比較的下位から出土しており、大洞B 1古式に位置付けられるであろう。上記した3例(図22~1・5・6)は、出土層位から型式特定が可能な数少ない事例となるが、いずれも口縁部文様帶の装飾として、魚眼状三叉文が施されている。

図22~1を基準に後期末葉(金剛寺2 b式)の台付浅鉢を見てみると、口端の波状線と体部上端に付された隆帯が、特徴として指摘されるであろう。図22~1の口端は緩い波状線をなすが、円文直上の波頂部が三分され、一山状の頂部と交互に配される。口端の山形突起は、古相の浅鉢形土器に屢々認められており(図22~2・10・13)、大洞B 2式まで継承される(図8~18・20)。上記した連続した波状線や頂部が刻まれた山形突起は、後期末葉の特徴に挙げられる。

また図22-1の口縁部文様帯の下端(体部上端)には、隆帯の剥落痕が観察される。本来は2のような波状に張り出した隆帯が付されたものと推察され、口縁部が無文の台付浅鉢(図23-1・2)にも、同様の隆帯が認められる。隆帶上に沈線が加えられ連鎖状をなしたり(図22-2)、一山状の頂部と二分された頂部で構成される(図23-1・2)。後者の一山状突起の基部には、縦位の短沈線又は三叉状の陰刻が加えられることもあり、口縁部に文様帯が配された場合、隆帯は下限の区画帯となる。上記した波状隆帯は、口端の波状線と形状が類似しており、後期末葉の特徴と見なされるが、晚期に残ったとしても頗る大洞B1古式の段階までであろう。

次に、図22-5を基準に大洞B1古式を見てみると、口縁部の内側の度合いが強まつたことが指摘される。後期末葉の図22-1では、底部から体部にかけて彎曲し、口縁部が外傾して立ち上がるのにに対し、図22-5は口縁部文様帯の部位で内側に彎曲している。口縁部の内彎は、前記したように大洞B C 1式の入組三叉文高坏(A 1類)に顕在化しており、彎曲の度合いが漸次強まる経過が指摘されよう。

図22-5・6の口縁部文様帯の下端は、1条沈線で区画されている。大洞B2式の台付浅鉢は、2条の沈線(平行沈線)で区画された例が多いことから、1条の界線も古的様相と見なせるであろう。大洞B1式の図22-10の口縁部文様帯の下端には、繩文帯が囲繞されている。大洞B2式に多用される口縁部文様帯下端の平行沈線は、繩文帯の繩文地文が消失したことに由来すると想定されることから、装飾鉢類のII c 文様帯(旧II c 文様帯)の成立と一体の関係にあったと見なすことができよう。晚期文様帯としてのII c 文様帯は、装飾鉢類の口頭部から繩文地文が消失したことで、大洞B2古式に成立しており(小林2005a:62-63頁)、台付浅鉢の口縁部文様帯の繩文地文は、大洞B2式以前の特徴となる。

三叉文の種類の中では、魚眼状三叉文が卓越する。魚眼状三叉文は、円文を囲うように三叉文を対称に配した構成と規定されるが、大きな円文を中心とした配置が古的様相で、円文から円形刺突への推移が想定されている(小林2005a:36-37頁)。須藤隆氏は、後期最終末の魚眼状三叉文が「跳描円文の中心に円形刺突が施されるのを特徴とする」のに対し、晚期初頭(大洞B1式)には「中

心の円形刺突を失った魚眼状三叉文」となることを指摘している(須藤ほか1995:222頁)。晚期にも円文の中心に円形刺突を施した例(図22-10)が存しておらず、厳密な指標とはなり得ないが、円形刺突は後期末葉の瘤状突起の名残と見なされることから、変化の方向性としては穩当であろう。

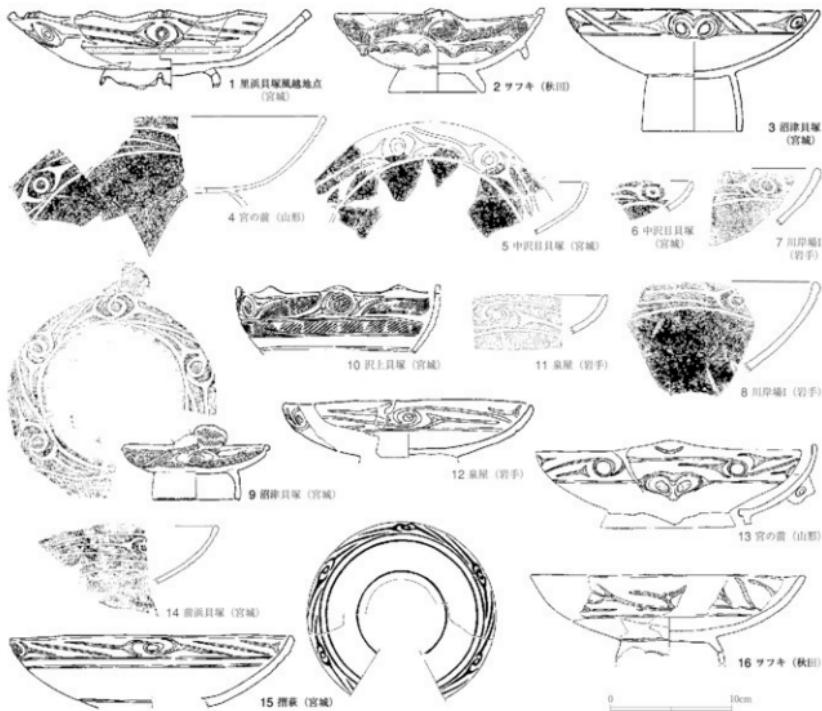
図22-1~7・10が、魚眼状三叉文に相当する。三叉文の主軸線が斜位に平行して、やや間隔を置いて配される(図22-1・2・5)が、その間に斜線が挿入された例も認められる(図22-4・8)。この斜線は沢上貝塚例(図22-10)のような入組帶状文が形態化したものと理解され、左傾・右傾の両例が併存する。魚眼状三叉文の系譜が、後期後葉の入組帶状文の連繫部に派生した三叉状の陰刻にあったことを窺わせる。

図22-9は、大きな円文を巻き込む入組三叉文が1単位展開するが、主軸線間に同様の左傾の斜線が配される。入組三叉文は、魚眼状三叉文と同様に円文を巻き込む形態が古的様相で、次第に円形刺突に収斂される推移が想定されている(小林2005a:36-37頁)。同例には、二山状の大型突起が1単位のみ配されている。この大型突起は、大洞B2新式~B C 2式に盛行する珊瑚状突起の初現と見なされるもので、大洞B1新式に現出しており、9も同式に相当すると考えられる(小林2005a:30-35頁)。

図22-11~13は、波状三叉文で構成されている。波状三叉文は、後期末葉の横位に連続する入組帶状文の系譜を引くもので、入組帶状文の主描線が1条のみで、円文に類する連繫部を中心に上下に向向した三叉文が配される。11・12の連繫部中心の円形刺突は、後期末葉の瘤状突起の名残であろう。

図22-3・13には、環状の粘土紐を貼り合わせ摘み出したような鏡眼状突起が、1単位付されている。正面性を有し、横位に穿孔された例(13)も存することから、後続型式に見られる縦長突起との関連が想定される(小林2005a:34頁)。3について須藤隆氏は、後期最終末に位置付けている(須藤1984:29頁)。しかし口縁部文様帯の縦位又は斜位の平行沈線は、大洞B1式の装飾鉢類に多用されることから、大洞B1古式の可能性も考えられる(小林2005b:241頁)。

脚部資料 東北中部の後期末葉~大洞B1式の台付浅

1-2: 後期末葉、3~13: 大洞B₁式、14~16: 大洞B₂式図22 東北中部から出土した後期末葉～大洞B₂式の三叉文施文台付浅鉢

鉢には、接合部底下が外側に膨らみ、透かしが穿たれた例が、屡々認められる。図22-1には、脚部が僅かに残存しているが、凸彎した脚部に、菱形の透かしの一部が観察される。

図23-1~10は、後期末葉～大洞B₁式の台付浅鉢の脚部資料である。口縁部が無文となる例が殆どであるが、1・2は体部に付された波状隆帯から、後期末葉に位置付けられよう。脚部は規格性が強く、2段で構成されており、凸彎部は球状に緩く張り出し、裾部は僅かに外傾して底面に接している。図22-1にも、同様の脚部が付されていたと想定される。

凸彎部は比較的幅広に作出され、透かしが穿たれる。透かしの意匠は、対向した三角形や菱形が通例で、交互に配された例が多い（図23-1・5・6・9～9）。三角形や

菱形のように先端を尖らせた透かしは、該域の後期後葉の香炉形土器や台付異形土器に屡々認められる。更にその淵源が、後期中葉の台付異形土器に求められることから、後期末葉になって台付浅鉢に取り込まれたと見なすことができるであろう¹⁸⁾。

脚部は無文が通例で、上下幅が広く、垂直に近い角度で外傾する。僅かに内彎した例も見られる（図23-8・10）が、後続型式のような強く外反した形制は認められない。裾部の径は凸彎部の径よりもや上回るが同程度であり、脚端は平坦乃至は緩やかな丸味を持って仕上げられる。

上記した台付浅鉢は、仙台湾沿岸部を中心として、南三陸沿岸域から仙北湖沼地帯にかけて分布している。遠隔地では山形県宮の前遺跡（図23-3）で出土している

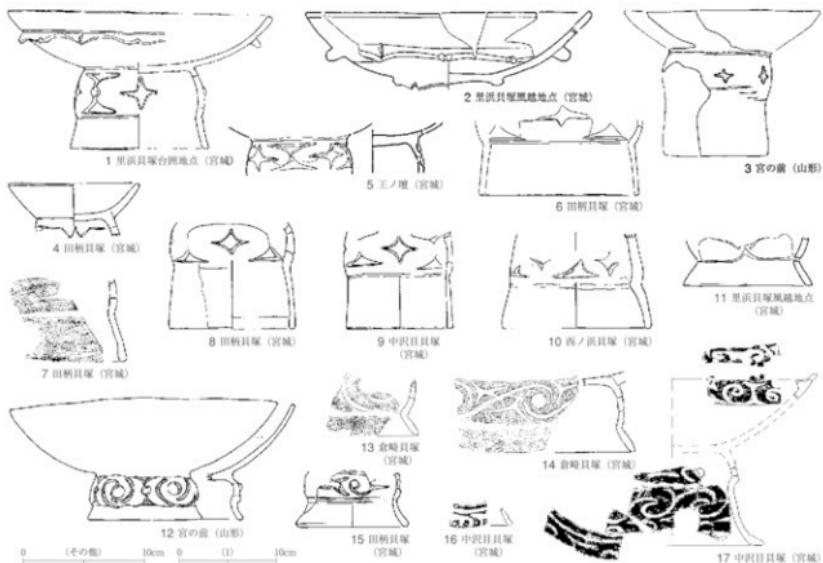


図23 東北中部から出土した後期末葉～大洞B2式の台付浅鉢脚部資料

が、大洞B C式の入組三叉文高坏の分布域とほぼ重複している。また接合部直下の凸脛部の作出と透かし文様の特徴にも、共通性が認められる。上記から、当該土器が入組三叉文高坏の脚部の母体となったことは、確実であろう。

(2) 大洞B 2式の三叉文施文の台付浅鉢

大洞B 2式についても、筆者は大洞B 2古式と同B 2新式とに二分しているが、大洞B 1式と同様に台付浅鉢について、その区分は明示できない。

口縁部資料 口縁部資料で大洞B 2式に位置付けられるのは、図8-18~28、図22-14~16である。口縁部の装飾としては、円文を圍った魚眼状三叉文（図8-18・22、図22-14）と、円文を巻き込んだ入組三叉文（図8-19・23・25、図22-15）が展開する。

管見の限りでは、入組三叉文高坏に関連する大洞B 2式台付浅鉢の完形資料は見出せないが、典型となるのは宮城県沼森遺跡出土の浅鉢形土器（図22-15）³⁰⁾である。同例は、大洞B 2式の堆積層（第1遺物包含層67b層）から出土している（柳沢ほか1990）。底部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる形制で、底部が欠損し、高台の有

無は判然としないが、台が付されると考えられる。口縁部文様帶は円文を巻き込む入組三叉文と右側の斜線が、交互に推定6単位配され、下端は平行沈線で画される（図12-2）。また体部下半には、1条の沈線が開続される。口縁部の装飾は先行型式を踏襲しているが、口縁部文様帶下端の平行沈線と体部下半の沈線に、新しい様相を見て取ることができる。いずれも後続する入組三叉文高坏に継承される属性である。

当該期の口縁部文様帶下端の平行線は、通常幅広に描出される（図8-1・18・20~28、図22-14~16）。大洞B C式の入組三叉文高坏では、沈線の幅と挟まれた陽刻部の幅が同程度となるが、大洞B 2式では沈線間の方が広く、繩文帶の名残を留めている。口縁部文様帶の狭小化と相俟って、幅広の平行線から、密着した平行線への変化が想定される。

大洞B 2式では体部下半に1条の沈線が開続される（図8-23-25、図22-15）が、図示した後期末葉～大洞B 1式の台付浅鉢では、沢上貝塚例（図22-10）以外に認めることができない。大洞B 2式になって顕在化することから、浅鉢自体にその系譜があるのではなく、装飾鉢

類からの影響関係が想定されよう。大洞B 2式～BC 2式の装飾鉢類には、底部直上に無文帯が作出された例が多く見受けられる。体部下半に沈線を巡らし、その直下から底部までを研磨して無文帯としたもので、特に大洞B 2式～BC 1式では、上端が1条の沈線で区画される（小林2005a：72頁）。装飾鉢類の底部直上の沈線が、台付浅鉢の体部下半に写し込まれたことが想定され、この1条沈線が大洞B C式入組三叉文高坏の段階になって、平行沈線に変化したと考えられる。

大洞B 2式の浅鉢形土器には、口縁部文様帶上端の区画線が腰々認められる（図8-18・19・21）。筆者が国示した後期末葉～大洞B 1式の台付浅鉢（図22）は、口縁部上端が区画されず、口端に露出した例が殆どである。しかし後期後葉には、口端を画した台付浅鉢が存しております、その系譜が腰々と受け継がれていたことも想定される。但し当該浅鉢の口縁部の文様帶は、比較的幅広に構成されており、狹小な文様帶からなる入組三叉文高坏には、継承されることはないかと想定される。

また大洞B 2式の浅鉢形土器には、文様帶幅の狭小化が進行して、口縁部文様が密着して施された例も認められる（図8-24・26～28）。口縁部付近で内彎した形制をなし、入組三叉文も横位に伸長しており（図12-3）、入組三叉文高坏成立前夜の様相を窺わせる。大洞B 2式の三叉文施文台付浅鉢から、大洞B C式の入組三叉文高坏が生成したとの理解に立つならば、上記した浅鉢が大洞B 2新式に位置する公算が高いであろう。

脚部資料 脚部資料では図23-17が、中沢目貝塚の大洞B 2式の層準（H I 3区27層）から出土しており、指針となろう。同例は口縁部と脚部の資料であり、体部から脚部上端を欠損するが、器高11cm、口径23cm、脚高8cmを測り、入組三叉文高坏と同程度の法量と推定されている（須藤はか1995：68頁）。黒色磨研の丁寧な作出で、口端は内面に強く突き出し、幅広の端面をなし、端面外側に突起（三山状突起？）とその内側に陰刻文様が展開する。口縁部の文様帶は、上下で対向した三叉状陰刻の頂点が連結し「工字状」を呈しており、その一端が伸びて溝を巻く「C字文2類」（小林2005a：52頁）が展開する。巴状の陽刻部が作出され、入組三叉文とは異った文様構成であり、入組三叉文高坏への系統的な連絡は認め難い。対向した棘状陰刻が連結したC字文は、大洞B C 1

式以降に顕在化することから、同例は大洞B 2新式に相当する可能性が考えられる（小林2005a：56頁）。なお図23-16も、大洞B 2式の層準（H I 3区22層）から出土している。

図23-12～15は、16・17に先行する大洞B 1新～B 2式に位置付けられるであろう。凸彎部に円孔が穿たれ、裾部は短く外反気味に開く形制となる。12にはC字文の原初的形態が、また14には横位連繋の入組帶状文の系譜を引く波状三叉文が認められる。15は浅鉢の脚部となるのか判然としないが、大洞B 2式に位置付けられる。凸彎部は一方のみが円孔を巻き込む入組三叉文2b類（小林2005a：36頁）で構成されており、東北北部では頸胴部界の屈折した装飾鉢類に一般的な高台である。

大洞B C式の入組三叉文高坏の脚部には、後期末葉の台付浅鉢からの強い系統性が窺える。大洞B 2新式の脚部（図23-17）は3段で構成され、接合部直下は凸彎状に緩く張り出し、脚柱部は垂直から外に向かって下方に開き、裾部は強く外反して底面に接着する。凸彎部の装飾は円孔が穿たれ、弧線文と鼓形区画？が交互に施される。脚柱部の装飾は、正確な復元は困難であるが、矩形文様の一端が伸びて反転して下方の文様に連結した構図で、下端には上閉じの弧線文も加えられる。透かし文様は穿たれず、陰刻は細く、縁取られた陽刻部は幅広に描出される。裾部の装飾は、上閉じの弧線文と下端を欠いた鼓形区画乃至は左側上方に突き出した鉤爪状区画と推定される。先行する大洞B 1式の脚部は、凸彎部と裾部の2带構成であったが、大洞B 2新式では凸彎部の上下幅が縮小する一方で、従前の裾部が伸張しており、脚柱部と裾部とに分離する。大洞B 2式台付浅鉢の裾部は後続する入組三叉文高坏に比べると、上下幅を有しているが、装飾意匠は入組三叉文高坏に多用される鉤爪状区画が施されており（図23-16）、前駆的様相が認められる。凸彎部や裾部の文様帶幅が狭まる一方で、脚柱部が発達して、脚部全体の装飾がより繁縝となり、透かし文様が多用されることで、入組三叉文高坏の成立に至ったと推測される。

C 大洞BC式の高坏（台付浅鉢）について

仙北湖沼地帯において入組三叉文高坏が盛行していた同じ時期、異なる特徴を持った高坏が東北一円に散見される。一般には台付浅鉢の範疇に含まれているが、ここ

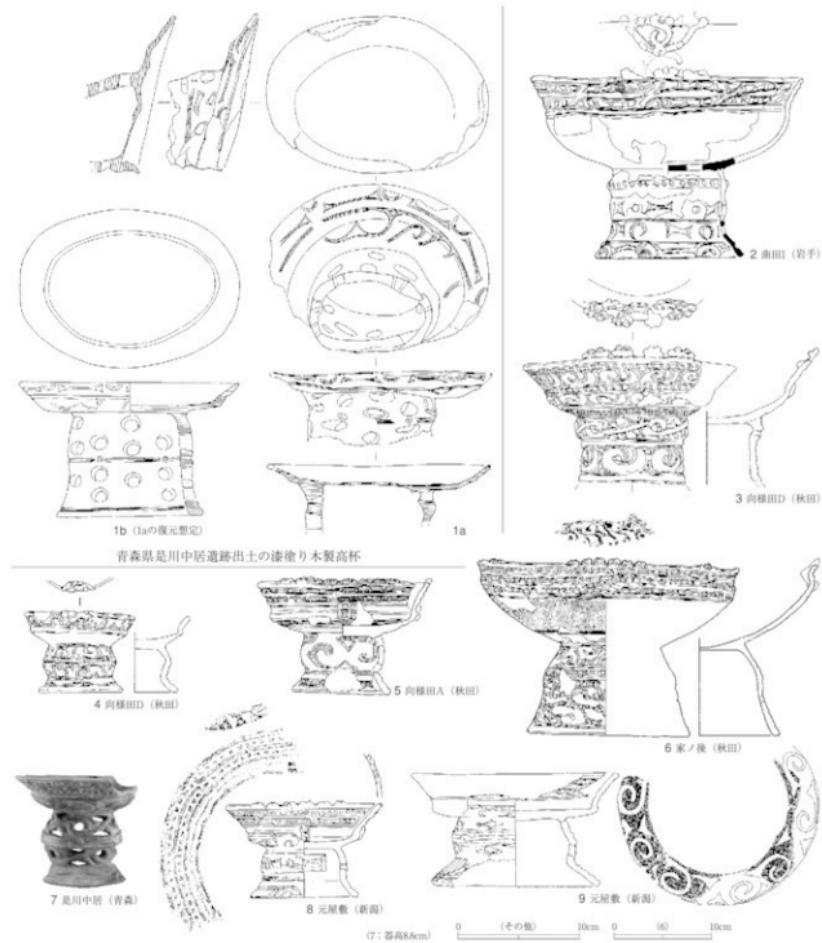


図24 大洞BC式の高杯・台付浅鉢集成図

では体部を凌ぐ高い高台が付されたものについて、高杯として弁別しておきたい。

図24-2～7は、東北北部で出土した大洞BC式の高杯のうち、装飾性に富む脚部を持った例である。多くは頭胴部界又は口縁部直下で屈折しており、体部には繩文地文が施され、口端にはB突起を組み合わせた正面性を有する装飾が配されている。この口端の装飾は、大洞B2新式～B2C式に盛行した珊瑚状突起の系譜を引くもの

で、突起内面には隆線文様が施される（小林2005a:30～35頁）。

図24-2・3は、大洞BC1式の高杯であろう。2は、頭部文様帯に末端の咬み合わない羊歛状文（羊歛状文2類）が施され、体部は無文となる。羊歛状文は対向した鈎爪状区画で構成されるが、突出部の先端同士は貫通せず、左頬の主軸線の基部同士が連結する。刻まれた陰刻が細く、「連結原則」（田村2000）が遵守されていないこ

とから、粗型的な羊歯状文と見なされよう。脚部上半には刻み目を持った隆帯が開続され、脚柱部には鼓形透かしと円文（円孔）の交互配置が2帯、更に裾部にも半円を囲う両端の開いた三叉状の陰刻文様が施される。

図24-3は、頭部に「C字文2類」と体部に「C字文1類」が展開するが、棘状陰刻はいずれも連結しており、当該期を表徵する文様構成である（小林2005a：52-57頁）。接合部直下には、僅かながら外側に張り出した凸彎が認められる。末端の咬み合う羊歯状文（羊歯状文1類）が展開しており、咬合部は円孔となる。脚柱部は「C字文2類」で構成されており、満巻文の末端には円孔、対向した棘状陰刻には三角形の透かしが穿たれる。

図24-4・5も、同期に位置すると考えられる。共に接合部直下が幅広に緩く張り出し、裾部が外に強く聞く形制で、4の凸彎部は2段で構成され、5の凸彎部には対向した三角形の透かしが穿たれる。

図24-7は、青森県是川中居遺跡出土の著名な高坏（八戸市博物館1985:59頁21）である。凸彎部は二分され、上下共に円孔と対向した三角形の透かしが交互に配され、その中间には陰刻で縁取られた入組文様が帶状に展開する。裾部は外に聞く形制で、半円と鼓形の陰刻文様が交互に配されることから、大洞BC1式に位置付けられる。

図24-6は、大洞BC2式の高坏である。口縁部直下の外折化（新生Ⅱc文様帶）と体部下半の平行沈線は、大洞BC2式の特徴である（小林2005a：63-64、72頁）。同例の脚部は2段で構成されており、共に繁縝な装飾が施される。上段は僅かに張り出した形制で、凸彎部の痕跡を留めている。下段は脚柱部に相当し、外反気味に開いており、小さな円孔が穿たれる。

図24-8・9は、新潟県北部の朝日村元屋敷遺跡から出土した高坏である。共に頭胴部界で屈折しており、体部に「C字文2類」が施される。8の脚部の凸彎部には、鼓形透かしと円孔が交互に配置され、9の凸彎部は中央で二分され、上下段それぞれに菱形透かしが穿たれる。

以上のように、大洞BC式においては屈折した器形で、口端に正面性を持った装飾の配された高坏が卓越する。また屈折部には、縱長のB突起が付される傾向が看取される。この突起は括れを持つ器形との相関性が強く、大洞B2式の浅鉢形土器に現出する（小林2005a：

73頁）。また脚部においては、凸彎部が作出され、円形や三角形、菱形、鼓形の透かしが穿たれており、多带化した構成となる。

3の脚部は、入組三叉文高坏の形制に酷似している。凸彎部・脚柱部・裾部の3段の構成で、脚柱部は垂直に降下し、裾部が強く外側に聞く。装飾意匠は必ずしも合致しないが、透かしを穿つ手法には共通性が認められる。2の脚部の鼓形透かしと円文（円孔）の配置も、入組三叉文高坏と共通しており、時期的な関連を想起させる。

4・5のような上下幅の広い凸彎部は、大洞B2新式～BC1式の特徴となる。同時期の壺形土器の頭部と肩部の境界にも、凸彎部が発達していることから、相互の関連が想定される。4・7・9の凸彎部は、中央で分帶されている。このように凸彎部が発達して、裾部の幅よりも上回り、中央が分帶された資料は、後述する大洞C1式の隆帯を開続した高坏・台付浅鉢に継承されたと考えられる。

または川中居遺跡では、大洞B2新式～BC1式の赤漆塗り木製台付杯（図24-1）が出土している。トチノキをくり貫いて作製されたもので、上面から見た形状は梢円形で、口径は18.6cm×13.1cmを測る。坏部は非常に浅く、屈折しており、口頭部と体部の2帯の文様帶で構成されている。前者には、2の裾部と同様の半円を囲う両端の開いた三叉文が展開しており、編年の位置の根拠となろう。脚部は上半のみ残存するが、接合部直下に微かな凸彎状の膨らみが観察される。復元図（図24-1b）では、中央の区画線を挟んで上下段とも、1段と2段の円孔が交互に穿たれるが、実測図（図24-1a）では2段の透かしは梢円形を呈しており、対向した三角形の透かしを企図した構成であったと推察される。恐らく区画線が中央になるように弱く張り出し、裾部が強く聞く、4や7に類似した形制であったと考えられる。従って、脚部に複雑な装飾を施した土製高坏と木製高杯には、相互の関連性が指摘され、木製高杯が土製高坏の透かしの意匠のモデルになっていた可能性も考えられよう。

D 大洞C1式の高坏（台付浅鉢）について

大洞C1式期には、皿形の体部に脚部を付けた形態の高坏（台付浅鉢）が盛行しており、主要器種としての地位を確立する。極めて装飾性に富み、薄手の精巧な造作

で、装飾は口唇の陰刻と突起、体部の文様、脚部の文様から構成される（高橋龍三郎1981：13頁）。

図25は、東北中部～北部にかけて出土した同式の高坏である。体部と脚部の高さがほぼ等しく、口縁部から緩やかにカーブをしながら底部に至る器形で、内面の底面は平底乃至は丸底で、一段低く作出され円形の窪みとなる例が多い。

口端の装飾は、広い端面に規則的な陰刻によって縁取られた2個一对の突起列が巡らされる。陰刻は1種類を連続したもの（図25-1・2）と、2～3種類を規則的に配列したもの（図25-6・7）があり、隆起帶を生じさせており、刻み目を加えたり、ソラ豆状突起を配した例も認められる。その装飾は、同式の浅鉢形土器²⁰に共通しており、平縁で構成された大洞BC式の入組三叉文高坏には、認められない特徴である。

体部は、磨消繩文による曲線的な文様で装飾される。亀ヶ岡土器の象徴とも言える半肉彫の手法が極度に発達しており、K字文系や雲形文系等の曲線に富んだ複雑な文様で構成される。意匠は同じでも、繩文地文を欠いた例も存している（図25-7・8）。これ等の体部の装飾は、同式の浅鉢形土器や椀形土器²¹に共通しており、体部の文様が平行沈線を除いて無文となる入組三叉文高坏とは、全く様相を異にしている。

脚部は、接合部直下から末広がりに外傾し、外反気味に開くのみで、裾部は入組三叉文高坏のような強い張り出しあとはならない。裾部は通常2条の沈線で区画され、上下幅が狭く、繩文地文以外の装飾を持つ例は少ない。脚柱部は、縦位に展開する曲線的な陰刻文様と三角形の陰刻による、比較的簡素な文様で構成されており、円形や三角形の小さな透かしが穿たれた例が多い。

大洞BC式に特徴的な接合部直下の凸彎部は、一部に残るのみで、消失の経過を辿っている。図25-1には、接合部直下に緩い凸彎部が認められる。同例の口端の装飾は、大洞BC式から連なるB突起列で、また体部の磨消繩文の文様は、咬合部が紡錘形となる2個の單一主要要素で構成されることから、大洞C1式の古段階に位置付けられよう。このように接合部直下の凸彎部は、大洞BC式の系譜を引く古的様相と見なされよう。

大洞C1式の高坏は、口端・体部・脚部の装飾の定型化が著しく、東北一円にその広がりが認められる。一方

大洞BC式の入組三叉文高坏は局地的な広がりでしかなく、対照的な在り方を示している。入組三叉文高坏を構成する属性のうち、広域的に分布する大洞C1式高坏に継承されたと断言できるものは、殆どなかったのが実態であろう。大洞C1式高坏の脚部の縦位方向に伸びた曲線的な陰刻と透かし文様を、入組三叉文高坏に関連づける向きもない説ではない（須藤1996:23頁）。また法量においても、口径が20cm程度、器高も10cm程度と近似しており、底面の円形の窪みも櫻ノ木遺跡例（図6）にその萌芽が認められる。しかし先に見たように、脚部の装飾は東北地方の大洞BC式の台付浅鉢・高坏に広く認められる特徴であり、入組三叉文高坏から直接継承された積極的根拠は見出せない。その他の属性についても、同様と言えよう。

入組三叉文高坏の特徴である接合部直下の凸彎部は、大洞C1式の高坏にも一部認められるが、東北北半の同期の高坏（台付浅鉢）には、凸彎部が隆帯化し、裾部が強く張り出した例が散見される。その典型となるのが、青森県上尾駿（1）遺跡例（図26-1）と亀ヶ岡遺跡例（図26-2）である。前記したように東北北部の大洞BC式の高坏の中には、幅広の凸彎部の中央が分帶された例（図24-4・7・9）が存している。この中央の区画帯が漸次隆帯化したと見なされるもので、注口土器の肩部と歩調を合わせた変化であったと推察される（小林2003:5頁）。

上記した高坏（台付浅鉢）の凸彎部の形制は、隆帯を挟んで算盤玉状を呈しており、上下の幅が同程度となる。隆帯上には陰刻で縁取られた突起やB突起が付され、その間には陰刻文様が加えられる。突起は通常4単位で構成され、その中間にも瘤状の高まりが認められる。隆帯の上下には、縦位の短線や弧線の透かしが、それぞれに穿たれており、対向した三角形透かしを伴った例（図26-9）も存在する。裾部は強く張り出した形制で、沈線が圍繞されるのみで、繩文地文以外の装飾は認められない。

上記した脚部は、東北北部を中心とした地域で出土している。東北北部では典型資料である上尾駿（1）遺跡（図26-1）と亀ヶ岡遺跡（2）の他に、是川中居遺跡（八戸市博物館1985:59頁22）や秋田県白坂遺跡（3）で出土している。北上川中流域では岩手県上平遺跡（5・

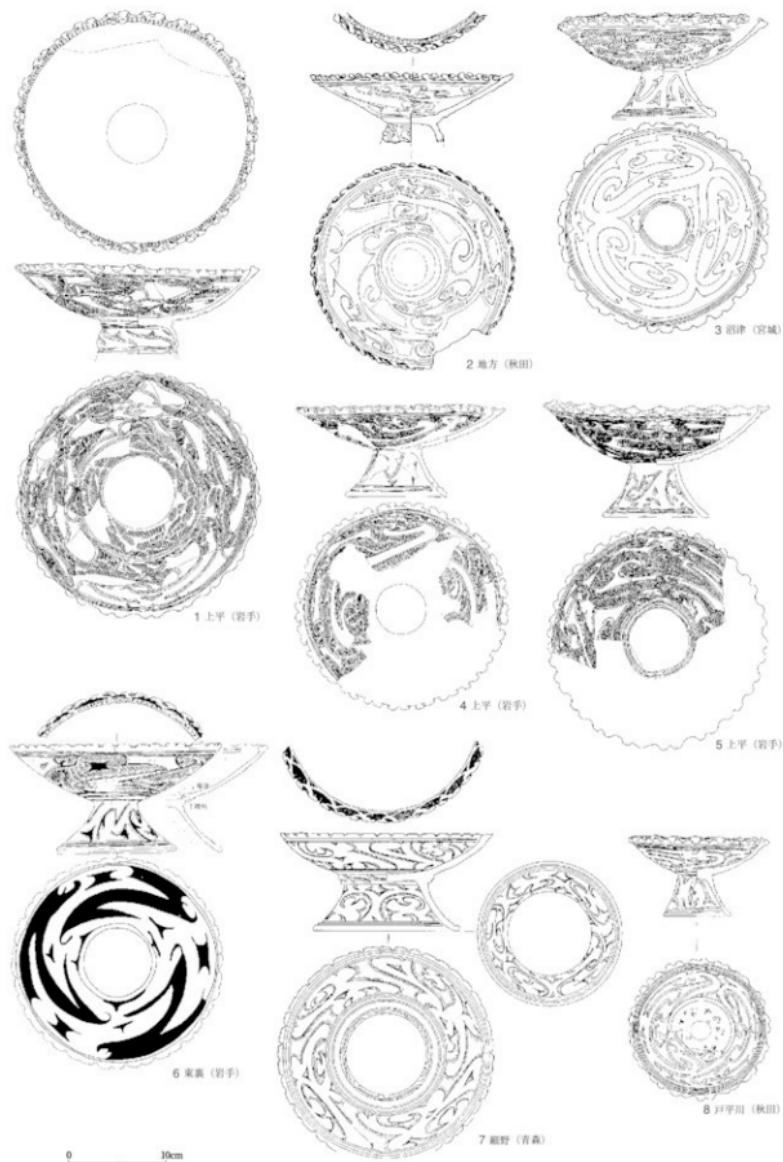


図25 磨消文様を施した大洞C式の高环・台付浅鉢

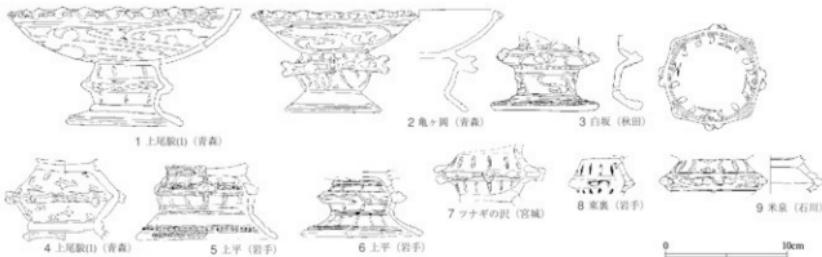


図26 凸縁部の発達した大洞C式台付浅鉢(高环)

6) や東裏遺跡(8)、仙北湖沼地帯では宮城県ツナギの沢貝塚(7)で出土しており、遠隔地の出土例としては石川県金沢市米泉遺跡例(9)を挙げることができる。同例は1の脚部に類似していることから、東北北半からのお贈品であった可能性が考えられる²⁰。

以上のように大洞C式の高环には、同B C式の入組三叉文高环からの影響を殆ど認めることができない。寧ろ同時期の浅鉢形・椀形土器との相関性が強く、東北北部の大洞B C式の高环(台付浅鉢)の系統下にあるものの、同C 1式になって新たに確立された器種と見なすことができるであろう。

E 小 結

入組三叉文高环は、仙台湾周辺に分布する後期末業～大洞B 1古式の黒色磨研の台付浅鉢を母体として、大洞B 2式の台付浅鉢を経て、同B C 1式になって成立した器種類型と考えられる。

口縁部においては、大洞B 1古式以来の魚眼状・入組三叉文施文の(台付)浅鉢の系譜を引くと見なされ、口縁部の内折が漸次強まって、それに連動して口縁部文様帶の上下幅が狭小となる経過が観察される。大洞B 2式の台付浅鉢では、口縁部文様帶下限の平行沈線と体部下半の1条沈線が顕在化し、入組三叉文高环の坏部を構成する属性が出揃うに至り、更に同式の新段階には、入組三叉文の主軸線が伸長して、文様の密着化が進行する。このような過程を経て、大洞B C 1式に入組三叉文高环の成立を見るが、口縁部の装飾意匠には大洞B C式期を通じて大きな変化ではなく、口縁部直下の棱の形成や体部の直線化と言った形制の変化が看取される。

脚部においても、後期末業～大洞B 1古式の黒色磨研の台付浅鉢の系譜を引くと考えられる。当該土器の脚部

は、球状に張り出した凸縁部と、垂直に近い傾きの据部の2段で構成されており、凸縁部の三角形や菱形の透かしに特徴付けられる。大洞B 2式では凸縁部が縮小する一方で、据部が伸張して脚柱部と据部とに分離する。端部が外に開いた形制へと変化しており、更に装飾が繁縝となることで、入組三叉文高环の確立に至ったと想定される。

しかし当該高环は、後続する大洞C 1式に継承されることなく、同B C 2式の終末段階で姿を消したと考えられる。その背景には、装飾体系に大きな変化が生じ、体部に磨消文様を展開した高环(台付浅鉢)が、東北一円に席捲して、主要器種の一翼を担うに至り、仙北湖沼地帯でも入組三叉文高环に取って代わったことが想定される。入組三叉文高环は、飽くまで局地的な器種類型に過ぎず、広域的に影響を与えることはなかったと見なされるであろう。

6 「入組三叉文高环」の分布

入組三叉文高环は、その分布が北上川中流域や三陸海岸・仙台湾などの沿岸部には認められず、北上川下流域・追川流域の湖沼地帯において、径50～60km程の拡がりに限定され、著しく地域色の強い器種類型であることが指摘されている。以下では、その分布を具体的に跡づけてみたい。

A 「仙北湖沼地帯」における出土例

北上川下流域及び追川・江合川・鳴瀬川流域の湖沼地帯である仙北湖沼地帯では、11ヶ所の貝塚・遺跡から当該高环が出土している(図28)。中沢貝塚以外の資料は、同報告書(須藤編1984)や須藤氏の論考(須藤1984)の中で、断片的に紹介されてきたに過ぎないが、近年登

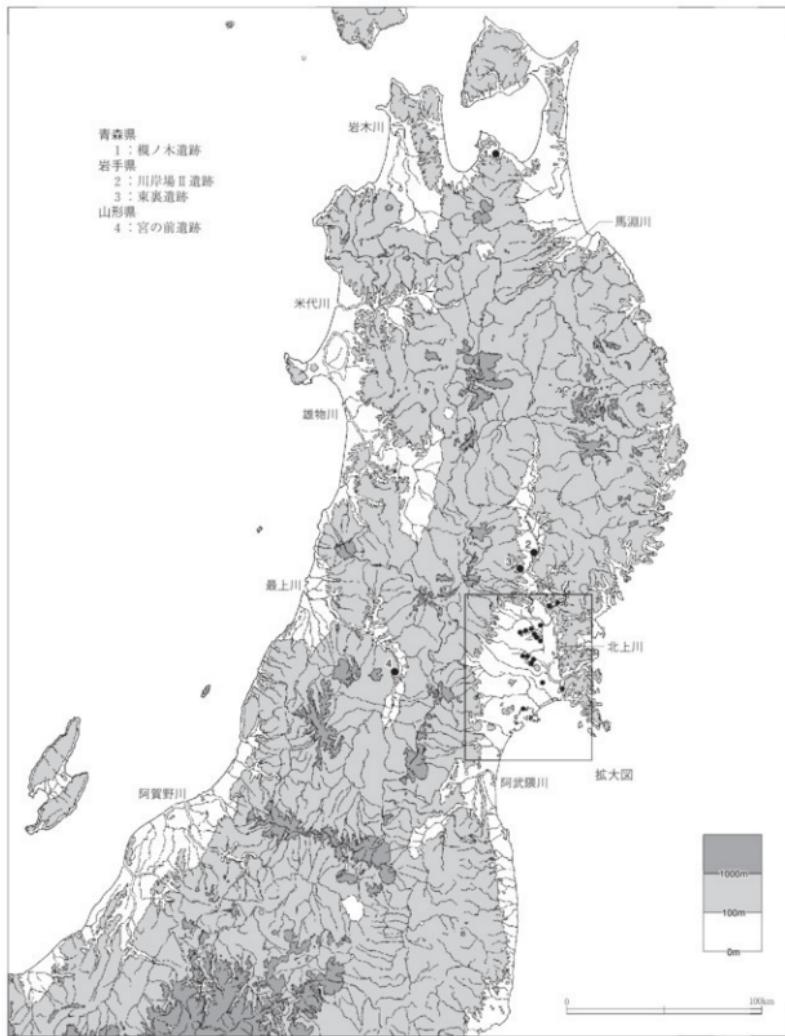


図27 「入組三叉文高坏」を出土した遺跡分布図(1)

市（旧石越町）富崎貝塚の報告書（後藤・小井川2003）と涌谷町フナギの沢貝塚の報告書（福山2004）が相次いで刊行され、当該高坏の内容は非常に充実してきている。

夏川流域 石巻平野北限に当たる夏川流域では、富崎

貝塚で口縁部資料7点（図8-29~35）、脚部資料17点（図15-43~59）が報告されている（後藤・小井川2003）。資料の総数では中沢貝塚に次ぐ内容で、先行する大洞B2式台付浅鉢（図8-18~28）も多数出土しており、これまで見てきたように、系統的な変遷を跡づけることが



1:相ノ沢道路跡、2:中神道路跡、3:富崎貝塚、4:鯨貝塚、5:敷味貝塚、6:渚子崎遺跡、7:倉崎貝塚、8:大多古貝塚、9:佐沼城跡、
10:恵比須田遺跡、11:中沢貝塚、12:長根貝塚、13:ナガギの沢貝塚、14:宝ヶ峯遺跡、15:南境貝塚、16:西ノ浜貝塚

図28 「入相三叉文高坏」を出土した遺跡分布図(2)

可能となっている。

伊豆沼・長沼周辺 石卷平野北部の伊豆沼・長沼周辺では、栗原市（旧若柳町）館貝塚から入組三叉文高坏B類の典型資料が出土している（図9-50）。同遺跡では、当該高坏に類似した入組矩形文を施した皿形の器種（図9-52）も出土している。

栗原市（旧榮館町）砂子崎遺跡では、入組三叉文高坏A類の略完形資料（図7-2）が出土している。口縁部文様帯が比較的幅を有し、脚部の凸凹部の文様も繁縝ではないことから、大洞BC1式に相当すると考えられる。

栗原市（旧追町）倉崎貝塚では、当該高坏の口縁部資料9点（図8-37~45）、体部資料1点（図8-46）、脚部資料6点（図15-61・65~69）が出土している。図8-37は入組三叉文高坏A類、38~40は同B類の典型となる資料で、37と46の体部下半には、1条沈線のみが回繞されている。その他に当該域では、栗原市（旧追町）大多古貝塚（図9-51）と同佐沼城跡（図15-76）で、当該高坏が出土している。

図示した資料の他には、1974年に刊行された『若柳町史』（眞理はか1974）の中に、館貝塚出土の入組三叉文高坏が6点（口縁部2点、脚部4点）、敷味貝塚出土の脚部資料が2点掲載されている³⁰。いずれも良好な資料であるが、縮尺が小さく且つ不鮮明で、図示に堪える状態にはなかった。本稿の中に組み込めなかかったことは、遺憾と言わざるを得ない。

蘿栗沼周辺 石巻平野中央部の蘿栗沼周辺では、大崎市（旧田尻町）中沢貝塚から略完形資料（図7-3）をはじめ口縁部資料17点以上、脚部資料47点以上が出土している。出土層位は殆どが大洞BC式の堆積層に相当しており、当該高坏の編年的位置の典拠となっていることは、前記した通りである。

大崎市（旧田尻町）長根貝塚では、入組矩形文を施した浅鉢（図9-47）が出土している。文様帯の幅が広く陽刻部も幅を有していることから、大洞BC1式の入組三叉文高坏A類に相当するであろう。図9-53は入組三叉文高坏A類に類似した口縁部資料であるが、注口乃至は蓋形土器の口縁部として復元されている。

涌谷町フナギの沢貝塚では、入組三叉文高坏の口縁部資料3点と脚部資料2点が報告されている。図9-48は口縁部が内彎した入組三叉文高坏A類、49・55は口縁部

に稜を持った同B類に相当する。脚部資料の図15-72は、透かしが判然としないが、凸凹部に横幅の短い鼓形区画と円文を巻き込む弧線文が、間隔を置いて配されることから、大洞BC1式に相当しよう。74は刻み目が細かく、裾部の装飾が繁縝に構成されており、大洞BC2式に位置付けられる。

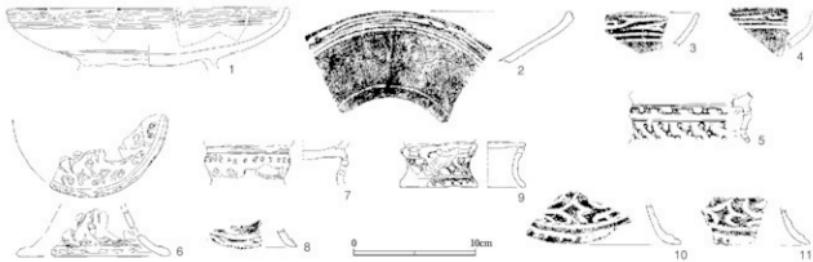
当該域ではその他に、大崎市（旧田尻町）恵比須田遺跡で入組三叉文高坏A類（図9-54）と同B類（図7-4）が出土している。

小結 上記から、入組三叉文高坏の分布の主体が、仙北湖沼地帯にあったことは確実であろう。しかいすれも湖沼地帯北半の石巻平野に位置する遺跡であり、南半の大崎平野での出土例は、管見の限りでは確認できない。須藤隆氏は、北上川下流域と追田流域の東西60km、南北60kmの範囲の湖沼地帯に、当該高坏が分布することを指摘している（須藤ほか1995:276頁）が、中沢貝塚を中心にして径60mの円周を描出してみると、確かに出土遺跡が円周内に収束している（図28）。同氏の指摘は正鵠を射ていたことが窺えよう。

大崎平野を貫流する吉田川の上流域の山間河谷には、晩期全般を通しての基幹集落である摺萩遺跡（大和町）が位置している（図2）。同遺跡では大洞BC式の土器資料が多数出土しているにも拘わらず、入組三叉文高坏や後述する平行線文装飾深鉢を見出すことはできず、辛うじて類似の脚部資料（図30-4・5）が指摘されるのみである。同遺跡は地理的に仙北湖沼地帯と近接するが、山間の低地に位置しており、湖沼地帯とは生活環境を異にしていたと想定される。摺萩遺跡に当該高坏を見出せない背景には、同遺跡が湖沼地域の強固なネットワークに組み込まれていなかつたことが暗示されており、これ等の土器が生業形態と深く結び付いた仙北湖沼地帯の社会的紐帯の強さの指標となっていた可能性も考えられよう。

B 北上川中流域（北上盆地）における出土例

北上川中流域に当たる北上盆地は、南北約90km、東西約10~20kmの広大な盆地であるが、その南縁は海拔100~200mの起伏の少ない丘陵（磐井丘陵）で囲まれ、仙北湖沼地帯へと連なっている。北上盆地で筆者が涉獵できた資料は、僅か2遺跡3例に過ぎない（図29-1・2・4）。



1~3川岸場Ⅱ、4・5東裏、6~11:相ノ沢

図29 岩手県内出土の入組三叉文高坏及び関連資料

岩手県奥州市(旧前沢町)川岸場Ⅱ遺跡では、入組三叉文高坏が2点報告されている(小山内2000)。同遺跡は、仙北湖沼地帯の北端(最奥部)から北上川に沿って、約35km 遷った地点に相当する(図27)。

図29-1は口縁部が内彎した入組三叉文高坏A類(A1類)、2は口縁部に稜を形成した同B類に相当する。前者は底部から内彎気味に立ち上がる形制で、口端が丸味をもつて作出される。口縁部文様帶の入組三叉文がやや上下幅を有し、咬合部が接着しないことから、大洞BC1式に位置付けられるであろう。また後者は、口縁部の特徴が入組三叉文高坏B類の典型であることから、大洞BC2式に相当する。3は、同遺跡出土の関連資料として図示した。口縁部の内彎が弱く外傾しており、背向した三叉文の主軸線が短く、入組三叉文高坏とは見なし難い。先行する大洞B2式の台付浅鉢と判断されよう。

須藤隆氏は、岩手県奥州市(旧衣川村)東裏遺跡において当該高坏が出土したことを指摘している(須藤1984:50頁)。具体的資料については明言していないが、図29-4を指示したものと思われる³⁰。同例は口縁部が強く内彎しており、入組三叉文高坏A類(A1類)に相当する。なお脚部資料である図29-5は、凸縁部を有し円孔が穿たれることから、入組三叉文高坏の脚部に酷似している。しかし報告書の写真団版(原相1981:図版31-15)で判する限りでは、精巧な造作とは見なし難く、入組三叉文高坏には該当しないであろう。

また、北上川中流域の北上盆地と同下流域の仙北湖沼地帯とを画する狹窄部(孤禅寺峠谷)の右岸に立地する一関市(旧花泉町)中神遺跡でも、入組三叉文高坏の出土が報告されている(須藤かは1995:40・237頁)。同遺跡

は绳文晚期末業~弥生中期初頭の遺跡として著名であるが、晚期前業の大型堅穴住居跡も検出されている。しかし当該期についての詳細は、明示されていない(須藤福1997、須藤2003)。

岩手県藤沢町相ノ沢遺跡は、中神遺跡の北東約3kmの丘陵地に位置する後期前業~晚期後業(大洞A式)の有力遺跡であるが、当該高坏の脚部と思われる資料が出土している。図29-6は据部に鈎爪状の陰刻文様、脚柱部に円孔を巻き込む菱形の透かしが穿たれることから、当該高坏の脚部であろう。8の裾部も、末端が入り組み連続した波形文様と脚端の刻み目で構成されており、当該高坏の脚部と思われる。その他については、当該高坏に相当するのか判然としない。7は凸縁部に円孔が巡らされ、その直下にもやや大き目の円孔が穿たれた点では、当該高坏に共通する。しかし写真団版(宮本2000:写真団版102-2362)で判する限り、器面の摩耗が著しく、凸縁部の径も7.0cmとやや小振りである。9も凸縁部・脚柱部・据部の3段で構成されるが、当該高坏に比しかなり小型となる。10・11は据部に鈎爪状、また脚柱部に菱形の一端が伸びて入り組む陰刻文様が施されているが、透かしの状況は判然としない。

北上盆地を縦貫する北上川は、绳文時代を通して遺跡間の紐帯を担う大動脈であったと想定されている。晚期においては、その流路に面した中神遺跡や川岸場Ⅱ遺跡、それに北上川との合流点から衣川を3km程遷った東裏遺跡は、交通の要衝としての役割を担っていたと予察され、入組三叉文高坏の出土はその傍証となる可能性が考えられる。現時点では、川岸場Ⅱ遺跡が北上盆地の北限であり、更に北上川を通った岩手県奥州市(旧水沢市)

杉の堂遺跡や盛岡市手代森遺跡等の拠点遺跡には、当該高坏を見出すことができない。従って、北上盆地の中でも南部のみが分布域となる。なお、当該高坏を出土している中神遺跡と相ノ沢遺跡は、仙北湖沼地帯の北端からは10km前後の位置関係にある。

C 仙台湾沿岸域（臨海部）における出土例

仙台湾は、宮城県牡鹿半島の先端部から福島県相馬市の鶴ノ尾崎に至る湾状の海域に相当する。そのうち北部の旧北上川や鳴瀬川の河口附近は石巻湾、更に南方の宮戸島とセヒ浜半島に囲まれた南北約10kmの入り海は松島湾と呼称されている。仙台湾沿岸域には、多くの晩期の貝塚や遺跡が点在しているが、当該高坏を出土した遺跡となると非常に少なく、仙北湖沼地帯に隣接する石巻湾岸と松島湾岸に限られるようである（図28）。

石巻湾 石巻海岸では、旧北上川の河口部に位置する南境貝塚で完形品（図7-1）と破片資料（図30-3）が、やや内湾に位置する宝ヶ峯遺跡で口縁部資料（図30-1）が出土している。図7-1は入組三叉文高坏A類の典型で、当該高坏では数少ない完形資料であり、前記したように大洞BC1式に位置付けられる²⁰。図30-3は断面図の提示がなく、形制は判然としないが、伸長した入組三叉文は当該高坏の典型である。図30-1は区画沈線直下に稜が形成されており、入組三叉文高坏B類に相当する。やや内削ぎ状の口端で、狭小な口縁部文様帶には、伸長した入組三叉文が展開しており、大洞BC2式に位置付けられるであろう。

また該域の拠点貝塚である沼津貝塚では、大洞BC1式の入組三叉文施文の装飾鉢が出土している（図13-17）。文様描出手法における当該高坏との共通性については、前記した通りであるが、公表された文献を渉猟した限りでは、同貝塚での当該高坏の出土例は確認できない。

松島湾 松島湾岸では、湾央域の拠点貝塚である西ノ浜貝塚で、口縁部資料が出土している（図30-2）。口縁部が短く内彎する入組三叉文高坏A類（A2類）に相当し、口縁部文様帶には入組矩形文が施される。なお湾口域の拠点貝塚である里浜貝塚と二月田貝塚では、首見の限り当該高坏の出土例は確認できない。

小 結 仙台湾沿岸域は、仙北湖沼地帯の南方に接する地域であるにも拘わらず、当該高坏は僅か4例を渉猟

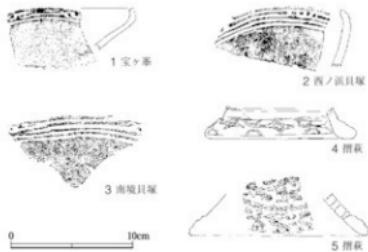


図30 宮城県内出土の入組三叉文高坏及び関連資料

できたに過ぎない。地理的に見て、仙北湖沼地帯とは頻繁に接触していた地域であったと目されるだけに、出土資料の僅少性は、詳細に報告された晩期前業の遺跡の少なさに起因する可能性が考えられる。その中で南境貝塚では、当該高坏の他に平行線文装饰深鉢の完形資料（図35-3・4）も出土しており、緊密な関係が存していたことを窺わせている。

なお現時点では、田柄貝塚が位置する南三陸沿岸域や仙台平野以南で、当該高坏の出土例を見出すことができない。当該高坏の出土が仙北湖沼地帯の周縁域に限られていることから、その範囲が湖沼地帯の日常の交流圏を暗示していた可能性が考えられよう。

D 遠隔地における出土例

仙北湖沼地帯から遠く離れた地域でも、入組三叉文高坏の出土例を2例指摘することができる。

青森県棚ノ木遺跡 青森県平内町棚ノ木遺跡については前記した。陸奥湾に突き出た夏泊半島の東南端に位置しており、太平洋沿岸と青森平野とを結ぶ要衝の遺跡であったと想定され、故地である仙北湖沼地帯からは、約250mの距離にある（図27）。

北上盆地において入組三叉文高坏を出土した北限の遺跡は、前記したように同盆地南部の川岸場II遺跡である。仙北湖沼地帯の周縁域に相当し、その広がりが限定的であったことを示している。ところが遙か彼方に位置する棚ノ木遺跡に忽然と完形に近い資料（図6）が出土しており、その中間地帯は空白域となっている。当該高坏が交易品として人伝いに中継されていたのであれば、その間に位置する北上川上・中流域や馬淵川流域の有力遺跡にも、当該高坏が認められて然るべきであろう。しかしそれ現時点で当該高坏が見出せないと云うことは、それが人

の移動によって仙北湖沼地帯から楳ノ木遺跡に、直接将来された可能性が考えられる。亀ヶ岡文化圏における文物の移動を如実に示した特記すべき事例と言わなければならない。

山形県宮の前遺跡 最上川中流域、尾花沢盆地南端の拠点遺跡である山形県村山市宮の前遺跡では、入組三叉文高坏の脚部の凸縁部が1点出土している。宮の前遺跡は、1974・93・97年の3次にわたって発掘調査が実施されているが、そのうち山形県埋蔵文化財センターが実施した1997年の第3次調査において、当該高坏の脚部資料が報告されている(植松1999:第90図12)。

図31が、宮の前遺跡出土の入組三叉文高坏の脚部である。底部の内面は平底、その裏側の脚部天井面は凸面状を呈し、凸縁部は内面ごと外側に膨らむ形制である。凸縁部の最大径は9.0~9.2cm、上下幅は2.0cm前後、器厚は7~10mmを測る。

凸縁部の文様は、円形刺突(貫通2孔、他は未貫通)を巻き込む13単位の入組矩形文と、円孔を巻き込む16単位の入組三叉文の2帶で構成される。上段の矩形文は横幅

の狭い鼓形をなし、下段の三叉文は主軸線が短く、水平乃至は緩い右上がりとなっている。下端の陰刻は円孔を中心とし、脚柱部上端から伸びた弧線と入り組んでおり、脚注部上端の透かしは、矩形基調の文様と想定される。

色調は、褐灰色(10YR 4/1)を呈しており、底部の内面はヘラミガキが加えられ、光沢を有するが、脚部の内面はナデのみで、ややざらついている。胎土は緻密で精選されており、微砂粒や石英、海面骨針を含む。

同例の口縁部の形態は判然としない。凸縁部の装飾が繁縝に構成されていることから推して、大洞B C 2式の入組三叉文高坏A 2類乃至は同B類に相当すると考えられる²⁰⁾。

宮の前遺跡は、故地と思われる仙北湖沼地帯から、直線で60~70kmの距離にある。しかしその間には、奥羽脊梁山脈が介在しており、障壁をなしている(図27)。前記した楳ノ木遺跡を除くと、宮の前遺跡が仙北湖沼地帯周縁域では、最も遠隔の出土例に当たるが、入組三叉文高坏が出土した他の周縁域は、低い丘陵を通じて湖沼地帯に接しており、障壁となるような高い山地は存していない。その点で宮の前遺跡は特異と言えるが、同遺跡では関東地方の後期末葉安行2式の注口土器の破片資料や、仙台湾沿岸域の大洞A式期の尖底の製塩土器も出土しており、後期末葉から晚期を通じて、求心力を有した遺跡であったことが指摘されている(小林2001:53~54頁)。

E 小 結

以上見てきたように、入組三叉文高坏の分布の主体が仙北湖沼地帯にあったことは明かである。その周縁域にも出土例が僅かに認められているが、域外の遺跡はいずれも拠点となる集落に相当しており、特に北上川流域では、交通の要衝と見なすことが可能であろう。

一方東北地方の南半には、当該高坏の出土例が全く認められない。現時点では北上川河口部~松島湾周辺にかけた地域が南限に当たり、仙台平野以南では確認できない。このことから当該高坏は、主に仙北湖沼地帯から北上川を通って、北方に移出された器種類型であったと考えられる。当該高坏の分布から、仙北湖沼地帯の通常の交流圈が暗示されるが、当該域は東北北半と南半との接触地帯に相当しており、その中でも北上川を通じて北半との結び付きを有していたことが推察されよう。

このように入組三叉文高坏を指標に置くことで、亀ヶ

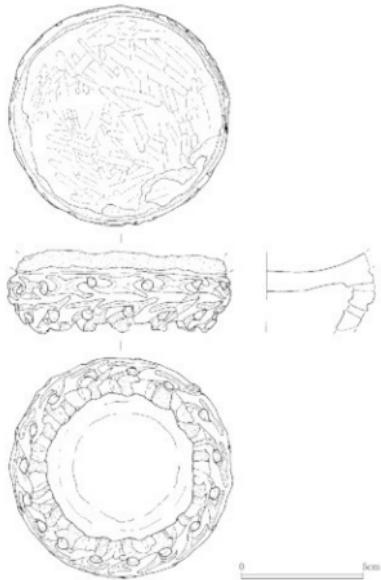


図31 山形県宮の前遺跡出土の入組三叉文高坏

岡文化圏内における文物の移動の範囲が明示され、仙北湖沼地帯と各地域間の交流関係を描き出すことが可能となろう。

7 「仙北湖沼地帯」に特徴的な土器群

これまで、仙北湖沼地帯に特徴的な入組三叉文高环について検討してきた。この他にも、中沢目貝塚II群土器（図1）を構成する「平行線文装飾深鉢」が、当該域に特徴的な器種類型であることが、須藤隆氏によって指摘されている。また先行する大洞B式期においても、「範刻目技法装飾深鉢」の卓越することが、小井川和夫氏によって指摘されている（後藤・小井川2003）。

以下では、上記の二つの器種類型に「入組矩形文装飾深鉢」と「繩文施文浅鉢」を加え、仙北湖沼地帯に特徴的に分布する四つの類型を抽出して、年代的に古い順から検討してみたい。

A 大洞B式に固有の「範刻目技法装飾深鉢」

「範刻目技法装飾深鉢」とは、文様装飾として刻み目手法と繩文施文が組み合わされた装飾深鉢である（図32）。範刻目技法は、先端の薄い範状工具を器面に縦に当て、横方向に連続的に移動しながら押捺したもの（後藤・小井川2003: 7頁）で、（口）頭部文様帶内の地文として用いられる。また体部には、異原体からなる羽状繩文が施されるのが通例である。

特徴形制では、口頭部が直上したA類³⁷の器形が卓越しており、屈折したB類は僅かでしかない（図32-41・42）。口端は緩い小波状を呈しており、谷の部分は刻み込まれない。また後期末葉の台形突起（図33-1・2）の系譜を引く例（図32-41・45）も散見されるが、これ等は頭胴部界の屈折したB類の器形と推測される。

（口）頭部文様帶は、通常三叉状の陰刻文様で構成される。三叉文の主軸線は、横位に長く伸びて平行線化しており、その末端同士の入り組む構成が卓越している（図32-1・2・18・20・21・52）。平行弦線のみの破片資料の多くも、本例に該当するものと思われる。この意匠は、後期末葉の横位連繋の入組帶状文に系譜を求めることができるであろう。平行化した三叉文の主軸線が、入組帶状文の主播線に相当しており、その末端同士が咬み合うと共に、咬合部を圍って三叉文が対向して配置される。上段の三叉文のみが独立した例（図32-7・34）も

存在する。その他に、波頂部直下に棘状の陰刻を配した例（図32-29～33）や、円形刺突を巻き込むように弧線文や主軸の短い三叉文を配した例（図32-37～39）も認められる。

範状工具による細い刻み目の充填手法は、東北地方の後期末葉の入組帶状文を伴う装飾深鉢に多用される（図33-1・2）。頭胴部界で屈折したB類に顕著で、口頭部が刻み目、体部が繩文地文となる例が多い。一方、口頭部の直上したA類では、口頭部文様帶のみが刻み目で充填され、体部は無文（繩文地文の例もある）となる。しかし繩文地文と併用される場合は、口縁部と下限の区画帶が刻み目帯となり、その間の頭部の文様帶（入組帶状文）と体部には、通常繩文地文が施される。

この範刻目技法は、東北一円の後期末葉を特徴付けており、晩期には継承されない。しかしその残影は、東北中部の大洞B1古式に見ることができる（図33-3）。後期末葉以来の装飾手法が地域的に残存し、仙北湖沼地帯を中心局的に発達を遂げたのが、範刻目技法装飾深鉢であったと考えられる。

当該土器の刻み目は、通常三叉文の背向した主軸線間や入組部に充填される。逆に区画内を磨り消して、区画外に刻み目が加えた例（図32-1・21～25・49・51～53）も認められるが、この場合口縁部が刻み目帯となり、I文様帶を構成する。また文様帶下端の区画帯が刻まれた例（図32-2・34・38・39）も見られる。

刻み目は薄い範状工具で細かく刻まれるが、比較的太目の工具で、間隔を置いて刻んだ例（図32-3・4・22～24・51）も認められる。更に陰刻に挟まれた区画が細く作出され、刻み目が痕跡程度となった例（図32-13）も存在する。刻み目は縱位方向を基本とするが、曲線部分では縁取られた陰刻文様に応じた方向で施される（図32-21・24・26・29・41・42・52～54・56）。

当該土器には、口縁部を横帯で区画し、刻み目帯を配した例（図32-2-4・14～19・47・48）も認められる。後期以来のI文様帶に相当するが、波頂部直下が弧状に縁取られ、刻み目が充填された例（図32-27・28・54）も存在する。大洞B1古式～B2式にかけては、I文様帶が消失する過程にあり、大洞B2式において晩期文様帶としてのIIc文様帶（旧IIc文様帶）が確立する。当該土器の口縁部の刻み目装飾は、その過渡的様相を示して



宮城県富嶽貝塚出土の簾刻目技法装飾深鉢及び関連資料

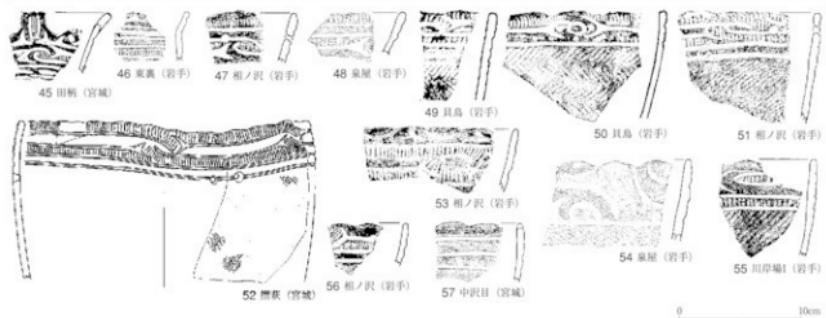


図32 「簾刻目技法装飾深鉢」集団図

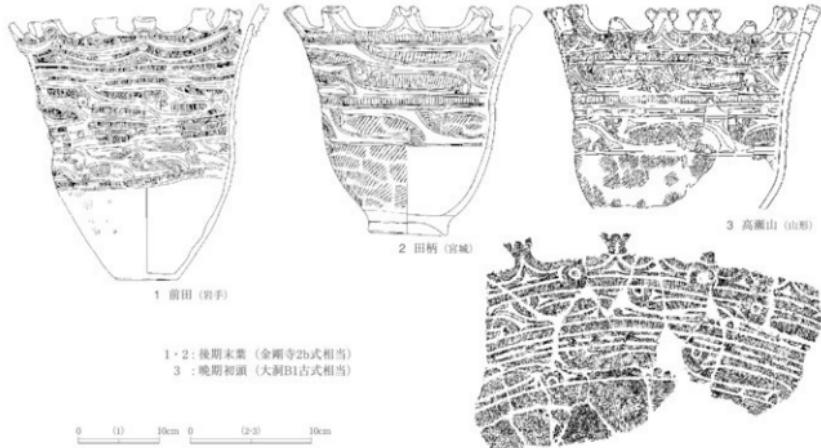


図33 「簾目技法深鉢」関連資料

いると言つていいことができるであろう。

当該土器に顯著な末端の入り組む三叉文には、縄文地文を有する例(図32-44)も認められる。縄文地文と簾目技法の親和性を示す事例であるが、仙台湾周辺の大洞B式では、前記したように口頭部に縄文地文を残す傾向が看取されており、仙北湖沼域では後期末葉に連なる簾目技法が、縄文地文に取って代わっていたと推定される。

当該土器の体部には、異原体による羽状繩文が卓越する。東北中部の大洞B式-C式には、羽状繩文の粗製深鉢や半精製の鉢形土器が盛行しており、後述の平行線文装飾深鉢や縄文施文浅鉢の特徴ともなっている。羽状繩文は東北中部の晩期に通徹した地域性と見なすことができ、その萌芽は後期後葉の金剛寺1~2a式期に求められる。しかし羽状繩文が地域性として確立するのは、当該土器の段階であろう。

編年の位置 当該土器は、大洞B1新式-B2式に相当すると考えられる。口頭部の直上したA類の器形が卓越することは、大洞B1新式以降の様相を窺わせる。前記したように、I文様帶の消失の過程にあることも傍証となろう。B類の器形である図32-41・45は、文様と化したI文様帶が見られ、IIa文様帶との融合化が想定されることから、大洞B1新式に比定されよう。

大洞B2式の装飾鉢類では、口端が施状工具で刻まれ小波状線となる例が、多く認められる。しかし当該土器の口端の谷部は刻み込まれずに、緩い波状線となることから、古的様相を留めている。因つて年代が下つても、大洞B2古式相当と考えられるが、ここでは大洞B2式に包括しておきたい。

分 布 当該土器の分布について小井川和夫氏は、松島湾や南三陸沿岸の遺跡には見られず、貝鳥貝塚や摺薪遺跡に類例が存することから、仙北湖沼地帯及びその周縁に限られることを指摘している(後藤・小井川2003:21頁)。

当該土器を集成してみると、確かに仙北湖沼地帯では富崎貝塚に際立っており、その他では貝鳥・館・中沢貝塚等で少量出土している。また大崎平野を貫流する吉田川上流域の摺薪遺跡にも認められ、更に北上川流域では岩手県川岸場Ⅱ・泉屋・東裏・相ノ沢の各遺跡、松島湾沿岸では宮城県里浜貝塚、南三陸沿岸では宮城県田柄貝塚等で少量出土している(図34)。仙北湖沼地帯を中心として、その周縁域である北上盆地南部へ松島湾・南三陸沿岸が分布域となっており、入組三叉文高環の分布と類似した在り方を示している。因つて小井川氏の指摘は、概ね妥当と言えるであろう。



B 大洞B C式に固有の「平行線文装飾深鉢」

「平行線文装飾深鉢」は、口端に低い山形突起と竪状工具によって刻まれた小波状縁を配した装飾深鉢である。口頭部には通常3条の平行沈線が開閉され、山形突起直下に棘状の陰刻が加えられ、突起の左右が弧状に縁取られ、突起は三山状を呈する。入組三叉文高坏と共に中沢目貝塚II群土器(大洞B C式期)を構成するもので、その分布は入組三叉文高坏と同様に、北上川下流域・追川水系の径60km程の湖沼域に限られることが、須藤隆氏に

よって指摘されている(須藤2003:84頁)。

特徴 全形の窓による資料に乏しいが、形制は屈折しないA類のみで、口縁部は弱く内傾した例が多数を占め、直上した例も認められる。図35-1・2は、口径(最大径)に対する器高の比率がほぼ同等と見なされるが、3・4は、器高が口径を大きく上回っており、長胴の形制となる。

口縁部の装飾については前記した通りであるが、口端が刻まれない装飾性に乏しい平行線文装飾深鉢

1類と、口端に竪状工具による刻み目が加えられた平行線文装飾深鉢2類とに大別される。前者の装飾は3条の平行沈線文の他に、山形突起直下の棘状・三叉状の短い陰刻文様のみで、突起左右の弧線は加えられない(図35-1・3・5~8)。一方後者の突起の左右は弧状に縁取られ、三山状を呈している。頸部様帶には3条の平行沈線文の他に、4条の平行沈線文(図35-26~28)、羊歯状文(図35-30)、裁痕列(図35-29・35・36)、入組矩形文(図35-44・45)等が施されており、変異に富む。特に、入組矩形文が施された装飾深鉢は、後述の入組矩形文装飾深鉢との緊密性を物語っている。

通常本体には、異原体による羽状繩文が施されるが、この地文が東北中部に通徹した地域性であることは、前記した通りである。底部の様相は判然としないが、図35-3・4で判する限りでは、底部直上が横位に削り出されるようである。

須藤隆氏は、中沢目貝塚出土の装飾深鉢を「深鉢A 1a類」に分類しているが、その中でも当該土器は「D 5類」とされたものに相当する(須藤ほか1995:61-63頁)。同氏は大洞B C式の深鉢の口縁部文様帶が、次第に装飾的になると指摘しており、筆者

者の分類に適用するならば、平行線文装飾深鉢1類から同2類への変化が、予察されることになろう。

編年の位置 平行線文装飾深鉢2類の口端は、通常刻み目の細かな小波状縁で構成される。東北北半の装飾鉢類には、大洞B 2式に竪状工具による小波状縁・^{ヨコノミ}連状縁が盛行し、大洞B C 1式では珠紋縁が卓越し、やがて刻み目の細かな小波状縁へと取替される経過が指摘されている(小林2005a:35頁)。当該土器の口端は、珠紋縁風に作出された例(図35-40)も散見されるが、多くは

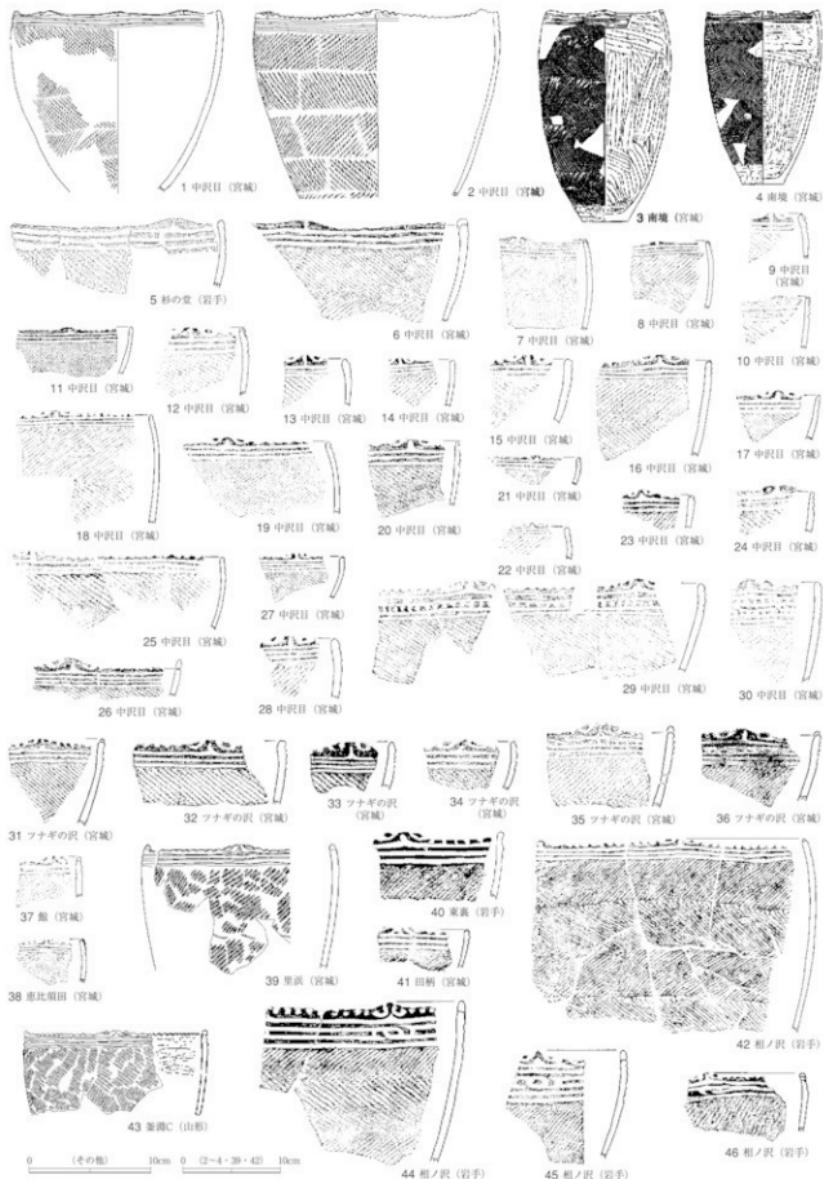


図35 「平行線文装飾深鉢」集成図



図36 「平行線文装飾深鉢」を出土した遺跡

細かな小波状線を呈している。また頭部文様帶に羊歯状文や截痕列を施された例も存在する。上記から、当該土器は大洞BC式に帰属されることになろう。

同式に比定される層位の根拠として、中沢貝塚の成果を挙げることができる。同貝塚では大洞BC式の層準から、当該土器が一通り出土している。これに対し大洞B2式の層準には認められず、入組三叉文高坏と同様の出土状況を示している。先に装飾性に欠ける平行線文装飾深鉢1類から、加飾性の高い同2類への変化を型式学

的に導出した。筆者は前者が大洞BC1式、後者が同BC2式に概ね比定されると私考するが、中沢貝塚の層位的状況は、必ずしも肯定的とは言い難いのが実情である。

入組三叉文高坏と同様に、同貝塚の第1次調査(図18-19-18-130)と第2次調査(図19-21-131-276)の境界面を基準に、当該土器の出土層位を見てみると、確かに上層では平行線文装飾深鉢2類(図18-19-41・45・49・62・63、図19-77-79)が卓越する。しかし、同1類(図19-108)も存している。一方下層では、1類(図20-168・233)と共に2類(図20-169、図21-265)も認められる。変遷の傾向性としては穩当であっても、必ずしも層位的に跡づけられた訳ではないことを確認しておきたい。

分布 須藤氏は、当該土器が入組三叉文高坏と同様に、北上川下流域・追川水系の径60km程の湖沼域に分布が限られることを指摘している。筆者が涉獵した当該土器出土の遺跡は、以下の通りである。

仙北湖沼地帯では、中沢貝塚に顕著で、その他に館貝塚やツナガの沢貝塚、恵比須田遺跡等で出土している。北上川中流域では、岩手県杉の堂・東裏・相ノ沢の各遺跡、南三陸沿岸域では宮城県田柄貝塚、石巻湾~松島湾沿岸域にかけては南境・黒浜貝塚、また奥羽脊梁山脈を介した山形県釜瀬C遺跡でも出土している(図36)。分布は仙北湖沼地帯とその周縁に限られており、特に中沢貝塚に顕著で、入組三叉文高坏と同様の分布が見られることから、須藤氏の言説を追認したことになるであろう。

C 大洞BC式に固有の「入組矩形文装飾深鉢」

「入組矩形文装飾深鉢」は、(口)頭部文様帶に末端が入り組む細長い鼓形の文様が施された装飾深鉢であるが、上記の平行線文装飾深鉢と同様に、大洞BC式に仙北湖沼地帯を中心とした地域に固有の器種類型であったと考えられる。

特徴 当該土器の(口)頭部文様帶は、入組三叉文高坏(入組矩形文施)と同様の横長の鼓形区画の一端が伸びて、相互に入り組む文様で構成される。その基本的な構図は、図37-2に図示した通りである。横位に長く伸びて、平行化した三叉文の主軸線が、上下で密着し、主軸線の末端と三叉文の一端が連結して、鼓形の区画が

作出される。

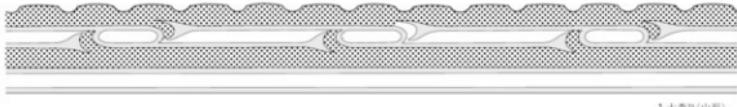
鼓形のモチーフで構成されることから、その系譜を大洞B1式の磨消文様に求めることが可能であろう。東北北部の大洞B1新式では、入り組みを伴う円文と横長の鼓形の文様を交互に配した磨消文様が屡々認められるが、この意匠は後期末葉の2段構成の入組帶状文に由来すると考えられる（小林2004a：87頁）。即ち起・終点の省略された入組帶状文の上・下端の主描線が、文様帶を画する沈線に接着し、横位の密着の度合いを増すことで、入組矩形文の成立に至ったと見なすことができる。しかし、仙北湖沼地帯付近にその系譜を跡づけるような資料は見出せず、また鼓形区画の横幅も入組矩形文装飾深鉢ほどは長くないことから、その可能性は低いと筆者は理解している。

先に鼓形のモチーフが、平行化した三叉文の主軸線が連結したことで構成されると解説した。当該域には、伸長化と平行化の著しい入組三叉文が卓越しており、有力な系譜の一つであることは確かであろう。しかし入組矩形文装飾深鉢が、仙北湖沼地帯を中心とした東北中部に局地的に分布することを考慮に入れるならば、範刻目技法装飾深鉢で指摘した該域固有の入組三叉文の系譜を引く可能性が予察される。

仙北湖沼地帯の大洞B1新式～B2式に固有の範刻目技法装飾深鉢の口頭部には、末端が入り組む三叉文の意匠が盛行する。図37-1がその模式図であるが、三叉文の主軸線が横位に長く伸びて平行線となっており、その末端同士が入り組んで、咬合部を開くように三叉文が配置される（図38-1）。三叉文の主軸線に挟まれた部分が、範刻目技法や繩文地文で充填された場合、その外周が磨り消されるのが通例であるが、逆の例も存在する（図32-44・52）。

上記した文様の密着の度合いが強まり、対向した三叉文の一端が主軸線に連結し、地文が消失することで、図37-2に至る経過が想定される。図38-2～4がその間の事情を物語る資料である。いずれも口頭部文様帯上端の区画線がなく、平行線化した陰刻によって開まれた陽刻部の上下幅は比較的広い。図38-1から地文が抜けた様相を呈しており、口端も平縁や緩い小波状線で構成される傾向にあり、古的様相を留めている。

図38-5～7も、口頭部文様が口端に露出する。口端は範状工具による刺み目の小波状線と、三山状又はそれに類する突起で構成され、矩形文の上下幅がやや狭まっており、図38-2～4からの発展が想定される。加飾された三山状突起は、大洞B C 1式の特徴に挙げられてお



1 大洞B(山形)



2 田柄貝塚(宮城)



3 田柄貝塚(宮城)



4 田柄貝塚(宮城)

1：大洞B2式、2：大洞BC1式、3・4大洞BC2式



■ 繩文地文

図37 「入組矩形文装飾深鉢」に施された入組矩形文模式図



図38 「入組矩形文装鎧深鉢」集成図

り（小林2005a:30頁）、編年の位置を考える上で参考となろう。

図38-8・9の頭部文様帶には、図38-5~7と同様の入組矩形文が施されるが、口端の加飾が著しい。8は口端突起の中間や右脇から右下向きに沈線が伸びて、鉤爪状区画が作出され、区画内が口端からの刻み目で充填され、突起間にも同様の装飾が施される。筆者がB突起4b類や珠紋縁とした装飾に相当するが、この装飾は大洞BC1-Bc2式の特徴であることが指摘されている（小林2004b:38-39頁）。口端の右下方向に突き出た鉤爪状区画は、(口)頭部文様帶に入組矩形文を施した深鉢に広く認められており（図38-13・14・21・22・27・32）、当該文様との緊密性を窺わせる。更に図38-9は、B突起の中央から菱形の区画が陰刻され、左右の対角又はその一端から沈線が弧状に伸びて、下端の界線乃至は口端に接し、半円形の区画が作出される。8・9とも口端装飾の陰刻が細く、陰刻後の磨きや潰しも顯著でなく、陽刻部が大きく作出されることから、古的様相を呈していると言えるであろう。

上記から、やや上下幅を持った入組矩形文は、大洞BC1式に位置付けられる公算が高いと判断される。入組三叉文高環においても、前記したようにやや幅広の入組矩形文は古相の形制（A類）との緊密性が認められており、同様の推移が想定される。

図37-3は、鼓形区画の上端の描線の末端同士が連結し、細長い鉤爪状のモチーフとなった例である。図38-16~18が実在の資料であるが、文様帶の上下幅が狭まって、文様が更に密着した結果と想定される。図38-18には小波状縁の下縁を縁取るよう二重の弧線文が配される。弧線の両端は突起間に二重の弧線文が配される。弧線の両端は突起間に露出しており、口端から削り込まれた珠紋縁と同様の効果が観察される。「弧線文を伴う小波状縁」（小林2005a:23-26頁）との近似性から、同例は大洞BC1式に位置付けられるであろう。

図37-4は、鼓形区画の上下端の描線の末端同士が連結して、部分的に刻み目を持つ平行線と化した例である。細長い矩形の陽刻部の間に、短小の陽刻部が3個存することから、入組矩形文の系譜にあると想定される。図38-19~21・23~32が実在の資料であるが、殆どが陰



図39 「入組矩形文装飾深鉢」を出土した道跡

刻と陽刻部の幅が同等で、文様帶の上下幅は狭小となっている。3個の短小の陽刻部のうち、中央の陽刻部は紡錘形に作出されており、咬合部の痕跡であったことを窺わせる。図38-20・23・32の咬合部は、入組矩形文からの発展を物語っていると言えるであろう。

入組矩形文装飾深鉢の口端に、右下方向に突き出した鉤爪状区画が顯著であることは前記した。その他に、山形状の突起に三叉状の陰刻を配し、突起の左右を縁取ったり（図38-11・26）、突起間に弧状に縁取った装飾が認め

られる(図38-23~25・28)。特に前者は、先の平行線文装飾深鉢と共通した装飾となっており、その亲和性を明示している。

当該土器の体部には、異原体による羽状縄文が施文される。範刻目技法装飾深鉢や平行線文装飾深鉢と同様に、東北中部に通徹した地域性となっている。

当該土器について、口端では装饰性の乏しいものから加飾化への変化、更に(口)頭部では文様の密着化の経過が指摘される。上記した推移は、当該域に固有の人組三叉文高坏や平行線文装飾深鉢にも認められており、器種間で呼応していた様相が窺える。更に入組矩形文装飾深鉢の口端形態や(口)頭部文様に、該域固有の範刻目装飾深鉢からの系統立った変遷が認められること、また体部に羽状縄文が継承されていることを勘案するならば、その母体が範刻目技法装飾深鉢にあったと見なすことができるであろう。

編年の位置 当該土器が、大洞B1新式~B2式の範刻目技法装飾深鉢を母体に成立したと見なした以上、同深鉢に後続することになる。また他器種との文様装飾の共通性から推して、大洞B C 1~B C 2式に位置付けられるであろう。(口)頭部文様带が比較的幅広に構成され、口縁部上端の区画を欠き、口端の刻み目の間隔がやや大きくなる。

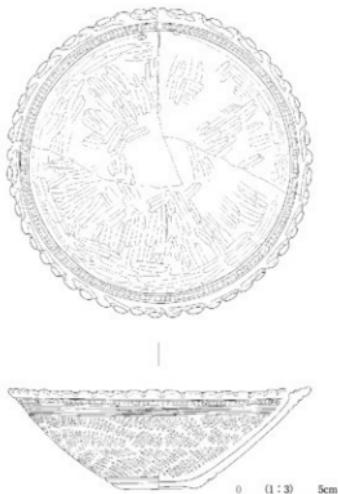


図40 山形県亀塚C遺跡出土の「縄文施文浅鉢1類」

振りとなる例は、大洞B C 1式に比定されよう。文様带が漸次狭小となる傾向が指摘され、陰刻と陽刻部の幅がほぼ同等で、口端が細かに刻まれた例は、大洞B C 2式に相当すると考えられる。

分布 管見の限りでは、当該土器の出土例は決して多くはない。仙北湖沼地帯では、宮崎貝塚に顕著であるが、その他ではツナギの沢・貝殻・館の各貝塚で、更に追川上流域では巻堀遺跡で出土している。北上川流域では岩手県杉の堂・東裏・南小梨蛇王・相ノ沢の各遺跡、沿岸城では宮城県田柄貝塚や泉沢貝塚、また奥羽脊梁山脈の西側では山形県けげんだい遺跡で出土している(図39)。田柄貝塚や北上川流域に目立っていることから、入組三叉文高坏よりもやや広域的な分布が指摘されるであろう。

D 大洞C 1式に固有の「縄文施文浅鉢」

上記した高坏や装飾深鉢以外の器種においても、大洞C 1式古段階の東北中部には、体部に羽状縄文を施した特徴的な浅鉢形土器が分布している。

特徴 当該浅鉢の形制は、口端が内削ぎ状に肥厚し、底部から口縁部にかけて40度前後の角度で直線的又は内彎気味に立ち上がり、底面は平底又は弱い上げ底となる。

口端の外縁は、範刻目によるやや大振りの小波状縁をなしており、谷部から刻み込まれた陰刻による装飾が施される。更に内側には、幅狭の平行沈線が巡らされ、細かな刻み目が充填され、截痕列となる。口縁部の文様带には、通常4条の平行沈線が回繞される。そのうち上位2条の沈線間は、細かな刻み目による截痕列となっており、その直下には狭小な無文帶が2条作出される。体部には異原体による羽状縄文が施文され、底面付近は沈線で区画され、その直下から底部まで研磨され、無文帶が作出される。

内面は、口端の内側が張り出して稜が形成され、その直下から底面にかけては、研磨が丁寧に加えられており、特に放射状の暗文に類した縦位のヘラミガキ痕に特徴付けられる(図40)。体部の器壁は4~前後と非常に薄く作出され、胎土も精選されており、手に取ると見た目よりも軽量な印象を受ける。

当該浅鉢は口縁端部の装飾手法により、三つの種類に区分することができる(図41)。

1類：上面から見ると、突起の両端から左上向きに沈線が伸びて、鉤爪状の区画が連続して作出される。突起右端から伸びた沈線は、突起の下縁を縁取って、突起を梢円形に浮き出しており、左端から伸びた沈線は左隣突起の下縁の中途までを縁取る構成となる。鉤爪状ではなく、突起の下縁を縁取る弧状沈線と左上向きに伸びた沈線が、交互に配された例も認められる（図40、図41-1）。

2類：突起間の谷部から伸びて2個の突起を連結した弧状沈線と、谷部外縁に頂点を持つ三叉状の陰刻が、それぞれ交互に配される。弧状沈線で結ばれた突起は2個一对となるが、突起間も刻み込まれ、突起は梢円形に浮き出される（図41-2）。

3類：突起の谷部に弧状沈線と三叉状陰刻が、交互に配されたもので、前者は突起の下縁を縁取っており、突起は梢円形に浮き出される。2類の2個一对の突起が、1個のみとなった構成である（図41-3）。

上記した3種類のうち、1類の装飾が一般的である。筆者が観察した山形県釜淵C遺跡では、11例中7例が1類、3例が2類に相当している。肥厚した口端の上面に施された同様の鉤爪状の陰刻は、大洞C 1式の高環（図25-2）にも認められており、大洞BC 2式終末～C 1式古段階の特徴に挙げることができるであろう。1類に次いで2類が多く見受けられるが、3類については類例が少ない。2類の中に3類の装飾を合わせ持つ例が存することから、3類は2類の変異であったと見なすことができるであろう。

編年的位置 口縁部の文様帶として開続された刻み目の細かな截痕列は、大洞BC 2式終末～C 1式の特徴であり、口部の突起列は大洞C 1式古段階の浅鉢形土器に共通する。しかし口縁部の文様帶に截痕列ではなく、斜線直線化した羊歛状文を施した例も存しており、大洞BC 2式終末段階に相当する資料も含まれている。

また1987年に、東北大文学部考古学研究室（当時）によって調査された宮城県石巻市（旧河北町）皿貝塚では、157枚にわたる大洞C 1式の堆積層が検出されたが、その中に当該浅鉢が含まれていた（水見1997：図3）。当該浅鉢の帰属型式を特定する上で、有力な根拠となる。

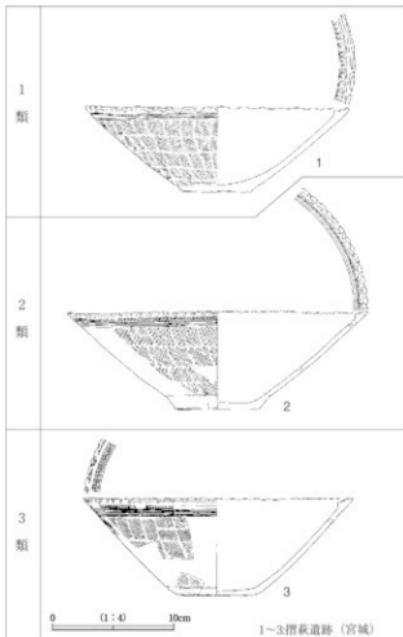


図41 「繩文施文浅鉢」の分類

上記から、当該浅鉢が大洞C 1式古段階に比定される公算が高いと判断される。しかしだ洞BC 2式の終末段階の資料も含まれており、やや時間幅が存していたことが想定される。

分布 当該浅鉢は先行型式で触れた他の類型に比べ、やや広域に分布している。仙北湖沼地帯では、ツナギの沢貝塚で多く出土しており、その他に中沢目・大多古・敷味・館・永根の各貝塚等で出土している。宮城県内では、吉田川上流域の摺萩遺跡に顕著に認められ、北上川河口部～沿岸域では、泉沢・長塙谷・皿貝・西ノ浜・里浜・沢上・南境・尾田峯の各貝塚や宝ヶ峯遺跡で出土している。岩手県内では北上川中流域の川岸場II・清水畑・手代森遺跡、沿岸域の宮野貝塚や上鷹生遺跡で出土している。奥羽脊梁山脈を介した山形県内では、砂川A・的場・矢口・作野・宮の前・漆坊・釜淵C・水上の各遺跡で出土している。

管見の限りでは、当該浅鉢の出土例は福島県三貫地貝塚（森ほか1988：第173図18）が南限、岩手県盛岡市手代



図42 「绳文施文浅鉢」を出土した遺跡

森遺跡（佐々木1986:第126図1）が北限、新潟県元屋敷遺跡（滝沢ほか2002:図面図版245-2828）が西限となり、特に山形県釜淵C遺跡（黒坂2003）と宮城県押崎遺跡（柳沢ほか1990）に、際立って出土している。分布の主体が、仙北湖沼地帯よりもその周縁にあり、分布域も広いことから、仙北湖沼地帯固有とは見なし難いが、分布が東北中部に限定されており、大洞C1式古段階を表徵する器種類型として、今後の研究の指標に位置付けておきたい。

E 小 結

以上、仙北湖沼地帯を中心とした地域に固有の器種類型について、解説してきた。

大洞B式の当該域には、刻目技法装飾深鉢が卓越している。範刻目技法は後期末業の入組帶状文の装飾深鉢の系譜を引くもので、その技法が局的に残存したと見なすことができるであろう。当該土器には主軸線の末端同士が入り組んだ三叉文が特徴的であり、後続する入組矩形文装飾深鉢に継承されたと考えられる。

大洞BC式では平行線文装飾深鉢が、入組三叉文高坏とほぼ同様の広がりを有することが指摘される。口端の装饰性に乏しい平行線文装飾深鉢1類と、口端に範状工具による刻み目が加えられた同2類とに二分され、前者から後者への変遷が想定され、前者が大洞BC1式、後者が同BC2式に相当すると考えられる。

また同式では、入組矩形文装飾深鉢も卓越している。末端同士が入り組む細長い矩形文様に特徴付けられ、入組三叉文高坏の口縁部文様との類似性が指摘される。先行する範刻目技法装飾深鉢からの発展が想定され、やや上下幅のある文様から密着した構成への変化が予察される。大凡前者が大洞BC1式、後者が同BC2式に比定されよう。

大洞C1式古段階には、繩文施文浅鉢が東北中部に分布している。前記した三つ類型に比べると分布域が広く、仙北湖沼地帯に固有とは認め難いが、口端装饰や形制、器面調整が極めて特徴的であり、東北中部の該期の指標に位置付けることが可能である。

上記した四つの類型の体部には、いずれも異原体による羽状繩文が施文される。粗製深鉢の羽状繩文は、晚期前業～中業の東北中部に通徹した地域性となっており、装饰土器にも適用されることを示している。

このように仙北湖沼地帯を中心とした地域には、固有の土器群が分布している。晚期初頭に確立された仙北湖沼域の特殊性が、晚期前半期に通底しており、取り分け入組三叉文高坏・平行線文装飾深鉢・入組矩形文装飾深鉢が盛行した大洞BC式期に、その地域色が顕在化していたことが指摘されるであろう。

8 結 語

本稿では、須藤隆氏によって提起された大洞BC式期に特徴的な入組三叉文高坏について、多方面から型式学的検討を加えてきた。これまで明らかにした事項を纏めると、以下の通りである。

- ① 入組三叉文高坏は大洞BC式期の仙北湖沼地帯に固有の器種類型で、規格性が強く、その分布も極めて限定される。仙北湖沼地帯以外での出土例は少なく、北上川を遡った交通の要衝となる拠点集落にもたらされる傾向が看取され、現時点では仙台平野以南での出土例は認められない。当該高坏が出土した範囲が、仙北湖沼地帯遺跡群の通常の交流圏であったことが暗示されよう。
- ② 入組三叉文高坏は口縁部の形状から、強く内彎した入組三叉文高坏A類と、内屈して稜が形成された同B類とに二分され、前者から後者への型式変化が想定される。概ね前者が大洞BC1式(同BC1～BC2式古相)、後者が大洞BC2式(同BC2式新相～終末)に位置付けられると思われるが、前者の形制は大洞BC2式にも認められており、厳密な型式区分とは見なし難いようである。
- ③ 入組三叉文高坏は、東北中部に特徴的な後期末葉以来の魚眼状三叉文等を配した黒色磨研の台付浅鉢の系譜を引くと考えられる。大洞BC式期に地域的偏倚が強まって確立した器種類型であったと想定される。
- ④ 入組三叉文高坏の文様は、背向する主軸線が密着し伸長化した入組三叉文に特徴付けられる。この文様は該域の大洞B2式の入組三叉文の系譜を引くものの、描出手法の特徴から大洞B2式とは識別可能と判断される。また入組三叉文高坏を構成する諸属性は、大洞C1式の高坏に継承されることなく、消滅の過程を辿ったと考えられる。
- ⑤ 大洞BC式期の仙北湖沼地帯には、入組三叉文高坏以外にも特徴的な器種類型が存している。特に平行線文装饰深鉢は、当該高坏と近縁の分布を示しており、文様の描出手法が共通する入組矩形文装饰深鉢は、やや広範囲の分布が認められる。この入組矩形文装饰深鉢は、大洞B式期の当該域に特徴的な匂い目技法装饰

深鉢が母体になった可能性が考えられる。

一般に様式化されたと言われる亀ヶ岡式土器の中にあって、局地的な広がりを持つ土器群を跡づけてきた。特に入組三叉文高坏は、仙北湖沼地帯に固有の器種類型であり、本稿では須藤氏の指摘した所説を多岐にわたって追認してきたことになるであろう。

晩期前業の仙北湖沼地帯において、入組三叉文高坏や平行線文装饰深鉢のような個性的な土器群が製作された背景には、共通した生業基盤に立脚した社会が存続していた可能性が想定されている。湖沼地帯といった比較的同質の地理的環境下にあって、水鳥狩猟や淡水産資源に依存した生業形態が、社会的紐帶を強固なものとし、齊一性のある地域相を築き上げて行ったと考えられる。

また中沢貝塚で出土した骨角製・貝製装飾品(図5-15～22)や土製仮面(図4-1)、恵比須田遺跡の大型遮光器土偶(図4-3)に象徴されるように、大洞BC式期の当該域には、非常に高揚した文化的内容を看取することができる。上記したような安定した地域社会が基盤となって、亀ヶ岡文化圏の中でも有力な地域圏の形成を可能にしたと見なすべきであろう。

この文化的領域を表徵する入組三叉文高坏は、複雑な透かし彫りの施された高い脚部を特徴とする。非常に手の込んだ造形品であることから、珍重された土器と推察される。恐らくは、仙北湖沼地帯に特定の製作者が存在して、製品が域内にまなく行き渡るネットワークが確立していたと考えられる。また数量的に多くはないが、域外の有力遺跡にも移出されており、特に約250km離れた青森県根ノ木遺跡ではほぼ完形品(図6)が孤立して出土した背景には、交易品として中継されてきたのではなく、故地である仙北湖沼地帯から直接往来され、奢侈品として丁重に扱われていた可能性が想定されよう。このように当該高坏は、亀ヶ岡文化圏内の地域間の交流関係を考究する上での指標と見なすことができるであろう。

須藤隆氏は、入組三叉文を施した高坏が、中沢貝塚で大洞BC式の層準から出土した事例を挙げて、芹沢長介氏によって設定された「兩滝式」を肯定的に紹介している。確かに装饰意匠としての入組三叉文と羊齒状文が、ある時期併存の関係にあったことは疑いなく、東北中部においては大洞BC2式の終末段階まで、単位文様

としての入組三叉文が、一部の器種の特定部位に残存する。しかしだ洞B C式期の入組三叉文が、先行型式とは識別される内容であることも、付言しなければならないであろう。

大洞B C式の入組三叉文には、背向した主軸線が密着し、伸長化又は短小化の傾向が看取される。特に後者は、Z字状の陽刻部を意識した構成で、陰刻文様を基調とした大洞B 2式からの発展が想定される。羊齒状文は陰刻によって浮き出された陽刻部の形状を基本的な意匠としているが、大洞B C式の入組三叉文にも、同様の効果を指摘することができ、三叉文は陽刻部を描出するための副次的な役割へと変化を遂げている。一方伸長した三叉文においても、陰刻部と陽刻部の幅が同程度を呈しており、陰刻主体の文様構成からの脱却が指摘されるであろう。

また、須藤氏が「雨滝式」の例証に挙げた中沢貝塚の層位的事例は、大洞B 2式期の層準に羊齒状文施文の土器を含まない一方、上記の特殊化した入組三叉文が同B C式の一部の器種に施されたことを実証したと見なせる内容である。入組三叉文高坏が大洞B C式の層準から出土し、先行型式の台付浅鉢とは分別されることを明示したのであって、大洞B式と同B C式を統合した「雨滝式」の根拠にはなり得ないと筆者は理解している。

以上、入組三叉文高坏を中心に東北中部の大洞B C式を考究してきた。一部の器種類型を取り上げたに過ぎないが、多岐にわたった検討の結果、多くの知見が得られたと見るのは、筆者の慢心であろうか。地道ではあるがこのような型式学的検討を重ねて行くことが、多様性に満ちた亀ヶ岡式土器を理解するための、必須の手続きであることを確認してきた次第である。

謝 辞

本稿は、須藤降先生によって着目された大洞B C式に固有の「入組三叉文高坏」及びその関連資料を涉獵し、考察を試みたものである。須藤先生には、本稿の着想から執筆に至るまで多大なるご指導を賜ると共に、中沢貝塚の研究成果を通して、多くのことを学ばせて頂きました。また高橋龍三郎先生には、早稲田大学考古学研究室所蔵の杉の堂遺跡資料の観察に際して便宜を図って頂くと共に、亀ヶ岡式土器研究の進め方について、様々なご教示を賜りました。平内町歴史民俗資料館所蔵の櫻ノ木遺跡資料の実測に当たっては、平内町教育委員会の後藤久志氏にご配慮を賜りました。山形県埋蔵文化財センター所蔵の宮の前・釜淵C遺跡資料の図化に際しては、植松暁彦・黒坂雅人両氏にご配慮を頂きました。記して感謝の意を表します。
(2006年4月30日稿了)

註

- 1) 東北地方の地域区分については、拙稿(小林2006: 57頁註1)に準拠する。即ち本稿で示した「東北中部」とは、北緯40度以南(厳密には北緯39度45度付近-秋田市と盛岡市を結んだラインよりも以南)~山形・宮城県境にかけた地域であり、北緯40度以北が「東北北部」に相当する。但し山形県の最上川上流域や宮城県の阿武隈川下流域は、「東北南部」に含まれる可能性が考えられる。
- 2) 「高坏C・C型類型」又は「台付鉢C・類型」の呼称は(須藤1984)に掲げるが、1995年に刊行された中沢貝塚の第2~4次調査の報告書では、「高坏C 1p類」と別の呼称で分類されている(須藤はか1995: 40頁)。
- 3) 「仙北湖沼地帯」は、須藤降・奥野義一両氏によって創出された呼称である旨を、須藤先生よりご教示を頂いた。
- 4) 鹹水性貝類を主体とした貝塚で、最も容奥まで広がりをみせるのは鶴見早期末葉~前期初頭である。石巻平野では、伊豆沼・長沼周辺までが鹹水域であったと推定され、長沼の北岸に位置する櫻塚貝塚では、前期初頭上川名Ⅱ式のハマグリを主体とする貝層が確認されている(須藤はか1995)。同貝塚は、現在の汀線よりも約35km内陸に位置している。
- 5) 長根貝塚等に据ると、「北上川中流域貝塚群」では、早期~前期初めにかけては鹹水性貝塚(14ヶ所)、前期中頃~中期は汽水性貝塚(10ヶ所)、後・晚期は淡水性貝塚(34ヶ所)へと変化しており、後・晚期の貝塚の増加が顕著である(藤沼はか1989: 1頁)。
- 6) 長根貝塚では、早期末葉から晩期末葉まで、断続的であるが長期にわたる居住が確認されている。早期末葉の鶴山Ⅱ式期の貝層は、カキ・ハマグリ・アカニシ・オキシジミ等の鹹水性貝類が主体をなすが、最も規模の大きな前期末葉~中期初頭の貝層はヤマトシジミ主体の汽水性貝層、後期後葉~晩期初頭の地点ではオオタニシ・イシガイ主体の淡水性貝層へと変化している(須藤はか1995: 13頁)。

- 6) 鳴瀬川と江合川に挟まれた独立丘陵には、史学上名高い早期木造の素貝塚（主礎貝塚）が位置している。
- 7) 鳴瀬川南岸の大松沢丘陵に位置する晩期の上野遺跡（図2）では、淡水性貝層の分布が指摘されているが、詳細は不明である（藤沼ほか1989：70-71頁）。
- 8) 仙北湖沼地帯北限の夏川流域に位置する登米市石越町富崎貝塚（金剛寺1式～大洞C1式）では、イノシシとシカの永久歯の出土及び摩耗状況から、冬季を中心として初秋から早春にかけて多く捕獲されていたと推定されている（後藤・小井川2003：50-53頁）。

また中沢目貝塚では、シカやイノシシの骨・角・牙を用いた製品が多数出土している（図5）。狩猟・漁撈具としては、骨角雕（図5-11～14）や根抜み（1～5）、刺突具（6～10）等が出土しているが、骨角雕や刺突具はシカの中手・中足骨や鹿角・釣針はシカ或いはイノシシの四肢骨を素材としている。皮膚の穿孔や土器製作等に用いたと思われる加工工具としては、シカ・イノシシの尺骨や中手・中足骨を素材とした骨砲や尖頭器が多く出土している。また装身具としては、同様の素材による髪飾り（15～20）や華麗な装飾を持つ鹿角形重飾（環状器製品）等が出土している。その他の用途は明確でないが、装飾的な凹形鹿角製品（22）も出土している。上記からもシカやイノシシが、食料資源としてだけではなく、生活資材として重要な役割を果たしていたことが窺えよう。

9) 管見の限りでは、楓ノ木遺跡例以外に全形の窺える事例としては、宮城県石巻市南境貝塚（図7-1）の1例が挙げられるのみである。

10) 平内町歴史民俗資料館所蔵の楓ノ木遺跡出土の高坏（図6）は、（青森県立図書館編1968:20頁46）が初出となるが、この他に下記の図録に写真が掲載されている。（青森県立郷土館編1986：35頁46）、（青森県埋蔵文化財調査センター編1990：54・193頁）。

11) 中沢目貝塚出土土器群の類別は、報告文献で差異が見られるため、本稿では報告書（須藤編1984、須藤ほか1995）に準拠し、大洞BC式相当の晩期2群の土器群を「中沢目貝塚II群土器」とした。従って「中沢目貝塚I群土器」が大洞C1式、「中沢目貝塚III群土器」が大洞B2式、「中沢目貝塚IV群土器」が大洞B1式に相当する。

一方須藤氏の論考（須藤1984）では、大洞BC式相当が「中沢目貝塚（出土）3群土器」に分類されており、「中沢目貝塚（出土）1群土器」が後期末葉、「中沢目貝塚（出土）2群土器」が大洞B式、「中沢目貝塚（出土）4群土器」が大洞C1式に相当する。ローマ数字やアラビア数字では、指示する内容を異にしており、注意を要する。

なお須藤氏は、「中沢目貝塚II群土器」が深鉢・鉢・浅鉢・台付浅鉢、壺、注口土器によって構成され、装飾・施文方法においては羽彫繩文の使用頻度が高く、跳磨きと磨きによる浮文化が顯著で、展開する文様構成に基本的な単位文様が存在していることを、特徴に挙げている（須藤編1984：134-137頁）。

12) 本稿の「宮城県北半」とは、宮城県内でも名取川以北の地域を指している。地形区分上では、北上川下流域（仙北湖沼地帯）、南三陸～松島湾にかけての沿岸域、仙台平野北部が該当し、ほぼ図2の範囲となる。縄文後期の標道遺跡である金剛寺貝塚（図11-14）は、名取川以南の高船丘陵に位置しており、嚴密には筆者の定義に合致しないことになるが、同流域

に近接しており、土器の内容も北半と類似していることから、本稿では同類として扱った。

- 13) 沼津貝塚は、西方に開口する古幡井溝（現沖積地）の最奥部の半島状に突き出た丘陵付け根の鞍部（標高15～20m）一帯に立地しており、遺跡全体の面積は東西220m×南北160mを測る。最も古い遺物では、縄文前期初頭（大木1式）の資料が出土しているが、貝層は中期後半（大木8b・9式）になって初めて形成され、中期後半～後期初頭はハマグリが多く、後期中葉～晩期前半にかけてはアサリ主体に変化し、晩期後半～弥生時代にかけてはヤマトシジミが主体となる傾向が看取されている（藤沼ほか1989：151頁）。また晩期前葉までは、ヤマトシジミが全く含まれていないことから、晩期前葉以降にヤマトシジミの種々な湯湖が急速に形成されていったことも指摘されている（林1984：136頁）。上記の貝相の変移は、古幡井溝の閉塞又是埋め立て時期が、弥生時代にはほぼ終了したことを窺わせるものであり、地理学上の成果からも、約2,000yr B.P.以降、海水の影響を受けない環境になっていたことが追認されている（松本1996:11-13頁、伊藤2003：545頁）。

14) 沼津貝塚第1Aアサリ層出土のZ字文（図13-2）は、第Ⅲアサリ層出土土器（図13-16）からの発展が想定され、大洞BC2式に位置付けられよう。しかし削まれた陰刻が細く、陽刻部が大きく作出されており、大洞BC1式の可能性も否定できない。

15) 予備調査として、1972年10月に中沢目貝塚A地点とその周辺の測量及び貝層の範囲確認調査が、東北大文学部考古学研究室（当時）によって実施された。この調査に基づいて、1973年11月第1次調査として、H3・I3・G3区の2m四方の調査区が開設され、XII層までの貝層が精査された。1979年10月第2次調査と同調査区が更に掘り下げられ、H3・I3区の1～27層、G3区の1～10層が精査された。1984年10～11月の第3次調査では、H1・I3区の28～124層、G3区の11～69b層が精査され、1986年8～9月の第4次調査では、H1・I3区の125～335層、G3区の70～215層が精査された。

第4次調査を終了した時点では、まだ底面に達していないが、この貝塚の形成は縄文後期中葉まで遡ると推定されている（須藤編1984:132頁）。なお同貝塚は、1988年に国史跡に指定されている。

16) 須藤氏の論考（須藤1984）と報告書（須藤ほか1995）では、層位名称や図示資料の帰属層位に差異が存しているため、図18～21は報告書の層位名称に準拠した。図示資料から判じて（須藤1984：第4図）の28・29層は、本稿図20の11・12層、（須藤1984：第4・5図）の30・34層は本稿図20の15層に相当するようである。須藤氏の言説に従うなら、最終報告書のI・3区15層の前後が基準となろう。

17) 三叉文の種類については、（小林2005a:35-37頁）に準拠している。

18) 大塚連朗氏は図23-1を例示し、仙台湾周辺で出土する円形小瘤に向かって対応する三角形状の透かしや菱形の透かしが、西日本の標準式紋様の影響・模倣によって生成したと指摘している（大塚2000:249頁）。しかし東北地方では、既に三角形の透かしが後期中葉の異形土器（田柄貝塚）に存しており、対向した三角形の透かしは、瘤付土器初期の釣手土器（宝ヶ峯遺跡）や台付異形土器（宝ヶ峯遺跡）に認められる。上記から三角形や菱形の透かしは、東北地方における自律的展開を考えるべき

であろう。

- 19) 須藤隆氏は、折衷道路例(図22-15)を「晩期1b期」(大洞B2式期)に位置付け、後続する入組三文高坏に系譜付けられることを指摘している(須藤はか1995:236-237頁)。しかし別稿(須藤1995:図1)では、「晩期1a期」(大洞B1式期)として同例が図示されている。
- 20) 大洞C1式の浅鉢形土器は、広い平底を有しており、底部から口縁部にかけて外反気味に開くものや、縦く内脣して開くものがある(高橋龍三郎1981:13頁)。
- 21) 大洞C1式の楕円形土器は、底部から口縁部にかけて強く内脣して立ち上がり、料理用のボウルに近い形状である。装飾の加えられた楕形は、通常平縁で、口頭部に截痕列(旧II c 文様帶)が明確される。大洞C1式の高坏は、口端は浅鉢形土器、体部は楕円形土器の特徴を兼ね備えており、両器種が折衷されたものと見なすこともできる。從て底部を欠損した場合でも、大洞C1式では、楕形の形制で口端に装飾を有するものが高坏、平縁で装飾を持たないものが楕円形土器となろう。但し高坏には、楕形の特徴である口頭部の截痕列は認められない。
- 22) 図26-3・5については、大洞C2式に位置付けられる可能性も残されている。また図26-7の実測図は、天地が逆に提示されている。

23) 館塚はA地点とB地点を合算した数で、(辻理はか1974;第57図7・8・12?・17・18-拓本、第58図6・7-実測図、第59・60・62・65図=写真、第81図19-拓本、第84図=写真)が該当する。第59図は入組三文高坏B類の、残存部位2/3以上上の略定形の資料として重要である。敷味貝塚では、(辻理はか前掲;第40図8・10-拓本、第45図7-実測図)が該当する。

24) 岩手県東裏跡出土の入組三文高坏が、図29-4に相当することを、須藤隆先生よりご教示頂いた。

25) 須藤隆氏は、南境貝塚で類似の透かし彫りが展開する舞部を持つ台付土器が出土しているが、鉢の形態に差異が見られ、地域的な変異と考えられることを指摘している(須藤1992a:286頁)。もし図7-1を指示したのであれば、地域差ではなく年代差として捉え直すべきであろう。

26) 須藤隆先生には、2005年3月に同例を実見して頂いた。その折、内面を丁寧に研磨しており、形態も極めて類似しているが、中沢貝塚出土の高坏に比べると、胎土はがっしりしており、やや重たい感じがするとのご教示を頂いた。

27) 装飾深鉢・鉢形土器の分類については、(小林2004b:37頁)に準拠する。即ち口頭部が直上する器形がA類、屈折する器形がB類となる。

図版出典

- 図1:(須藤2003:第2図) 改変
 図4-1:(須藤編1984)、2:(阿部・藤沼1996)、3:(丹羽1980)
 図5:(須藤編1984)
 図6:小林実測(平内町歴史民俗資料館蔵)
 図7-1:(後藤2004)、2:(須藤編1984)、3・4:(須藤1984)
 図8-1・5・7・9・10・12-17:(須藤編1984)、2-4・6・8・11:(須藤はか1995)、18-35:(後藤・小井川2003)、36-46:(阿部1990)
 図9-47・50・52-54:(須藤1984)、48・49・55:(福山2004)、51:(後藤1953)
 図10-1:(山口1995)、2:(佐々木はか1986)
 図11-1・2・4・15・19:(手塚はか1986)、3・8-13・16-18・22:(柳沢はか1990)、5・7:(小井川1980)、6・21:(後藤・小井川2003)、14:(後藤1960)、20:(佐藤甲二はか1983)
 図13:(須藤1984:第14・15図) 改変
 図15-1・2・4・5・10-13・17-19・21・25-27-29・31-32・34-37・40-42:(須藤編1984)、3・6-9・14-16・20・22-24・26・30・33・38・39:(須藤はか1995)、12・60・62-64・70・71・73・75-77:(須藤1984)、43-59:(後藤・小井川2003)、61・65-69:(阿部1990)、72・74:(福山2004)、76:(佐久間・小村田1995)
 図16:(須藤編1986:図4) 改変
 図17:(須藤はか1995:第5図版) 改変
 図18-1~70:(須藤編1984)
 図19-71~128:(須藤編1984)、129-153:(須藤はか1995)
 図20-154-257:(須藤はか1995)
 図21-258-330:(須藤はか1995)
 図22-1:(阿部・須田:1997)、2・16:(柴田・小林2003)、3:(須藤1984)、4・13:(山口1995)、5・6:(須藤はか1995)、7・8:(及川はか2004)、9:(須藤編1984)、(須藤1984)、10:(開根2002)、11・12:(濱田はか2003)、14:(小井川1979)、15:

(柳沢はか1990)

図23-1:(小井川1980)、2・11:(阿部・須田:1997)、3・12:(山口1995)、4・6-8・15:(手塚はか1986)、9・16・17:(須藤はか1995)、10:(後藤はか1989)、13・14:(阿部1990)

図24-1:(宇部はか2002)、2:(鈴木隆英1985)、3・4:(三浦はか2005)、5:(宇田川はか2004)、6:(谷地1992)、7:(八戸市博物館1985)、8:(滝沢はか2002)、9:(山崎2002)

図25-1・4・5・5:(小原はか1990)、2:(石郡同1987)、3:(須藤1996)、6:(相原1981)、7:(高橋龍三郎1981)、8:(高橋忠彦はか2000)

図26-1・4:(福田はか1988)、2:(鈴木克彦はか1984)、3:(高橋学1994)、5・6:(小原はか1990)、7:(福山2004)、8:(相原1981)、9:(西野はか1989)

図29-1~3:(小山内2000)、4・5:(相原1981)、6~11:(宮本2000)

図30-1:(志間はか1991)、2:(後藤はか1989)、3:(藤沼はか1995)、4・5:(柳沢はか1990)

図31:小林実測(山形県埋蔵文化財センター蔵)

図32-1~44:(後藤・小井川2003)、45:(手塚はか1986)、46:(相原1981)、47・51・53・56:(宮本2000)、48・54:(濱田はか2003)、49・50:(草間・金子編1971)、52:(柳沢はか1990)、55:(及川はか2004)、57:(須藤はか1995)

図33-1:(須藤1992b)、2:(手塚はか1986)、3:小林実測(山形県埋蔵文化財センター蔵)

図35-1・6・11・20・23・26:(須藤はか1995)、2・13・15~19・21・22・24・25・27~30:(須藤編1984)、3・4:(後藤2004)、5:(林・高橋はか1983)、7・10・12・14・37・38:(須藤1984)、31-36:(福山2004)、39:(小井川・山田2002)、40:(相原1981)、41:(手塚はか1986)、42:(小山内2000)、43:小林実測(山形県埋蔵文化財センター蔵)、44-46:(宮本2000)

図38-1:(安孫子1993)、2・12~15・19・23・27・32:(宮本

- 2000)、3:(熊谷1977)、4:(林ほか1983)、5~7・21:(相原1981)、8・9・16・18・24・28:(手塚ほか1986)、10・11・17・20・22・26・29~31:(後藤・小井川2003)、25:(宮城県教
- 育庁文化財保護課編1977)

 図40: 小林実測 (山形県埋蔵文化財センター蔵)
 図41-1~3:(柳沢ほか1990)

引用文献

- 相原康二 1981 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-N- (一関地区 東裏遺跡)」岩手県文化財調査報告書第55集 岩手県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査センター編 1990 『北の誇り・亀ヶ岡文化—縄文時代晚期編—』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③ 青森県教育委員会
- 青森県立郷土館編 1986 『亀ヶ岡文化—華ひらいた縄文の世界—』青森県立郷土館考古部門特別展示図録 青森県立郷土館
- 青森県立図書館編 1968 『青森県埋蔵文化財展 目録』青森県県民課
- 安孫子昭二 1993 『大森B遺跡とその周辺』『川崎利夫先生還暦記念論集 野に生きる考古・歴史と教育』 pp.19~48 川崎利夫先生還暦記念会
- 阿部博志・藤沼邦彦 1996 『土偶資料 宮城県』「東北・北海道の土偶Ⅱ—亀ヶ岡文化の土偶—」土偶シンポジウム5 宮城大会 pp.149~166 「土偶とその情報」研究会
- 阿部博志・須田真平 1997 『里浜貝塚X—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚風越地点の調査—』東北歴史資料館資料集43 東北歴史資料館
- 阿部 恵 1990 『倉崎貝塚』『大貫館山船跡ほか』宮城県文化財調査報告書第137集 pp.97~126 宮城県教育委員会
- 石垣同誠一・西谷隆・菅原俊行 1987 『秋田市秋田新都市開免整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地方遺跡・台B遺跡』秋田市教育委員会
- 伊藤晶文 1999 『北上川下流沖積低地の新完世地盤発達』『季刊地理学』第51巻第1号 pp.1~18 東北地理学会
- 伊藤晶文 2003 『北上川下流低地における浜堤列の形成時期と新完世後期の海水準変動』『地理学評論』第76巻第7号 pp.537~550 日本地理学会
- 伊東信雄・藤沼邦彦・須藤隆ほか 1969 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—長根貝塚—』宮城県文化財調査報告書第19集 宮城県教育委員会
- 横松暁彦 1999 『宮の前遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第65集 山形県埋蔵文化財センター
- 宇田川清一ほか 2004 『向様田A遺跡 遺物編—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X-II』秋田県文化財調査報告書第370集 秋田県教育委員会
- 宇部則保ほか 2002 『八戸市内遺跡発掘調査報告 15 是川中居遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集 八戸市教育委員会
- 及川真紀・森一鉄ほか 2004 『川岸場II遺跡第2次発掘調査報告書』前沢町文化財調査報告書第16集 前沢町教育委員会
- 大塚道朗 2000 『縄文土器研究の新展開』 同成社
- 岡道夫ほか 2005 『第四章 北上の貝塚』『北上町史 資料編I』 pp.399~464 北上町史編さん委員会
- 小山内透 2000 『川岸場II遺跡発掘調査報告書—北上川上流改修事業・白山地区築堤—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第317集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 小原俊巳ほか 1990 『上平遺跡群(上平遺跡) - 第4次発掘調査概報(遺構・土器) -』盛岡市教育委員会
- 金子啓彦 1992 『大洞B式2の概略構造について(中) - 東北地方北部を中心として-』『紀要』XII pp.1~44 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 草間俊一・金子昌治 1971 『貝鳥貝塚』 花泉町教育委員会・岩手県文化財愛護協会
- 齊谷常正 1977 『南小梨蛇王遺跡』千厩町文化財調査報告第1集 千厩町教育委員会
- 黒坂雅人 2003 『釜淵C遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集 山形県埋蔵文化財センター
- 小井川和夫 1979 『前浜貝塚』本吉町文化財調査報告書第2集 本吉町教育委員会
- 小井川和夫 1980 『宮戸島台廻貝塚出土の縄文後期末・晚期初頭の土器』『宮城史学』7号 pp.9~21 宮城教育大学歴史研究会
- 小井川和夫 2004 『里浜貝塚風越地点出土土器の検討』『東北歴史博物館研究紀要』5 pp.17~51 東北歴史博物館
- 小井川和夫・山田晃弘 2002 『里浜貝塚西畑地出土遺物』『東北歴史博物館研究紀要』3 pp.45~136 東北歴史博物館
- 小池一之・田村俊和・鶴西清高・宮城豊編 2005 『日本の地形3 東北』 東京大学出版会
- 後藤勝彦 1953 『登米郡長沼附近の貝塚について』『登米郡北方村—東北における水田單作農村の歴史—』(平重道著) pp.1~10 宮城県登米郡北方村
- 後藤勝彦 1960 『宮城県名取市高船金剛寺貝塚出土繩文式土器の研究—陸前地方後期縄文式文化の編年的研究—』『宮城県の地理と歴史』III (1982年復刻版) pp.109~122 東北大学地域社会研究会編 (国書刊行会発行)
- 後藤勝彦 2004 『南境貝塚調査の留意の成果 I - 7トレンチの場合—陸前地方縄文中期から後期の編年的研究—』『宮城考古学』第6号 pp.63~110 宮城県考古学会
- 後藤勝彦ほか 1989 『考古資料編』『松島町史 資料編I』 pp.1~525 松島町史編纂委員会
- 後藤勝彦・小井川和夫 2003 『富崎貝塚—北上川中流域の淡水産貝塚の研究—』石越町文化財調査報告書第1集 石越町教育委員会
- 小林圭一 2001 『最上川流域における縄文時代後・晚期の遺跡分布』『山形考古』第7巻第1号(通巻31号) pp.21~81 山形考古学会

- 小林圭一 2003 「東北北半における縄文晩期前葉の注口土器」『研究紀要』創刊号 pp.1-44 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2004 a 「大洞B式「ノ字文」の系譜」『先史考古学研究』第9号 pp.84-111 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 小林圭一 2004 b 「岩手県安代町曲田I 遺跡出土の晩期縄文土器(前編) -E III-011住居跡出土土器の再検討-」『研究紀要』第2号 pp.29-55 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2005 a 「岩手県安代町曲田I 遺跡出土の晩期縄文土器(後編) -E III-011住居跡出土土器の再検討-」『研究紀要』第3号 pp.21-92 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2005 b 「縄文時代晩期初頭注口土器の一様相 -青森市沢山遺跡出土の大型注口土器の検討を通して-」『葛西 勲先生還暦記念論文集 北奥の考古学』 pp.217-255 葛西 勲先生還暦記念論文集刊行会
- 小林圭一 2006 「山形県天童市宮田遺跡から採集された縄文時代晩期前葉の注口土器」『研究紀要』第4号 pp.35-60 山形県埋蔵文化財センター
- 佐久間光平・小村田達也 1995 「佐沼城跡」追町文化財調査報告書第2集 追町教育委員会
- 佐々木博和ほか 1985 「香ノ木遺跡・色麻古墳群一昭和59年宮城県營園場整備等に伴う遺跡詳細分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書第103集 宮城県教育委員会
- 佐々木清文ほか 1986 「手代森遺跡発掘調査報告書 -北上川水系大沢川の河川改修工事に伴う事前緊急発掘調査-」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐藤甲二ほか 1983 「茂庭-茂庭住宅团地造成工事地内遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第45集 仙台市教育委員会
- 柴田陽一郎・小林芳行 2003 「ツフキ遺跡-1号営場は整備事業(大砂川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II」秋田県文化財調査報告書第352集 秋田県教育委員会
- 益谷正三ほか 1981 「宮城県營園場整備開発遺跡詳細分布調査報告書(昭和55年度)」宮城県文化財調査報告書第75集 宮城県教育委員会
- 志間泰治ほか 1991 「宝ヶ峯」章藤報恩会
- 鈴木克彦ほか 1984 「亀ヶ岡石器時代遺跡」青森県立郷土館調査報告書第17集・考古-6 青森県立郷土館
- 鈴木隆英 1985 「曲田I 遺跡発掘調査報告書-東北展貫自動車道追跡遺跡発掘調査-」岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第87集 岩手県埋蔵文化財センター
- 須藤 隆 1984 「北上川流域における晩期前葉の縄文土器」『考古学雑誌』第69巻第3号 pp.1-51 (pp.265-315) 日本考古学会
- 須藤 隆 1992 a 「東北地方における縄文時代貝塚の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集 (共同研究「動物考古学の基礎的研究」) pp.245-297 国立歴史民俗博物館
- 須藤 隆 1992 b 「東北地方における晩期縄文土器の成立過程」『東北文化論』ための先史学歴史学論集』 pp.655-707 加藤愈先生還暦記念会
- 須藤 隆 1996 「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『日本文化研究所研究報告別巻』第33集(別刷) pp.1-40 (pp.93-132) 東北大日本文化研究所
- 須藤 隆 2003 「東北日本における晩期縄文集落の研究」『東北大学文学研究科研究年報』第52号(別冊) pp.1-59 (pp.30-88) 東北大学大学院文学研究科
- 須藤隆嗣 1984 「中沢貝塚-縄文時代晩期貝塚の研究-」東北大学文学部考古学研究会
- 須藤隆嗣 1986 「中沢貝塚-第3次調査概要-」東北大学文学部考古学研究会
- 須藤隆嗣・閑根達人ほか 1995 「縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢貝塚II」東北大学文学部考古学研究会
- 須藤隆嗣 1997 「岩手県花泉町中神遺跡の調査」東北大学文学部考古学研究室・花泉町教育委員会
- 閑根達人 2002 「沢上貝塚出土晩期縄文土器の再検討」『宮城考古学』第4号 pp.1-27 宮城県考古学会
- 芹沢長介 1960 「石器時代の日本」榮書館
- 高木 晃 1999 「大芦I 遺跡発掘調査報告書-ふるさと農道緊急整備大芦地区開発遺跡発掘調査-」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第306集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋忠彦・伊藤政 2000 「戸平川遺跡-東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIV-」秋田県文化財調査報告書第294集 秋田県教育委員会
- 高橋 学 1994 「白坂遺跡発掘調査報告書-県営園場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査-」秋田県文化財調査報告書第244集 秋田県教育委員会
- 高橋龍三郎 1981 「亀ヶ岡式土器の研究-青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について-」『北奥古代文化』第12号 pp.1-51 北奥古代文化研究会
- 高沢規則・高橋保雄ほか 2002 「元屋敷遺跡II(上段) -奥三面ダム開削遺跡発掘調査報告書XIV-」朝日村文化財報告書第22集 朝日村教育委員会
- 田中忠三郎ほか 1966 「縄文土器研究集 第一集(平内町櫻の木出土資料)」平内町教育委員会・平内町郷土研究会
- 手塚均ほか 1986 「田柄貝塚I -遺構・土器編」宮城県文化財調査報告書第111集 宮城県教育委員会
- 奈良修介・豊島晶 1967 「秋田県の考古学」郷土考古学叢書3 吉川弘文館
- 西野秀和・岡本恭一ほか 1989 「金沢市米泉遺跡-小立野古府館街路改造事業に係る金沢市米泉町二丁目米泉遺跡緊急発掘調査報告-」石川県立埋蔵文化財センター

- 丹羽 茂 1980 「恵比須遺跡出土の土偶」『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎1号墳他』宮城県文化財調査報告書第67集 pp.217-222 宮城県教育委員会
- 八戸市博物館 1985 「縄文の美ー是川中居遺跡出土品図録 土器編ー」目で見る八戸の歴史2
- 演田宏ほか 2003 「泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書ー開闢水池事業関連遺跡発掘調査ー」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第399集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 林 謙作 1984 「宮城県下の縄文期貝塚群」『宮城の研究 第1巻 考古学篇』 pp.109-172 清文堂出版
- 林 謙作 1993 「曲田Iと八幡一東北北部晚期前業の土器ー」『論苑考古学』 pp.223-263 坪井清足さんの古稀を祝う会編
- 林謙作・高橋龍三郎ほか 1983 「杉の堂遺跡-第5次発掘調査概報-」水沢市文化財報告書第10集 水沢市教育委員会
- 永見淳哉 1997 「晩期縄文時代における狩猟漁撈活動の研究」『歴史』第88輯 pp.1-26 東北史学会
- 福田友之・工藤大はか 1988 「上尾駅（1）遺跡C地区発掘調査報告書ーむづ小川原開発予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ー」青森県埋蔵文化財調査報告書第113集 青森県教育委員会
- 福山宗志 2001 「フナギの沢貝塚」『宮城考古学』第3号 p.177 宮城県考古学会
- 福山宗志 2004 「フナギの沢貝塚ー県道河南蒸船線道路改良工事に係るフナギの沢貝塚発掘調査報告ー」涌谷町文化財調査報告書第6集 涌谷町教育委員会
- 藤沼邦彦・小井川和夫ほか 1989 「宮城県の貝塚」東北歴史資料館資料集25 東北歴史資料館
- 藤沼邦彦・三宅宗議ほか 1995 「石巻の歴史 第七巻 資料編1 考古編」石巻市史編さん委員会
- 松本秀明 1984 「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」『宮城県の研究 第1巻 考古学篇』 pp.7-52 清文版出版
- 松本秀明 1996 「序章2 石巻の地形環境」「石巻の歴史 第一巻 通史編（上）」 pp.7-13 石巻市史編さん委員会
- 松本秀明 2000 「II. 新山崎遺跡周辺の地形変遷と遺跡立地の地形環境」「新山崎遺跡ー蛇田地区農業農村整備事業に伴う発掘調査報告書ー」石巻市文化財調査報告書第8集 pp.3-11 石巻市教育委員会
- 三浦俊成・榮一郎ほか 2005 「向様田D遺跡ー森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIIIー」秋田県文化財調査報告書第392集 秋田県教育委員会
- 宮城県教育庁文化財保護課編 1977 「巻崎遺跡」 一迫町教育委員会
- 宮本節子 2000 「相ノ沢遺跡発掘調査報告書ー畠地帯総合土地改良事業ー」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第322集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村田章人 2000 「羊齒状文の施文原則」『埼玉考古』第35号 pp.32-46 埼玉考古学会
- 森幸彦ほか 1988 「三貫地貝塚」福島県立博物館調査報告第17集 福島県立博物館
- 谷地薫ほか 1992 「曲田地区農免農整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IIー家ノ後遺跡ー」秋田県文化財調査報告書第229集 秋田県教育委員会
- 柳沢和明ほか 1990 「沼萩遺跡」宮城県文化財調査報告書第132集 宮城県教育委員会
- 山口博之 1995 「宮の前遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集 山形県埋蔵文化財センター
- 山崎忠良ほか 2002 「元星散遺跡IIIー奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XVー」朝日村文化財報告書第23集 朝日村教育委員会
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号 pp.1-19 (pp.139-157) 東京考古学会
- 杉理弘ほか 1974 「第一章 原始及び古代の遺跡」『若柳町史』 pp.1-114 若柳町史編纂委員会編

縄文時代晚期後半の蓋形土器

佐 藤 祐 輔

はじめに

東北地方における縄文時代晚期の土器（通称「亀ヶ岡式土器」）は、長い縄文時代を通してみても最も器種分化が進んだ時期であり、その多様性は古くから考古学者を注目させてきた。主な大別器種をみても、浅鉢・深鉢・皿・壺・注口・香炉形土器など様々であり、現代人の我々から見ても縄文時代人の製作・想像力には感歎させられるほどである。

これら様々な器種が描う「亀ヶ岡式土器」ではあるが、その中に蓋形土器（以下、「蓋」と簡略する）が組成していることは案外知られていないのではないであろうか。例え該期の報告書などで、蓋について触れられることがあったとしても、出土土器中の珍品や土製品の一部として扱われることが大半である。確かに、出土土器組成中で蓋の占める割合は1%にも満たない場合が通常であり、出土したとしても1遺跡1点程度である。このようなこともあり、縄文時代晚期の蓋について本格的に扱った論考は皆無に近い。

それに対して、弥生土器に組成する蓋は、出土量の豊富さもあってか、古くから注目されてきた経緯があり（森本1934）、近年まで多くの論考がみられ、研究が進展している（伊藤2004、小田野1983、角南2003、鈴木1998、林1966）。

では縄文土器に稀にみられる蓋という器種は、「亀ヶ岡式土器」の中で不間にされるほど、意味を持たない器種なのであろうか。かつて山内清男は、縄文土器の蓋について「蓋は稀にあるが、弥生式のものとは違って居る。壺形土器と蓋～（中略）～の如く組合せて使用する形態は縄紋式とは趣を異にして居る」（山内1937）と考えていたながらも、縄文時代からの伝統を重視していた山内は、北陸地方の縄文晚期土器に組成する蓋と、近畿地方の弥生土器に組成する蓋との関連についても少なからず関心

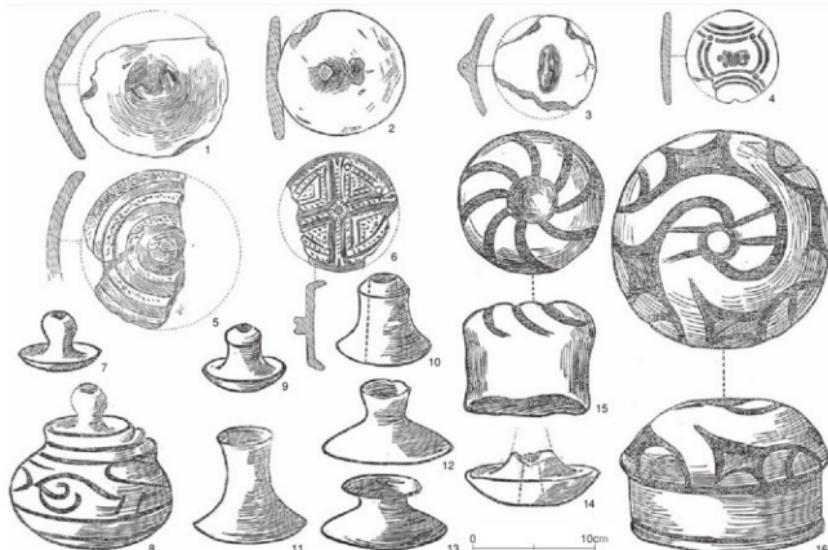
を抱いていたようであり、縄文時代の蓋が弥生土器に影響を与えた可能性も考慮している点は、注目すべきであろう^(注1)。

また、東北弥生土器研究を進めてきた須藤隆は、壺蓋が組成することを重視して東北弥生土器の認定を行ってきた。この蓋に対する認識は、西日本における弥生土器の器種組成が伝播して遠賀川系土器とともに東北地方に定着するというものであった（須藤1973・83）。後年、東北弥生土器の壺蓋が東北縄文晚期の蓋から成立するという理解も示しており（須藤2000）、蓋という器種を一括して西日本弥生土器の影響とする見解を暗に否定している。

このように縄文晚期の蓋は、系統的に弥生土器の壺蓋へと繋がる可能性が非常に高いにもかかわらず、具体的な分析が行われずに現在に至っており、統一した見解はみられない。よって本稿では、蓋についての研究史を簡単に振り返り、これまで考古学者がどのように蓋を扱ってきたのかを確認し、その後、晚期の蓋を集め、分析を加えてみたいと思う。これまで、蓋が異形土器として扱われ、また特殊な土器として認識してきたのは何かしらの理由があるはずであり、考古学者の感覚的な判断ではなく、正面から蓋と向き合って分析を行い、再度特殊な器種として位置づける作業を行う。その際には、特殊な蓋とセットとなる「特殊な身」についても検討する。また、弥生土器の蓋との関連についても触ることとする。

蓋の研究史^(注2)

縄文晚期の蓋を中心とした論考は、上記のごとく皆無に近いが、縄文後期や弥生土器の蓋についての論考は比較的多くみられる。時代は違えども、蓋という同一器種を扱った論考は、参考となる部分も多くあるため、振り返ってみようと思う。



第1図 佐藤傳藏による蓋形土器の指摘

1. 戰前の研究

蓋を中心とした最も古い文献は、佐藤傳藏1898である（八木1902）。佐藤は、縄文時代の「蓋及蓋とみられるもの」（佐藤1898）を集成し、それが蓋として機能していた可能性を初めて指摘した（第1図）。佐藤が集成した資料は、縄文後期～弥生土器の蓋に加えて、様々な土製品も含まれているが、佐藤の報告は、固定観念化された現代の考古学研究者にとって、非常に新しい問題も投げかけている点で重要である。それは、現在スタンプ状（形）土製品として把握されている遺物（第1図7・9～14）が、壺と一緒に蓋として出土（青森県西津軽郡木造出土）したことを報告している点である（第1図7・8）。スタンプ状（形）土製品については、今日に至っても用途が確定していないが、蓋の可能性も考えられており、佐藤の指摘について再度耳を傾ける必要もある。また、耳飾として現在考えられている遺物（第1図15・16）に対しても蓋の可能性を考えている。

八木斐三郎は、佐藤傳藏の指摘した蓋を取り上げて、縄文土器の一器種として解説している（八木1902 第1図4・6・9・16）。蓋の「本源は貯蔵物を入れる、か汚れ

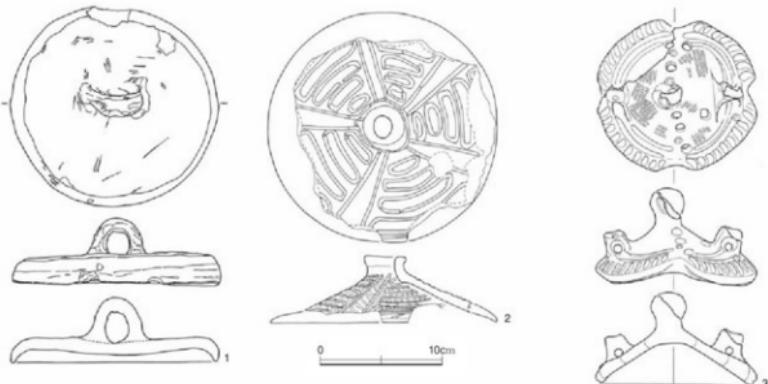
を避くるか天然物は切りて使用せし頃の遺風か此數者に出でざる可しと考ふ若し」、「如何なる形状の物と如何なる大きなものとは蓋が伴うや否やを推究するも亦一興なるべし」（八木1902）と述べ、蓋の起源の問題や蓋と身の関係を知るには口徑の分析が必要であることを指摘している。また、蓋の形態分類も行い、「富士山形」・「満頭形」・「板蓋形」・「曲物蓋の形」などに分類しているが、具体的な資料の提示がなく、詳細は不明確である。

その後、弥生土器の蓋について森本六爾・小林行雄らが形態、穿孔位置や穿孔数などを基に分類を行い、蓋の用途や変遷について研究を行っている（森本1934、末永ほか1943）。

2. 戰後の研究

戦前、蓋に対する関心は比較的高いものであったが、戦後すぐには、縄文・弥生土器の蓋とともに目立った研究がなされることはない。

小田野哲恵は、東北地方の弥生土器にみられる蓋を集め、スヌの付着位置から使用方法について考察を行い、「かぶせ蓋」と「合せ蓋」・「落し蓋」が存在すること



第2図 縄文時代中・後期の蓋形土器

を指摘している（小田野1983）。この研究は、単純な口径比較のみで、蓋と身の関係を考えることへの問題提起とも考えられ、使用痕の分析に視点を置いた点で、非常に評価できる。

伊藤正人は、これまでの縄文土器の蓋に関する研究史を的確にまとめ、関東地方の縄文中期末から後期の蓋を集成・分類して、蓋の変化や分布範囲について検討している（伊藤1990）。それに加えて、蓋と身の関係や機能の問題についても触れて、今後の課題を提起し、蓋の基礎的な研究を行っている。

伊藤実は、弥生時代の蓋の使用方法を検討し、器形の変化と連動して蓋の材質や使用方法が変化していったことを指摘した（伊藤2004）。

以上のように、縄文後期や弥生土器の蓋に関する研究は古くから行われ、比較的進んでいるにもかかわらず、縄文後半の蓋については全く研究が進んでいない。これまで、集成が行われた形跡もないでの、まずは集成作業を行うことから始めなければならないようである。

蓋集成

1. 縄文時代後期以前の蓋（第2図）

蓋が土器組成の中に定着するのは、縄文中期末・後期初頭からであろう⁽⁸⁴⁾。それ以前の時期においては、東

北地方の大木8a・8b式に組成する無文の蓋が山形県西海濱遺跡で出土している（第2図1 阿部・黒坂1991）。大きさなどから考えて、おそらくキャリバー形の深鉢とセット関係を持っていると考えられる。

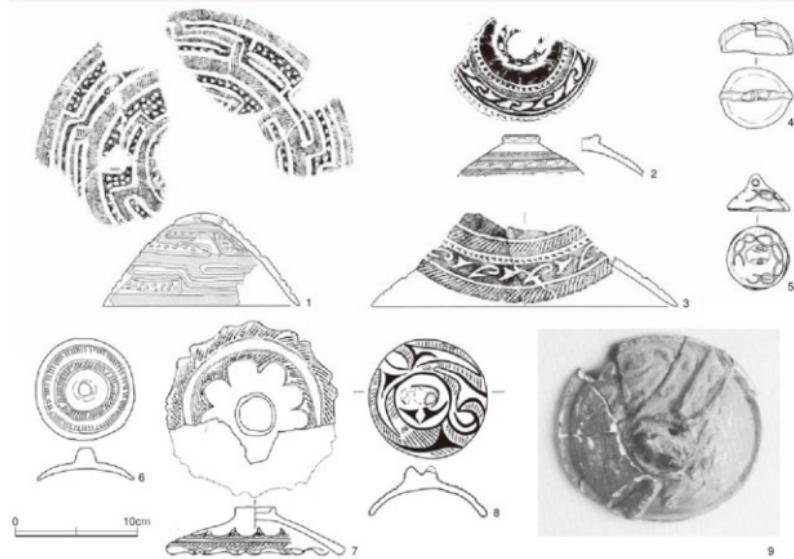
縄文中・後期の蓋は、注口土器とセットとなることが明らかになっているが、東北地方の後期前半には、岩手県相ノ沢遺跡などで様々なバリエーションをもった蓋が顕著にみられる（第2図2 宮本2000）。その多くは笠形を成しているが、天井部を持たずに貫通している点に特徴がみられる。

同様に後期前半の北陸地方では、三十穂場式以降、顕著に蓋が組成するようになる（第2図3 品田・平吹2001）。これらの蓋は、胴部への穿孔だけではなく環状把手が紐掛けの機能として働いており、身と蓋の関係が縄文晚期や他地域の蓋とは大きく異なる様子が窺える。また、身・蓋とともに波状口縁をなすことが多く、土器製作当初から身と蓋のセット関係が意識されていたことも考えられる。

2. 縄文時代後期前半の蓋（第3図）

a. 北陸地方の蓋

後期前半の蓋は、御経塚式・中屋式期に北陸地方を中心として組成しており、土器組成中で一定量の役割を



第3図 晩期前半の蓋形土器（東北・北陸）

扱っている。注1で述べたように、当方の蓋は、山内清男・佐原真などによって、畿内の弥生土器に組成する蓋との関連が古くより指摘されているが、現状でその関連性を積極的に肯定することはできない。

形態を見てみると、つまみ部は環状を呈して、脇部は直線的に口縁部に至っている（第3図2・3）。つまみ部は加飾されることが多く、二又状になる場合もある。この形態は、いわゆる笠形の蓋であり、形態だけをみると弥生土器の壺蓋に非常によく似ているため、山内や佐原はこの点に注目していたのであろう。ただし、晩期前半から弥生時代までにはかなりの時間的な距離が存在し、晩期後半には北陸地方で蓋の存在が明確ではなくなることなどから、否定する見解のはうが多いようである。伊藤実は「縄文の蓋形土器は直径が10~15cmほどの小型のものが主流で、注口土器などの蓋として使われたものと考えられる。今のところ煮炊用土器（深鉢）には土器蓋はなかったとしてよい」（伊藤2004）としている。伊藤が指摘するように、該期には条痕を施す粗製深鉢が煮沸具として大きな位置を占めており、粗製深鉢よりもはるか

に口径の小さい蓋が組み合うとは考えられない。ただし、該期には粗製深鉢よりも小さな精製深鉢も組成しており、口径などから考えて、おそらく蓋はこれら精製深鉢とセットになるものと考えられる。

つまみの付かない丸底状の蓋もあり（第3図1）、様々なバリエーションをもつ点も特徴的である。

b. 東北地方の蓋

東北地方縄文晩期には、蓋として断定はできないながらも、その可能性のある土器が出土している。岩手県花巻市小田遺跡（第3図4・5 中村1979）や宮城県七ヶ浜町二月田貝塚（第3図7 後藤1972）・福島県飯館村羽白C遺跡（第3図8 鈴鹿ほか1988）の蓋が、晩期前半期に位置づけられよう。

岩手県向館遺跡では、後期後半の蓋が住居内から同時期の資料と共に出土している（第3図6 笹平・小山内1994）。つまみ部は棒状を呈しているものの、器形が丸みをもち、穿孔を施さない点で、羽白C遺跡の蓋と類似する。

小田遺跡の蓋は、つまみ部に横位の貫通孔を設けて、紐掛孔としている(第3図5)。同様の形態は、相ノ沢遺跡でも出土している(宮本2000)。胴部文様は梢円文を横位に展開するのみであり、幅年的な位置づけは難しいが、出土土器の中心が大洞B2～C1期なので、この範疇に収まるものと考えられる。第3図4は無文の例で、「一文字」の隆起区画が施され、つまみ部が欠けている。つまみ部には、穿孔の溝が残っており、5のような横位の穿孔があった可能性がある。

二月田貝塚の資料(第3図7)は、蓋として図示したものの、台付浅鉢の可能性が高い。報告書では蓋として図示されており、本稿では大洞B1期の蓋として取り上げた(図5)。円形のつまみ部は、上述した北陸地方の晚期前半の蓋に似るが、装飾はなく、相違点がみられる。

羽白C遺跡の蓋(第3図8)は、二又状のつまみ部を有し、胴部は半球状を呈して丸みをもっている。文様は、磨消繩文で三叉文を描いており、大洞B1期と考えられる。穿孔は施されない。

やや時期が下る例としては、宮城県沼津貝塚で大洞C1期の蓋が出土している(第3図9 東北大学文学部1982)。扁平な器形の中央に二又状のつまみ部を作出し、つまみ部を貫通するように横位に穿孔を施している。小田・羽白C遺跡例が半球状を呈していたのに対し、器形が大きく異なる。胴部には、つまみ部と直行するよう二条の隆起帯が走り、2単位の文様区画を行っている。この文様を区画する隆起帯は、後述する大洞C2期以降の蓋へと系統的に繋がる可能性もあるが、該期の資料は沼津貝塚の1点だけなので、その確証はない。文様は、写真からでははっきりしないが、雲形文が彫りこんで描出されているので、大洞C1期とした。ちなみに伊東信雄が指摘していた沼津貝塚の蓋(伊東1985、中村1988)は、この土器を指している。

3. 縄文時代晚期後半の蓋(表2参照)

a. 大洞C2期(第4・5図)

大洞C2期として時期比定が確定な例は、秋田県平鹿遺跡SX005出土土器である(小玉1983 第4図1)。SX005からは、一括して廃棄したと考えられる13個体の土器が出土しており、精製土器(2～6)から判断すると、大洞C2式でも中頃に比定される(高橋1993)。1

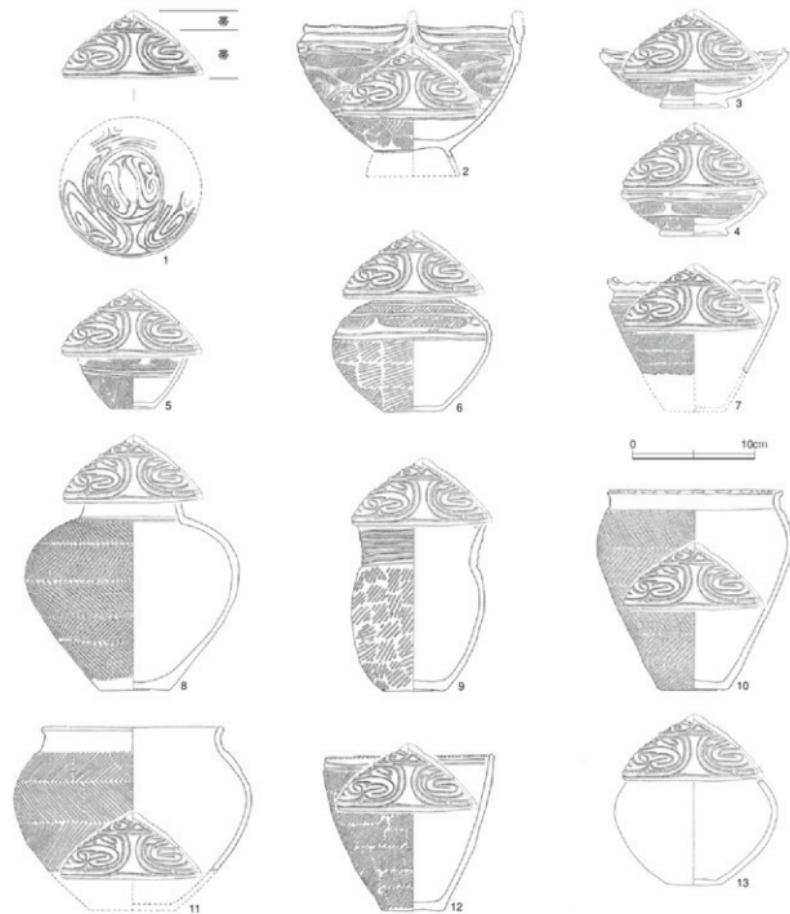
は、つまみ部(I帯)の頂点と体部(II帯)が一部欠けているだけで、文様や器形を知る上では問題のない資料である。II帯は、隆起帯で区画し、その内部には入り組んだ沈線文を3単位施している(文様展開図は、小林・小川1989を参照した)。隆起帯は団正面部分のみで収束する。I帯は、II帯同様の入組文を2単位で描いている。入組文の文様構成は3・4と類似する点はあるものの、1の文様には副線や補助単位文が充填され、より曲線的で複雑な印象を与える。区画する隆起帯には、キザミや刺突などの装飾はみられない。口縁部の穿孔は、残存部には2ヶ所空けられており、等間隔に廻るとすれば、推定で4ヶ所穿孔されていることになる。穿孔が焼成前か後かは、報告書に記述がないため不明である。

これらは良好な一括資料であるため、この蓋とセットとなる身について考えてみることにしたい。ただし、この遺構は、良好な一括資料であるが、遺構の性格上(廃棄坑?)、土器そのものの使用状態を示した出土状態ではないと考えられ、出土状況も図面では示されておらず、写真図版からだけでは、その詳細を知ることはできない。

試しに2～13に、1の蓋(口径12.0cm)を被せてみると、2・10・11は蓋よりも口径が大きすぎて、その機能を果たすことができない。例え組み合ったとしても、落し蓋のように機能していたことになる。3・4は、浅鉢に蓋が被さるという奇妙な組み合わせになってしまい、積極的にセット関係を示す根拠はない。すると、身として最も機能しそうなものは6・8・13の壺および7・9・12の中形深鉢であろう。壺の場合は「かぶせ蓋」として、深鉢の場合は「合せ蓋」・「落し蓋」の可能性が考えられる。しかし、いずれの土器(身)も口縁部に穿孔がなされておらず、穿孔のある蓋とセット関係を示しているとは考えられない。

以上のことから、SX005は使用時の状態を示した遺構ではなく、土器捨て場のような廃棄坑であった可能性が高い。蓋の身となる土器が共存していないことも考えられるが、口径から考えると、壺もしくはやや小ぶりの深鉢が身として機能していた可能性も捨てきれない。

平鹿遺跡以外の該期の蓋としては、花巻市(旧石鳥谷町)安堵屋敷遺跡(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1984)や北上市九年橋遺跡(藤村ほか1978)・山

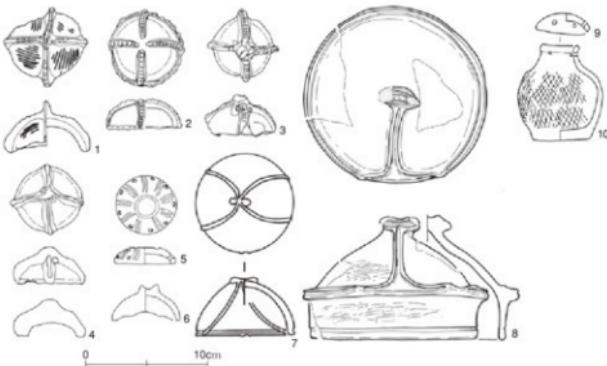


第4図 秋田県平鹿遺跡SX005出土土器

形県村山市宮の前遺跡（山口ほか1996）などで出土しているが、3遺跡共に遺跡の存続期間が長く、詳細な所属時期が不明確である。平鹿遺跡の蓋と比較すると、文様や装飾が簡素で、小形であることがわかる。

安堵屋敷遺跡では5点中4点が文様を持たず、隆起区画にキザミを入れる程度である（第5図1～3）。隆起区画は、平鹿遺跡のように曲線的な「X」字状とは異なり、真「十」字に区画している（以下「4単位隆起区画」と

称する 第5図1～4）。2は隆起区画が中央で連結せず、つまみ部を形成していない。1は地文に縄文を施しており、今回集成した中で、縄文を施す唯一の例である。隆起区画を持たない5は、中央の円文から、9単位の放射状沈線（2条1単位）が伸びており、後述する弥生前期に伴う蓋（第20図3など）の文様構成と酷似する。安堵屋敷遺跡からは少数ながら、大洞A'式～弥生前期の土器が出土しているので、これらに伴う可能性もある。



第5図 大洞C2期の蓋形土器

穿孔方法についてみてみると、3・4はつまみ部へ横位に穿孔され、5は放射状沈線間に等間隔で9箇所穿孔を行っている。

九年橋遺跡の蓋（第5図7）は、曲線的な「X」字状を呈し、頂部に二叉状の突起（つまみ部）を作出している。

一方、宮の前遺跡の蓋（第5図8）は、口縁部が直線的に立ち上がり、隆起区画もつまみ部から一方向に伸びるのみ（一単位隆起区画）で、類例は現在のところ見当たらない。全面丁寧なミガキ調整が行われ、赤彩の痕跡も一部で見られる。宮の前遺跡は、大洞C2式からA1式までの変化が土器捨て場で層位的に検出され、8は大洞C2式でも新しい段階の層位から出土しており、該期に位置づけられる可能性が高いが、大洞A1式期まで下る可能性も否定できない。

第5図9・10は、郡山市淹ノ口遺跡で「蓋を伴って出土した」（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団1988）ミニチュア土器である。10の胴部には網目状捺糸文が施されており、他の土器も考慮に入れると、大洞C2期に位置づけられよう。両土器共に穿孔が穿たれている。

b. 大洞A1期（第6図）

大洞A1期の蓋が、前後の時期を通してみても、最も多く確認することができた。

大洞A1期の確実な例は、北上市九年橋遺跡（第6図3～5 畠村1988・91）・大船渡市宮野貝塚例（佐々木2002

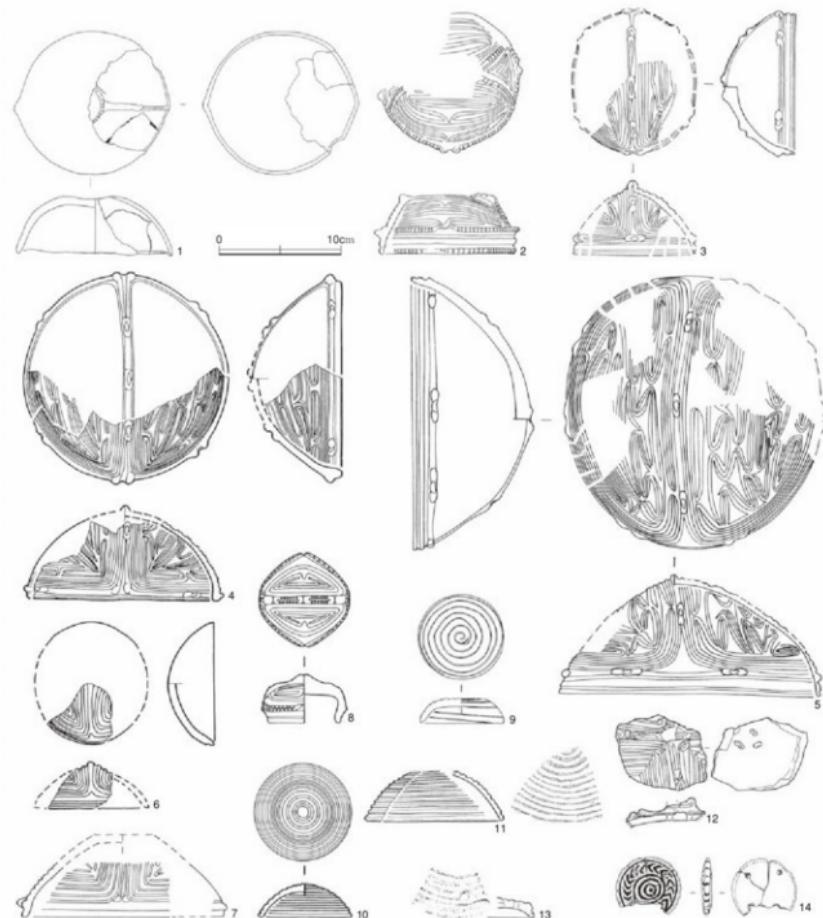
第6図2）などである。両遺跡の文様は、大洞A1期に特徴的な工字文を隆線文手法で描出しており、時期比定が確定できる。隆起区画は、「一文字」の区画（以下「2単位隆起区画」と呼称）が中心であり、前段階の平底遺跡例（第4図1）と比較すると、隆起区画や文様構成に均

整がとれている。文様帶構成をみると、平底遺跡の蓋は、つまみ部（Ⅰ帯）と胴部（Ⅱ帯）が上下に分離していたのに対して、A1期の蓋は一帯構成の文様帶となっている。

2単位隆起区画の両端は、第6図2や5のように、二又状に分岐して、区画を一周する。この二又状に分岐する三角状の区画（以下「三角状区画」と呼称）は、大洞C2期の隆起区画（第4図1・第5図7）が密接に接することによって成立したものであろう。三角状区画は、宮の前遺跡の蓋（第5図8）のように、既に大洞C2期に作出されている。隆起区画上には、つまみ状の突起が3ヶ所つけられる例が多い（第6図3～5）。サイズも大小様々であり、第6図5が最大のもので口径21.2cm、最小のものは口径4.6cmとなり、組み合わせる身のサイズも様々であったことが想像できる。

隆起区画をもたない蓋も存在する。第6図9～11であるが、蓋として機能していたかは断言できない。小形で丸底を呈する点から、後続する高瀬山遺跡（第7図15）のような蓋と関連するのではないだろうか。

また、弥生前期になってから出現すると考えられている逆皿形（倒皿形）の蓋が、宮城県香ノ木遺跡で大洞A1期の層から出土しており（第6図13 佐々木1985）、非常に興味深い。天井部には同心円文（渦文？）が描かれ、穿孔も施されている点で、弥生前期の蓋（第19図1・9）と非常によく似る。青森県二枚橋（2）遺跡では、円盤形の蓋が出土しており（第6図14 橋ほか2001）、同様に



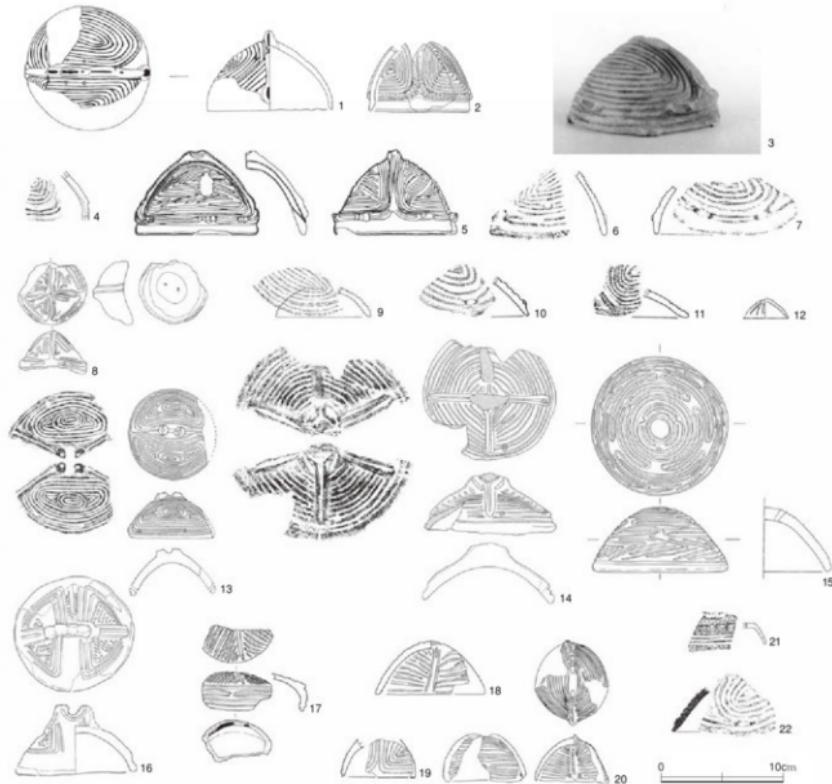
第6図 大洞A1期の蓋形土器

弥生の円盤形の壺蓋と関連性が考えられ、大洞A1期には既に、様々なバリエーションを持った蓋が存在していることが分かる。

c. 大洞A2期 (第7図) (注6)

大洞A2期の確実な例は、大沼遺跡出土の蓋である (第7図16 桧原2001)。大沼遺跡で伴出する土器の大半

は、大洞A2期であり、蓋の帰属年代が大洞A1期まで遡ることはない (注7)。文様区画が沈線化し (以下「沈線区画」と呼称)、その内部は刺突を充填し、後継する弥生前期の蓋と文様構成が極めて良く似ている。器面全面に赤彩を施している点 (藤沼・小川2006を参照) で、前段階の蓋と同様である。つまみ部は、二又に分かれた突起状をしており、前段階に顕著に認められた隆起区画上の



第7図 大洞A2・A'期の蓋形土器

突起の名残と考えられる。前段階の名残は、沈線区画に認められ、図からは読み取れないが、やや隆起して作出されている。

青森県では、他に二枚橋（2）遺跡（第7図1 橋ほか2000）や沢山（1）遺跡（第7図2 児玉1994）・亀ヶ岡遺跡（第7図3 鈴木・岩潤2001）・剣吉荒町遺跡（第7図4 鈴木・木村1988）で出土している。沢山（1）遺跡も、大沼遺跡同様、大洞A2～A'式期の遺跡であり、該期に位置づけられるのは間違いない。

秋田県上新城中学校遺跡では、2単位隆起区画の蓋が出土している（石郷岡ほか1992 第7図5）。胴部文様は「Z」字状の綾杉文が描かれている。綾杉文は、後述する

同遺跡で出土した該期の壺の文様と関連を指摘できる。破片でも同心円文を描く蓋が1点出土している（第7図6）。

岩手県では、川岸場I遺跡で破片資料である亀ヶ岡・上新城中学校例と同様、同心円文を描いた蓋を確認できる（第7図7）。

第7図8は、宮城県山王岡遺跡出土の蓋である⁽¹⁸⁾。沈線化が進み、新しい要素を持つが、4単位隆起区画は比較的しっかりと作出されているので該期に位置づけたが、蓋が出土したR区の他の土器は大洞A'期から弥生前期の資料が主体であり（大洞C2期も少数混じる）、時期が下る可能性もある。

第7図13・14は、山形県げんだい遺跡の蓋である^(注9)。13が2単位隆起区画、14が4単位隆起区画である。14の文様は、隆起区画を橋渡しするように、平行する沈線が同心円状に幾重にも施される。沈線は非常にラフに描かれている。二ヶ所の穿孔（現存）は、1つを隆起区画上の沈線内に施し、もう一つを区画内に施している。13の文様は、同心円文を基本として、中央部に対向する綾杉文を充填し、等間隔に4ヶ所穿孔する。つまみ部は、大沼遺跡の例と同様に、二又の突起状をなす。両者ともに赤彩痕が残る。

また、大洞A2期に帰属する可能性がある蓋がある（第7図15）。この蓋は、これまで見てきた資料とは異なり、区画文をもたないところに大きな特徴がある。通常であれば、丸底の鉢として扱われるであろうが、底部に穿孔をもつことから、蓋として扱われている（小林2005）。器形だけをみれば、大洞A1期の同心円文のみを施した、小形の蓋（第6図10）に似る。内・外面ともに丁寧に漆が塗られ、内面に至っては、漆を塗った際に残る刷毛の跡までが残っている好資料である。文様構成は、下段に矢羽根状文を、上段には横長の「日」の文字を2段施している。これらの文様は、大洞A式の範疇として考えられるが、大洞A2式が遺跡単位でまとめて出土した天童市砂子田遺跡で同様の文様構成を持つ土器が出土しているので、高瀬山遺跡の蓋もおそらく大洞A2式に位置づけられよう^(注10)。

d. 大洞A'期

該期の資料として積極的に扱える蓋は非常に少ないが、大洞A1・A2期の蓋と比較したときに、文様描出手法の沈線化した資料が、該期に属する可能性が高い。大沼遺跡例（第7図16）のように、大洞A2期には既に沈線化が進んでいることも、この変遷過程を裏づけている。

青森県宇鉄遺跡からは、大洞A'期の土器に伴い、第7図17の蓋が出土している。器形は、口縁部から直線的に立ち上がり、天井部はやや丸みをもつ。丸みをもった天井部は、前段階からの名残であろう。区画文は、一條の沈線で描かれるのみであり、前段階のものとは大きく異なる。側面には簡素な（副線の抜けた）流木型変形



第8図 晩期蓋形土器の分布範囲

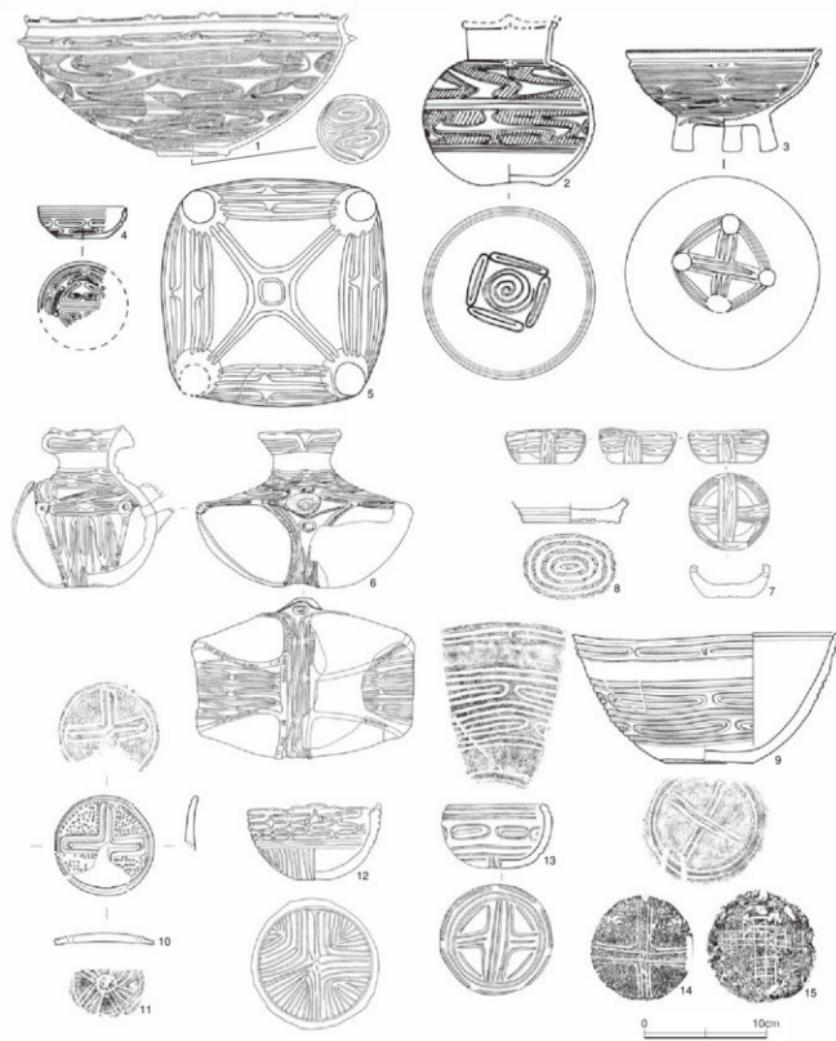
工字文を描く。

岩手県細田遺跡の蓋（第7図18）は、宇鉄遺跡の蓋よりも丸みをもった器形で、前段階の特徴を良く残している。区画文は二条の沈線で行き、第7図14のように区画文と区画文とを同心円状に繋いでいる。川岸塙II遺跡の例（第7図19・20）も沈線化していることから、該期に位置づけられる可能性が高い^(注11)。

上述した香ノ木遺跡と同様の器形の蓋は、剣吉荒町遺跡で、大洞A'期の土器と共に出土しており（第7図21）、逆皿形の蓋としては最も古いものとして報告されている（鈴木・木村1988）。

4. 蓋の分布範囲（第8図）

以上、縄文晩期の蓋を概観してきたが、所属する時期



第9図 底面に文様を有する土器

幅は広く、長い間連續的に製作・使用されていたことがわかる。また、その分布範囲も東北地方一円に広く分布している。

北限は青森県むつ市の二枚橋（2）遺跡で（橋はか

2001）、本州の北限に近い位置まで分布している。蓋の南限は、現状で山形県の高瀬山遺跡であるが（小林ほか2005）、隆起区画を持つ蓋だけをみれば、河北町花ノ木遺跡となる（第7図11）。この分布範囲は、一般的に理解さ

れている大洞式の分布範囲に収まり、晚期後半に独自の土器群を構成する浮線文土器分布圏では茨城県殿内遺跡以外（第7図22）に出土していない点は注目される。ただし、浮線文土器分布圏には、文様構成が類似する土器がみられ、隆起区画をもつ蓋との関連が指摘できるので、この点については次節で述べることにしよう。

IV. 蓋の成立過程とその展開

晩期後半の蓋は、上記のように25遺跡から計47点出土していることが確認できた。いずれの遺跡も、各地域を代表する遺跡であり、小規模な遺跡からは出土していない。つまり、晩期後半の土製の蓋は東北地方でも限られた集団によって、製作・使用されていた可能性が高いことになる。また、他の器種とは異なり、基本的に1遺跡で1～数個体しか出土しないのが通例で、遺跡内における扱われ方も得意な状態であった可能性がある。この現象は、北陸地方における晩期前半の出土状況とは明らかに異なり、晩期後半の蓋へと系統的に連続しないことを示唆し、一律に「蓋」として扱い得るものではないことがわかる。

では、晩期後半の蓋はどのようにして成立し、展開していくのであろうか。この問題を解決するために、蓋の形状や文様に注目して検討してみようと思う。

1. 底面に文様をもつ土器について

a. 脇部文様と底部文様の関係

現状で、晩期後半の蓋へと系統的に連続する最も古い例は、平底遺跡で出土した大洞C2期の蓋であることは上述した（第4図1）。共伴した他の精製土器（第4図2～6）は、基本的に磨消繩文によって文様が構成されているのに対して、1の蓋は沈線・彫り込みによって文様が描かれ、地文繩文が欠けている。大洞C2期には、磨消繩文を伴わずに沈線のみによって文様が描出される例が稀にみられ、その文様構成は入組文や渦文の場合が多く、磨消繩文土器の文様構成とは大きく異なる。このことは、蓋の文様が通常の土器文様とは異なる装飾体系の中で採用されていることを示していよう。

また、磨消繩文土器には、稀に底部外面に文様を施す例があるが、その文様構成も上述した入組文・渦文を中心である（第9図1）。土器底部に文様を描く例は、晩期

初頭から連続として続いているが、底面が平滑なためか、文様を「十字」に4単位、もしくは「一文字」に2単位に分割する例が多い。縦に2単位もしくは4単位区画する点は、蓋の区画に非常によく似ていると感じるのは筆者だけであろうか。少なからず関係があることを念頭において、底部に文様をもつ土器について以下みていくたい。

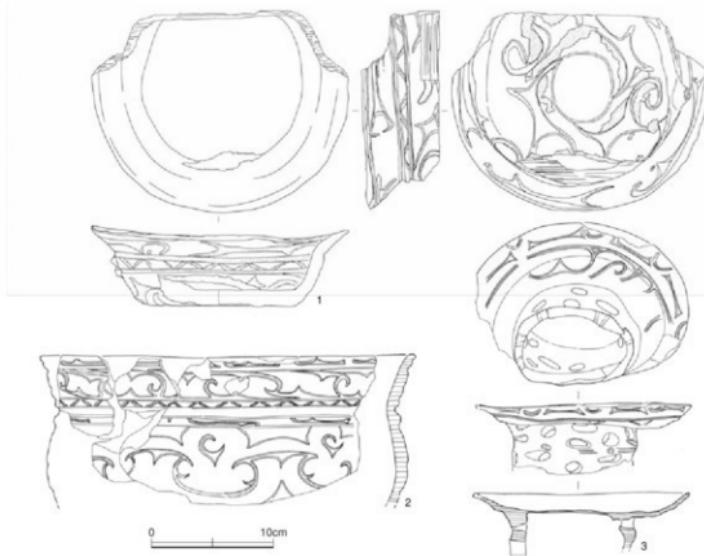
底面に文様をもつ土器は、「亀ヶ岡式土器」では壺・浅鉢・注口土器などで比較的多く見られ、大洞B～C1期には、脇部と同様の文様（菱形文や雲形文など）が描かれる。

それに対して、晩期後半になると大洞C2期以降、脇部文様とは異なった文様が描かれるようになる。その文様が、上述した入組文や渦文・同心円文である（第9図1・2）。後続する大洞A1期以降に至っては、十字区画文が盛行し（第9図3・5）、脇部文様とは全く乖離した文様を描き出すようになり、晩期前半期の様相とは大きく異なる。

このような底部に十字区画文などの文様を施す類例は、東北地方に限らず、日本海側の浮線文土器分布圏にも広く分布している。近隣では、新潟県青田遺跡（第9図7 荒川ほか2004）で出土し、さらに西に目を向けると、新潟県田上町保明浦遺跡（第9図9 田畠2003）や石川県松任市乾遺跡（第9図12 岡本2001）にとどまらず、鳥取県智頭枕田遺跡（第9図13 設楽2004）にまで分布している。その多くが、小形の浅鉢に施される。いずれも脇部文様とは異なる文様を施しており、東北地方の例と文様構成が共通していることがわかる。第9図7・12には口縁部に、補修孔ではない二個一対の穿孔が施されており、上述した東北地方の蓋と共通する要素を持つ点で非常に興味深い。青田遺跡の小形鉢の区画文内には、浮線文が描かれており、脇部文様と共に通する要素を持つ点で東北地方とはやや異なる。同じような例は、福島県荒屋敷遺跡の注口土器にも見られる（第9図6）。

また、時期は降るが、畿内地域の弥生土器の壺底面に文様を描く例が古く小林行雄によって指摘されており、晩期後半の文様構成が受け継がれている可能性を指摘できる。（末永ほか1943 第9図14・15）。

では果たして、晩期を通して脇部と底部文様の関係の変化はいかにして起こり、どのように展開していったの



第10図 是川中居遺跡出土の木胎漆器

であろうか。また、各地域によってどのような独自性を有していたのであろうか。この問題を解きほぐすには、木胎・籐胎漆器などの植物質容器や陶胎漆器との関連を考えなければならないようである。

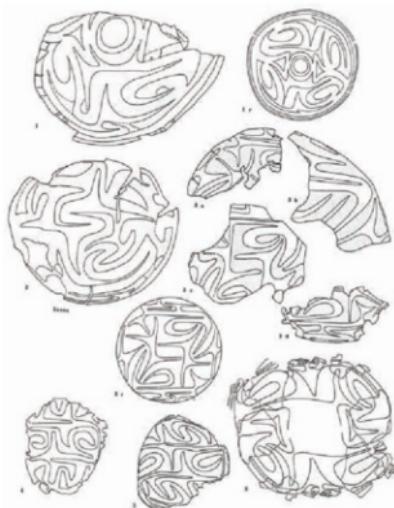
b. 土器と漆器の関係－変化するその関係の強弱－

底部まで有文にする容器は、土器に限らず陶胎漆器や籐胎・木胎漆器などの植物質容器にも多くみられる（第10図）。古くから土器と植物質容器の関係は指摘されており、土器の底部を方形にして、その四隅を突出させる形態が、カゴ容器などを模倣して製作したためにできあがったとする説がその代表例である（甲野1976）。出土した籐胎漆器の形態などから考えても、この説の蓋然性は極めて高いが、果たして漆器など植物質容器の模倣は、「亀ヶ岡式土器」全般を通じて同じ動きを示しているのであろうか。土器だけをとってみても、晩期初頭と末葉では同じ時期区分をしてよいのかと思う程にその様相は大きく異なっており、その模倣の仕方も各時期によって異なる可能性が高い。この関係を見極めるためには、各時期における土器・漆器の形態・文様・装飾方法などを相

互に検討し、模倣されている要素とされない要素を抽出する作業が必要である。

まず、晩期前半の例をみてみよう。晩期前半で多種類の材質比較が可能な遺跡は、八戸市是川中居遺跡に代表される。是川中居遺跡からは、古くに籐胎漆器が出土し、さらに近年の調査では、多くの籐胎・木胎漆器が出土して注目を浴びている（宇部・小久保2002、村木ほか2005）。第10図1は、木胎漆器の鉢である

る。上述したような四隅突出の底部をもち、木胎部を彫り込んで文様を描き、全面に赤漆を塗布している。木胎漆器の場合、底部を方形に仕上げる必要性はないので、木胎漆器にも籐胎漆器の底部模倣現象がみてとれる。ただし、籐胎から木胎への影響関係はみられるが、木胎から籐胎への影響関係は現状でみられない。籐胎漆器の場合、素材に凹凸があって脆弱なため、木胎漆器のように文様を彫り込んで描出すことはできないのであろう。では、木胎漆器と土器との関係はどうであろうか。両者の器形・文様を見たときに、どの属性を比較しても、見た目は全く変わらない。両者共に、彫り込んで三叉文や菱形文などの文様が描かれ、器面全体が漆で覆われている。唯一の相違点は、陶胎が木胎かの差だけである。第10図3の台付浅鉢の脚部には、透かし孔が穿たれ、これも土器へと忠実に模倣される。つまり土器（陶胎漆器）と木胎漆器とでは、全ての属性において相互の属性交換現象が起きていることになる（第15図模式図上段）。この現象については、関東地方の角底土器を分析した阿部芳郎によつて「土器（陶胎）、籐胎、そして木胎容器群の中に、それぞれの容器の連鎖・変容・型式化という現象



第11図 蓋胎漆器の文様構成（須藤1996より転載）

が実在する」(阿部2004)といった指摘があり、「亀ヶ岡式土器」前半期の特異性と捉えることができる。

次に、晩期中葉（大洞C1・C2期）の例をみてみよう。大洞C2期になると、黒地赤漆の彩文描出が特徴として現れるようになる（第11図　須藤1996）^{11回}。彩文手法は、容器の素材そのものを彫り込むことなく文様を描くことができ、蓋胎漆器などの薄い素材の容器にも文様を描くことを可能にしたようである。土器に描かれる文様も、大洞C1期では前段階同様に彫り込んで雲文形が描かれるのに対して、大洞C2期になると彫刻手法ではなく沈線と縄文のみの沈線手法で文様を描くようになり、彩文の出現が土器の文様描出手法の変化と連動した動きであった可能性を指摘できる。赤漆塗の仕方も同様であり、晩期前半同様に大洞C1期では文様の凹凸に係わりなく全面に塗布するが、大洞C2期になると部分的（縄文部のみ）に赤彩を施すこともあり、赤と黒のコントラストがはっきりとしてくる。ここにも土器文様の変動と赤彩の出現が強い関連をもっていたことを窺わせる。また、大洞C1期の文様（雲形文）は、晩期前半同様に、磨消縄文手法ではなく、無文地に文様を描く例が多くみられ、台付浅鉢の脚部にも透かし孔などが施され、木製容器（木胎漆器）との関係性が依然として指摘できる。

蓋胎漆器に彩文を施した例は、亀ヶ岡遺跡（第11図1）や山王岡遺跡（第11図2・3）で出土しており、両者共に浅鉢の内面に曲線的な文様を描いている。内面にまで彩文を描くという手法は、土器にも稀にみられ、文様描出手法において共通性がみられる。

しかし、蓋胎漆器と土器との間に相違点が多く見られるのも事実である。蓋胎漆器の文様を分析した須藤隆は、「土器型式と蓋胎漆器の文様の複合の仕方、すなわち文様要素の構成、その配列、施文方法などが異なり、土器と蓋胎漆器は異なる固有の装飾体系をそれぞれ確立している」とし、「蓋胎漆器の彩文意匠は、東北地方の晩期3、4期に発達する土器の雲形文の意匠構成とは明らかに異なる」と述べ、彩文の特異性を強調している。

陶胎漆器の代表例である第12図は、全面を文様帯とする壺である。この土器については後述するが、文様構成や底面の形態・文様施文などから考えて、該期の壺としては非常に異質な印象を受ける。特に底部と肩部の文様が連続して描かれている点は、通常の土器にはみられない文様構成である。これらのことから考えると、彩文手法自体は土器・漆器の両者で共通した要素でありながらも、彩文独自の文様や書き方・器面の使い方が存在していると考えられる（第15図模式図中段）。

最後に晩期後半の例をみてみよう。該期には、これまでみてきた蓋胎漆器はあまり出土しなくなる。宮城県根岸遺跡・山王岡遺跡で出土しているだけで（須藤1996）、管見では他に類例を知らない。蓋胎漆器製作の後退がみられる時期である。晩期後半の土器文様は、「工字文」や「匹字文」といった、直線的な文様が主流であり、晩期前半からみられる曲線的な文様とは大きく異なることから、土器の文様と漆器（彩文など）の関係が非常に希薄になってきたことを示唆している。

該期において、土器と植物質容器との関係を示すものとしては、角底部に描かれる十字文がある。この文様は、植物質のカゴを編む際に添える軸（米の字縞み・菊底）を模倣したものと考えられている（第9図3・5　甲野1976、藤沼・小川2006）。この底部形態を具体的に示す植物質容器の実例は、残念ながら亀ヶ岡文化圏では出土していないが、石川県御経塚遺跡で晩期前半の編み物の圧痕が検出されている（高尾ほか1991、渡辺1994）。となる



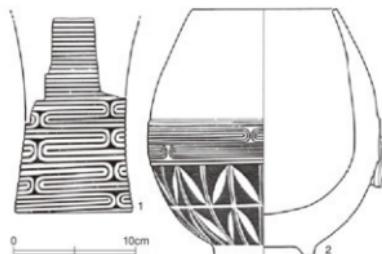
第12図 亀ヶ岡遺跡出土の陶胎漆器（黒地赤彩、小川忠博氏撮影）

と、これまで漆器と土器が互いに属性を交換し、強い関係を有していたのに対して、晩期後半になると、土器は藍胎漆器の福み方、つまり植物質容器の素材そのものを模倣し始めることになる（以下「素材模倣現象」と呼称）。そして、単純に模倣するだけではなく、土器製作の中で独自の模倣形態をとることになる。当初、藍胎漆器の底部を忠実に模倣していたが、該期になると明らかに模倣の度合いを超えた、四隅柱状脚の底部が出現するようになる（第9図5・6）。つまり、素材模倣現象を取り入れながらも、土器独自の形態を取るようになる時期と考えられる。

では木製容器との関係はどうであろうか。現状で東北地方における晩期後半の木製容器の出土例は未見だが、参考までに奈良県唐古遺跡で出土した弥生前期の筒状木製容器を見てみると（奈良国立文化財研究所1993）、直線的な工字文（流文）が彫刻的に描かれており（第13図

1）、木製容器と工字文が深い関係を有していることが分かるであろう。また、第13図2の木製壺は、胴部中央に工字文を、胴部下半には彩文で木葉文を描いている。彩文による木葉文は、西日本において該期の土器文様に積極的に採用され、描出手法を変えて沈線で描かれる場合も多々ある。それに対しても、木製容器に彫刻される工字文は、土器文様として採用されることはまずみられない（注12）。この現象は、西日本前期弥生土器において、彩文と土器文様の間で強い影響関係を持つようになるのに対しても、木製容器独自の文様（工字文）は土器文様と関係性が希薄であったことを示している。

それに対して、東日本縄文晩期後半では、土器文様として直線的な工字文が主流となり、彫刻文が施される木製容器（容器だけに限らず木器全般の傾向）との関連性が指摘できるのである。つまり、西日本弥生前期土器とは異なり、東日本晩期後半の土器は、木製容器の彫刻文



第13図 西日本弥生前期の木製容器

様と強い関係性を持つていた可能性が高い。また木製容器には、文様が施されない場合が多いのも特徴的であるが(白木製品)、文様を施さずとも、容器表面に見られる木目(年輪)自体が文様の役割を担う場合もあるのではないか。この「木目文様」は、直線的な文様にもなり、また曲線的な文様にもなりうるものであって、素材そのものを模倣(「素材模倣現象」)するようになった晩期後半には、「木目文様」さえも模倣の対象となった可能性さえある(第15図模式図下段)。

通常木製容器を製作する場合、板木取りで行なわれる。その際には、底部に限らず不規則に同心円(年輪)や矢羽根状の模様が残る。その同心円を模倣した可能性は、底部に施される第9図9や後述する第17図6から読み解くことができる。底部に施される渦文も同様の現象かもしれない。また、同心円が底部に施される蓋(第7図1~4・6・7・9~11・13)も同様のものと考えられる。

c. 蓋と植物質容器の関係

長く土器と植物質容器の関係についてみてきたが、結論から先に述べると、晩期後半の蓋は植物質容器と強い関連性をもって成立したと考えられる。

蓋が盛行しない晩期前半には、土器に類似する植物質の蓋は出土していない。このことは、土器の蓋が独自に成立していたことを示している。該期の土器蓋は、上述したように非常に小形で、形態的には縄文後期前半の土器蓋と非常によく似ており、植物質容器との関連を指摘することはとてもできない。

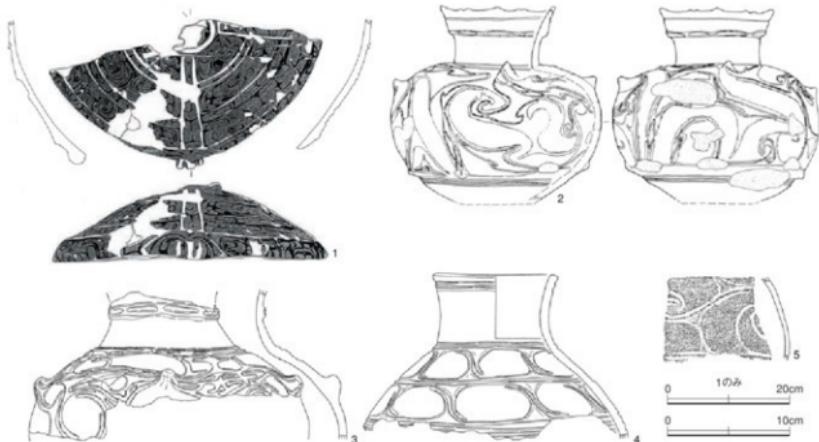
彩文が盛行する大洞C2期の蓋(第4図1)は、通常の土器文様とは異なり、入り組んだ曲線的な文様が描かれ、その文様構成は、上述した藍胎漆器の文様に非常に

よく似ている(第11図参照)。稀に、該期の土器底部に同様の文様が施される例も見られ、おそらく底部有文の土器と藍胎漆器の文様などが融合した形で、成立したものであろう。2・4単位区画を行い、同様の曲線的な文様を施す遺物として土版や岩版がある。また、隆起区画は該期の土偶に見られるものと非常によく似ており、藍胎漆器も含め、祭祀遺物と強い関係を有していることも指摘できる。

晩期後半に至っては、隆起区画がさらに盛行し、同心円文や綾杉文のような通常の土器にはみられない文様を施すようになる。これらの文様は、藍胎漆器の文様構成の範疇からは大きく外れた文様原理であり、上述した木製容器によく見られる文様(「木目文様」)の範疇で理解されなければならない。素材模倣現象が起きる該期には、木製の蓋が存在する可能性は非常に高く、その形態を土製の蓋が模倣していた可能性が高いのである。

このことを示唆するものとして、東北地方とは遠く離れた、高知県居德遺跡で出土した木胎漆器の蓋を例にとろう(佐竹ほか2003 第14図1)(注14)。居德遺跡は、晩期後半(大洞A1期)の大洞式土器が多く出土したことで著名であり、晩期後半の広域な地域間関係を示す遺跡で、木胎漆器の蓋についても東北地方との関係を考慮しなければならない(注15)。この蓋には、彩文で曲線的な文様が描かれており、これまでみてきた亀ヶ岡式土器の彩文(第11図)とは文様構成において大きく異なる。その文様構成については鈴木正博によって分析が加えられ(鈴木2000)、福島県羽白C遺跡(第14図2 鈴鹿ほか1988)の特殊壺と関連があるとされている。

しかし、ここで注目するのは、彩文ではなく、その形態である。全体の半分程度しか残存していないが、つまみ部から放射状に隆起帯(匙面隆帯)で十字区画をしていることがよくわかる。この区画は、上述した東北地方晩期後半の4単位隆起区画とよく類似する(第7図14)。また、隆起区画を繋ぐように同心円状に匙面隆帯が作出されており、匙面と沈線の違いはあるものの、同様に第7図14と非常によく似ている。彩文だけを比較してみると、居德遺跡の彩文と東北地方の土器の蓋に施される文様は明らかに異なっており、晩期後半では彩文と土器文様の間に関連性が薄いことが分かるが、素材の形態・装飾に類似点があることが理解できる。これは、上述し



第14図 居徳遺跡出土の木胎漆器と関東型特殊壺

た素材模倣現象を踏まえれば、容易に解釈が可能であり、晩期後半の蓋が木製の蓋と強い関係を有していたことが理解できよう。

居徳遺跡の彩文との関連が指摘される羽白C遺跡の特殊壺の類例は、福島県～関東地方（浮線文分布圏）を中心に分布しており⁽³³⁰⁾、「亀ヶ岡式土器」分布圏と日本海側の浮線文分布圏では出土しない。この地域には羽白C遺跡例と様相の異なる特殊壺が分布していることが注目される。ここでは、便宜的に羽白C遺跡に類似する特殊壺を「関東型特殊壺」とし、東北地方に分布する特殊壺を「東北型特殊壺」と呼称することにしよう。関東型特殊壺は、彩文を土器文様として採用した壺であることは明らかであり、千葉県志摩城跡において大量に出土している（第14図3～5 荒井ほか2006）。方形状の文様単位（第14図4）も、彩文と共通する要素である。

それに対して東北型特殊壺は、彩文の模倣が全く見られず、むしろ土器文様と強い関係にある点で興味深い。この東北型特殊壺は、文様・装飾において該期の蓋と極めて良く類似しており、素材模倣現象を考慮すれば、蓋同様に植物質容器、特に木製容器と密接な関係を持っていた可能性が高いのである。よって、次に特殊壺の分析を行うことで、蓋と対になる「身」の容器について考えていきたい。

2. 身としての特殊壺—特殊壺が「特殊」足る所以—

a. 東北型特殊壺

第Ⅲ章3節で、平鹿遺跡の蓋を例にとって、大洞C2期には小形の深鉢か壺がセットとなる可能性を指摘した。しかしながら、深鉢や壺は、該期の土器組成中で大半を占めるのに対して、蓋は1遺跡数点しか出土しない例がほとんどである。つまり、身と蓋の数量比は全く異なっており、セット関係としては不釣合である。果たして1個体の蓋が、他の様々な土器へと使いまわされたのであろうか。蓋という器種がこれまで異形・珍品として扱われてきた大きな理由はここにある。

前節で、蓋に施される文様が非常に特殊であることを述べてきたが、同様の文様構成をとる土器が存在することに、ここでは注目する。それが上記した東北型特殊壺である。東北型特殊壺は、隆起区画によって文様単位が区画され、その多くは区画内に同心円文や綾杉文を充填する。隆起区画を持たない特殊壺もあるが、それらの多くは器面全体を文様帶とすることに大きな特徴があり、特殊な容器である陶胎漆器と共に存する要素である。また、稀に橢円形を呈するもの（第16図16・第17図6）も存在するが、「平面形を橢円や非対称にする発想は木製食器特有のもの」（宇野1996）と考えられており、その特異性は際立っている。



第15図 素材間の関係模式図

特殊壺が文様構成において蓋と共通性をもつことに、身として機能していた可能性を指摘できる理由の一つであるが、最大の理由はもう一つある。それは、口縁部の穿孔である。口縁部形態は無文で短く直立、もしくは内傾する場合が多く、同時期の壺とは一線を画している。穿孔の数や方法は様々であるが、口縁部全周に等間隔に廻るものと、二個一対の穿孔が2単位か4単位廻るのが基本的な穿孔方法のようである。これらの穿孔の多くは焼成前穿孔であり、土器製作の段階で、穿孔を利用することができると想定されていることがわかる。口縁部に穿孔が施される例は、西日本の弥生土器の壺に多々みられ、穿孔のある壺蓋と組み合わせることが分かっている。このようなことから考えると、本稿で対象とした蓋とこれから見ていく東北型特殊壺は、組み合わせ関係の土器として製作・使用されていた可能性が高いと考えられる。

これら東北型特殊壺は、その特異さからか、古くは養虫仙人による亀ヶ岡遺跡出土土器を表した屏風絵にも描

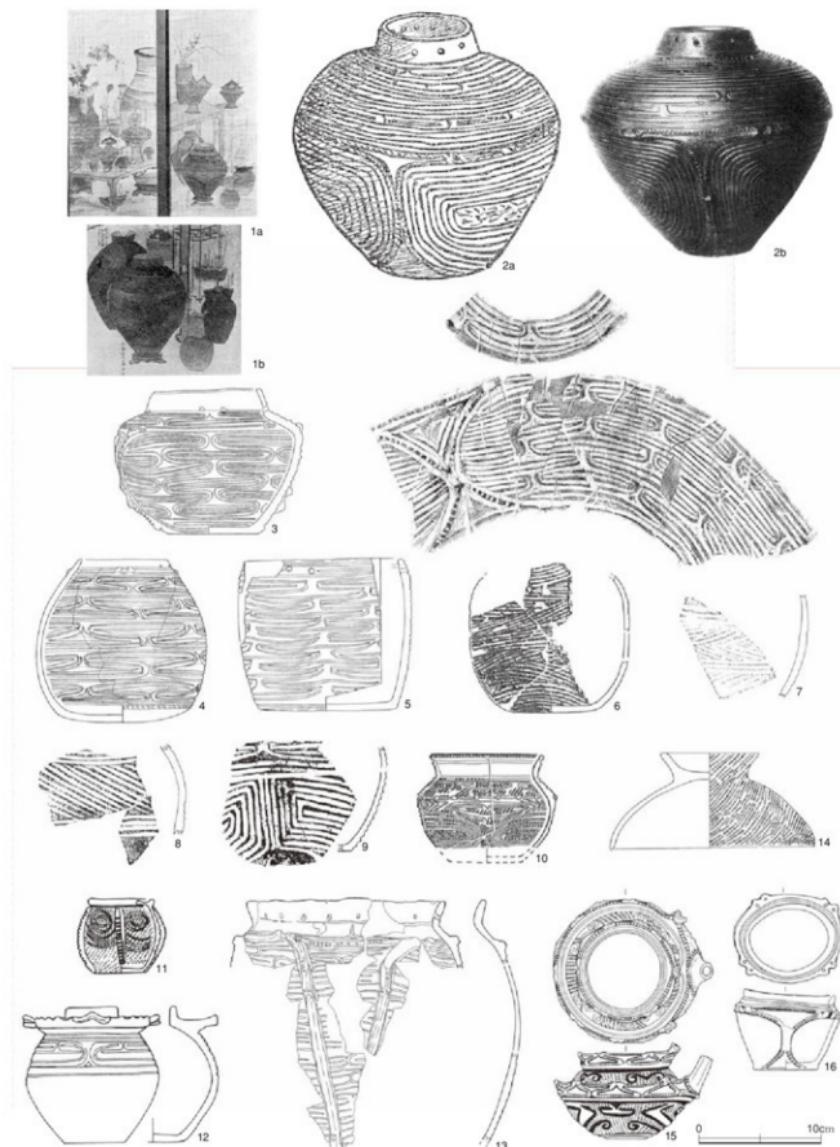
かれ（第16図1a・b 杉山1967、清水1959）、また、若林勝邦や杉山寿栄男によって青森県十面沢遺跡の特殊壺も報告されている（第16図2a・b 〔註〕 杉山1923）。いずれも、口縁部全周に穿孔を施して、胴部の文様帯を上下2段に分割し、上段には工字文を、下段には隆起区画で2単位（推定）の区画を行って、内部に工字文や矢羽状文を施している。胴部下半の隆起区画には、上述した蓋の「三角状区画」をも形成しており、強い関連性がみられるのである。

特殊壺の初現は、大洞A1期であり、現状で大洞C2期以前のものは見当たらない。大洞C2期では、蓋受けと考えられるような口縁部形態をもった壺が出土しているが（第16図11・12）、口縁部の穿孔が見られない点で東北型特殊壺とは異なる。11は、キザミをもった縦位の4単位隆起区画を作出し、同心円文を描く点で後続する特殊壺と関連するかもしれない。ラフな隆起区画とキザミは、第5図1～3の安堵屋敷遺跡の蓋ともよく似ている。

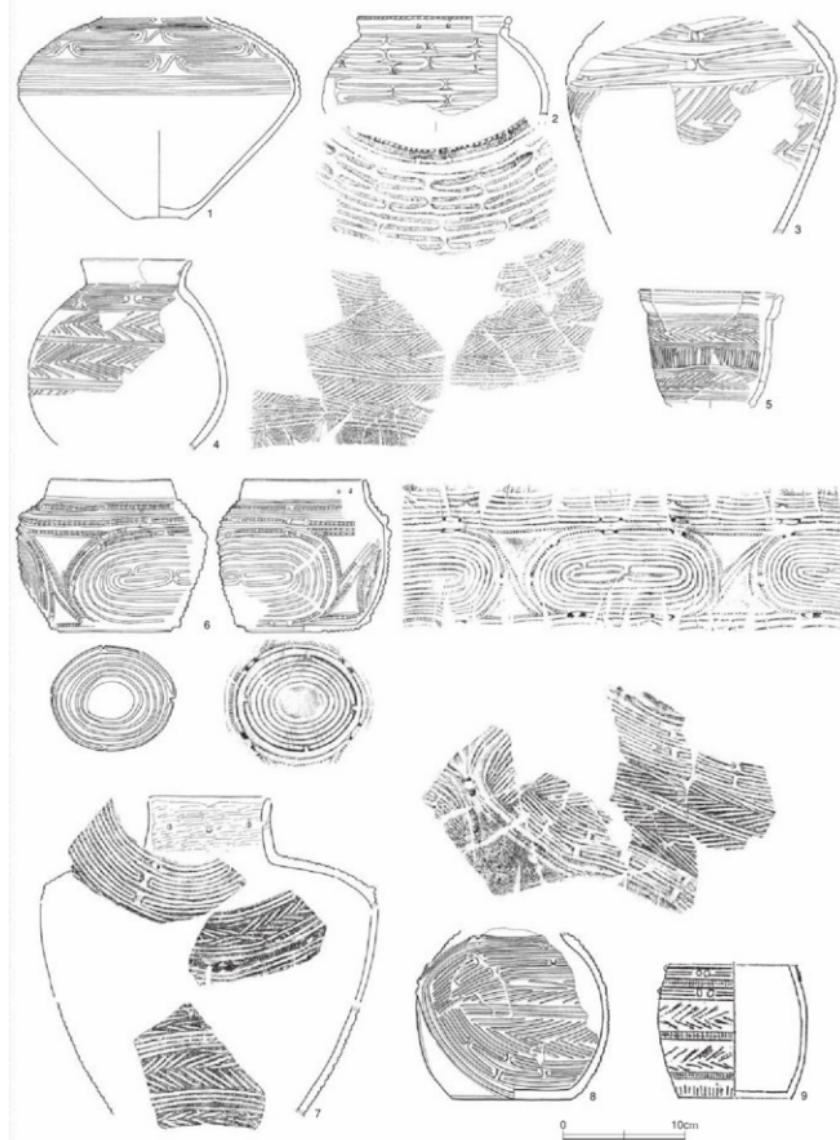
大洞A1期のつなぎⅢ遺跡の特殊壺（第16図16）は、梢円形に作出されており、木製容器との関連が指摘できる。文様が描かれない点で、白木製品を模倣した可能性も考えられる。穿孔は、隆起区画上の突起へ縦方向に施されており、やや特殊な穿孔方法である。因みに第16図14～16は土坑一括資料であり、注口土器から判断すると大洞A1期として問題ないであろう。この3個体は土坑内に土器片を敷いた上に、14の粗製台付鉢が15の注口土器と16の特殊壺に被さった状態で出土している（高橋・高橋1980）。また、土器の周りを粘土で覆い、土坑を人為的に埋め戻した可能性が指摘されている。この出土状態は、特殊壺が「特殊」に扱われたことを示唆しているよう。

大洞A1期の他の好例としては、青森県弘前市薬師（II）遺跡で出土している（第16図3 田村1968、藤沼・小川2006）。短頭の口縁部には、二個一対の穿孔が2単位空けられている。胴部は、キザミをもった隆起区画で1単位区画を行い、その内部には工字文を多重に描いている。隆起区画には三角状区画が上下対向して作出されている。この一単位の隆起区画の例は、第4図1の平鹿遺跡の蓋と同様である。大洞A1期の工字文の採用は、該期の蓋にもみられ（第6図3～5）、身と蓋の文様装飾原理が連動していることがわかる。

ただし大洞A1期には、第17図2のような穿孔をもつ



第16図 東北型特殊壺集成（1）



第17図 東北型特殊壺集成 (2)

た短頭壺も存在している点は、蓋と身のセット関係を考える上で、注意しておく必要もある。

大洞A 2期のものは、山王廻遺跡V層出土土器が著名である（第17図6 伊東・須藤1985）。須藤隆は、この特殊壺に対して「浮線渦巻文の短頭広口壺がこの蓋とセットになると考えられることから、砂沢式の蓋付き注口土器は、晚期後半の蓋付き短頭壺の伝統を受けたものとみられる。これまで、田舎館式期の蓋に代表される東北地方北半で知られていたこの型式の蓋は、その起源を亀ヶ岡文化のなかに求めることができる。なお、從来、広口壺とみられてきた浮線渦巻文土器は、注口土器である可能性がきわめて強いと考えている」（須藤2000）と述べているが、集成した資料を見る限り、注口部の付いたものは見当たらない⁽¹¹⁸⁾。確かに、短頭の口縁部だけを見ると、砂沢遺跡出土の注口土器に類似しているが、文様系統において両者は全く異なるものである。

しかしながら、東北型特殊壺から弥生の注口土器へとセット関係が変化した可能性もある。セット関係の変化によって、東北型特殊壺が弥生時代には姿を消すことここまで理解できるが、晩期末から弥生時代前半期になると、注口土器の存在は希薄となり、全ての弥生の壺蓋が注口土器とセットになるとは考えられない。砂沢式に後続する弥生中期（五所式～田舎館式）においては、壺とセット関係をもっていることからも（林1966）、他器種（特に穿孔をもつ壺）との関係についても積極的に考慮すべきと考える。同様のことは、晚期のセット関係についても言えることである。

山王廻遺跡の特殊壺は、つなぎⅢ遺跡（第16図16）と同様に梢円形を呈する点に特徴があり、木製容器との関連性を指摘できる。素材模倣現象の起きた該期であるから、底部には木目を表現したと思われる同心円文も描かれている。同じ底部形態（梢円・木目文）は、浮線文分布圏の鳥屋遺跡でも出土している（第9図8 関ほか1988）。

また、単位文間の三角状区画が、上下ズレて描かれている点は注目すべきである。このように上下をズラす文様構成は、第17図1のような大洞A 1期の工字文にしばしばみられ、これと関連する可能性がある。しかし、別の視点に立ってみると、彩文の文様構成とも類似するのである。第12図の模式図をみると、単位文の連結部分

（黒地部分）が上下にズレて陥り、単位文は渦文を描いており、基本的な文様の配置関係が第16図16と同様である。他の彩文も同様である（第11図3～6）。そもそも、縦位に文様を区画することは、通常の土器文様にはみられない。三角状の文様は、第11図1の単位文間にもみられ、共通する要素であり、第12図のような全面を文様帶とする壺が特殊な位置を占めるならば、東北型特殊壺との関係も考慮に入れなければならないだろう。しかし、両者で文様構成には大きな違いがみられるため、部分的に属性交換を行っているだけと判断する。

山形県花ノ木遺跡では、隆起区画内部を工字文と綾杉文で埋め尽くす特殊壺が出土している（第17図8 今田2000）。三角状区画は、山王廻遺跡と異なり対向して作出されている。口縁部の大半が欠損しており、穿孔の有無は確認できないが、おそらく薬師（II）遺跡・山王廻遺跡の例と同様に、穿孔をもった短頭の口縁部が付くものと考えられる。

岩手県大橋遺跡では、口縁部全周に穿孔を施す大形の壺が出土している（第16図13）。大形のためか三角状区画が縦方向に間延びしており、内部にまで文様が描かれている。隆起区画間を多条の沈線で繋ぐ文様は、第7図14とよく類似するが、部分的に反転し、工字文状に描かれている。大洞A 1～A 2期の資料と考えられる。

上述した亀ヶ岡遺跡（第16図1）・十面沢遺跡（第16図2）の土器は、文様帯が上下に分かれている点で、山王廻・花ノ木例とは一見して異なる。しかし、隆起区画や文様構成（同心円文・綾杉文）・口縁部穿孔などにおいて、東北型特殊壺と共通する要素を多分に併せ持ち、東北型特殊壺の範疇で捉えるべきと考える。おそらく山王廻・花ノ木例に後続する特殊壺と考えられる。同心円文の中央部には、帯状の綾杉文を施文しており、類例は九年橋遺跡で小形の壺が出土している（第16図10）。同様の特殊壺は、花ノ木遺跡で破片ながら出土している（第17図7）⁽¹¹⁹⁾。

大洞A'期のものとしては、岩手県大船渡市長谷堂貝塚の特殊壺がある（第16図6 金子ほか1999、鈴木2000b）。隆起区画は確認できないが、第17図8とはば同様の文様構成である。8と比べて沈線化が進んでいるようである。鈴木正博は、大洞A'式としているが、R Z03（埋設土器）で共伴した土器は、主文様帯下に副部横帯文



第18図 北陸地方の特殊壺

が施されており、弥生前期まで下る可能性もある。

以上、隆起区画をもった東北型特殊壺についてみてきたが、隆起区画をもたない特殊壺も存在することは注意すべきである。それは器面全面を文様帶とする壺で、これらの多くは、文様帶を多段に設定し、綾杉文や工字文を描いており、明らかに一般的な土器の文様帶構成とは異なっている。

秋田県上新城中学校遺跡では、肩部に工字文（隆線流水状工字文）を、胴部に綾杉文を3段描く特殊壺が出土している（第17図4）。肩部文様から判断すると大洞A2期であり、口縁部には4ヶ所（推定）穿孔が施されている。綾杉文を横位に描く例は、他の遺跡でも破片レベルでも散見され、同様の特殊壺であったことが推測される（第16図7・8）。また、第16図9のように縦位に文様を区画して、重四角文を描く大洞A'期の土器は、言うまでもなく、これまで見てきた東北型特殊壺（第16図1・2・10、第17図6）の流れで追うことができる。

全面を文様帶として多段化する例は、青森県沢山（1）遺跡でも出土している（第16図4）。最大径が胴部下半にあり、下膨れになっている点でも上新城中学校遺跡と同様である⁽¹²⁰⁾。青森県剣吉荒町遺跡では、頭部の付かない例も出土している（第16図5）。両土器には、穿孔が二

個一对な点で東北型特殊壺と共通するが、文様は一般的な土器文様（隆線流水状工字文・流水型変形工字文 佐藤2008）を描く点で異なる⁽¹²¹⁾。いずれにしても、口縁部の穿孔・全面文様帶（多段化）などの点で、東北型特殊壺と共通する要素をもっており、無関係ではないだろう。

宮城県巻堀遺跡では、全面を文様帶とする小形の深鉢が出土している（第17図5）。共伴する遺物から、大洞A2期と判断でき、既に鈴木正博によって注目されている土器である（鈴木2002）。文様帶構成が上新城中学校遺跡（第17図4）と共通しており、壺ではないが関連性を指摘できる。

このように晩期後半において、口縁部の穿孔・文様の多段化・綾杉文・隆起区画などに注目すると、東北型特殊壺とそれに類する土器の間で、一般的の土器にはみられない、独自の文様・装飾体系を有していたことがわかる。この現象は、上記した蓋にもみられ、同様の文様・装飾体系の中で製作・使用されていたことが窺えるのであり、両者のセット関係を強く物語っている。

b. 関東型・北陸型？特殊壺

次に、所謂「亀ヶ岡式土器」外殻圈でみられる特殊壺

についてみてみよう。上述したように、同時期の東北南部（福島県）・関東地方には、浮線文土器群が広がっており、東北型特殊壺とは異なる特殊壺（関東型特殊壺）が分布している。関東型特殊壺（第14図2～5）は、鈴木正博によって彩文との関連が明らかにされており（鈴木2000）、素材模倣現象の起きた東北型特殊壺とは異なる装飾原理であることがわかる。また、口縁部の穿孔もみられない点で、両者を直接的に結びつけることは難しい。

しかし、同じ浮線文土器分布圏において東北型特殊壺と関連する土器が出土する地域がある。それが日本海側の新潟・石川を中心とした地域である。この地域は、上述した底部有文の土器が出土する地域とはほぼ同様の範囲でもある。

第18図1・2は、新潟県青田遺跡出土の特殊壺で（荒川ほか2004）、隆起区画内に下向き「コ」字文を幾重にも描く。隆起区画にはキザミが施されないが、東北型特殊壺と非常に強い関係を有することを示唆している。

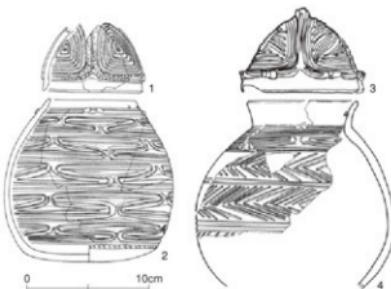
同じく新潟県和泉A遺跡（第18図3）や保明浦遺跡（第18図4）では、縦位に帯状の綾杉文帯を描く壺（深鉢？）が出土している。一見するとこの土器の器形は、東北型特殊壺とは大きく異なる。しかし、文様構成を見てみると、帯状の綾杉文帯は、東北型特殊壺と同様のモチーフであることに気付く。また、綾杉文に注目すると、綾杉文の方向を、途中で変化させる点で、花ノ木遺跡例（第17図7）とも共通する。

縦位の帯状綾杉文は、石川県乾遺跡でも出土しており（第18図5）、土器内に同心円文と同居している点で、東北型特殊壺との関係を示す。乾遺跡の特殊壺の文様は、東海・中部地方の「浮線渦巻紋系土器」や「沈線紋系土器」と共通する要素を持っており（永井1994）、東北と北陸・中部の特殊壺同士で、広い範囲での議論が可能となる。この点にいち早く注目した鈴木正博は、綾杉文の分析から広域な検証作業を行なっている（鈴木2003a・b）。

c. 組み合わせの検討

以上、蓋と東北型特殊壺が、文様・装飾体系において共通する要素を持っていることを確認し、両器種の分布範囲がほぼ同じであり、両器種はセット関係にある可能性が高いことを確認してきた。

問題となるのは、両器種が実際に組み合うのかという



第19図 蓋と特殊壺の組み合せの一例

ことである。残念ながらそれを示すような状態で出土した例は一例もない。ここでは、両器種が出土した遺跡での組み合わせを確認すると共に、集成した蓋と特殊壺の口径比較を行って、セット関係の蓋然性を確認してみたい。

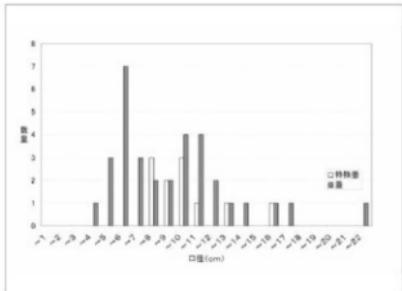
両器種が共に出土した遺跡は、青森県亀ヶ岡遺跡・沢山（1）遺跡・剣吉荒町遺跡、秋田県上新城中学校遺跡、宮城県山王町遺跡、山形県花ノ木遺跡・蟹沢遺跡の計7遺跡である（第8図参照）。ただし、両器種とともに口径を計測できる遺跡は、青森県沢山（1）遺跡と秋田県上新城中学校遺跡の2遺跡だけである。両遺跡出土土器を組み合わせてみると、第19図のようになる。口径から判断する限りでは、両器種が組み合うことに支障はないようである。

沢山（1）遺跡（第19図1・2）の文様構成は、蓋が同心円文で特殊壺は工字文（隆線流氷型工字文）となっており、相違点も目立つが、蓋の隆起区画上の点列と特殊壺の文様帶下端の点列に共通性がみられる。

上新城中学校遺跡（第19図3・4）では、綾杉文に共通性がみられる。蓋は「Z」字状の綾杉文であるが、こういった綾杉文は同時期の壺に一般的に採用されることから（鈴木2003b）、身と同時期の大洞A2期に位置づけられる。蓋には穿孔が確認できないため、両土器が実際のセット関係を示すとは考えられないが、該期の様相をよく表したセット関係と考えられる。

次に、全ての蓋と東北型特殊壺の口径比較を行なってみよう（表1）。蓋は大小様々で、口径値にバラつきがみられるが、5.0～13.0cmの間に集中する傾向がある。それ

表1 薫と東北型特種壺の口径比



に対して特殊壺は、8.0~12.0cm の間に集中しているのがわかり、口径値において非常に近似した関係を有していることが読み取れる。

以上、文様構成の類似点や口徑値の近似などから考えて、両器種がセット関係を有していた可能性が非常に高いと考えられる。あとは、セット関係を示した状態で出土することを期待するばかりである。

3. 弥生土器の蒸との比較

本稿で関連する弥生土器の蓋は、「逆皿形（倒皿形）」と「円盤形」の蓋である。これらの蓋は、壺蓋とは異なり、口径が小さく、天井部に文様を描き、口縁部や天井部に穿孔する点から考えて、これまで見てきた晩期後半の蓋と強い共通性をもち、系統的に連続する可能性が極めて高いのである。

既存の研究においては、須藤隆がこの点について簡単に言及しただけであり（須藤2000）、詳細な分析が行われていないのが現状である。よって最後に、この問題に触れて、本稿を締めることしよう。

第20図に、東北地方で出土した弥生土器の壺蓋の主なものを図示した。基本的に、大洞A1・A2期で盛行した隆起区画は形散化し、沈線区画になっている。隆起区画の名残は、砂沢式のつまみ部に部分的に残るのみである。他の資料は、基本的に4単位沈線区画であり、晩期後半の構図とはほぼ同様である。大洞A2期の第7図16と第20図2を比較すると、区画文や刺突などで共通する要素を多く持っており、弥生土器の逆皿形の壺蓋が、晩期後半から漸進と製作・伸田されていくことが伺える。

高瀬克範は、逆圓形の巻が出現する要因として、砂沢

式の小形浅鉢（第20図10・11）と、東北南部・北越にみられる放射状沈線を持つ浅鉢（第20図12・13）が融合して成立すると判断している（高瀬2000）。上述したように、逆皿形の蓋は晩期後半の蓋から系統的にトレスすることができ、高瀬が想定するような過程を踏まなくとも、逆皿形の壺蓋は成立すると考える。そもそも、放射状沈線を描く浅鉢は、文様の単位数に決まりがなく（4～6単位と様々）、4単位が基本の逆皿形とは大きく様相が異なる。高瀬が指摘する第20図12・13のような放射状沈線をもつ土器は、晩期後半には既に存在しており（第20図14～16）、その系統として扱うのが妥当であろう（北越地方においても大洞A’期の例が散見できる（第20図14）。

また、宇鉄遺跡例（第7図17）のように大洞A’期には側面に文様を描く蓋が既に出現しており、第20図10・11のような浅鉢と関連するとなったら、器形のみであろう。

福島県須賀川市松ヶ作A遺跡では、底面に1本沈線で渦文を描いた弥生前期の浅鉢が出土している（第20図17）。第20図1の渦文と類似するが、他人の空似であろうか。関連を指摘するにとどめておこう。

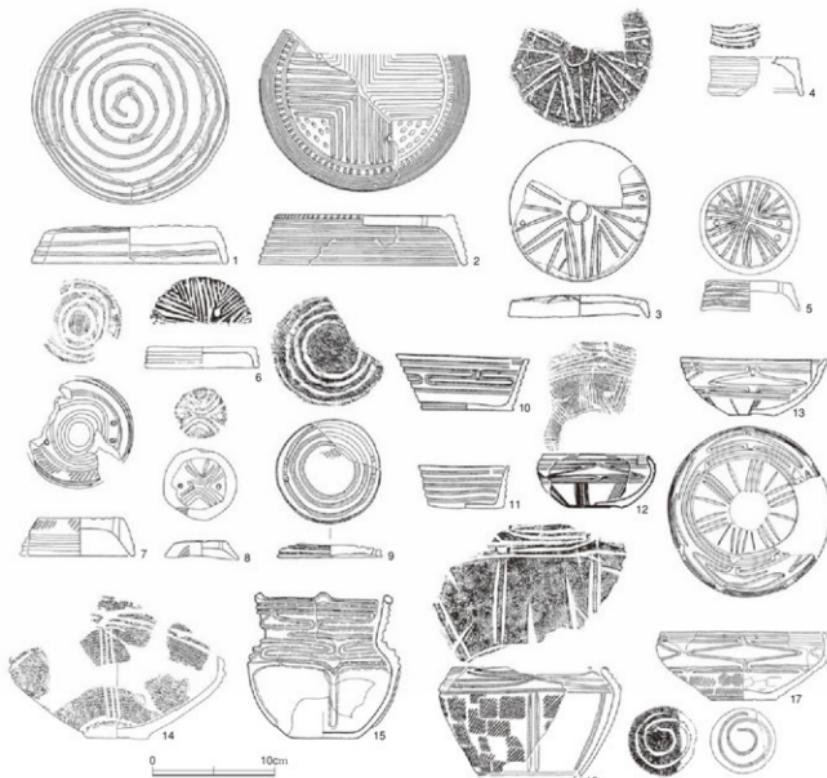
新潟県田上町保明浦遺跡では、4単位社隸区画の蓋が出土している（第9図10・11）。10には刺突も充填され、砂鉢式の蓋との関連が考えられ、11も第20図3によく似ており、新潟県域でも弥生前期に逆皿形の蓋が存在していた可能性が指摘できる。

また、宮城県香ノ木遺跡では、大洞 A 1期の層から逆皿形の蓋が出土していることは既に確認した（第6図13）。穿孔の位置や天井部の文様（同心円か溝文）において、弥生の蓋と酷似しており、第7図21なども含めれば、既に晩期後半には、逆皿形の蓋が定型化していた可能性も考えられる。

円盤形の壺蓋については、二枚橋（2）遺跡で、晚期後半のものと思われる例が出土しているが、弥生土器（第20図9）のものとは、文様構成において大きく異なるため、現状で直接的な関連を指摘することは避けておこう。

VI. おわりに

以上、縄文時代晚期の蓋形土器について、集成を行い、



第20図 東北弥生前期土器の壺蓋と関連資料

若干の考察を行ってみたが、資料の希薄さから、十分な検討を行うことができず、拡大解釈が過ぎたかもしれない。しかし、資料が希薄に感じるのは、決して筆者自身の集成不足ではなく、これが実態を表していると考えられる。上述したように、蓋が出土する遺跡は、各地域を代表する比較的大規模な遺跡であり、小規模な遺跡からは全くと言っていいほど出土していない。これは、蓋を製作し、使用する集団が限られていた可能性が高く、特殊壺とあわせて考えると、出土土器の中での位置付けが、いかに特異なものであるかが理解できよう。

蓋に施される文様は、他器種の土器とは異なり、かなり異質な文様が施されることから、土器への視点だけで

なく、他の材質を用いた容器との関連も含めて検討を行った。通称「亀ヶ岡式土器」を製作した集団は、藍胎・木胎・陶胎漆器など様々な素材を用いて、容器などの諸道具を製作・使用し、独自の製作・装飾体系が確立していた。そして、それらは相互に模倣し、属性の交換を行っていたことが理解できる。しかし、土器・藍胎・木胎漆器の関係は、縄文晩期を通じて同じ関係であったわけではなく、各時期においてその関係に強弱の変化があったものと考えられる。

そういった遺物間関係の変化の一過程で、蓋と特殊壺が成立し、セットとして使用されていたようである。器面全面に装飾を施し、底面にまで加飾する例のある特殊

壺と、その装飾形態に類似性の見られる蓋は、おそらく他の諸遺物と相互に関連を持ちながら、身と蓋の関係を強めていき、弥生時代になり土器の一器種として定着していくものと考えられる。そこには、西日本からの弥生土器組成の影響は少なからず存在していたであろう。

弥生土器の模倣(写し)について考察した吉田広は、「土器本来の素材に適った使用形態が貫かれている縄文的食器においては、ヒヨウタン・ヒヨウタン製容器の形を写し取ることは不要であった」とし、「素材の性質をかなり無視した、強い目的意識的な食器様式を形成することが特徴」的な弥生土器においては、「木製食器と土製食器の写しの関係」が起きることを指摘している(吉田2004)。しかし、これまで見てきたように、少なからず「亀ヶ岡

式土器」製作においては「素材の性質を無視した強い目的意識」が働いており、「写し」現象は頻繁に行なわれていたことがわかる^(注2)。

蓋という、これまで珍品扱いされてきた器種に目を向けて論を進め、「身も蓋もない」ような話になってしまった感が否めないが、今後土器研究において、珍品・異形土器のような不間にされることの多かった遺物を、いかに位置づけるかは少なからず大切な作業であろう。

たとえ珍品であろうとも、過去の人類が、それを製作・使用していたのは事実である。そこに何かしら彼らの行動の意図・意味が含まれているということを忘れずに、今後も目を背けることなく向き合っていきたい。

表2 東北地方縄文晩期後半の蓋出土遺跡一覧

都道府県	市町村名	道跡名	所属時期	参考文献	点数	備考
青森県	五所川原市(旧市浦村)	大沼道跡	大洞A2期	柳原2001、藤沼・小川2006	1	赤彩
々	三郷村	宇鉢道跡	大洞A'期	兎玉・相馬2004	1	口縁内面塗?
々	むつ市(旧大畠村)	二枚橋(2)道跡	大洞C2~A2期	橘ほか2001、藤沼・小川2006	4	
々	佐井村	佐井八幡堂道跡	大洞A2期		1	
々	南部町(旧名川町)	劍吉荒町道跡	大洞A2・A'期	鈴木・木村1988	2	
々	つがる市(旧本造町)	亀ヶ岡道跡	大洞A2期	鈴木・岩渕2001	1	
々	青森市	沢山(1)道跡	大洞A2~A'期	兎玉1994	1	
秋田県	秋田市	上新城中学校道跡	大洞A2期	石郷岡ほか1992	2	
々	横手市(旧増田町)	平鹿道跡	大洞C2期	小玉1983	1	赤彩・穿孔
岩手県	奥州市(旧前沢町)	川岸場道跡	大洞A'期?	小山内2000.、及川ほか2004	3	
々	一関市	細田道跡	大洞A'期	工藤・晴山1999	1	
々	花巻市(旧鳥谷町)	安堵屋道跡	大洞C2期	岩手県埋蔵文化財センター1989	5	
々	大船渡市	宮野貝塚	大洞A1期	佐々木2002、藤沼・小川2006	1	
々	北上市	九年橋道跡	大洞C2~A1期	藤村1988・91	10	
宮城県	栗原市(旧一迫町)	山王廻道跡	大洞A1~A'期?	大場・永見1998、須藤2000	2	穿孔
々	石巻市	沼津貝塚	大洞C1期	東北大文学部1982	1	
々	加美町(旧小野田町)	香ノ木道跡	大洞A1期	佐々木ほか1985	1	穿孔
山形県	真室川町	釜瀬C道跡	大洞A1・A2期	黒坂	2	
々	最上町	げんだい道跡	大洞A2期	安部・月山1988	2	赤彩・穿孔
々	尾花沢市	漆坊道跡	大洞A2期	大類1982	1	
々	村山市	宮の前道跡	大洞C2期	山口ほか1995	1	赤彩
々	東根市	蟹沢道跡	大洞A1~A'期?	佐藤1963	1	
々	寒河江市	高瀬山道跡	大洞A2期	小林2005	1	全面塗塗り・穿孔
々	河北町	花ノ木道跡	大洞A2期	今田2001	1	赤彩
新潟県	田上町	保明浦道跡	鳥屋2b式?	田畠2003・2004	(1)	穿孔

<謝辞>

本稿作成の裁縫は、寒河江市高瀬山遺跡（HO地区）で出土した蓋形土器について小林圭一氏からご教示頂いたことにあります。小林氏からは晩期土器研究についても様々なご指導を頂きました。また下記の方々には資料調査・文献収集などにおいて多くのご協力を得ました。記して感謝の意を表したいと思います（五十音順・敬称略）。

（個人）阿部泰之 安藤広道 石川日出志 伊藤才城 稲野裕介 大坂拓 大場亞彌 大類誠 小野隆志 小松正夫 佐藤信行 岩川欣也 庄司祐一 西谷隆 日隈広志 向出博之 山口博之 渡邉朋和

（機関）秋田市教育委員会 河北町教育委員会 北上市埋蔵文化財センター 慶応義塾大学民族学考古学研究室 田上町教育委員会 丸亀市教育委員会

なお、本稿は2006年度大久保忠和考古学振興基金奨励研究の成果を一部含む。

<注>

1) 山内が「日本遠古之文化」で指摘している縄文時代の蓋は、おそらく縄文後期前業の壺之内式に組成する蓋を指していると考えられる（山内1940）。

北陸地方で出土する晩期の蓋との関係については、残念ながら山内の論考中で直接確認できないが、山内門下である中村五郎が「かつて山内先生が北陸の構造の蓋と弥生の蓋の関係に注目していたことを思い出すのである」と山内本人の見解として回顧している（中村1988）。また、中村同様に山内門下である佐原真は、弥生文化の特質について触れた概説書で、弥生文化を構成するものを、①大陸から伝来した要素、②縄文文化からの伝統として受けついだ要素、③弥生文化で固有の発達をとげたもの、の三要素に分類し、蓋を②縄文文化からの伝統として受けついだ要素として扱い、「晩期に北陸地方の蓋が近畿に伝えられ、近畿で前期中ごろに弥生土器の一器種として登場」（佐原1975・76）するものとした。少なからず山内の考えが影響しているものと考えられる。

2) 蓋は縄文・弥生土器に限らず、古墳時代以降の土器・陶磁器にも組成している。これらの蓋は、縄文・弥生時代の蓋とは異なり、土師器・須恵器・陶磁器の中の一器種として一定の役割を担っており、本稿が対象とする縄文・弥生土器における蓋とは、その意味合いが大きく異なることから、今回の分析対象からは外した。

3) 弥生土器の蓋についての研究史を振り返った角南純一郎は、佐藤傳藏の報告が後年の弥生土器研究に大きな影響を与えたことを指摘しており、佐藤の報告は単なる集成作業ではなく、蓋としての概念を提示した点で非常に重要であろう。

また、角南は同論文において、小林行雄が唐古遺跡の報告で弥生土器の壺蓋と要蓋の二者の存在を初めて明らかにした（末永ほか1943）と述べているが、この見解のプライオリティは森本六爾にある（森本1934）。

因みに、現在の視点に立てば、第1図6は北海道室蘭出土の弥生土器（田舎倉式）の蓋である。

4) 縄文中期の有孔飼付土器は、土器の開口部を有機物で覆って結縛した可能性もあるが、否定する見解もある（田代・中川1982）。否定論者は、有孔飼付土器を酒道具として捉え、発酵過

程でのガス抜き孔と考えているようである。伊藤正人は縄文後期の蓋と身の関係が、有孔飼付土器からの系統として成立するとしており（伊藤1990）、筆者もその系統的な変化を考えると有孔飼付土器にめぐる小孔列は、紐掛けのために機能していた可能性が高いと考えており、「蓋などの緊縛孔と考える余地はないのである」（田代・中川1982）と強く断定する必要性もないのではないだろうか。

また、本稿で対象とする晩期後半の特殊壺や弥生中期前半の壺にも、有孔飼付土器同様に口縁部直下に孔列を廻らしている例がみられる。このように時期や地域に大きな隔たりがあるからも、共通する形態や属性を有する遺物は、恐らく機能面でも類似した点があったのではないかと考えられる。単純な比較や推測だけではなく、出土状況や土器の観察によって、今後改めてその関係性について考えてみたい。

5) 報告者において、第3図7の土器についての記述はなく（後藤1972）、報告者が蓋として認識していたかについては、不明である。

6) 大洞A 2期に帰属する資料として、慶応義塾大学所蔵の佐井八幡堂遺跡の蓋があることを確認している。2部位隆起区画の蓋で、流水平型変形工字文を縦位に展開する好資料である。器形は、第5図8の宮の前遺跡によく似ている。この資料については、近々大坂拓氏が発表予定と聞いているので、その報告を待ちたい。

7) 大沼遺跡の土器は、特殊工字文の構成要素である変形匂字文が横位に伸びており、大洞A 2式でも新しい段階に位置づけられる可能性が高い。

8) 報告書内でこの蓋を解説した坂田由紀子は、類例として大日向（II?）遺跡を取り上げている（大日向・水見1998）。筆者が、同遺跡の報告書を何度も確認したが、類例を確認できなかつた。筆者が見落とした可能性もあるが、坂田の示した類例は、もしかすると第20図5かもしれない。明らかに沈線区画による弥生土器の蓋である。ご教示願いたい。

9) げんだい遺跡の報告者は、この蓋を弥生前期と判断しているが、筆者が他の出土土器を確認したところ、明確に弥生前期と定位づけられるものは1点のみであり（佐藤2006にて報告）、その多くは晩期末葉の大洞A 2期であった。よって、これらの蓋を積極的に弥生前期に位置づける根拠は非常に薄い。

また、高瀬克範は、げんだい遺跡から出土した土器について（第7図13）、特殊な小型鉢を判断し、「かりに蓋だととしても、文様・形態のうえで逆面形蓋とは異質といわざるをえない」と、弥生土器の蓋との関連性を否定している。しかし、第7図13のような土器は、出土遺跡の大半が縄文晩期後半の時期であることから、少なくとも弥生土器の蓋との時間的な距離は大きくなっている。しかも隆起区画が底部まで施されていることや、その多くが穿孔を有していることなどから考えて、蓋としての可能性を含めて、弥生土器に組成する蓋との関連を考慮すべきと考えている。詳細は後述する。

10) 高瀬山遺跡（HO地区）からは、大洞A 2期の土器が比較的まとまって出土しており、蓋の隔年的な位置づけを示唆している。大洞A 2式については、佐藤2005a・bで若干の検討を行っているので、参考願いたい。

11) 法政大学所蔵の川岸場遺跡（伊藤鉄夫コレクション）でも、破片資料1点出土している（伊藤ほか1996のp211、001-37右列の下から2番目）。

- 12) 晩期前半期で彩文を施した例として、是川中居遺跡の樹皮製容器があげられ、報告者は、出土状態などから大洞C2期としている。この容器に描かれた彩文は、該期の土器にはみられない特異な文様構成であり、彩文独自の文様原理がこの段階で既に成立していた可能性も考えられる。入組んだ文様構成は、後述する大洞C2期以降の彩文と共通する要素である。
- 13) 藏内第I様式の土器文様として工字文が採用された著名な例としては京都府竹野遺跡の例がある。
- 14) 倉鹿遺跡の本胎土器には、いくつつかの穿孔が施され、口縁部の穿孔内に糸状の依存物が残っている点から、報告者は補修孔として判断している(佐竹ほか2003)。しかし、実物は未見だが、東京国立博物館開催の「発掘へんろ—遺跡でめぐる伊予・土佐・讃岐・阿波—」の展示ブリヂカで観察したところ、欠損していない部分にも穿孔が確認された。よって補修孔ではなく、身と蓋を繋ぐための紐掛け孔である可能性も考えられる。
- 15) 倉鹿遺跡の本胎土器の焼成技術を分析した永嶋正春は、漆の塗布の仕方や彩文の文様構成などから、大陸文化の影響を想定しているが、具体的な比較・分析が行われているわけではないので、説得力に欠ける(永嶋2006)。
- 16) 晩期後半の特殊壺は、石川日出志や鈴木正博などが既に分析を加えており、晩期後半から弥生時代まで継続的に製作されていることを指摘している(石川2005、鈴木2000・2003a)。両氏の論考は、いずれも東北地方南部から関東地方の特殊壺を対象とし、主に弥生時代の特殊壺との関係性を重視した研究である。本稿で取り上げる東北地方の特殊壺と両氏の取り上げる特殊壺を別に比較することはできないが、同時期において広域に「特殊壺」が展開することは、今後比較・検討の必要性はある。本稿は、特殊壺の分析が主題ではないので、別稿で詳しく述べたいと思っている。
- 17) 第16図2aは若林勝邦氏が亀ヶ岡出土としたもので(若林1892)、同図2bは杉山寿栄男によって十面鍬遺跡出土と報告された土器である(杉山1923)。口縁部の穿孔や文様・装飾などから、同一個体であると考えられる。「縄文土器のはなし」(筆者未見、中村1990を参照した)での土器を取り上げた甲野勇は、「大洞A式、青森県十面鍬」としており、いずれの遺跡出土のものははっきりしない。

同様の土器は亀ヶ岡遺跡でも出土しているが(第16図1)、屏風絵であることを考慮にいれても、文様や器形などで第16図2とは大きく異なる。

- 18) 須藤隆は、本稿の「東北型特殊壺」を「浮線渦巻文土器」と呼称している(須藤2000)。しかし、これらの文様構成をよく確認すると、渦文ではなく、同心円文である場合がほとんどであるので、須藤の用いる「浮線渦巻文土器」の名称は適切ではない。おそらく須藤は、東海・北陸地方に分布する「浮線渦巻紋系土器」や「沈線紋系土器」(永井1994)との関連から造詣したものであろう。
- 19) 第17図7の特殊壺は、破片資料から復元したため、器形に若干のズレがある可能性もある。特に、胴下半の破片は、亀ヶ岡・十面鍬遺跡同様、同心円文を基本とした曲線的なモチーフであるので、上下左右の判断が誤っている可能性があることを付記しておく。
- 20) 口縁部に孔を有し、下彫になる器形は、縄文中期の有孔彌付土器などと同様であり、土器だけの視点ではなく、他の材質容器との関連(模倣現象)も考慮しなければならないであろう。弥生時代の木製容器に、下彫のものが多いのも興味深い。
- 21) 刀根町荒原遺跡の土器に描かれている文様(縦位置に展開する流水平型変形工字文)は、注6で述べた佐井八幡堂遺跡の蓋と共通する文様構成である点は注目される。
- 22) 地蔵田B遺跡の土器については、実見した結果、積極的に弥生前期土器として扱えるかどうか判断に迷う。変形工字文だけをみるとならば、大洞A式に位置づけるのが妥当と考える。
- 23) そもそも「最も弥生土器的な写し」という行為は、木製高杯を中心にみられる弥生中期中葉以降の現象であり、その現象を「ひょうたん写し」にまで援用することは、やや論に飛躍がありすぎるを感じる。吉田も指摘するように、「ひょうたん写し」の土器は「祭祀的色彩の強さを予測させる」ものであり、「写し」行為が一般化した弥生後半の高杯とは、その製作・用途においては相違点が大きすぎる。むしろ、祭祀的な容器の模倣現象は縄文土器の「写し」行為とよく似ており、「ひょうたん写し」の初現である弥生前末期の段階とも時間的に離れてはいないと感じる。

参考・引用文献

- 秋山真吾・藤沼邦彦 2007 「N、東北地方各地の亀ヶ岡文化の遺物について」弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告5 亀ヶ岡文化遺物実測図集(3) 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター pp.155~175.
- 阿部明彦・黒坂雅人 1991 『山形県埋蔵文化財調査報告書第164集 西海瀬遺跡第1次発掘調査報告書』 山形県教育委員会
- 安部実・伊藤邦弘 1987 『山形県埋蔵文化財調査報告書第117集 生石2遺跡発掘調査報告書(3)』 山形県教育委員会
- 安部実・月山隆弘 1988 『山形県埋蔵文化財調査報告書第128集 げんない遺跡発掘調査報告書』 山形県教育委員会
- 阿部 豊 1999 『宮古市埋蔵文化財調査報告書54 千鶴IV遺跡—宮古市水産課千鶴地区漁港漁村総合整備事業開催—』 宮古市教育委員会
- 阿部芳郎 2004 「縄文時代後晩期における角底形土器の研究」『駿台史学』121 駿台史学会 pp.71~94.
- 荒井徳志紀・鬼澤昭夫・黒沢哲郎・戸村勝司郎 2006 〔(財)香取都市文化財センター調査報告書第99集 志摩城跡・二ノ台遺跡I一 経営体育成基盤整備事業鳥居地区に伴う発掘調査報告書〕—(財)香取都市文化財センター
- 荒川隆史・石丸和正・猪狩俊哉・加藤学・赤坂亨 2004 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V 青田遺跡」 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川日出志 2005 「縄文晩期の刷毛法から弥生土器の磨消繩文へ」「地域と文化的考古学」 明治大学考古学研究室 pp.305~318.
- 石川日出志・増子正三・渡辺裕之 1992 『安田町文化財調査報告書12 六野瀬遺跡1990年調査報告書—立川ブランド工業株式会社東日本工場増設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書—』 安田町教育委員会

- 石郡周誠一・安田忠市・納谷信広 1992 「上新城中学校遺跡―学校改築に伴う緊急発掘調査報告書―」 秋田市教育委員会
- 一迫町教育委員会 1977 『巻巻遺跡』 一迫町教育委員会
- 伊藤玄三・小倉淳一・田部秀男 1996 「T 6 赤沢郡前沢町 T 6001川岸場」『法政大学所蔵 伊藤鉄夫・陽夫考古学資料目録Ⅱ』 法政大学文学部考古学研究室 pp.205~221.
- 伊東信雄 1985 「東北地方における稻作農耕の成立」『日本史の黎明 八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』 六興出版 pp.335~365.
- 伊東信雄・須藤隆 1985 『山王町遺跡調査図録』 一迫町教育委員会
- 伊藤正人 1990 「土製蓋小考―縄文文化から後期の関東地方を中心に―」『考古学研究』36~4 考古学研究会 pp.74~92.
- 伊藤 実 2004 「土器の蓋―弥生土器の蓋の効用とその意義―」『考古学論集―河瀬正利先生退官記念論文集―』 河瀬正利先生退官記念事業会 pp.375~394.
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1984 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第74集 安堵屋敷遺跡発掘調査報告書」
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 宇野隆夫 1996 「木製食器と土製食器―弥生変革と中世変革―」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器―弥生期から平安期にかけての木製食器―』 理藏文化財研究会 pp.7~21.
- 宇部則保・小保内拓也 2002 「八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集 是川中居遺跡―長田沢地区―」 八戸遺跡調査会
- 宇部則保・小久保拓也 2002 「八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集 八戸市内遺跡発掘調査報告書第15 是川中居遺跡1」 八戸市教育委員会
- 及川真紀・森一欽・依田恵美子・中野益男 2004 「前沢町文化財調査報告書第16集 川岸場I 遺跡第2次発掘調査報告書」 前沢町教育委員会
- 大友透・福山宗志 1995 「名取市文化財調査報告書第36集 平成6年度年報」 名取市教育委員会 pp.23~40.
- 大場直彌・水見淳哉 1998 「国史跡山王町遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 一迫町教育委員会
- 岡本基一 2001 「乾遺跡発掘調査報告書 A・C区下層編」 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 小島嶌知世・菊池寛子・稲野裕介 2004 「北上市埋蔵文化財調査報告書第61集 丸子館跡」 北上市教育委員会
- 小田野哲吾 1983 「岩手県出土の「蓋形土器」について」『岩手県立博物館研究報告』1 岩手県立博物館 pp.66~83.
- 加藤学・荒川隆史 1999 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡」 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子啓彦・阿部勝則・工藤利幸 1999 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第296集 長谷町貝塚発掘調査報告書―県営長谷堂住宅替事業関連遺跡発掘調査―」 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 菊池徹夫・岡内三眞・高橋龍三郎 1996 「青森県空虚蔵遺跡出土土器の共同研究」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』42 早稲田大学大学院文学研究科 pp.81~103.
- 工藤 大はか 1997 「青森県立郷土館調査報告書第40集 考古―11 馬淵川流域の遺跡調査報告書」 青森県立郷土館
- 工藤利幸・晴山雅光 1999 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第283集 細田遺跡発掘調査報告書―開墾水地事業関連調査―」 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 黒坂雅人 2003 「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集 釜淵C遺跡発掘調査報告書」 (財) 山形県埋蔵文化財センター
- 甲野 勇 1976 「縄文土器の話」 学生社
- 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1988 「中山地区土地改良共同実行事業関連発掘調査報告書2 滝ノ口遺跡」 郡山市教育委員会
- 小柴吉宏ほか 1990 「三島町文化財調査報告書10集埋蔵文化財調査報告書V 莊屋敷遺跡II(河岸段丘低湿地の遺跡)―国道252号線改良工事に伴う発掘調査報告書―」 三島町教育委員会
- 小玉 準 1983 「秋田県文化財調査報告書第101集 平鹿遺跡発掘調査報告書」 秋田県教育委員会
- 兎玉大成 1994 「特集 青森市沢山(1) 遺跡の出土遺物」『燃系文』21 青森山田高等学校考古学研究会
- 兎玉大成・相馬俊也 2004 「宇鉄遺跡における縄文晩期中葉―末葉の土器」『研究紀要』7 青森大学考古学研究所 pp.1~38.
- 後藤勝彦 1972 「宮城県七ヶ浜町二月田貝塚(Ⅱ)」 宮城県県立女子高等学校社会部
- 小林圭一 2005 「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集 高瀬山遺跡(HO地区) 発掘調査報告書」 (財) 山形県埋蔵文化財センター
- 小林達雄・小川忠博 1989 「縄文土器大観4 後期 晩期 縄文」 小学館
- 小山内透 2000 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第317集 川岸場II 遺跡発掘調査報告書―北上川上流改修事業(白山茶園)に伴う発掘調査―」 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 今田史明 2001 「河北町埋蔵文化財調査報告書第4集 花ノ木遺跡発掘調査報告書」 河北町教育委員会
- 柳原謙高 2001 「市浦村埋蔵文化財調査報告書第12集 岩井・大沼遺跡―県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―」 市浦村教育委員会
- 佐々木和博・古川一明・大槻仁一 1985 「宮城県文化財調査報告書第103集 香ノ木遺跡 色麻古墳群―昭和59年宮城県営園場整備等関連遺跡詳細調査報告書―」 宮城県教育委員会
- 佐々木洋 2002 「宮野貝塚緊急発掘調査報告書」 大船渡市教育委員会
- 管平克子・小山内透 1994 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第206集 向館遺跡発掘調査報告書―一般県道上米内停車場整備関連遺跡発掘調査―」 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 佐竹寛・藤方正治・下村裕・曾我貴行 2003 「高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第78集 居地遺跡群IV—四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 佐藤傳藏 1896 「本邦石器時代遺跡より発見せる土製の蓋と蓋らしもの」『東京人類学会雑誌』143 東京人類学会 pp.167~171.
- 佐藤信行 1963 「蟹沢遺跡―山形北部に於ける縄文晚期終末の研究―」『山川考古』7 村山考古同好会 pp.1~17.
- 佐藤祐輔 2005a 「紳子田遺跡が投げかける問題」『山形考古』8~1 山形考古学会 pp.1~32.
- 佐藤祐輔 2005b 「縄文時代晚期後業について」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集 高瀬山遺跡(HO地区)発掘調査報告書』 (財) 山形県埋蔵文化財センター pp.369~373.
- 佐藤祐輔 2006 「生石2遺跡をめぐる研究史―「生石式」と「生石2式」―」「さあべい」22 さあべい同人会 pp.26~44.
- 佐藤祐輔 2008 (未刊) 「変形工字文覚書―変形する「工字文」と変形する「変形工字文」―」「地域と文化の考古学II」 明治大学文学部考古学研究室
- 佐藤嘉広 1992 「東北地方における遠賀川系土器の受容と製作」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』 加藤稔先生還暦記念会 pp.729~762.
- 佐原 真 1975 「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史』1 岩波書店 pp.113~182.
- 佐原 真 1976 「蓋一蓋形土器」『日本の美術125 弥生土器』至文堂 pp.40~41.
- 設楽博己 2004 「遠賀川系土器における浮遊文土器の影響」『島根県考古学会誌』20・21合併号 島根考古学会 pp.189~209.
- 品田高志・平吹靖 2001 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書第37集 新潟県柏崎市十三本塚遺跡群・十三本塚北遺跡発掘調査報告書」 柏崎市教育委員会
- 清水潤三 1959 「考古学・民族学叢刊第三輯 亀ヶ岡遺跡―青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究―」三田史学会
- 親町喬・野村忠司 2000 「龍峰遺跡発掘調査報告書II 遺物編」中郷村教育委員会
- 菅原俊行・安田忠市 1986 「地蔵田B遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田市教育委員会 pp.11~261.
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 「京都帝國大学文学部考古学研究報告第16冊 大和唐古弥生式遺跡の研究」桑名文星堂
- 桙原莊介・戸沢光則・小林三郎 1969 「茨城県鹿島内(浮島)における縄文・弥生両時代の遺跡」『考古学集刊』4~3 東京考古学会 pp.33~72.
- 杉山寿男 1923 『原始文様集』工芸美術研究会
- 杉山莊平 1967 「糞虫仙人小伝」『物質文化』10 物質文化研究会 pp.22~32.
- 鈴鹿良一ほか 1988 「福島県文化財調査報告書第194集 真野ダム関連遺跡発掘調査報告XII 羽白C遺跡(第1次)」福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴木克彦・岩渕宏子 2001 「青森県立郷土館収蔵資料図録―第3集・考古編(2)―」青森県立郷土館
- 鈴木克彦・木村鉄次郎 1988 「青森県立郷土館調査報告第22集 考古ー7 名川町剣吉荒町遺跡(第2地区)」発掘調査報告書・青森県立郷土館
- 鈴木 源 1998 「弥生時代の蓋形土器」『列島の考古学 渡辺誠先生還暦記念論集』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会 pp.151~159.
- 鈴木正博 2000 「[土器型式]の眼差しと「細別」の手触り―大洞A 1式「縁辺文化」の成立と西部弥生式の位相―」『埼玉考古』35 埼玉考古学会 pp.3~31.
- 鈴木正博 2002 「弥生時代の板谷波瀬」『関東弥生研究会第2回研究発表会』関東弥生文化研究会 pp.1~14.
- 鈴木正博 2003a 「亀ヶ岡式」から「遠賀川式」へ―「文様帶クロス」関係から観た弥生式形成期の複合構造と相互の密結合―』日本考古学協会第69回年会研究発表要旨 日本考古学協会 pp.56~60.
- 鈴木正博 2003b 「遠賀川式」文様帶への型式構え』『埼玉考古』38 埼玉考古学会 pp.3~24.
- 須藤 隆 1973 「土器組成論」「考古学研究」19~4 考古学研究会 pp.62~89.
- 須藤 隆 1983 「東北地方の初期弥生土器―山王郡崩式―」『考古学雑誌』68~3 日本考古学会 pp.1~53.
- 須藤 隆 1996 「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『日本文化研究所研究報告』33 日本文化研究所 pp.1~40.
- 須藤 隆 2000 「弥生時代の東北地方」『宮城考古学』2 宮城県考古学会 pp.1~24.
- 開闢之・石川出志ほか 1988 「鳥屋遺跡I・II・新潟県豊栄市鳥屋遺跡発掘調査報告」豊栄市教育委員会
- 高瀬克範 2000 「東北地方初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』46~4 考古学研究会 pp.34~54.
- 高橋正之・高橋与右衛門 1980 「岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集 頭所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市つなぎⅢ・つなぎⅣ・上野・南の又・室ヶ沢I・II遺跡 雪石市広瀬II遺跡(昭和52年度・53年度)」(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋龍三郎 1993 「大洞C 2式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』4 阿佐ヶ谷先史学研究会 pp.83~152.
- 高坂勝喜ほか 1991 「野々市町御経塚遺跡」野々市町教育委員会
- 田嶋壽大・斎藤邦雄 1995 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集 大日向II遺跡発掘調査報告書―第2次・第5次調査―」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 田代孝・中山誠二 1984 「第2回特別展 縄文時代の酒造具―有孔釣付土器展―」山梨県立考古博物館
- 橋善光・奈良正義・小笠原正明・薗野哲男 2001 「大畑町文化財報告書第12集 二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書」大畑町教育委員会

- 田畠 弘 2003 「田上町文化財調査報告書第20集 保明浦遺跡Ⅲ—新潟県営高生産性大区画は場整備事業【田上郷地区】埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」 田上町教育委員会
- 田畠 弘 2004 「田上町文化財調査報告書第21集 保明浦遺跡Ⅳ—新潟県営渓水防除事業【田上郷地区】埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」 田上町教育委員会
- 田村誠一 1968 「第3節 葉器Ⅱ号遺跡」「岩木山—岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書一」 岩木山刊行会 pp.89~116.
- 角南龍一郎 2003 「弥生時代前期の蓋形土器—蓋の再発見と四国の事例—」「中の遺跡—第8次調査— 総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 丸亀市教育委員会・(財)元興寺文化財研究所 pp.79~86.
- 東北大文学部 1982 「考古学資料図録」 I 東北大文学部
- 永井宏幸 1994 「沈線紋系土器について「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 朝日遺跡V(土器編・総論編)」(財)愛知県埋蔵文化財センター pp.363~376.
- 永嶋正春 2006 「居城遺跡出土木胎漆器の漆塗に見られる大陸の様相について」『原始絵画の研究 論考編』 六一書房 pp.85~93.
- 中村五郎 1988 「弥生文化の曙光」 未来社
- 中村五郎 1990 「第V章人工遺物 第1節土器」「三島町文化財調査報告10集埋蔵文化財調査報告書V 荒屋敷遺跡Ⅱ(河岸段丘低湿地の遺跡)」一国道252号線改工事に伴う発掘調査報告書一 三島町教育委員会 pp.181~502.
- 中村良幸 1979 「大迫町埋蔵文化財報告第4集 小田遺跡発掘調査報告書」 大迫町教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図録 近畿原始編」 奈良国立文化財研究所
- 林 謙作 1966 「軒形押式土器の蓋と田舎船式土器の蓋」「物質文化」7 物質文化研究会 pp.16~24.
- 藤田弘道・矢島敬之ほか 1987 「砂津遺跡発掘調査報告書—図版編—」 弘前市教育委員会
- 藤沼邦彦・小川忠博 2006 「弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告3 ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」の図録」 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 藤村東男ほか 1977 「北上市文化財調査報告第18集 九年橋遺跡第3次調査報告書」 北上市教育委員会
- 藤村東男ほか 1978 「北上市文化財調査報告第23集 九年橋遺跡第4次調査報告書」 北上市教育委員会
- 藤村東男ほか 1979 「北上市文化財調査報告第25集 九年橋遺跡第5次調査報告書」 北上市教育委員会
- 藤村東男ほか 1984 「北上市文化財調査報告第35集 九年橋遺跡第7次調査報告書」 北上市教育委員会
- 藤村東男ほか 1986 「北上市文化財調査報告第42集 九年橋遺跡第9次調査報告書」 北上市教育委員会
- 藤村東男ほか 1987 「北上市文化財調査報告第44集 九年橋遺跡第10次調査報告書」 北上市教育委員会
- 藤村東男ほか 1988 「北上市文化財調査報告第47集 九年橋遺跡第11次調査報告書」 北上市教育委員会
- 藤村東男ほか 1991 「北上市文化財調査報告第66集 九年橋遺跡第10次調査報告書(補遺)」 北上市教育委員会
- 宮本節子 2000 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第332集 相沢遺跡発掘調査報告書—畠地帯総合土地改良事業—」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村木淳・小久保拓也・杉山陽亮 2005 「八戸市埋蔵文化財調査報告書第107集 八戸市内埋蔵文化財発掘調査報告書20 是川中居遺跡4」 八戸市教育委員会
- 森本六爾 1934 「煮沸形態と貯蔵形態—獣生式土器の蓋—」「考古学評論」1~1 東京考古学会 pp.32~39.
- 八木勝彦・新井田えり子・吉田真由美 2006 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第481集 大橋遺跡発掘調査報告書—中山間総合整備事業岩間地区開遺跡発掘調査—」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 八木獎三郎 1902 「日本考古学」 蔦書房
- 山口博之・押切淳・黒坂広美 1995 「山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集 宮の前遺跡第2次発掘調査報告書」(財)山形県埋蔵文化財センター
- 山内清男 1937 「日本遠古之文化」 先史考古学会
- 山内清男 1940 「堀之内式」「日本先史土器図譜 第一部 第六輯」 先史考古学会
- 吉田秀享・吉野謙也 2001 「福島県文化財調査報告書第384集 県道古殿須賀川線(うつくしま未来博開通)遺跡発掘調査報告 松ヶ作A遺跡」 福島県教育委員会
- 吉田 広 2004 「ひょうたん写しの土器」「考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—」 河瀬正利先生退官記念事業会 pp.363~374.
- 若林勝邦 1892 「六孔又ハ十孔ヲ有スル貝塚土器」「東京人類学会雑誌」78~7 東京人類学会 pp.413~414.
- 渡辺 誠 1994 「編み物の容器—籠と釜、筍—」「季刊考古学」47 雄山閣 pp.35~38.

<図版出典>

- 第1図 佐藤1898
- 第2図 1: 西海瀬遺跡（阿部・黒板1991）、2: 相ノ沢遺跡（宮本2000）、3: 十三本塚北遺跡（品田・平野2001）
- 第3図 1~3: 龍峯遺跡（親野・野村2000）、4~5: 小田遺跡（中村1979）、6: 向船遺跡（笠平・小山内1994）、7: 二月田貝塚（後藤1972）、8: 羽白C遺跡（鈴鹿はか1988）、9: 沼津貝塚（東北大文学部1972）
- 第4図 平底遺跡（小玉1983）
- 第5図 1~5: 安堵屋敷遺跡（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1984）、6: 二枚橋遺跡（橋はか2001）、7: 九年橋遺跡（藤村はか1978）、8: 宮ノ前遺跡（下段: 山口はか1995を再トレース、上段: 筆者作図、トレース、山形県埋蔵文化財センター蔵）、9: 滝ノ口遺跡（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団1988）
- 第6図 1~14: 二枚橋（2）遺跡（橋はか2001）、2: 宮野貝塚（佐々木2002）、3~10: 九年橋遺跡（3~5: 8: 藤村はか1987、4~6: 藤村はか1988、7~10: 藤村はか1984、9: 藤村はか1986）、11: 垂瀬C遺跡（向出博之氏作図、筆者トレース、山形県埋蔵文化財センター蔵）、12: 山王壠遺跡（大場・水見1998）、13: 香ノ木遺跡（佐々木はか1985）
- 第7図 1: 二枚橋（2）遺跡（橋はか2001）、2: 沢山（1）遺跡（見玉1994）、3: 鶴ヶ岡遺跡（鈴木・岩間2001）、4~21: 刃吉荒町遺跡（鈴木・木村1988）、5~6: 上新城中学校遺跡（石郡同はか1992）、7: 川岸場I遺跡（及川はか2001）、8: 山王壠遺跡（大場・水見1998）、9: 漆坊遺跡（筆者作図・尾花尻市教育委員会蔵）、10: 垂瀬C遺跡（向出博之氏作図、筆者トレース、山形県埋蔵文化財センター蔵）、11: 花ノ木遺跡（筆者作図・河北町教育委員会蔵）、12: 鰐沢遺跡（佐藤1963）、13~14: げんだい遺跡（安部・月山1988、拓本筆者）、15: 高瀬山遺跡（小林2005を再トレース）、16: 大沼遺跡（柳原2001を再トレース）、17: 宇鉄遺跡（見玉・相馬2004）、18: 紺田遺跡（工藤・晴山1999）、19~20: 川岸場II遺跡（小山内2000）、22: 墓内遺跡（杉原はか1969）
- 第8図 原団: 小林圭一氏提供
- 第9図 1: 是川中居遺跡（宇部・小保内2002）、2~5: 九年橋遺跡（2~4: 藤村はか1977、3: 藤村はか1987、5: 藤村はか1991）、6: 荘屋敷遺跡（小柴はか1990）、7: 青田遺跡（荒川はか2004）、8: 鳥屋遺跡（関・石川はか1988）、9~11: 保明浦遺跡（田畠2004を再トレース）、12: 乾遺跡（岡本2001）、13: 智頭枕田遺跡（設楽2004）、14~15: 唐古遺跡（木永はか1943）
- 第10図 1~3: 是川中居遺跡（1~2: 村木はか2005、3: 宇部・小久保2002）
- 第11図 須藤1996
- 第12図 鶴ヶ岡遺跡（写真: 藤沼・小川2006（小川忠博氏撮影）、模式図: 藤沼・小川2006より筆者作成）
- 第13図 1: 唐古遺跡、2: 筒江片引遺跡（奈良国立文化財研究所1993）
- 第14図 1: 居德遺跡（佐竹はか2003）、2: 羽白C遺跡（鈴鹿はか1988）、3~5: 志摩城跡（荒井はか2006）

- 第16図 1: 鶴ヶ岡遺跡（1 a: 清水1959、1 b: 杉山1967）、2: 十面沢遺跡（2 a: 若林1892、2 b: 杉山1923）、3: 薩樂（II）遺跡（秋山・藤沼2007）、4: 沢山（1）遺跡（見玉1994）、5~8: 9: 刃吉荒町遺跡（5~8: 鈴木・木村1988、9: 工藤はか1997）、6: 長谷堂貝塚（金子はか1999）、7: 大沼遺跡（柳原2001）、10~12: 九年橋遺跡（10: 藤村はか1991、11: 藤村はか1977、12: 藤村はか1984）、13: 大橋遺跡（八木はか2006）、14~16: つなぎIII遺跡（高橋・高橋1980）

- 第17図 1: 九年橋遺跡（藤村はか1987）、2: 川岸場I遺跡（及川はか2001）、3: 千鶴IV遺跡（阿部1999）、4: 上新城中学校遺跡（石郡同はか1992を再トレース）、5: 卷屋遺跡（一迫町教育委員会1977）、6: 山王壠遺跡（実測図: 伊東・須藤1985、拓本: 藤沼・小川2006）、7~8: 花ノ木遺跡（筆者作図・河北町教育委員会蔵）、9: 蟹沢遺跡（佐藤1963）

- 第18図 1~2: 青田遺跡（荒川はか2004）、3: 和泉A遺跡（加藤・荒川1999）、4: 保明浦遺跡（田畠2004を再トレース）、5~6: 乾遺跡（岡本2001）

- 第19図 1~2: 沢山（1）遺跡（見玉1994）、3~4: 上新城中学校遺跡（石郡同はか1992）

- 第20図 1~2~11: 砂沢遺跡（藤田はか1988）、3: 生石2遺跡（佐藤2005 a）、4: 川岸場II遺跡（小山内2000）、5: 大日向II遺跡（田舎・斎藤1995、6: 君成田下野場遺跡（佐藤1992）、7~8~12: 地藏田B遺跡（菅原・安田1986、拓本筆者）、9~13: 十三塚遺跡（大友・福山1995）、13: 六野瀬遺跡（石川はか1992）、14: 青田遺跡（荒川はか2004）、15: 九年橋遺跡（藤村はか1991）、16: 丸子館遺跡（美濃国・小田鶴はか2004、拓本筆者）、17: 松ヶ作A遺跡（吉田・吉野2001）

(2007年4月27日脱稿)

追記: 本論文脱稿後、須藤隆2007『東日本縦文・弥生時代墓葬の発展と地域性』と鈴木正博2007『亀ヶ岡式』分布の南下と西日本の塗工芸一「彩色塗文様帶」による弥生式文化形成視点の確立―「環境史と人類」第1冊の2本の論考を目にした。須藤は本稿の蓋と特種蓋を集成し、その組み合わせの可能性を指摘している。鈴木は居德遺跡出土木胎漆器の蓋の系統を北陸地方晩期「丁野式」の土製蓋に求めている。いずれの論考も本稿に深く関係するため、機会を得て逐次詳述していきたい。

山形県内の古墳時代前期土師器について

— 近年における発掘調査の成果 —

吉田江美子

1. はじめに

山形県内では、ここ10年程の間に内陸地方の山形盆地で大規模な発掘調査が行われ、古墳時代の集落、中でも前期の資料について膨大な住居跡一括資料などに恵まれる機会を得ている。それまで不明であった古墳時代の集落像が徐々に明らかになり、ようやく県内資料による土器編年作業が可能になりつつある。しかし、まだそれは漠然とした状態であることから、近年の発掘調査の成果を再検討することで、古墳時代前期土師器の編年の位置づけを試みてみたい。

なお今回掲載する資料については、1994年の学習会資料に掲載されたものを含め、1994年から2004年の間に報告書が刊行された山形県内10遺跡について（第1図、表1）、住居跡あるいは土坑内一括資料について対象とする。そのため元屋敷遺跡（山形市・山埋セ2002）、服部・藤治屋敷遺跡（山形市・山埋セ2004a）などでも良好な資料は出土しているが、河川跡からの出土品で一括性の保障が得られないこと、また頁数に限りもあるため、今回は割愛する。

2. 研究小史

山形県における古墳時代の研究は、1968年柏倉亮吉氏・加藤稔氏による古墳時代後期の鶴遺跡出土土師器編年試案を契機に、塙釜式と対応する土器群「宮町式」、さらに南小泉II式に相当する「谷柏式」を加えて、山形県独自の古墳時代土器編年の基礎を示した。その後もこれらを軸として山形における土器編年について、加藤・川崎利夫両氏はそれぞれの立場から研究を進めた。1980年代後半～93年宮城県側では、新資料の増加により古墳時代前期土師器の再検討・再編成の研究が進められ、山形県でもその間徐々に増加する資料をもとに、山形県教育委員会は山形県の土師器の集成（山県教委1986）、阿部明彦氏は土器編年の検討と細分化を行った（阿部1986）。1994年

に山形県埋蔵文化財センターでは、新しい資料の集成を持って丹羽茂氏編年を基準に再検討を試みている（山埋セ1994）。しかし研究の進む宮城・福島県側土器編年（辻編年・辻秀人1994）との照応による土器の年代の検討・決定に終止し、地域編年の完成には至らなかった。

その後更なる古墳時代前期の遺跡の発見と膨大な資料増加に伴い、2004年田嶋明人氏協力のもと漆田編年による土器編年の検討を試み、その成果を『萩原遺跡報告書』



第1図 遺跡位置図

表1 遺跡所在地

No	遺跡名	所在地
1	越り屋遺跡	白鷹町大字荒砥
2	萩原遺跡	山形市大字長谷堂
3	今塚遺跡	山形市大字今塚
4	長表遺跡	山形市大字今塚
5	馬洗場B遺跡	山形市大字中野
6	洪江遺跡	山形市大字洪江
7	高橋南遺跡	天童市大字高橋
8	菖蒲江1遺跡	天童市大字高橋
9	藏増押切遺跡	天童市大字藏増
10	板橋2遺跡	天童市大字藏増

内で提示した(山理セ2004b)。なお1994年と2004年の成果については、それぞれの資料に則り筆者が加筆し表としてまとめた(表3)。

また近年植松暁彦氏が、新潟県考古学会シンポジウムにおいて山形県の古墳時代前期の土器編年案を示している(植松2005)。

3. 土器の分類

以下表2に示す基準で土器を遺構ごとに分類し、表4にその分布を示しておく。しかし欠損のため分類できないうものは分類から削除した。また各土器の組成は表5に

表2 土器の分類基準

供 給 具	器 台	A	杯部が単純口縁	a	杯部口縁が直行する	1	脚部が直行する
		B	杯部が有段口縁	b	杯部口縁が外反する	2	脚部が外反する
		C	その他	c	杯部口縁が内弯する		
高 杯	杯	A	有段の坏部	a	長い棒状脚をもつ(開脚部に対して2:1以上)	1	中空脚
		B	無段の坏部	b	短い棒状脚をもつ(開脚部に対して2:1以下)	2	中実脚
				c	上部から開脚する		
实用的 器種	小 型 壺 類	A	単純口縁	a	口縁が直行する		
				b	口縁が外反する		
				c	口縁が内弯する		
	ミニチュア土器	B	複合口縁	a	有段口縁		
				b	折返し口縁		
実用的 器種	壺 類	A	底部が平底で口縁が内弯する				
		B	体部で一度内弯し、口縁は開く				
	大型壺類	A	単純口縁	a	口縁が直行する		
				b	口縁が外反する		
				c	口縁が内弯する		
		B	複合口縁	a	有段口縁	1	加飾がある
				b	折返し口縁		
実用的 器種	小型壺類	A	単純口縁	a	口縁が直行する	1	頸部括れが鋭角的
				b	口縁が外反する	2	頸部括れが曲線的
				c	口縁が内弯する		
		B	複合口縁	a	有段口縁		
				b	折返し口縁		
		C	台付壺	c	口縁につまみ出しがある		
	瓶	A	単純口縁	a	口縁が直行する	1	頸部括れが鋭角的
				b	口縁が外反する	2	頸部括れが曲線的
				c	口縁が内弯する		
		B	複合口縁	a	有段口縁		
				b	折返し口縁		
塊 鉢	A	單孔	a	丸底	1		
		B	複数孔	b	平底	2	
	A	体部で一度内弯し、口縁は開く	a	丸底	1		
		B	底部から口縁まで屈曲しないもの	b	平底	2	
	支 脚	A	角型				

示したとおりである。

4. 考 察

以上のように古墳時代前期資料を検討した結果、現在いくつかの一括出土土器群が、山形県内の土器編年の中軸として位置づけされる見通しを得たが、ここではその土器群の形態的特徴と類例を考察していく。なお土器群の年代を考慮する上で、宮城県の辻畠年と北陸の漆町編年を参考として用いるため、文章中これら編年用語が混在することを了承いただきたい。両編年の時期対応は表3に示している。

【洪江遺跡 S T706・第8図】

器台の出土資料であるが、形態上の特徴から北陸系漆町5・6群に属すると田鶴氏に指摘されている。

【今塚遺跡 S T211・第5図】

S T211資料について、壺・小型丸底壺・高杯のセットであり、供膳具としての赤彩土器で組成されている。壺の口縁部は山形盆地内では出土例の多い直行口縁（A a型）で、壺・壺類を含めると他遺跡の資料を見た場合、この型に折返し口縁型（B b型）や、口縁や頸部に加飾が施された型（1型）が伴う例が多い。

またこの土器群の高杯坏部は浅く、坏部器形は緩やかな曲線あるいは直線的なラインを描き継ぎを持たない（B型）ことから、東海系の古相の特徴を持つと思われる（阿部・吉田2004）。この高杯と直行口縁壺・折返し口縁壺の共伴関係は萩原遺跡S T 5（第3図）・6（第4図）で顕著であり、他高塚南遺跡S T 8（第8図）・S T208（第12図）などでも見受けられる。

このS T211資料は山形盆地の古墳時代「土器群」としては古段階の様相を示しており、4世紀初頭～前半（漆町8群）の所産と考えられている（阿部・吉田2004）。

【今塚遺跡 S T702・第6図】

高杯・小型丸底壺・壺・壺・ミニチュア土器のセットで、やはり供膳具は赤彩土器で組成されている。高杯の坏部に稜のないB型に加え、有稜のA型が出現して脚部も棒状化・長脚化していく（b型からa型へ移行）とい

表3 各遺跡年代表

宮城編年 (辻編年)	北陸漆町編年	宮町	山形西高4住	熊の台39住	坊屋敷70住	下槇	比丘尼平	調訪前	天神森古墳	福井森古墳	三和	開B	畠田	廻り屋14住	岡の台	黒藤船	萩原	今塚	馬洗場B	洪江3次	高塚南	葛浦江1	板橋2	長表	藏増押切
5・6																									
-1	7																								
-2																									
-1	8																								
-2	9																								
-3	10																								
-4	11																								
出典		山理セ 1994						報告書				山理セ 2004 b				報告書									

う過程が、このセットから窺える。それと連動するようには器台坏部にも有段或いは稜（B型）が出現する例が、このセットに加え高塚南遺跡S T202などにも存在する。

壺・壺類について、直行口縁（a型）は減少し外反口縁（b型）が増加する傾向にある。

また小型丸底壺では、前段階のものと比べ大型化し頭部がしまりやや横長の球胴の体部を持つ型の出現が見られるようになる。馬洗場B遺跡S T1216（第7図）、高塚南遺跡S T202（第10～11図）ではその良好な共伴関係が窺える。

この一括資料は、4世紀中頃（漆町9群）に属すると推察される。なお、同じ漆町9群段階ながらもS T211資料よりやや新しい段階の資料として、板橋2遺跡S T20-1括資料（第14図）を挙げておく（山理セ2004 b）。

【高塚南遺跡 S T211・第12図】

結合器台・高杯・鉢・小型丸底壺・壺から組成されているセットである。高杯脚部はますます棒状化・長脚化が進み、脚部は中空脚（1型）と中実脚（2型）に分化、坏部は有稜（A型）が主となるが無稜（B型）も皆無となるわけではない。一方で、前段階まで存在した脚部に透孔をもつタイプは姿を消す。

結合器台について辻秀人（辻1995）は、Ⅲ-3期にのみ確認されるとしている。

壺・壺類について整形の粗雑化が進み、頭部の括れは緩くなり（2型）、口縁も器壁が厚く外反する（b型）傾

向が見られる。しかしそれでもなお壺類には複合口縁(B型)が残る。

鉢類では広い平底を持つ鉢が出現する。

これらは前記のとおり辻Ⅲ-3期或いは4期の範疇、古墳時代前期後半に属するものと思われる。

同様の共伴関係をもつ資料として、高擧南遺跡S T 201(第9図)・馬洗場B遺跡S T 1209(第7図)の高杯と複合口縁壺の組成、そして今回未掲載であるが元屋敷遺跡、服部・藤治屋敷遺跡の河川跡出土の土器、下積遺跡

S T 7-1括出土土器(県教委1981)に好例が見られる。

5.まとめ

前項で時期による土器の形態の変化を述べたが、もう一度その変遷を整理したい。

古墳時代前期で変遷の度合いが大きいのは、実用的器種よりも祭祀用供器具であろう。

高杯では時代が下るにつれて壺部にA型→B型、脚部にc型→b型→a型という変化が顕著に認められ、透孔の加飾を失って行く。器台は小型化と壺部A型→A型+B型への器形の変化が進み、前期後半に入ると土器組成の上で急激にその絶対量が減少していく。

大型壺・甕について前期初頭は直行口縁や折り返し・棒状浮文などの加飾口縁が数多く見られるが、やがて時代が下るにつれ外反する単純口縁がその中心となるものの、後半に入っても複合口縁は土器組成の要素として

残っていく。頭部の括れは初頭には鋭角的な「く」の字状の括れを見せるが、後半に入ると次第に括れは緩やかなラインを描くようになる(1型→2型)。

そして土器全体の変化の特徴として挙げられるのが、田嶋明人氏も北陸地方の漆町8群と9群を境に起る現象として述べているが(田嶋1995)、県内でも初頭では土器が「調整が緻密で焼成が良好」であるのに対し、中頃以降土器の粗雑化・器壁の肥厚化が進行するということであろう。

なおこの変遷は、簡単にではあるが第16図に示す。

以上、1994年以降10年間山形県内で発掘された古墳時代前期の資料による土器の変遷を検討した。この期間山形盆地での調査を中心だったため、「山形県内」というよりも『山形盆地内の土器について』といった方が正確かも知れないが、現在鶴岡市において古墳時代前期の遺跡が調査されており、今後庄内地方の古墳時代前期の土器様相も明らかになることと思われる。

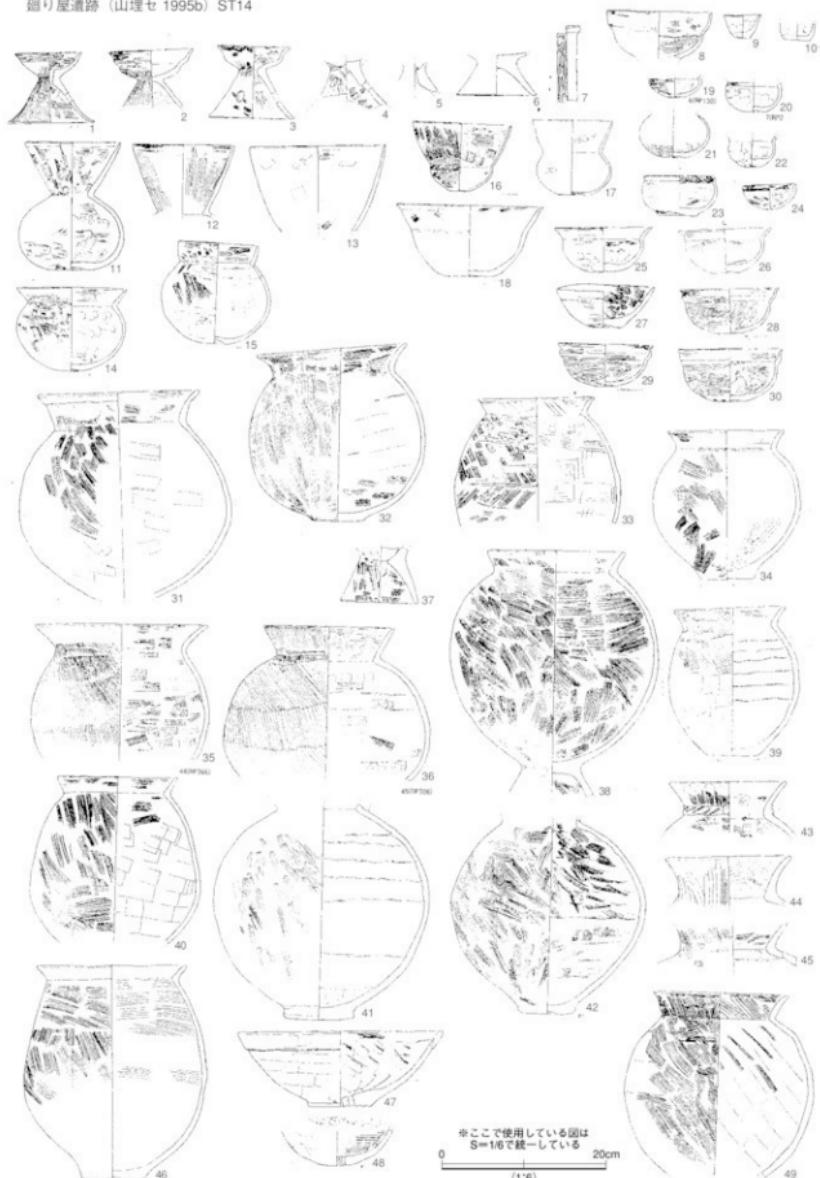
時間と頁数の制約もあって終始抽象的な表現を多用したところであるが、今後の課題としてはこれまで調査されたすべての古墳時代前期の遺跡と遺物を含めた再検討と、それらを基とした編年の作成を目標としたい。

最後に、本稿を執筆するにあたり阿部明彦氏にご指導いただいた。記して謝意を表する。

出典・引用文献

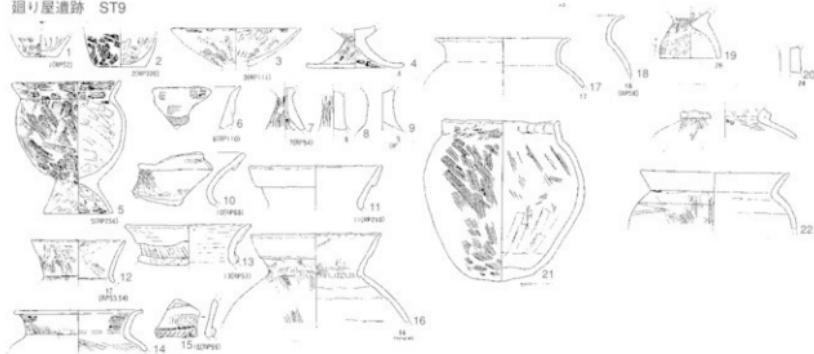
- 阿部明彦1986「最上川流域の土師器編年と関東北との対比」『最上川流域の古墳の年代論』山形考古学会第28回総会研究大会予稿集
- 阿部明彦・吉田江美子2004「出羽の土師器とその編年」『出羽の古墳時代』古志書院
- 石川県立埋蔵文化財センター1986「津町遺跡！」
- 植松義彦2005f 山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相[『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現 シンポジウム資料第1分冊』新潟県考古学会]
- 田嶋明人1995「土器と「古墳時代」」『北陸古代土器研究第5号』
- 辻秀人1995「東北南部における古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集 歴史学・地理学第27号』
- 山形県教育委員会1986「山形県内出土の土師器集成」
- 山形県教育委員会1981「下横道跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第39集
- 山形県埋蔵文化財センター調査研究課1994「山形県内出土の古式土師器について」第1回講内學習会資料
- 山形県埋蔵文化財センター1994 a 「今坂遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書7集
- 山形県埋蔵文化財センター1994 b 「同ノ台発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書15集
- 山形県埋蔵文化財センター1995 a 「畠田遺跡・中野遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書22集
- 山形県埋蔵文化財センター1995 b 「黒り屋遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書27集
- 山形県埋蔵文化財センター2001「長表遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書87集
- 山形県埋蔵文化財センター2002 a 「元原敷地遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書95集
- 山形県埋蔵文化財センター2002 b 「菖蒲江1遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書105集
- 山形県埋蔵文化財センター2003「疋崎押切遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書112集
- 山形県埋蔵文化財センター2004 a 「服部・藤治屋敷2、3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書119集
- 山形県埋蔵文化財センター2004 b 「萩原遺跡2、3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書120集
- 山形県埋蔵文化財センター2004 c 「馬洗場B遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書123集
- 山形県埋蔵文化財センター2004 d 「洪江遺跡2、3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書124集
- 山形県埋蔵文化財センター2004 e 「板橋1遺跡・板橋2遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書125集
- 山形県埋蔵文化財センター2004 f 「高南遺跡・菖蒲江1遺跡・菖蒲江2発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書132集

廻り屋遺跡 (山形セ 1995b) ST14



第2図

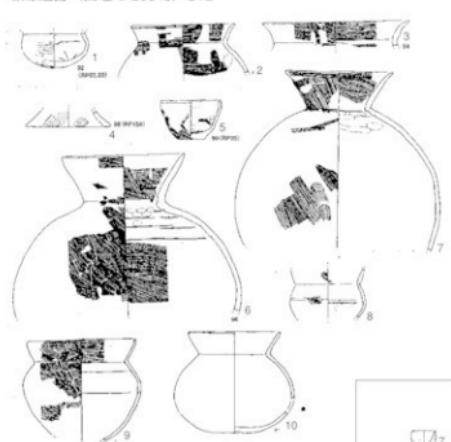
廻り屋遺跡 ST9



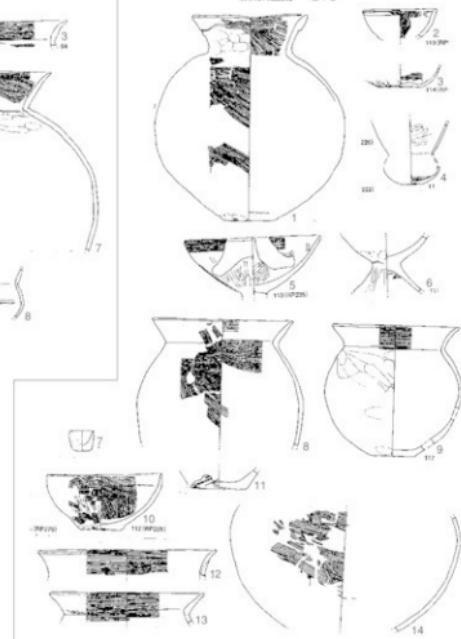
廻り屋遺跡 ST18



萩原遺跡（山埋セ 2004b）ST2

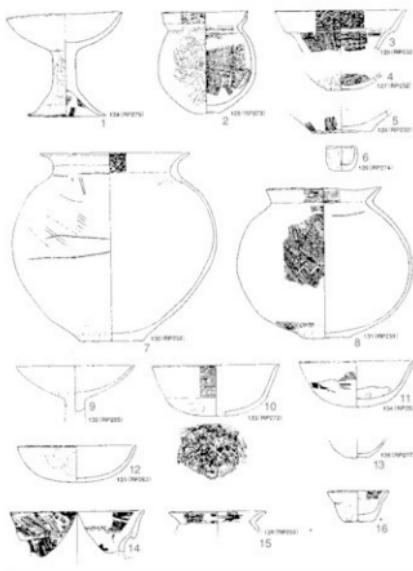


萩原遺跡 ST5



第3図

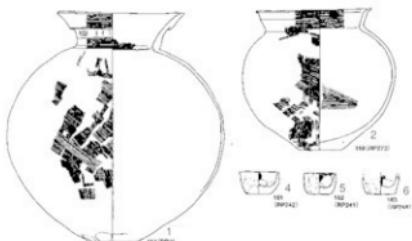
萩原遺跡 ST6



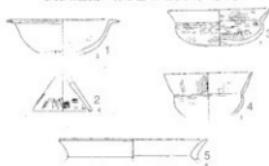
萩原遺跡 ST8



萩原遺跡 ST10



長表遺跡 (山埋セ 2001) ST9

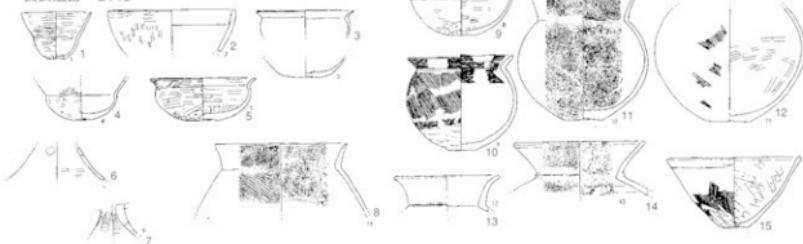


長表遺跡 ST27

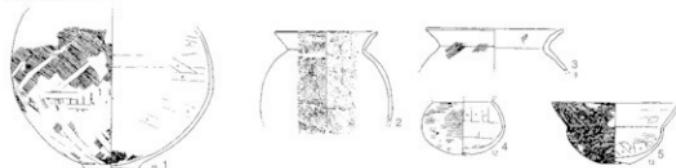


第4図

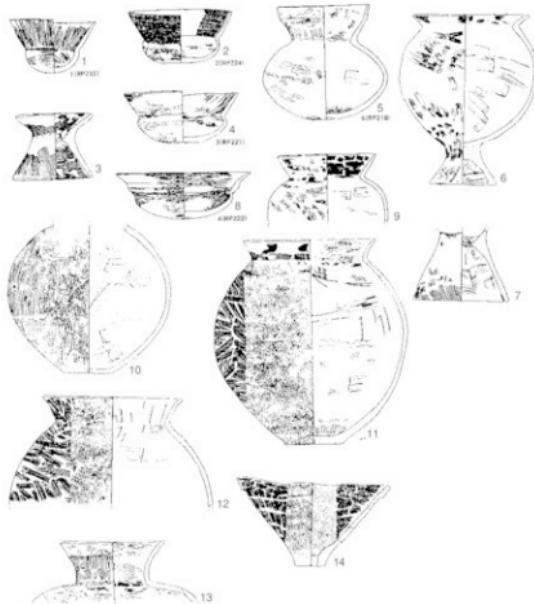
長表遺跡 ST19



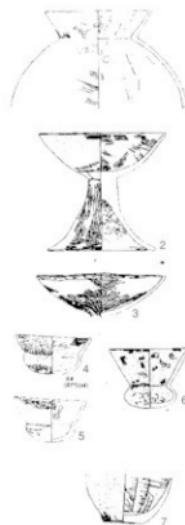
長表遺跡 ST12



今塚遺跡（山埋セ 1994a）ST5

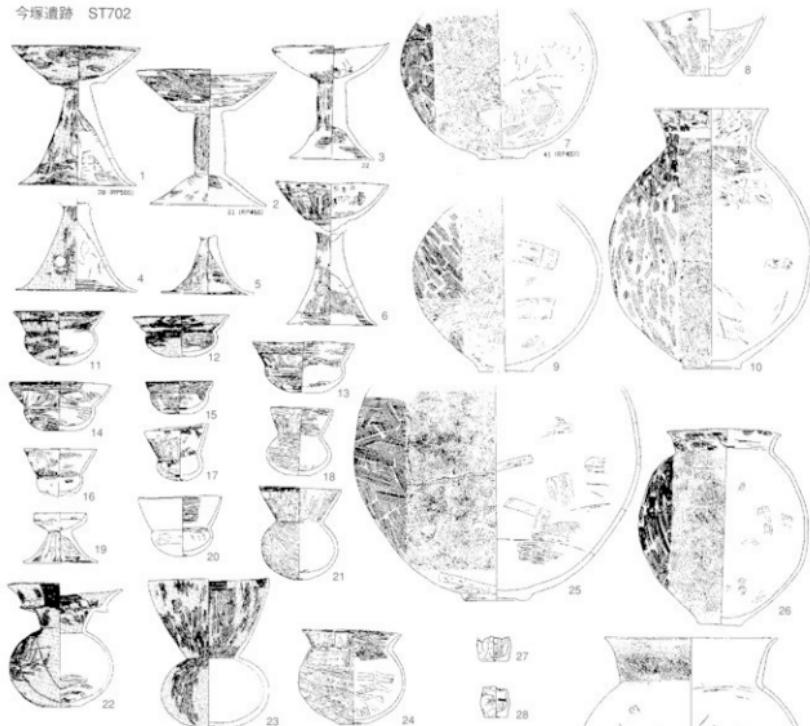


今塚遺跡 ST711

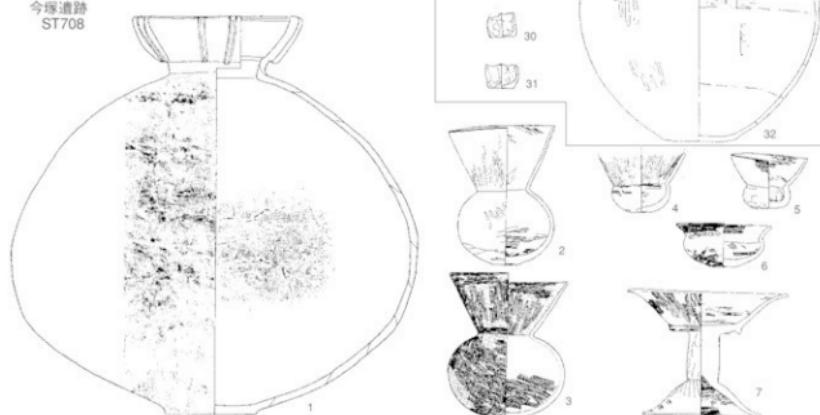


第5図

今塚遺跡 ST702

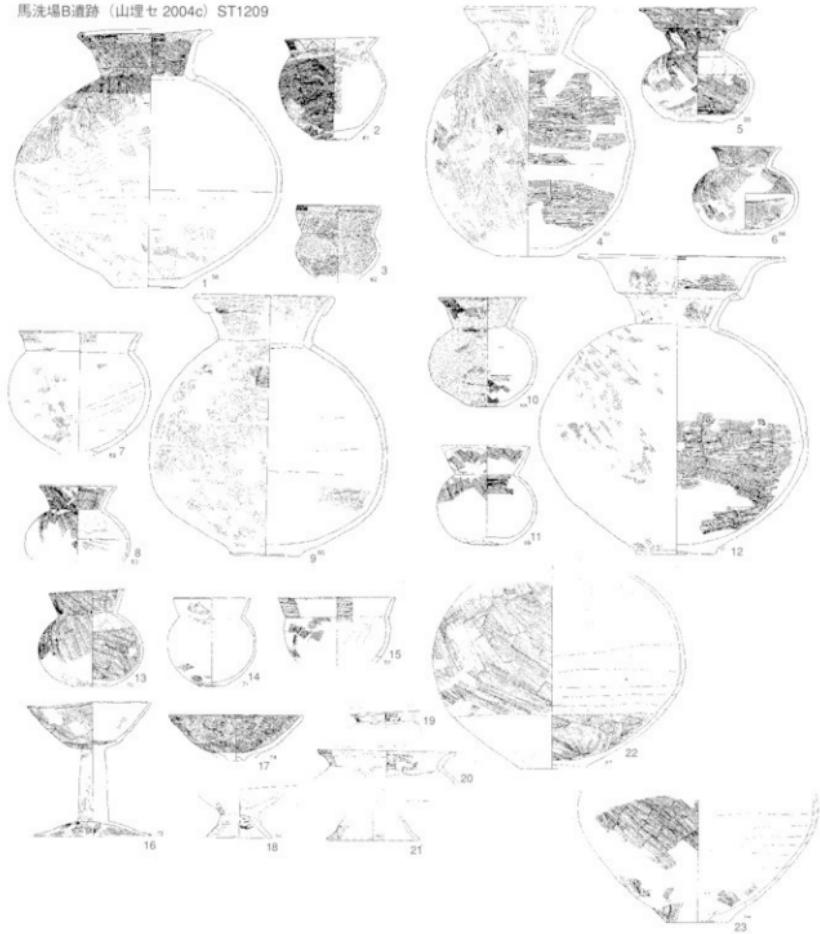


今塚遺跡
ST708

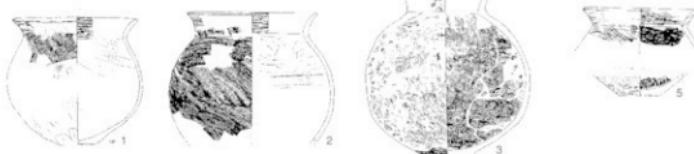


第6図

馬洗場B遺跡（山埋セ2004c）ST1209



馬洗場B遺跡 ST1217

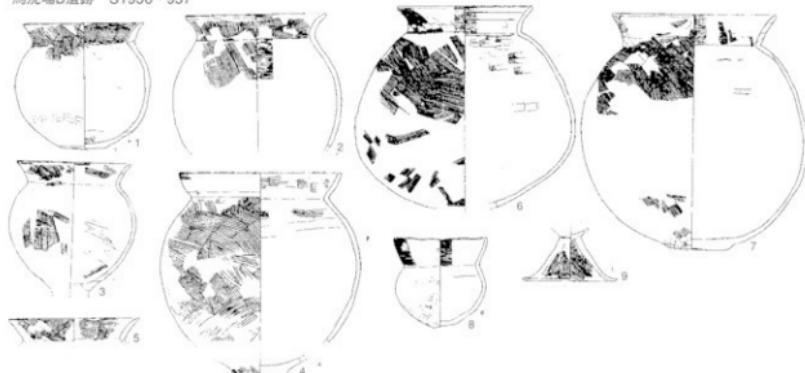


第7図

馬洗場B遺跡 ST1216



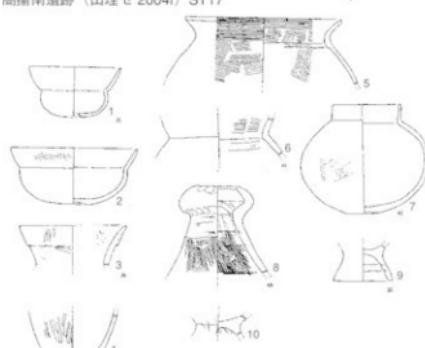
馬洗場B遺跡 ST956・957



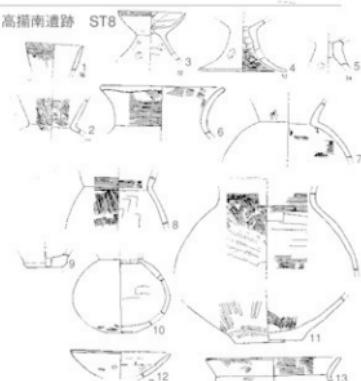
渋江遺跡 (山埋セ 2004d) ST706



高橋南遺跡 (山埋セ 2004f) ST17



高橋南遺跡 ST8

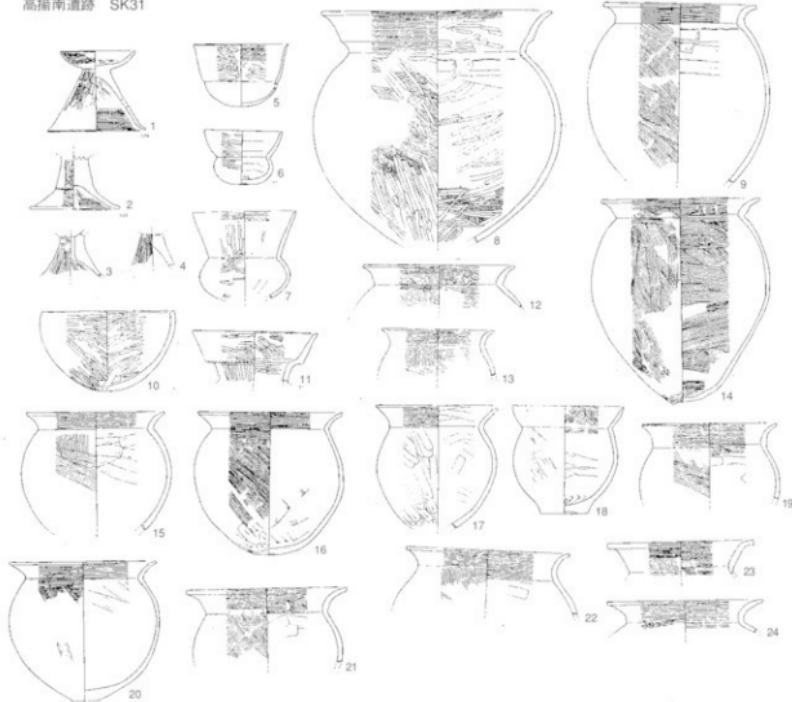


第8図

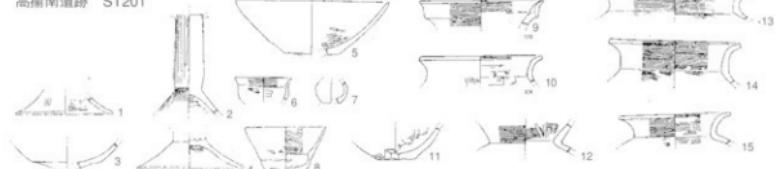
高塙南遺跡 ST12



高塙南遺跡 SK31

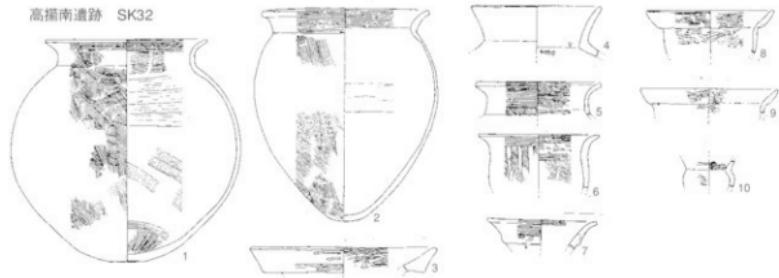


高塙南遺跡 ST201

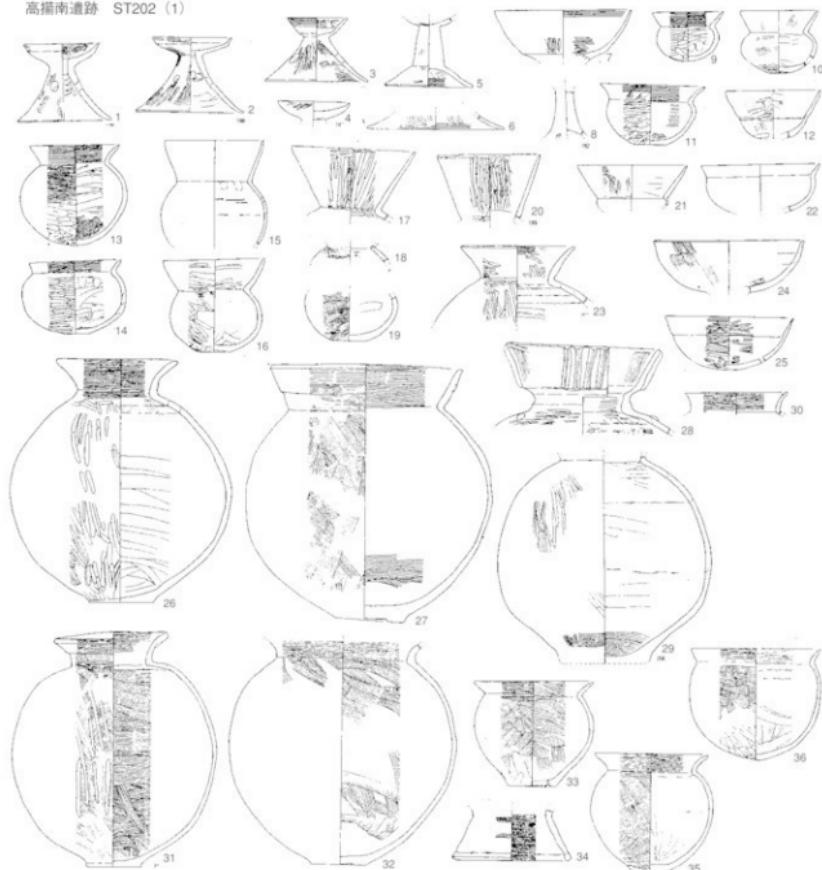


第9図

高麗南遺跡 SK32



高麗南遺跡 ST202 (1)

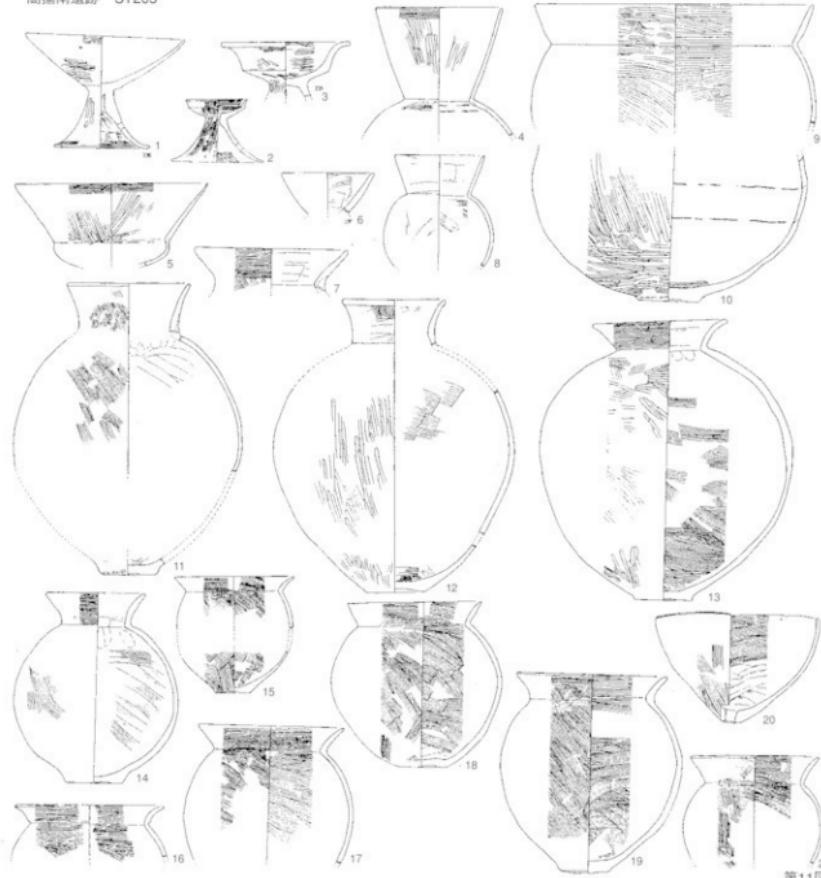


第10図

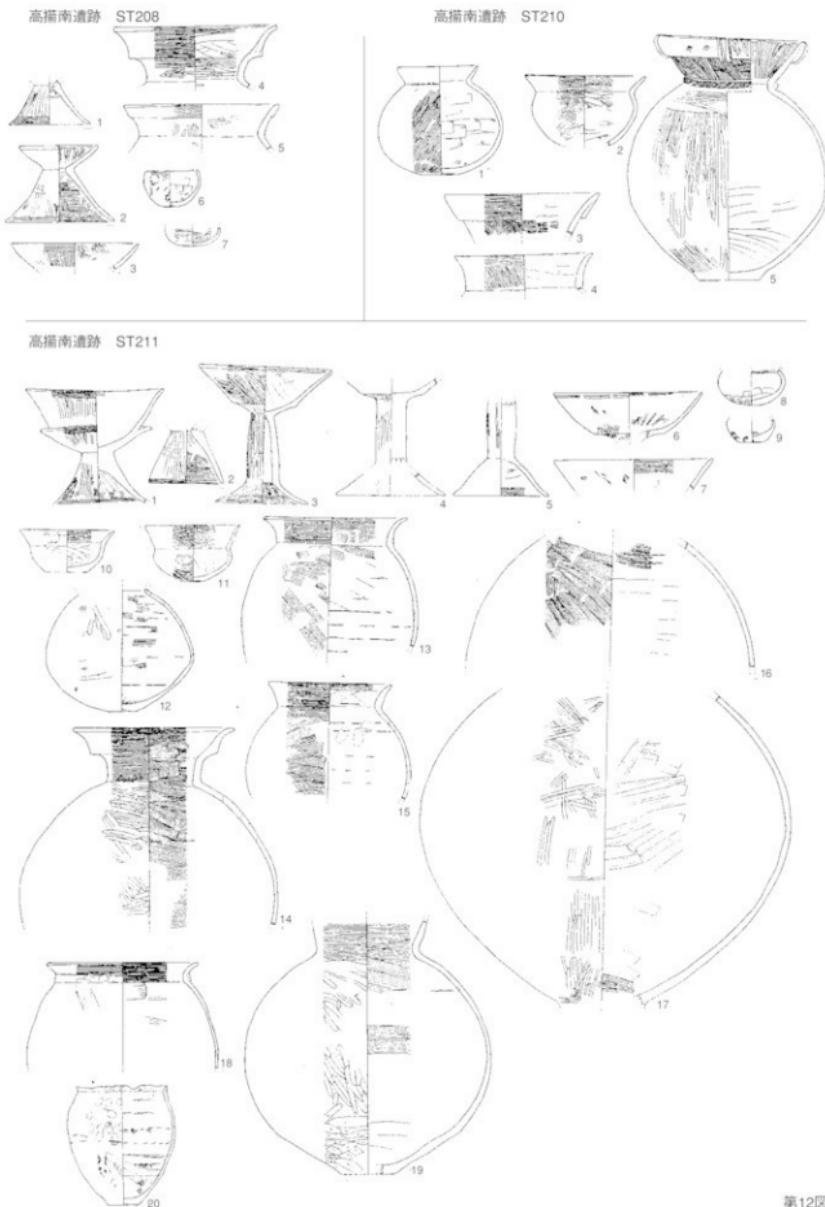
高橋南遺跡 ST202 (2)



高橋南遺跡 ST205

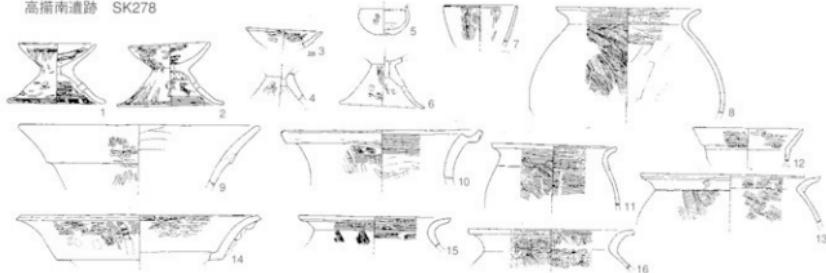


第11図

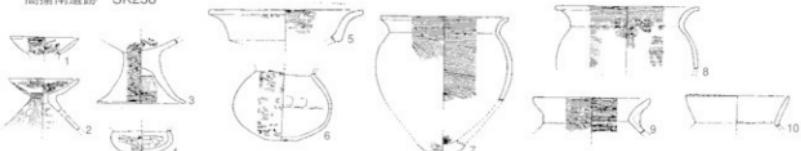


第12図

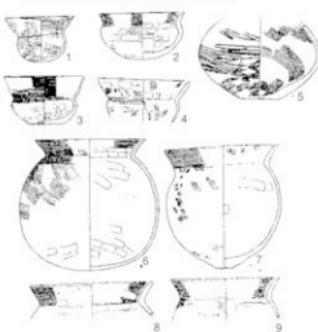
高攝南遺跡 SK278



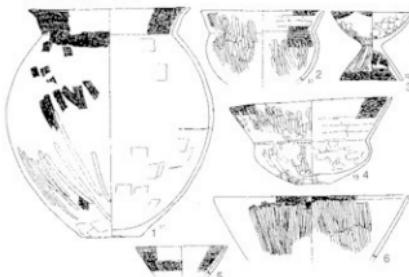
高攝南遺跡 SK258



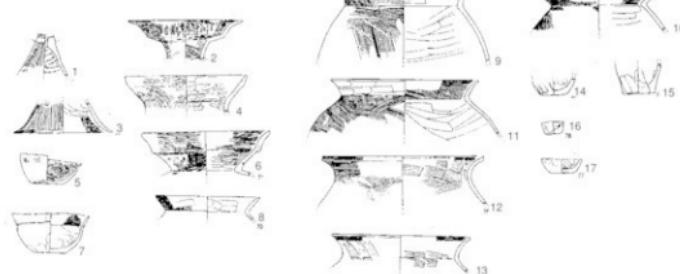
菖蒲江遺跡（山埋セ 2004f）ST3



菖蒲江遺跡 ST4

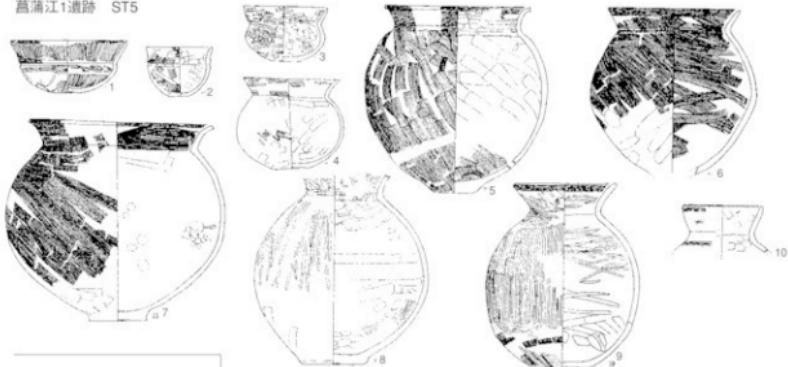


菖蒲江遺跡 ST14

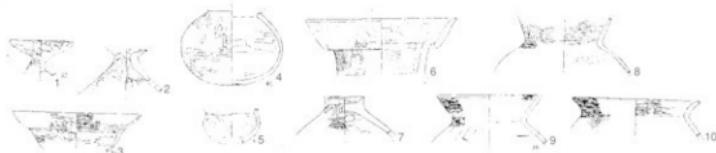


第13図

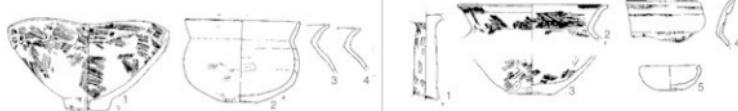
菖蒲江1遺跡 ST5



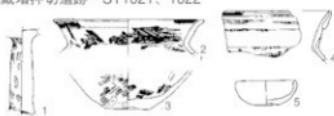
菖蒲江1遺跡 ST7



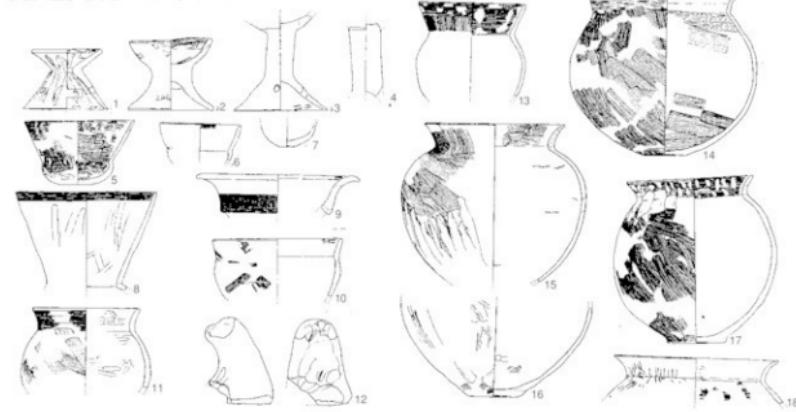
藏増押切遺跡 (山埋セ 2003) ST1002



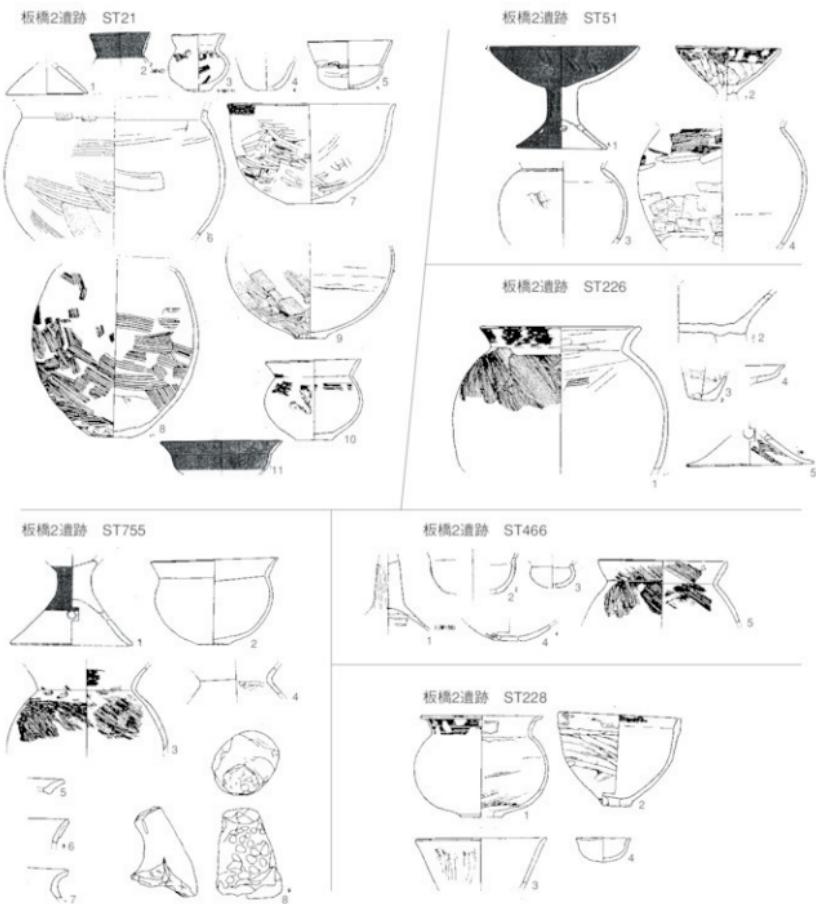
藏増押切遺跡 ST1021、1022



板橋2遺跡 (山埋セ 2004e) ST20



第14図



第15図

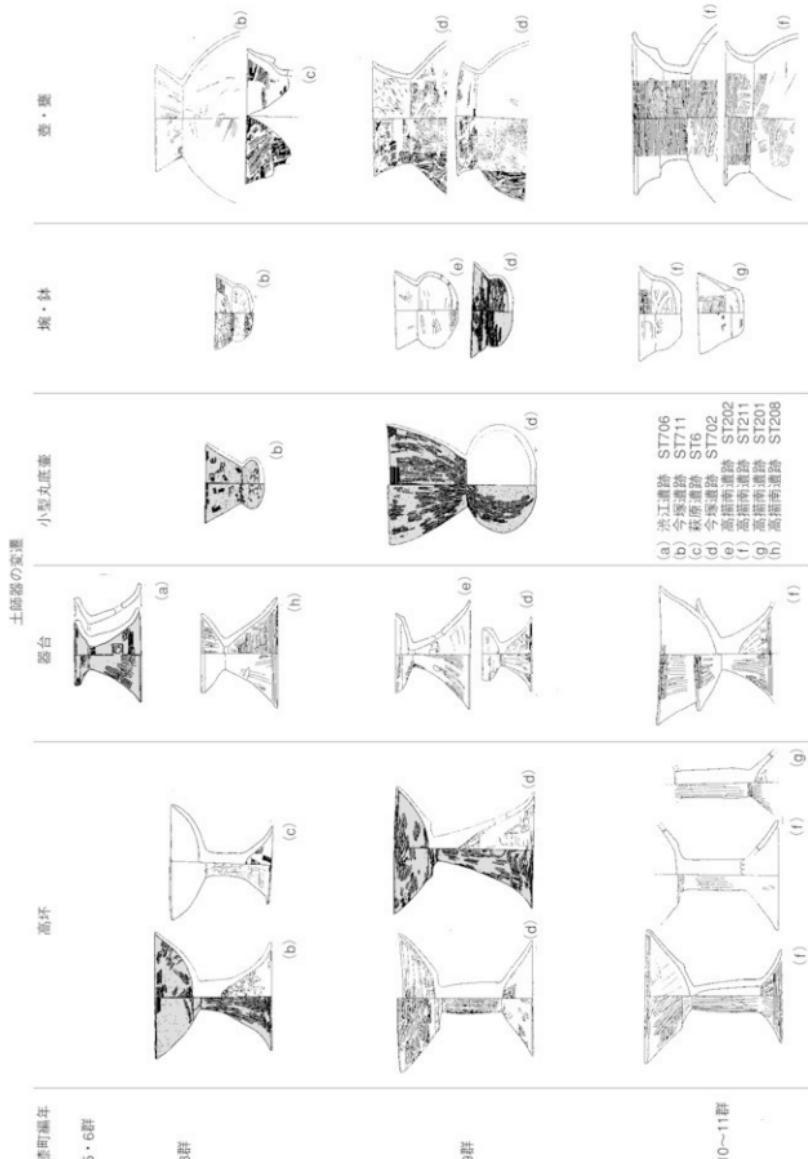


表4 分類分布表

	縦り屋	萩原	長表	今塙	馬洗場B 米江	高 播 南	葛蒲江1	藏増	板橋2
器種	分類								
Aa1	1			1				1	
Aa2					1		1	1	
Ac1						1			
Ac2					1		1 1	1	1
Ac3								1	
Bb2	3						3 1		
Bc1	1								
Bc2	1			1					
C					1		1		
Aa1							1		
Aa2					1 1 2				
Ab2					1 1		1		
Ac			1					1	
Ba1									1
Ba2					1				
Bb2	1				1 2				
Bc1	1				1		1		
Bc2					1				1
- A	2	1 1 3		3		2		4	1
タ B		1		2					1
Aa	3	1		1 1 2 3 2	1	1 1 1	1 5 1	1 3	1 1 1
Ab	1			1 3 1			1		1
Ac	3	1	1 1	1 1 4 1 2	1 1	2 1 1	2 2 1 1		
Ba								1	
Bb				1 1	1 1				
Aa	1	2 1		1		1 1	1 1	1 1	1
Ab	1 2			1 1 2		1 1 1 1	1 1 4	1	2
Ac					1				1
Ba				1		1 1	1 1 1	2 1	
Bb	3	1 2 1 1	1 1	3	1 1	2 1 2 2	1 1		
Ba1						1	1		
Bb1	1				1		1		
Aa1	4 1	1 2 2		2 1	1	1	1 2		1 1 1
Aa2	1				1	1			1
Ab1	1 1	1 1 1 1	1 1		1	3 2 2 1 3	1 2	1 1 1 1 1	1 3
Ab2	1				1 1 1 2	1 4 2 1 1	2 2 1	2 1	1
Ac1						1			
Ac2									
Ba1							3		
Bb1	1					1	1		1
Bc2						2			
C	2 2			1	1	1 1			
Aa1				1 1	2 2	1 1	1	1 2	1 1
Aa2					1		1		
Ab1		1 1 1 1	1			3 2 1	1 1		
Ab2	1					2 1	1 1		
Ac1	1					1 2 1			1 1
Ac2	1					1 1 1			
Ba1	1								
Aa						1	1		1
Ab				1 1 1				1 1	1
Ba	1								
Bb1	1								
Aa		1				1 1			
Ab		1	2 1 4 1 4	5 1	2 1	1 3	1 2	3 1 1 4 2 1	1 2 2 1
Ba	2		3	1			1		
Bb1	1	1						1	1
Bb2	1								
支脚			1					1	1

表5 遺構別分類表

遺物No		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25				
留 置 ij	ST14	Bb2	Bb2	Bb2			b	A	A	A	Aa	Aa	Ac	Ab	Ac	Ac	Ac	Ab	bB1	Ab	Ab	Ab	Ab	Ba	Ab					
	ST26	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49					
	ST18	Ab	Ba	Aa2	Aa2	Aa2	Bb1	Ab2	Aa1	Ab2	Aa2	Aa1	C	C	Aa1	Aa1		Aa	Ab		Aa1	Bb1	Ba	Ab1						
置 屋	ST9		B	c	C						Bb	Bb	Ab	Bb1	Ab		Bb													
	ST18	Ac	Bc2	Bb	Bc1	Ac2																								
	ST2	Aa	Aa1				Bb1	Aa	Aa	Ac1	Aa																			
載 厚	ST5						Ac	B		A	Aa1	Ab1	Bb																	
	ST6	Bb2	Ba1	Bb					A	Ab2	Aa1	Bb	Ba1	Ba1	Ba1			Bb	Aa1	B										
	ST8	Aa1		Ab					Bb2	A																				
長 表	ST10	Bb	Ab1	A	A	A																								
	ST9						Ab	Ab																						
	ST27	Ab	Ac1																											
表 青	ST19	Ab		Ab	Ab	Ab				Aa1	Ba	Ba1	Ab1	Ab			Ab1	Aa1	Ab											
	ST12	Aa1	Aa1		Ab																									
	ST5	Ab1	Ab1	Aa1	Ab1	Ac	C			Ab1	Aa		Ab1	Ab	Bb	Ab														
今 堆	ST711	Ab	Bb2	B	Aa	Ac	Ab2																							
	ST702	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25				
	ST702	Ac1	Aa2	Bb2	c	b	Cc1	Ab		Ab	Ab1	Ab1	Ab	Ab1	Ab1	Aa	Aa	Ac	Bc2	Ac	Ac	Bb	Ac	Ab1						
黒 塗 場 B	ST708	Ab	A	A	B	B	A	Ab2																						
	ST1209	Bb	Aa1	Ac	Bb	Bb	Ab	Aa1	Ab	Bb	Ab	Ac	Ba	Aa	Aa		Aa1	B												
	ST1217	Aa2	Aa2	Ab1	Aa1																									
江 流	ST1216	Ab2	Ac	Aa	Ab	Aa2	Aa2	a																						
	ST956	Aa1	Ab2	Aa1	Ac1																									
	ST706	Aa2																												
高 塗	ST7	Ab	Ab	Ab	Ac	Ac2																								
	ST8	Ac	Aa	Ac2			Bd1			Ab	Ab			B	Aa1															
	ST12	Aa	Bb	A	A	Ab2																								
南	SK31	Ac2																												
	ST201	a	A	A	A																									
	SK32	Ab2	Ab1		Ab1	Ab2	Ab2	B																						
南	ST202	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25				
	ST202	Bc2	Bb2	Ac																										
	ST205	Ab	Bb1	Ba1	Bb1	Ba1																								
高 塗 江	ST208	Aa2	Ba1	Bb1	Ba																									
	ST210	Ac	Ab	Bb	Ab	Bb1																								
	ST211	C																												
高 塗 江 1	SK278	Aa2	Ac2																											
	SK258	Ac	Ac2																											
	ST3	Ac	Ab	Ab	Ab																									
高 塗 江 2	ST4	Ab1																												
	ST14	Ba																												
	ST5	Ab	Ab	Ab	Ab	Ab1	Ab1	Ab	Ab	Ab	Ab	Ab	Ab	Ab	Ab	Ab														
高 塗 江 2	ST7	Aa																												
	ST1002	Ab	Ab																											
	ST1021	2	Ab1		Bb1	Bb																								
板 機	ST20	Aa1	Ac2	Ba2	2	Ab1	Ab1																							
	ST21																													
	ST21																													
2	ST51	Bb2	B																											
	ST226	Ab1																												
	ST755	Ab																												
2	ST466	Ab	Ab	Aa	Aa1																									
	St228	Ab1	Ab2	B																										

山形県内出土斎串の集成と分類

山 内 七 恵

1 はじめに

発掘調査によって山形県内の遺跡から出土した斎串(いぐし)は数多い。斎串とは、短冊状の薄板あるいは立体的な棒で、串の形状を呈する木製品である。主に奈良時代・平安時代の遺構から出土し、そこで行われた祭祀やまじないに使用された道具であると考えられている。

斎串の先行研究は、「木器集成図録-近畿古代篇-」^①、「斎串考」「日本考古学論集3 呪法と祭祀・信仰」^②等がある。「木器集成図録-近畿古代篇-」は、唐古・鍵遺跡を含む近畿地方の遺跡から出土した木製品を集めた図録である。「木器集成図録-近畿古代篇-」に記載されている斎串の型式分類は、薄板の両端の形状によって4型式に分類し、更に側面からの切込みの形状によって8型式に分類するものである。「斎串考」は、筆者である黒崎直氏が、斎串の分類と変遷を行って諸問題をまとめた研究論文である。「斎串考」に記載されている型式分類は、切込みの形状によって6型式に分類し、更に上端部の形状や切込みの回数で細分している。この二稿は、斎串の形状の特徴的な要素を捉えて型式分類を行っており、前者は薄板の両端の形状に、後者は切込みの形状に重点を置いている。本稿では「木器集成図録-近畿古代篇-」に記載された型式分類を引用しつつ、両端の形状と切込みの形状の両方に視点を置いて考察を試みたい。

山形県内出土の斎串を集成し、分類を行うことによって、山形県の古代祭祀の復元に役立つことができれば幸いである。

2 研究の流れ

山形県内出土の斎串の資料を収集した。現在まで刊行されている各遺跡発掘調査報告書を検索したところ、17遺跡から227点の斎串が出土していた。このうち1点は、1981年に酒田市教育委員会が史跡城輪柵外郭西門跡の北西部を発掘調査した際に出土したという事実が、1982年

に刊行された略報に記載されている。しかし、この資料の詳細な情報(実測図・計測表・写真)が記載されていないため、取り扱うことができない。よって本稿では、16遺跡から出土した226点の資料を研究対象とする。

報告書の記述を基に、資料の各部(図1)の計測値と情報を一覧にした(表1)。一覧表に記した内容は、遺跡名・遺物年代・出土地点・型式・長さの値()・幅の値(mm)・厚みの値(mm)・全体形状・上部形状・下部形状・切り込みの11項目である。長さと幅と厚みの値は、最も大きい計測値を記した。上部形状が主頭状の資料は、先端の角度が100度以上の場合を鈍角主頭状、70度以下の場合を鋭角主頭状と定めて明記した。一覧表を基に、分類と考察を行う。

3 型式分類

本稿では、「木器集成図録-近畿古代篇-」^①に記載された型式分類を引用する。山形県内出土の斎串に見られる特殊な形状を、新たに分類項目に付加した(図1)。

両端の形状の分類に英字を使用する。A型式は両端をそれぞれ一側面から鋭く斜めに切り落としたもの。B型式は両端を主頭状に作るもの。C型式は上端を主頭状にして下端を剣先状に作るもの。D型式は上記の3型式に属さないものとする。

切込みの分類にローマ数字を使用する。I式は切込みを入れないもの。II式は側面を割裂くように上端木口から割れ目を入れるもの。III式は上端近くの側面の左右1箇所に切込みを入れるものとし、上端の斜辺からの切込みも含む。IV式は、上端近くの側面の左右2箇所以上に切込みを入れるもの。V式は側面の上端と斜め下から左右2箇所以上に切込みを入れるものであり、この場合1箇所の切込み回数が4~5回に及ぶことがある。VI式は両側面の左右対称位置を三角形に切欠くもの。VII式は、IV式とVI式が組み合わさったもの。但し、引用している参考文献の「木器集成図録-近畿古代篇-」では、P70

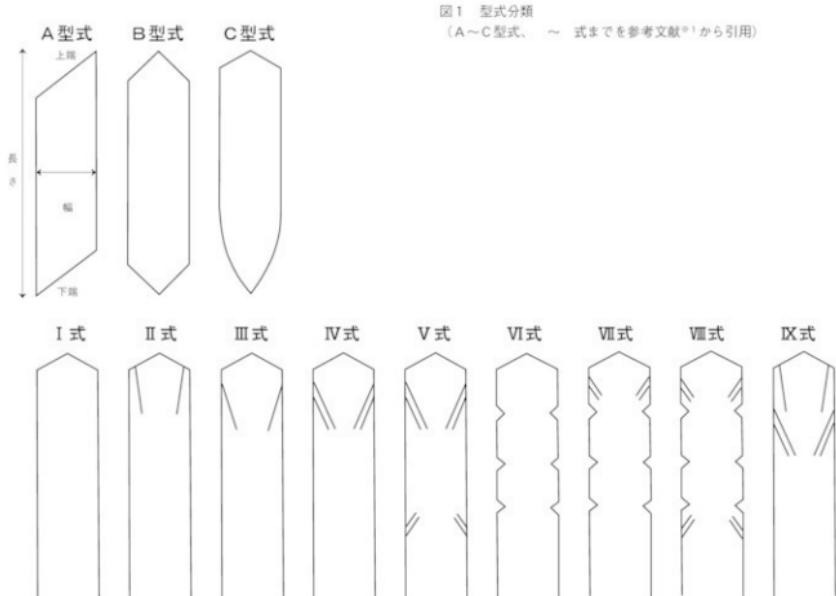


図1 型式分類
(A～C型式、～式までを参考文献^①から引用)

の15行目に「Ⅶ式はⅢ式とⅥ型式が組合さつたもの」と記載されている。論文の内容や図版と照合したところ、正しくはⅣ式とⅥ式が組み合わさつたものであると本稿では解釈した。Ⅷ式は、Ⅴ式とⅥ式が組み合わさつたものとする。

山形県内出土の斎串に見られるⅡ式とⅣ式が組み合った形状を型式分類に付加し、Ⅸ式と位置づける。

上記したⅠ～Ⅷ式に属さない形状をⅩ式とする。

4 考 察

① 資料の分類

(1) 棒と薄板の分類について

本稿では、厚みの値が幅の値の二分の一以下の形状は薄板、二分の一以上の形状は棒と分類し、一覧表に明記した。全体資料数226点の内、薄板が200点、棒が25点、判別不可能な資料が1点という結果が出た。薄板の資料数が圧倒的に多く、模範的な形状であったことが確認できた。棒の資料はC I型式が1点、C II型式が2点、D I

型式が1点であり、残りの21点は残念ながら型式不明であった。棒の資料には、切込みが有る形状と無い形状が存在する。

薄板と棒の用途の違いであるが、現時点では斎串の用途を確証できる要素が少ないため明らかにできない。

(2) 型式分類について

山形県内出土の斎串を15型式に分類できた(表2)。A型式の資料と、Ⅶ式・Ⅷ式の資料は山形県内からの出土例が無い型式である事が分かった。Ⅶ式・Ⅷ式は、左右対称位置を三角形に切欠き、更に切込みを有するという特徴がある。切込みは無いが三角形の切欠きを有するⅥ式の資料は、1点のみ出土している。山形県内では、三角形の切欠きを要する斎串が普及しなかつたことが窺える。三角形の切欠きの有無は、斎串の用途(祭祀やまじないの内容)に深く関係しているように思われる。三角形の切欠き部分に使用痕がみられた報告が無いため、デザインとして成形された可能性も考えられる。

型式と遺物年代の関係を表にした(表2)。本稿の遺物

表2 型式と遺物年代の関係

	B	B	B	B	C	C	C	C	C	C	C	D	D	D	不明	合計
8世紀					1	5	3	1	2						2	14
9世紀	1	1	1		5	19		2		2		2	1		66	100
10世紀		1			4	18		3		2	1		1	1	9	40
古代	1				7	7		2	1	1		1	1		28	49
11世紀		2			2	3		4							11	22
15世紀中葉～16世紀中葉												1				1
合計	2	4	1	1	23	50	1	9	5	4	3	4	2	1	118	226

年代は報告書の記述を基に特定している。但し、8世紀以降11世紀迄に出土していることは明確であるが、それ以上の詳細な遺物年代が判明していない資料に関しては古代に区分した。

表2を見ると、9世紀の資料が最も多いことが分かる。『頬聚三代格』に嘉祥四年二月二十一日付の太政官符が記載されており、出羽国の解状に対して太政官が応じ、9世紀の出羽国に陰陽師が置かれた事が記されている。陰陽師とは、「令義解」に「掌らむこと、占筮して地相む事」と記され、土地の吉凶を占う役職であったことが分かる。斎甲を用いて占筮をしていたという確認は無いが、陰陽師が置かれた9世紀頃は庄内地方に国府が存在しました、律令体制が整っていたため多くの律令祭祀が行われていた可能性がある。律令祭祀の盛行に伴って斎甲が普及したのではないだろうか。

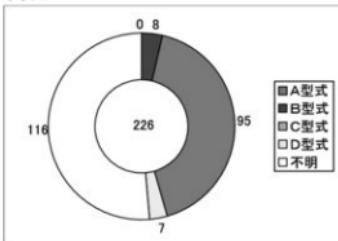
山形県内で一番普及していたと考えられるC II型式の斎甲は、9世紀と10世紀の資料が多いことが分かった。また、IX式の斎甲も9世紀と10世紀の資料が多いことが分かった。

8世紀から11世紀にかけての資料を、時代が途切れるところ無く確認できた。特に9世紀の資料が多く、この時代は斎甲をする祭祀が盛行されたと推測できる。

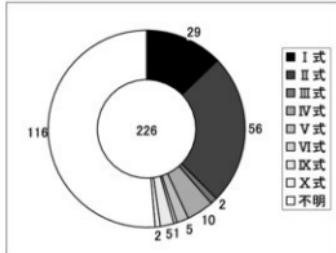
②資料数の割合

両端の形状に着目した場合、全体資料数の割合はA型式0点(0%)、B型式8点(3.5%)、C型式95点(42.0%)、D型式7点(3.1%)、型式不明116点(51.4)%である(グラフ1)。C型式の資料数が圧倒的に多く、模範的な型式であると言える。B型式とD型式の資料数は極僅かで、A型式においては資料が全く無いという結果が出た。

グラフ1



グラフ2



グラフ3

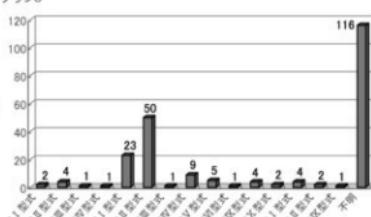
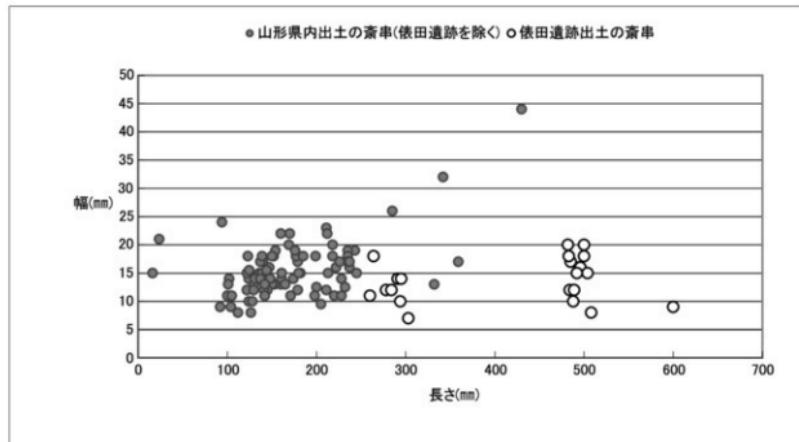


図2 資料の大きさ



切込みの形状に着目した場合、全体資料数の割合はI式29点(12.8%)、II式56点(24.8%)、III式2点(0.9%)、IV式10点(4.4%)、V式5点(2.2%)、VI式1点(0.4%)、IX式5点(2.2%)、X式2点(0.9%)、型式不明116点(51.4%)である(グラフ2)。II式の資料数が最も多く、模範的な型式であると言える。続いてI式、IV式の資料数が多く、その他は極僅かである。

両端の形状と切込みの形状を組み合わせて分類した場合、全体資料数の割合はB I型式2点(0.9%)、B II型式4点(1.8%)、B III型式1点(0.4%)、B IV型式1点(0.4%)、C I型式23点(10.2%)、C II型式50点(22.1%)、C III型式1点(0.4%)、C IV型式9点(4.0%)、C V型式5点(2.2%)、C VI型式1点(0.4%)、C IX型式4点(1.8%)、C X型式2点(0.9%)、D I型式4点(1.8%)、D II型式2点(0.9%)、D IX型式1点(0.4%)、型式不明116点(51.4%)である(グラフ3)。C II型式の資料数が最も多く、山形県内出土の斎串の模範的な型式であると言える。次いでC I型式が全体資料数の約1割を占め、普及した型式であると言える。

③ 資料の大きさ

幅と長さの値が明確な資料は108点である。これを対象に、大きさの値を示す分布図を作成した(図2)。分布

図の作成にあたって、山形県飽海郡八幡町(発掘当時の住所)に所在する依田遺跡から出土した斎串を、別系列として取り込んだ。依田遺跡からは、律令祭祀の「祓所」が検出されている³²。祭祀遺構や、祭祀道具の一つと考えられる斎の中から、他の遺跡の斎串とは異なる特殊な大きさの斎串が出土した。

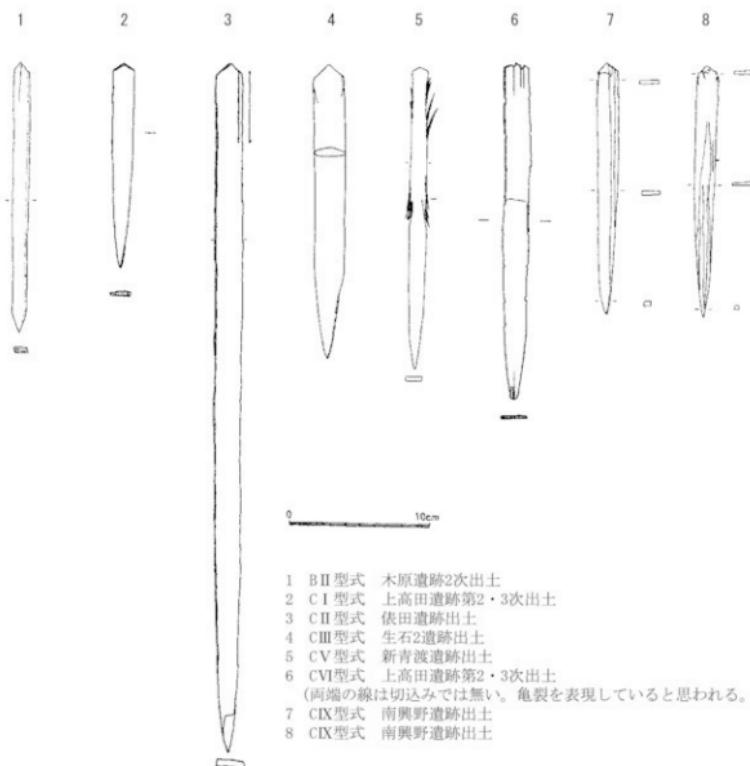
図2を見ると、山形県内出土の斎串は長さが100mm～250mm、幅が10mm～20mmの間の値を示す資料が多く、この値が平均であることが分かる。

依田遺跡出土の斎串は、長さが300mm前後と500mm前後、幅が10mm～20mmの間の値を示す資料が多い。長さが500mm前後と、それ以上の値の資料は、全て依田遺跡から出土している。幅の値は、山形県内出土の斎串の平均値に適合する。依田遺跡からは、長さの値が大きい斎串が出土していることを確認できた。細長い斎串を要する祭祀が行われていたと推測できる。

④ IX式について

IX式の資料は他県での出土報告が稀少なため、先行研究の型式分類に組み込まれていない。山形県内の2ヶ所の遺跡から計5点の出土報告があるので、山形県内出土の斎串の特殊な形状であると推定し、本稿では型式分類に組み込むこととした。

図3 出土例



酒田市に所在する南興野遺跡から出土した38点の資料のうち、第1次調査で発見された3点と第2次調査で発見された1点がIX式である。山形市に所在する今塚遺跡からは1点の斎甲が出土しており、その資料がCX型式である。

IX式の斎甲の遺物年代は、9世紀と10世紀後半であることが分かった。側面を割裂くように上端木口から割れ目を入れ、更に上端近くの側面の左右2箇所以上に切込みを入れる形状であり、切込みの数が多いという特徴がある。この特徴を要する祭祀やまじないが、9世紀～10世紀後半頃に行われていたと推測できる。

大きさは、幅の値が平均よりやや大きい資料を2点確認できた。切込みの数が多いため、幅を広めに作製して強度を高めたのかもしれない。今後もIX式の斎甲の出土報告を期待すると共に、着目して見解を深めていきたい。

⑤ 出土地点について

斎甲が出土した16遺跡中、14遺跡が庄内地方に所在する(図3)。近年、庄内地方で行われている日本海沿岸東北自動車道建設に係る発掘調査でも、古代の遺構から斎甲が出土したという報告があった。9世紀の庄内地方には出羽国の国府が置かれており³¹、律令制に係る祭祀や

まじないに伴って斎串が普及したと考えられる。

斎串が出土する遺構は、祭祀遺構、河川、溝、井戸、土壇等がある(図4)。祭祀遺構ではさまざまな祭祀が行われ、多種の型式の斎串が使用されていた可能性がある。資料の大きさの考察で触れた俵田遺跡の祭祀遺構からは、C型式とD型式の2種類の斎串が出土している。

河川と溝でも様々な祭祀が行われた可能性がある。井戸では、廃棄する際に儀式を行い、斎串を使用したと考えられる。

「斎串考」^②によると、土壤からは多数の木製品が出土しているにも関わらず、斎串や人形などの祭祀道具が出土することは極めて稀であると言う。土壤は不用な物品の廃棄場とされた場合が多く、祭祀道具と考えられている斎串が投棄されることは少なかったのではないだろうか。

5まとめ

山形県内出土の226点の斎串を集成し、分類を行った。山形県内出土の斎串は、薄板が模範的な形状である。型式分類すると、上端を主頭状として下端を刺先状に作り、側面を割裂くように上端木口から割れ目を入れる形状(C II型式)の資料が最も多く、模範的な型式であることが分かった。長さが100mm~250mm、幅が10mm~20mmの値が平均の大きさである。但し、俵田遺跡の祭祀遺構からは長さが300mm前後や500mm前後の、平均より長い斎串が出土した。

側面を割裂くように上端木口から割れ目を入れ、更に上端近くの側面の左右2箇所以上に切込みを入れる形状(IK式)の斎串が数点出土しており、切込みの数が多い斎串を要する祭祀やまじないも行われていたことが推測できる。

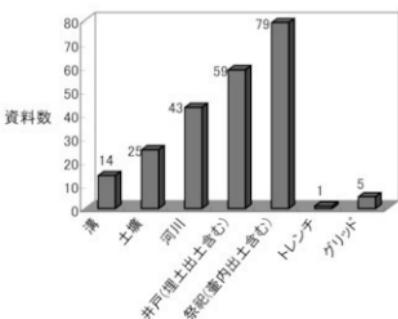
8世紀から11世紀にかけての資料を、時代が途切れるごとに確認できた。特に9世紀の資料が多く、この時代に斎串を要する祭祀やまじないが盛行されたと思われる。

資料の大方が庄内地方から出土している。9世紀は庄内地方に出羽国の国府が置かれており^③、多くの律令祭祀が行われていたと考えられる。それに伴って、斎串が普及した可能性がある。

図4 斎串が出土した遺跡の位置図



グラフ4 斎串が出土した遺構と資料数



6今後の課題

本稿では山形県の古代祭祀の復元に役立てるよう、これまで行われていなかった斎串の集成と分類に取り組んだが、以下の課題が残った。

用途に応じて斎串の形状が多種に及んだと考えられる

が、用途の考察を行うことが出来なかつた。文献資料や民俗資料と照らし合わせて検討をしていきたい。また、今後もIK式に着目して見解を深めたい。

謝 辞

本稿執筆にあたり、渋谷孝雄氏、齋藤健氏にご指導を頂いた。文献資料の解釈に際しては、渡辺和行氏からご助力を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

1)『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』によると、出羽国の国府（城輪）が現在の庄内地方に置かれていたと考えられている。

2)『平城京と祭場』『国立歴史民俗博物館研究報告第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇』によると、依田遺跡は「延喜式」に記された城所の状況にあたると考えられている。

引用・参考文献

- ※1 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 - 近畿古代篇 - 』
- ※2 黒崎直「斎弔考」齋藤忠1986『日本考古学論叢3 祀法と祭祀・信仰』
- 黒坂勝美1993『新訂増補 国史大系<普及版>類聚三代格 前編』
- 黒坂勝美1992『新訂増補 国史大系<普及版>令義解』
- 国立歴史民族博物館『平城京と祭場』『國立歴史民族博物館研究報告第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇』
- 奈良文化財研究所2004『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』
- 律令祭祀研究会1988『律令祭祀遺物集成』
- 第25回古代城柵官衙遺跡検討会事務局（財团法人山形県埋蔵文化財センター内）1999『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2006『発掘やまがた最前線 平成18年度 山形埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2006『研究紀要第4号』
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2004『研究紀要第2号』
- 山形県教育委員会1983『農林事業関係遺跡（2）発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第64集
- 山形県教育委員会1984『依田遺跡 2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第77集
- 山形県教育委員会1984『新青渡遺跡 2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第79集
- 山形県教育委員会1987『生石2遺跡発掘調査報告書（3）』山形県埋蔵文化財調査報告書第117集
- 山形県教育委員会1987『生石4遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第118集
- 山形県教育委員会1987『南興野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 山形県教育委員会1988『南興野2第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第122集
- 山形県教育委員会1988『生石4遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第125集
- 山形県教育委員会1991『圃地田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第167集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1994『今塚遺跡発掘調査報告書』第7集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1994『木原遺跡第2次発掘調査報告書』第8集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1992『五百刈遺跡発掘調査報告書』第10集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1994『鷲鳥城跡 第6次発掘調査報告書』第18集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1995『人坪遺跡第2次発掘調査報告書』第23集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1995『上高田遺跡・木戸下遺跡発掘調査報告書』第25集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1996『向田遺跡発掘調査報告書』第34集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1998『上高田遺跡第2・3次発掘調査報告書』第57集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2001『山田遺跡発掘調査報告書』第83集
- 酒田市教育委員会1982『史跡・城輪櫛跡・昭和56年度発掘調査略報（1）』
- 川西町教育委員会1982『山形県川西町 道伝遺跡第2次重要遺跡確認調査概報』
- 川西町教育委員会1984『山形県川西町 道伝遺跡発掘調査報告書・置賜郡衙推定地 - 』

表1 山形県内出土畜糞一覧

No.	遺物名(次数)	遺物年代	出土地点	型式	長さ()	幅()	厚み()	全体形状	上部形状	下部形状	切込み
1	上糞田遺跡	9世紀~10世紀	河川(SG 6)	C	340.0	32.0	4.0	板	鈍角主頭状	剝先状	
2		9世紀~10世紀	河川(SG 6)	C	160.0	13.0	5.0	板	主頭状	剝先状	上端に有
3		9世紀~10世紀	河川(SG 6)	C	171.0	11.0	4.0	板	主頭状	剝先状	上端に有
4		9世紀~10世紀	河川(SG 6)	C	161.0	14.0	2.5	板	鈍角主頭状	剝先状	上端に有
5		9世紀~10世紀	河川(SG 6)	不明	(143.0)	15.0	4.5	板	主頭状	欠縫	上端に有
6		9世紀~10世紀	河川(SG 6)	不明	(115.0)	19.0	7.0	板	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
7		9世紀~10世紀	河川(SG 6)	不明	(150.0)	18.5	4.5	板	欠縫	剝先状	
8		9世紀~10世紀	河川(SG 6)	不明	(196.0)	23.0	8.0	板	欠縫	欠縫	
9		9世紀~10世紀	河川(SG 6)	不明	(194.0)	20.5	7.0	板	欠縫	剝先状	
10	上糞田遺跡(第2・3次)	8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 4)	C	136.0	15.0	3.0	板	鈍角主頭状	剝先状	上端に有、下端の左右方向に有
11		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 7)	不明	182.0	(7.0)	3.0	板	欠縫	欠縫	上端に有
12		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 7)	C	122.0	12.0	2.5	板	主頭状	剝先状	上端に有
13		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 8)	不明	(473.5)	15.0	6.0	板	主頭状	欠縫	
14		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 8)	C	152.0	18.0	4.0	板	主頭状	剝先状	
15		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 8)	C	179.0	17.0	3.0	板	主頭状	剝先状	上部両脇に毛羽状切込み
16		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 8)	不明	(95.0)	24.0	2.0	板	鈍角主頭状	欠縫	
17		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	C	153.0	13.0	4.0	板	鈍角主頭状	剝先状	上端に有
18		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	C	243.0	19.0	2.0	板	鈍角主頭状	剝先状	上端に有
19		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	不明	(132.0)	20.0	3.0	板	主頭状	欠縫	上端に有
20		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	C	147.0	16.0	4.0	板	鈍角主頭状	剝先状	
21		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	C	154.0	19.0	5.0	板	主頭状	剝先状	上端に有
22		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	不明	(99.0)	19.0	5.0	板	鈍角主頭状	欠縫	
23		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	C	332.0	13.0	4.5	板	主頭状	剝先状	
24		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	C	169.0	20.0	5.0	板	主頭状	剝先状	上部両脇に毛羽状切込み
25		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 9)	不明	(252.0)	25.0	3.0	板	鈍角主頭状	欠縫	
26		8世紀後半~10世紀後半	河川(SG 1 F 7)	不明	342.0	(19.0)	5.0	板	欠縫	剝先状	
27	木舟道遺跡(第2次)	9世紀中期	井戸(SE 8 F)	C	200.0	12.5	3.0	板	鈍角主頭状	剝先状	上端に有
28		9世紀中期	井戸(SE 8 F)	B	198.0	11.0	4.0	板	主頭状	鈍角主頭状	上端に有
29		9世紀中期	井戸(SE 8 F)	不明	150.0	18.0	2.5	板	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
30		9世紀中期	井戸(SE 8 F)	不明	124.0	10.0	3.0	板	主頭状	欠縫	上端に有
31		9世紀中期	井戸(SE 8)	C	213.0	15.0	4.5	板	主頭状	剝先状	上端に有
32		9世紀中期	井戸(SE 8 F)	D	236.0	19.0	7.0	板	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
33		10世紀前葉	土壤(SK 43 F)	D	205.0	9.5	3.0	板	主頭状	欠縫	上端に有
34		9世紀中葉~10世紀中葉	土壤(SK 12 F)	不明	(144.0)	11.0	8.0	棒	欠縫	欠縫	
35		9世紀中葉~10世紀中葉	グリッド(F-5)	不明	(95.0)	14.0	5.0	板	欠縫	剝先状	
36		9世紀中葉~10世紀中葉	グリッド(F-5)	不明	(126.0)	15.0	3.0	板	欠縫	剝先状	
37		9世紀中葉~10世紀中葉	グリッド(F-5)	不明	(91.0)	11.0	4.0	板	欠縫	剝先状	
38		9世紀中葉~10世紀中葉	グリッド(F-6)	不明	(94.0)	10.0	6.0	棒	欠縫	剝先状	
39		10世紀前葉	土壤(SK 43 F)	C	100.0	11.0	2.0	板	主頭状	剝先状	上端に有
40	大坪遺跡(第2次)	9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	C	430.0	44.0	6.0	板	鈍角主頭状	剝先状	上部と下部の両側に毛羽状切込み
41		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	不明	(110.0)	26.0	4.0	板	鈍角主頭状	欠縫	
42		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	不明	(136.0)	36.0	5.0	板	欠縫	欠縫	
43		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	不明	(104.0)	24.0	5.0	板	鈍角主頭状	欠縫	
44		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	C	102.0	14.0	4.0	板	主頭状	剝先状	
45		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	不明	(64.0)	16.0	4.0	板	主頭状	欠縫	
46		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	D	94.0	24.0	2.0	板	平状	剝先状	
47		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	C	92.0	9.0	5.0	棒	鈍角主頭状	剝先状	
48		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 F-7)	不明	(126.0)	9.0	2.0	板	欠縫	剝先状	
49		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 D-7)	不明	(120.0)	11.0	2.0	板	主頭状	欠縫	上端に有
50		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 D-7)	C	104.0	9.0	4.0	板	鈍角主頭状	剝先状	上端に有
51		9世紀後半~10世紀前半	河原(S 01 D-7)	不明	(65.0)	24.0	4.0	板	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
52	後田遺跡	11世紀	井戸理土(S 18B)	C	23.5	21.0	3.0	板	鈍角主頭状	剝先状	上部と下部の両側に毛羽状切込み
53		11世紀	井戸理土(S 18B)	C	16.2	15.0	4.5	板	鈍角主頭状	剝先状	
54	後田遺跡(第2次)	9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(15.0)	16.0	3.5	板	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
55		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(118.0)	8.0	4.0	棒	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
56		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(218.0)	15.0	5.0	板	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
57		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(128.0)	17.0	2.0	板	鈍角主頭状?	欠縫	上端に有
58		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	600.0	9.0	3.0	板	主頭状	剝先状	
59		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	278.0	12.0	3.0	板	主頭状	剝先状	
60		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	291.0	14.0	4.5	板	主頭状	剝先状	上端に有
61		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	295.0	14.0	4.0	板	主頭状	剝先状	
62		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	284.0	12.0	3.5	板	鈍角主頭状	剝先状	
63		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(142.0)	19.0	3.0	板	主頭状	欠縫	
64		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(73.0)	10.0	5.5	棒	主頭状	欠縫	
65		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	496.0	16.0	2.5	板	主頭状	剝先状	上端に有
66		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	482.0	20.0	2.5	板	鈍角主頭状	剝先状	上端に有
67		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	500.0	18.0	4.0	板	主頭状	剝先状	上端に有
68		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	496.0	16.0	5.0	板	主頭状	剝先状	上端に有
69		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	500.0	20.0	5.0	板	主頭状	剝先状	上端に有
70		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	504.0	15.0	5.0	板	主頭状	剝先状	上端に有
71		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(402.0)	19.0	2.5	板	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
72		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(445.0)	18.0	4.0	板	鈍角主頭状	欠縫	上端に有
73		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	508.0	8.0	6.0	棒	主頭状	剝先状	上端に有
74		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	不明	(482.0)	9.0	5.0	棒	欠縫	剝先状	上端に有
75		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	264.0	18.0	4.5	板	主頭状	剝先状	上端に有
76		9世紀中葉	祭祀(SM 60)	C	260.0	11.0	3.5	板	主頭状	剝先状	上端に有

No.	遺跡名(次数)	遺物年代	出土地点	型式	長さ()	幅()	厚み()	全体形状	上部形状	下部形状	切込み
77	俵田遺跡(第2次)	9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(63.0)	10.0	3.5	板	圭頭状	欠端	上端に有
78		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(207.0)	14.0	3.5	板	欠端	削先状	
79		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(246.0)	10.0	4.0	板	欠端	欠端	
80		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(430.0)	10.0	5.5	棒	欠端	削先状	
81		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(53.0)	10.0	4.5	板	欠端	削先状?	
82		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(171.0)	5.0	5.0	棒	欠端	削先状?	
83		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(128.0)	7.5	5.0	棒	欠端	削先状	
84		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(60.0)	3.0	8.0	棒	欠端	削先状?	
85		9世紀中葉	祭祀(SM60)	D	303.0	7.0	6.0	棒	尖状	削先状	
86		9世紀中葉	祭祀(SM60)	D	294.0	10.0	4.0	板	尖状	削先状	
87		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(294.0)	8.0~9.0	5.0~6.5	棒	欠端	削先状?	
88		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(300.0)	8.0	5.0	棒	欠端	欠端	
89		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(170.0)	7.0	4.0	棒	欠端	欠端	
90		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(236.0)	7.0	8.0	棒	欠端	削先状?	
91		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(302.0)	14.0	6.0	板	欠端	欠端	
92		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(277.0)	13.0	4.0	板	欠端	欠端	
93		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(244.0)	13.0	6.0	板	欠端	欠端	
94		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(198.0)	12.0	3.5	板	欠端	欠端	
95		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(197.0)	10.0	5.0	棒	欠端	欠端	
96		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(194.0)	16.0	3.0	板	欠端	欠端	
97		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(208.0)	12.0	3.0	板	欠端	欠端	
98		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(451.0)	13.0	3.0	板	欠端	欠端	
99		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(430.0)	11.0	6.5	棒	欠端	欠端	
100		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(393.0)	24.0	7.0	板	欠端	欠端	
101		9世紀中葉	祭祀(SM60)	不明	(212.0)	9.0	6.0	棒	圭頭状	欠端	
102		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(126.0)	7.0	3.0	板	圭頭状	欠端	
103		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	C	485.0	17.0	4.0	板	鈍角圭頭状	欠端	上端に有
104		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	C	484.0	12.0	4.0	板	圭頭状	欠端	上端に有
105		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	C	488.0	10.0	5.0	棒	圭頭状	欠端	上端に有
106		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	C	483.0	18.0	4.0	板	鈍角圭頭状	削先状	上端に有
107		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	C	492.0	15.0	3.0	板	鈍角圭頭状	削先状?	上端に有
108		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	C	493.0	12.0	5.0	板	圭頭状	削先状	上端に有
109		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(260.0)	17.0	4.0	板	圭頭状	欠端	上端に有
110		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(185.0)	16.0	3.0	板	圭頭状	欠端	上端に有
111		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(196.0)	15.0	5.0	板	圭頭状	欠端	上端に有
112		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(115.0)	18.0	3.0	板	圭頭状	欠端	上端に有
113		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(134.0)	16.0	4.0	板	鈍角圭頭状	欠端	上端に有
114		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(159.0)	12.0	6.0	棒	圭頭状	欠端	上端に有
115		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(56.0)	11.0	3.5	板	圭頭状	欠端	上端に有
116		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(195.0)	7.0	6.0	棒	欠端	削先状?	
117		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(238.0)	7.0	7.0	棒	欠端	削先状?	
118		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(297.0)	14.0	2.0	板	欠端	欠端	
119		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(209.0)	14.0	2.5	板	欠端	削先状	
120		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(348.0)	16.0	3.0	板	欠端	削先状	
121		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(231.0)	13.0	4.0	板	欠端	削先状	
122		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(196.0)	14.0	4.0	板	欠端	削先状	
123		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(116.0)	16.0	4.0	板	欠端	削先状	
124		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(71.0)	12.0	2.0	板	欠端	削先状	
125		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(58.0)	9.0	1.5	板	欠端	削先状	
126		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(131.0)	9.0	3.0	板	欠端	削先状	
127		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(119.0)	11.0	3.0	板	欠端	削先状	
128		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(175.0)	8.0	3.0	板	欠端	削先状?	
129		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(230.0)	15.0	5.0	板	欠端	削先状	
130		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(138.0)	12.0	4.0	板	欠端	削先状?	
131		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(185.0)	11.0	2.0	板	欠端	削先状	
132		9世紀中葉	祭祀(SM60)人面唐土器	不明	(222.0)	8.0	2.0	板	欠端	欠端	
133	向田遺跡	10世紀後半	井戸(S E 108)	C	218.0	20.0	3.0	板	圭頭状	削先状	上端に有
134		10世紀後半	井戸(S E 108)	C	(260.0)	18.0	5.0	板	圭頭状	欠端	上端に有
135		10世紀後半	井戸(S E 108)	不明	(200.0)	23.0	5.0	板	圭頭状	欠端	上端に有
136		10世紀後半	井戸(S E 108)	C	(130.0)	15.0	4.0	板	鈍角圭頭状	欠端	
137		10世紀後半	井戸(S E 108)	C	124.0	14.0	2.0	板	鈍角圭頭状	削先状	上端に有
138		10世紀後半	井戸(S E 108)	C	105.0	11.0	—	不明	圭頭状	削先状	上端に有
139	生石2遺跡	8世紀	溝(D 100)	C	359.0	17.0	3.0	板	圭頭状	削先状	
140		8世紀	溝(D 100)	C	211.0	23.0	6.0	板	圭頭状	削先状	左右に有
141		8世紀	溝(D 100)	C	212.0	22.0	3.0	板	圭頭状	削先状	
142		8世紀	溝(D 100)	C	174.0	14.0	4.5	板	鈍角圭頭状	削先状	
143		8世紀	井戸(S E 490)	C	165.0	13.0	3.0	板	鈍角圭頭状	削先状	
144		8世紀	井戸(S E 490)	C	161.0	15.0	4.0	板	鈍角圭頭状	削先状	上端に有
145		8世紀	井戸(S E 490)	C	150.0	13.0	4.0	板	圭頭状	削先状	上部に毛羽先状切込有
146		8世紀	井戸(S E 490)	C	130.0	13.0	3.0	板	圭頭状	削先状	上端に有
147		8世紀	井戸(S E 490)	C	131.0	14.0	2.5	板	圭頭状	削先状	上端に有
148		8世紀	溝(D 100)	不明	(141.0)	18.0	4.0	板	圭頭状	欠端	
149		8世紀	溝(D 100)	C	139.0	15.0	2.0	板	圭頭状	削先状	
150		8世紀	井戸(S E 250~F 1)	不明	(70.0)	10.0	3.0	板	欠端	削先状	
151	生石4遺跡	9世紀	井戸(S E 2 Y)	C	222.0	16.0	4.0	板	鈍角圭頭状	削先状	左右に有
152		9世紀	井戸(S E 2 F 4)	B	179.0	12.0	5.0	板	圭頭状	鈍角圭頭状	左右に有
153		9世紀	井戸(S E 2 F 4)	不明	(139.0)	17.0	3.0	板	欠端	欠端	

番号	遺跡名(次数)	遺物年代	出土地点	型式	長さ()	幅()	厚み()	全体形状	上部形状	下部形状	切込み
154	生石4遺跡(第2次)	9世紀	トレンチ(D)	不明	(249.0)	18.0	5.0	板	圭頭状	欠損	斜みの下に毛羽先状切込み
155	南阿野遺跡	9世紀	井戸(S-E54 F4)	C	182.0	15.0	3.0	板	圭頭状	斜先状	斜みの上に毛羽先状切込み
156		9世紀	井戸(S-E54 F4)	C	180.0	15.0	2.0	板	圭頭状	斜先状	上端に、斜みの上に毛羽先状切込み
157		9世紀	井戸(S-E54 F4)	B	145.0	12.0	5.0	板	圭頭状	圭頭状	
158		9世紀	井戸(S-E54 F4)	不明	(162.0)	(8.0)	2.0	板	圭頭状	欠損	
159		9世紀	井戸(S-E54 F4)	C	148.0	14.0	2.0	板	欠損	欠損	上端に有
160		9世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	142.0	11.0	5.0	板	欠損	欠損	上端に有
161		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	141.0	12.0	3.0	板	圭頭状	斜先状	上端に有
162		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	不明	(110.0)	12.0	3.0	板	圭頭状	欠損	上端に有
163		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	237.0	16.0	2.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	
164		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	不明	(206.0)	16.0	3.0	板	鈍角圭頭状	欠損	上端に有
165		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	235.0	18.0	5.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
166		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	236.0	17.0	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
167		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	226.0	14.0	2.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
168		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	218.0	18.0	5.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
169		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	235.0	17.0	6.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
170		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	226.0	17.0	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
171		10世紀後半	井戸(S-E63 F6)	C	237.0	17.0	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
172		10世紀後半	井戸(S-E203)	C	245.0	15.0	4.0	板	圭頭状	斜先状	上端に、斜みの下に毛羽先状切込み
173		10世紀後半	井戸(S-E203)	不明	(174.0)	23.0	4.0	板	欠損	斜先状?	
174		10世紀後半	井戸(S-E203)	D	170.0	22.0	4.0	板	平状	斜先状	上端に、斜みの下に毛羽先状切込み
175	南阿野遺跡(第2次)	11世紀後半	井戸(S-E4 F2)	C	140.0	17.0	2.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
176		11世紀後半	井戸(S-E4 F2)	C	122.0	15.0	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	
177		11世紀後半	井戸(S-E6 F3)	不明	(144.5)	8.0	3.0	板	圭頭状	欠損	上端に有
178		11世紀後半	井戸(S-E6 F2)	不明	(143.0)	12.5	3.0	板	圭頭状	欠損	上端に有
179		11世紀後半	井戸(S-E64 F2)	C	124.5	15.5	2.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
180		11世紀後半	井戸(S-E64 F3)	B	142.0	11.0	2.5	板	圭頭状	圭頭状	上端に有
181		11世紀後半	井戸(S-E64 F3)	C	144.0	15.5	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
182		10世紀後半	井戸(S-E101 F4)	C	(57.0)	14.0	2.5	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
183		10世紀後半	井戸(S-E101 F3)	C	129.5	12.0	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に、左端左右に茎葉字?有
184		10世紀後半	井戸(S-E101 F4)	C	128.0	10.0	2.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に封印の下に毛羽先状切込み
185		10世紀後半	井戸(S-E101 F4)	C	126.5	8.0	3.0	板	圭頭状	斜先状	
186		10世紀後半	井戸(S-E101 F3)	C	(119.0)	9.0	3.0	板	欠損	斜先状	
187		10世紀後半	井戸(S-E101 F3)	C	112.0	8.0	3.0	板	圭頭状?	斜先状	上端に毛羽先状切込み
188		10世紀後半	井戸(S-E101 F3)	C	137.0	14.0	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
189		10世紀後半	井戸(S-E101 F3)	不明	(129.0)	6.0	3.0	板	欠損	欠損	
190		10世紀後半	井戸(S-E101 F4)	不明	(174.0)	11.0	4.0	板	圭頭状?	欠損	
191		8世紀後半~9世紀前半	溝(S-K55 F2)	C	199.0	18.0	3.0	板	平状	斜先状	
192	新青道遺跡(第2次)	10世紀後半~末葉	土壙(S-K250 F9)	C	148.0	14.0	2.0	板	圭頭状	斜先状	
193		10世紀後半~末葉	土壙(S-K250 F9)	C	137.0	17.0	2.5	板	鈍角圭頭状	斜先状	
194		10世紀後半~末葉	土壙(S-K250 F9)	C	121.0	18.0	4.5	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に有
195		10世紀後半~末葉	土壙(S-K234 F3)	不明	(96.0)	15.0	5.5	板	欠損	斜先状	
196		11世紀後半	土壙(S-K31 F1)	不明	(77.0)	21.0	3.0	板	欠損	欠損	
197		11世紀後半	土壙(S-K31 F1)	不明	(89.0)	16.0	4.0	板	欠損	斜先状	
198		11世紀後半	土壙(S-K311 F1)	不明	(90.0)	8.0	3.0	板	欠損	斜先状	
199		11世紀後半	土壙(S-K311 F1)	不明	(128.0)	7.0	4.0	棒	欠損	斜先状	
200		11世紀後半	土壙(S-K311 F1)	B	211.0	12.0	3.0	板	圭頭状	斜先状	上端に有
201		10世紀後半~末葉	土壙(S-K250 F9)	C	(143.0)	18.0	2.0	板	圭頭状	斜先状	上端に有
202		10世紀後半~末葉	土壙(S-K250 F9)	C	139.0	18.0	3.0	板	圭頭状	斜先状	上端に有
203		10世紀後半~末葉	土壙(S-K250 F9)	B	142.0	13.0	3.5	板	圭頭状	斜先状	上端に有
204		10世紀後半~末葉	土壙(S-K250 F9)	不明	(94.0)	16.5	4.0	板	圭頭状	欠損	上端に有
205		11世紀後半	土壙(S-K311 F7)	不明	(106.0)	11.0	4.0	板	欠損	斜先状	
206		11世紀後半	土壙(S-K311 F7)	不明	(124.0)	13.0	5.0	板	欠損	斜先状	
207		11世紀後半	土壙(S-K311 F7)	不明	(76.0)	16.0	6.0	板	鈍角圭頭状	欠損	
208		11世紀後半	土壙(S-K311 F7)	不明	(142.0)	14.0	3.0	板	鈍角圭頭状	欠損	
209		11世紀後半	土壙(S-K311 F7)	不明	(201.0)	22.0	4.0	板	鈍角圭頭状	欠損	
210		11世紀後半	土壙(S-K311 F7)	C	220.0	11.0	3.5	板	鈍角圭頭状	斜先状	
211		11世紀後半	土壙(S-K311 F7)	C	228.0	11.0	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	
212		11世紀後半	土壙(S-K311 F7)	C	232.0	12.5	3.5	板	鈍角圭頭状	斜先状	
213	山田遺跡	8世紀末葉~10世紀初頭	河川(S-G172 F2)	不明	(266.0)	22.0	6.0	板	圭頭状	欠損	
214		8世紀末葉~10世紀初頭	河川(S-G172 F2)	B	177.0	18.0	5.0	板	鈍角圭頭状	鈍角圭頭状	
215		8世紀末葉~10世紀初頭	河川(S-G172 F2)	不明	(190.0)	25.0	7.0	板	斜状	欠損	
216		8世紀末葉~10世紀初頭	河川(S-G172 F2)	不明	(273.0)	28.0	6.0	板	欠損	棒状	
217		8世紀末葉~10世紀初頭	河川(S-G172 F2)	不明	(174.0)	18.0	5.0	板	欠損	斜先状?	
218	五百石道跡	9世紀後半	グリッド(1~21-)	C	101.0	13.0	5.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	
219	田地石道跡	9世紀	溝(S-D2)	不明	(123.0)	22.5	3.0	板	圭頭状	欠損	
220		9世紀	溝(S-D2)	不明	(147.0)	18.0	12.0	棒	欠損	欠損	
221		9世紀	溝(S-D2)	不明	(198.0)	18.0	6.0	板	欠損	欠損	
222		9世紀	溝(S-D2)	不明	(75.0)	13.5	6.0	板	欠損	斜状	
223	藤島城跡(第6次)	15世紀末葉~16世紀中葉	土壙(S-K2 F)	D	285.0	26.0	3.0	板	平状	斜先状	
224	今堀遺跡	9世紀	溝(S-D37)	C DK	160.0	22.0	5.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上端に毛羽先状切込み
225	謙佐道跡(第2次)	8世紀末	溝(S-D24)	B	185.0	18.0	4.0	板	鈍角圭頭状	圭頭状	上部脇に毛羽先状切込み
226		8世紀末	溝(S-D24)	C	176.0	19.0	3.0	板	鈍角圭頭状	斜先状	上部脇に毛羽先状切込み

庄内地方北部の10～11世紀代の土器群の様相

植 松 晓 彦

1 はじめに

近年、庄内平野では、圃場整備事業に伴い数多くの古代遺跡の調査が行われてきた。特に庄内地方の北部地域は、資料数の増加に伴い古代集落の様相が明らかに成りつつ、筆者も以前『庄内高瀬川と月光川流域の集落変遷』(植松1997)で土器相や集落の動向を検討した事がある。

しかし、10～11世紀代の資料は、全体に散発的であまり良好な資料に恵まれなかった。全県的にみても、当該期は遺跡数の減少が指摘され(阿部他1998)、その様相が不明瞭な時期にある。

現在でも状況に大きな変化はないが、昨今10世紀前葉の降下とされる十和田a火山灰が、県内の内陸部(高瀬山遺跡・北向遺跡)や庄内地方南半(興野川原遺跡)でも検出され、地域性も検討できる状況になりつつある。

本稿では、筆者の前述論考時に欠けた同地域の遊佐町木原遺跡の一括資料等を紹介し、当該期の土器群を再検討し、古代～中世に至る当地域の様相を併せて概括する。

2 研究史

庄内地方の古代の土器編年は、1970年代後半～80年代前半に大枠が定められた。

最初に佐藤庄一氏の「山形県における平安時代の土器様相」は、集落出土の一括資料を内陸部の紀年木簡や北陸地方等との対比から9～11世紀までの土器編年を示した。(佐藤1979・1983)

川崎利夫氏は、境興野遺跡の調査で当該期の主体を占める所謂赤焼土器の観察から、焼成方法や性格等を論じ、赤焼土器の変遷^{1・2)}を示した(川崎1981)。

阿部明彦氏は、北陸地方の須恵器窯の吉岡編年との対比から、上記佐藤氏の編年の若干の修正と全体に半世紀程年代が遡る事等を、報告書内で指摘した(阿部1983)。

その後、1980年代後半に入り、岩見誠夫・船木義勝・

能登谷宣康氏は、山形県の須恵器窯資料を秋田県内の窯跡と対比させ、8世紀初頭～10世紀後半までの編年觀を示した(船木他1988)。本県でも阿部明彦・伊藤邦弘氏が、この編年觀を機軸に県内の窯跡を整理し、県内での須恵器窯の分布や変遷を明らかにした(阿部・伊藤1995)。

渋谷孝雄氏は、県内で官衙的な遺跡として著名な下長橋遺跡を調査され、出土した火山灰のある遺構や地震跡、地鎮遺構、施釉陶器等を整理し、特に10世紀以降の全体的な土器様相や変遷を示した(渋谷1988)。

1990年代に入り、阿部明彦氏は、北目長田・上高田遺跡の調査から、一括資料の分類等を行い、同形態の土器群が出土する遺構や層準のまとまりを土器組成として捉え、当地域の土器相や変遷をまとめた(阿部1995)。

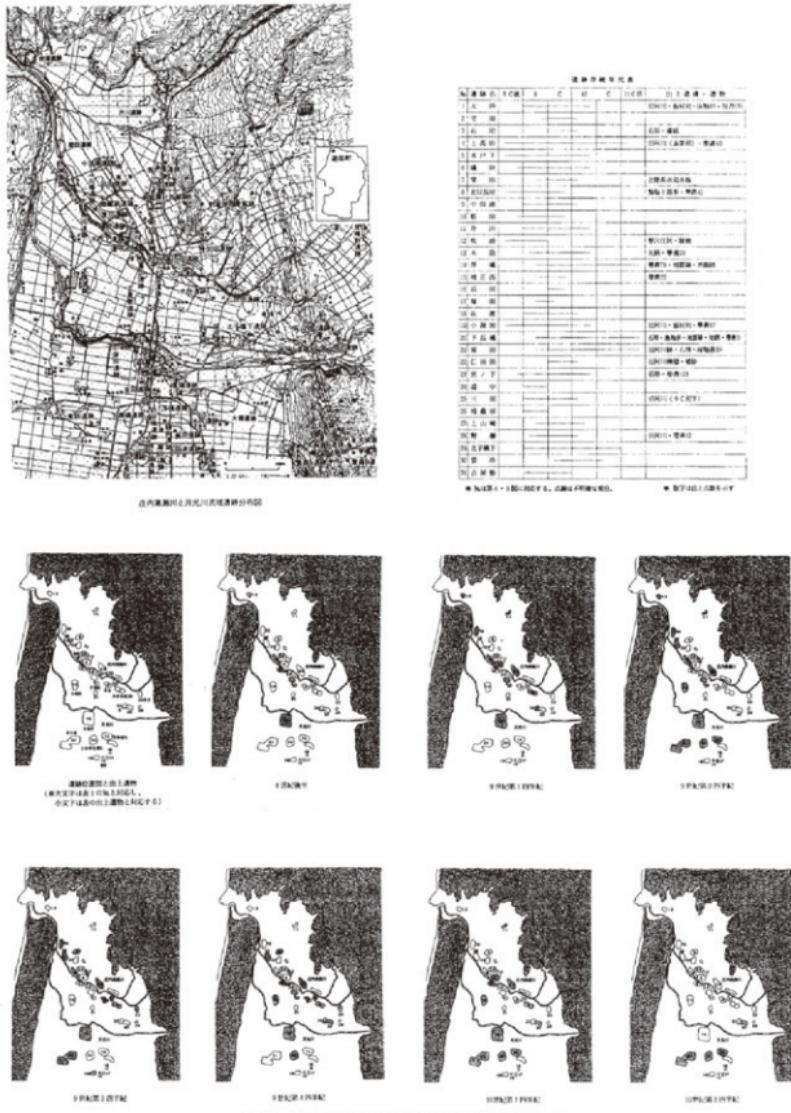
筆者は、先学研究を踏まえ庄内北端部の土器群を、新たに古代秋田城の新資料や、近年の畿内の施釉陶器の編年觀、火山灰出土遺構の分析等から8世紀後半～11世紀初頭の土器変遷と実年代を概観した(植松1997)。

同時期に伊藤武士氏は、「出羽における10-11世紀の土器様相」を集成され、出羽北半は秋田県の地域毎を整理し、出羽南半(庄内地方)は筆者の土器変遷を引用し、最も新しい段階として境興野遺跡の一群を追加し11世紀前半と位置づけた(伊藤1998)。

その後、阿部明彦氏は、城柵官衙検討会の一連の研究で、県内の古代の窯跡・集落出土の詳細な土器編年を組まれ、一部報告書時との年代觀の齟齬はあるが、庄内平野の集落出土の土器群を、全体に8世紀前半～10世紀後葉に分類し編年觀を示した。(阿部他1998・1999)

一方、中世側から高桑弘美氏が、筆者や伊藤氏の変遷を基に、隣県などとの比較から下長橋(S X1105)より境興野(S X26)を新相とし、11世紀前半をあて、古代の最も新しい段階とした(高桑2003)。

山口博之氏も中世「遊佐荘大橋遺跡の成立」で庄内地方の古代集落の展開を精査し、上記遺跡を同様に評価した(山口2003)。



第1図 庄内北部の遺跡位置と概要図（植松1997）

3 土器編年

本稿では、近年の土器編年や変遷を整理し、近年の阿部氏の編年とも概ね誤差は少ないと判断し、前述筆者の土器変遷（植松1997）に最初準據する（第2・3図）。

また、本稿では、上記論考が庄内北部の小地域（遊佐町）に限定した事もあり、筆者の最も新しい部分の次段階に、伊藤武士氏が指摘した庄内平野中央部の酒田市境興野遺跡を加える（伊藤1998）。

以下は、詳細は前述拙稿に譲るが、本稿の当該期V期以降の資料を記しておく。

V期（9世紀4/4期）：宅田遺跡S K 7・堂田遺跡S E 51・大坪遺跡S G 1 F - 4の一部（同一墨書等）。

VI期（10世紀1/4期前半：火山灰降下期）：浮橋遺跡S E 11・13・下長橋S K 28。

VII期（10世紀1/4期後半：火山灰降下以後）：下長橋遺跡S B 1・2・4・燒待遺跡S E 2・小深田遺跡S D 77。

VIII期（10世紀2/4期）：下長橋遺跡S B 3・5・6。

IX期（10世紀3/4～11世紀1/4期）：下長橋遺跡E U 825・826・S X 1105・浮橋S K 16。

X期（11世紀1/4～2/4期）：境興野S K 26。

4 木原遺跡1次調査の一括資料

本項では、先の土器変遷を作成した時に欠けた木原遺跡1次調査の一括資料（阿部・植松1993）を紹介し、時期や形態を再検討する（第4～9図）。

木原遺跡は、庄内平野北端の遊佐町大字宮田字木原に所在し、本遺跡の位置する一帯は遺跡の北側を西流する庄内高瀬川と南側を西流する月光川によって形成された自然堤防（微高地）上に立地する。標高は約7mを測る。

周辺には、本遺跡同様に両河川の自然堤防上に、奈良～平安時代の集落遺跡が多く、当該期では上高田・浮橋・下長橋遺跡等が散発的に分布する。（第1・4図）

1次調査は、平成4年に県圃場整備事業に伴い、約6,400m²が調査された。主な遺構は掘立柱建物跡4棟以上、井戸跡4基、大小の土坑、墓坑、畝状溝跡等が検出され、ほぼ南北方向に主軸を持ち、重複関係等から2時期以上の変遷が窺える。（第5図）

遺物の主体は、一部9世紀前半代の古相の土器群もあ

るが、広域火山灰（十和田a）を含む土坑や落ち込み遺構から多量の土器群が出土し、火山灰降下前後の10世紀前半頃と考えられる。他に包含層からK-90後半段階の縁袖陶器や「伴」「虫」等の少數の墨書き土器、二次調査では方形の帶対金具、小形の梵鐘等も出土した。

報告書では、主な遺構の変遷と遺物群の年代観を、Ⅰ期：S K304・540・393（9世紀1/4～2/4期）、Ⅱ期：S K302・S X617（10世紀1/4期）、Ⅲ期：S E30・S X938・977・S K 7（10世紀2/4期）と比定した。以下に主な3つの遺構を報告書に沿って概述する。

S K302土坑（第6図）

木原遺跡では、一部土坑上面を小溝や暗渠に墳されるが、最もまとまりのある一括資料の一つである。調査区中央の長径約3.9m、短径2.9mの隅丸方形で、確認面からの深さは約76cmである。覆土は7層からなり、中位の4層に火山灰が厚さ2～4cm堆積する。遺物は、この火山灰層を挟んでその直上下から、多くの赤焼土器の坏類が主に出土した。図化資料できたのは24点である。

赤焼土器の坏類（B 1）は、報告書でa～d類に形態や口径指数（器高/口径×100）等で細分した。

B 1 a類（18～17）：高径指数40前後の器高の高い一群。B 1 bと共に法量的に大型品。

B 1 b類（18～14）：高径指数35前後を示す器高がやや低く相対的に外傾度大きい一群。

B 1 c類（18～16）：高径指数32、33前後を示す一群。

B 1 d類（18～8）：高径指数30を切る歪みの著しい浅身一群で、器高が坏類で最も低い。

B 1 a～b類は、共に法量的に大型で、口縁部の立ち上がりは内湾ないし直線的外傾で、内湾例は口縁部の外反角度がいくらか強い。平均高径指数は35前後である。

煮沸形態では、赤焼土器の壺・鉢・鍋が認められる。壺・鉢類の口縁部は丸みを帯びて口唇部が僅かに上方に短く立ち上がる。鍋は頭部の括れなど屈曲がほとんど見られず、体部から一連で統一、口唇部は壺類と同様の形態である。なお、他に図示しないが、破片資料として須恵器類では、底径が小さくヘラ切りの須恵器坏（A 1 d類）や、丸みの強い肩の壺片がある。

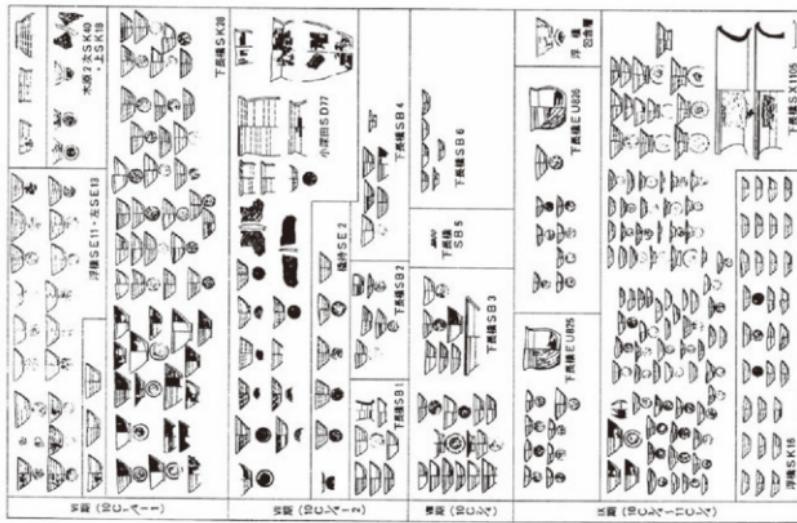
報文では、層位的に火山灰降下期の10世紀前葉に一括廻来されるが、時期的に「主体的な赤焼土器類よりは先行するもの」と考え、まとめで10世紀第1四半期とした。

庄内平野の集落遺跡の土器編年・変遷図

時間	佐藤 (1979-1983)	川崎(1979)	阿部(1983)	浜谷(1989)	阿部 (1995-1996)	樺谷(1997)-伊藤(1998)	阿部(1998)	樺谷(1997)年代割付資料
9世紀	地正面SK11 地正面SE11	關日	地正面SK11 地正面SE3	下長櫛SP101 (下長櫛Ⅰ期)	上高田1b期 北目長田K2(北目長田Ⅲ期)	地正面SE3 北目長田SK2(北目長田Ⅲ期)	大槻2次SG1 F→G	地床跡:縫合-灰陶模様皿(K-90) 今源:木桶(853年)
4/4	地正面SE3 茅ヶ台地			宅田SK7 上高田Ⅱ期	宅田SK7 上高田Ⅲ期		北目長田Ⅲ期	大平:竹籠瓦灰陶(K-90)
1/4古	地正面SE3 茅ヶ台地			下長櫛SK28 (下長櫛Ⅰ期)	下長櫛SK28(下長櫛Ⅰ期)		道伝:木桶(896年)	
1/4新				深櫛SE11-13 木原2次SK18-40	深櫛SE11-13 木原2次SK18-40(下長櫛Ⅲ期)		道伝:木桶(896年)	
2/4	北田SE107a 北田SE159 境興野SK7			燒野田SK2 小森田SD77	燒野田SK2 小森田SD77		十和田Ba(915年) 精粹層燒 浮燒包含層:折口5件	
10世紀	上台ST2			下長櫛SB1-2-4 (下長櫛Ⅲ期)	下長櫛SB3-5-6(下長櫛V期)	上高田1b期*	十和田Ba(915年) プローフ混入	
3/4				手藏田SK142 沼田SD42		上高田Ⅰ期*	下長櫛:尾上燒田4号(10C前半)	
4/4	北田SE105b 上台ST2			下長櫛SB3-5-6 (下長櫛Ⅳ期)	上高田Ⅲ期	上高田Ⅰ期*	上高田:尾上燒田4号(10C前半~末葉)	
1/4					深櫛SK16 下長櫛Ⅴ期	下長櫛SK16 下長櫛Ⅴ期	津輕SK16 東濃野SK159	
3/4					境興野	境興野	上高田Ⅲ期	境興野:東濃山1号(10C後半~末葉)
4/4	北田SE105b 上台ST2			下長櫛出頭燒 (EU825-826)	下長櫛SK1105 (下長櫛V期)	下長櫛SK1105 (下長櫛V期)	下長櫛出頭燒 (EU825-826) (下長櫛V期)	重複切込み:地盤燒筋:青釉 浮燒包含層 :東濃丸石4号(10C末~11C初頭)
1/4	後田SK602				境興野SK126			境興野SK126(伊藤1998)
1/2-4								
3/4	境興野SK26							
4/4								
1/4								
12世紀	2/4	平形G地点 SD4				大槻		押留奈遊佐狂丸見(1147年)
3/4								
4/4								

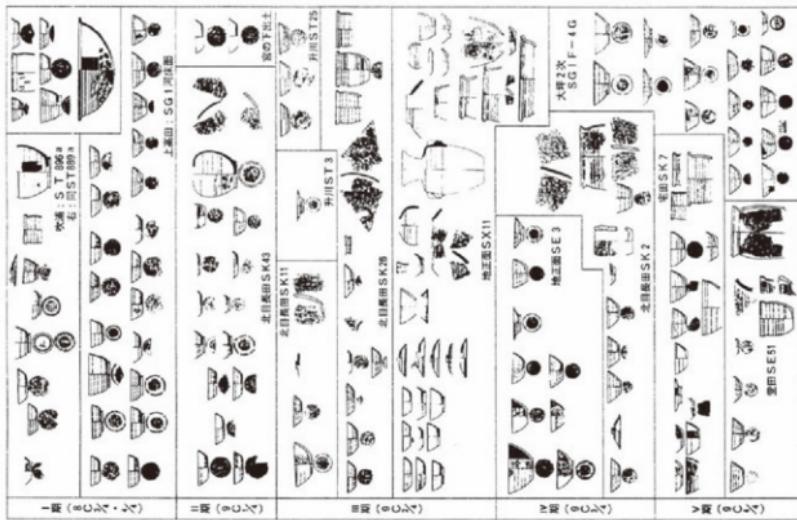
*各氏の編年割は、その報告書や論者の本文中に準拠して筆者がまとめた。

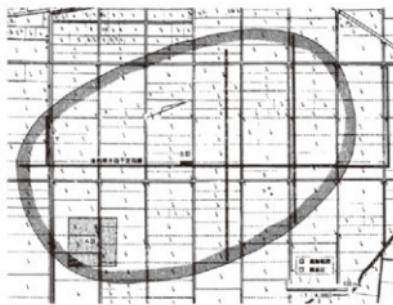
*大平:木桶(896年)は測量毎の変遷であるが、一部測量の後の活用からは浜谷(1989)・阿部(1998)の部分に当るかを比較するため付け加えた。



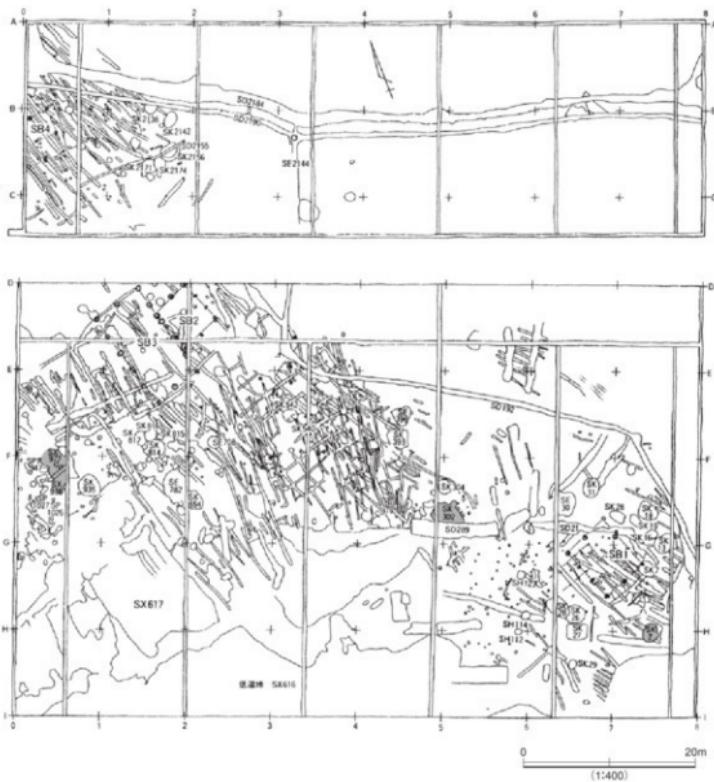
第3図 土器組成変遷図(植松1997)

卷之三

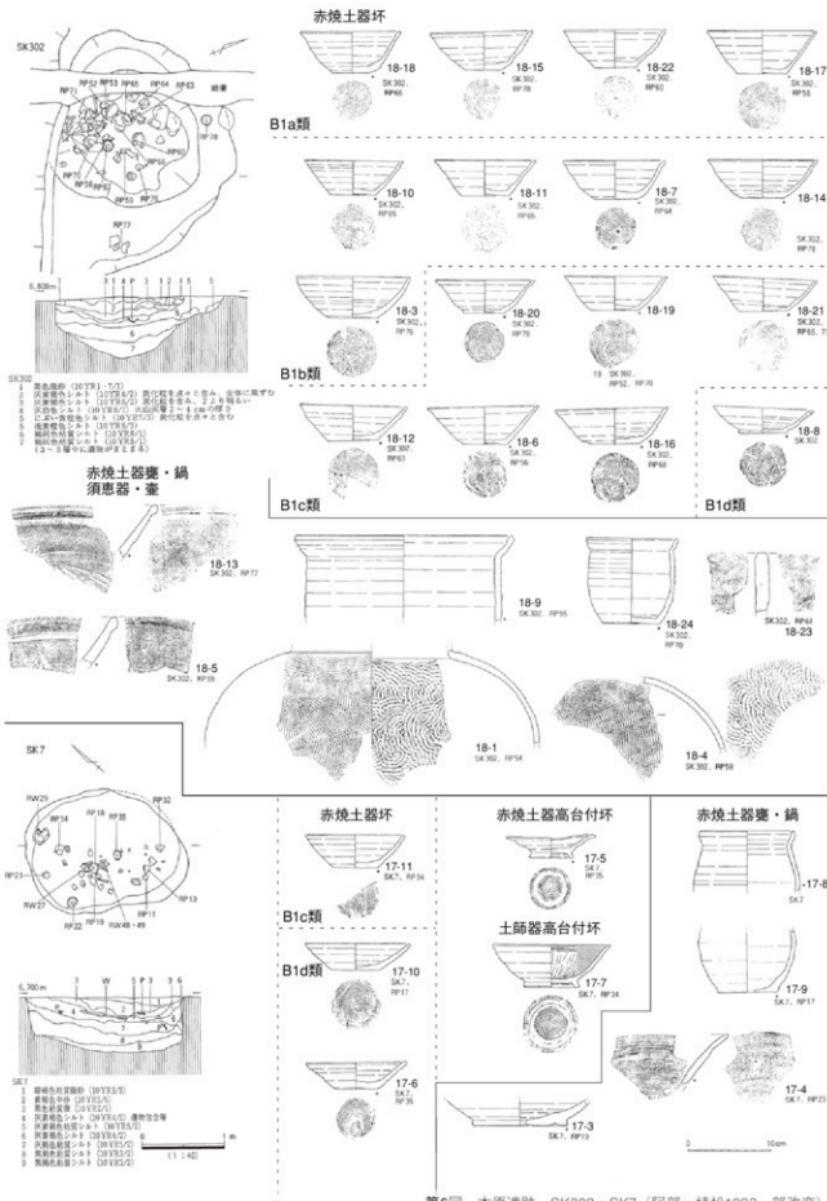




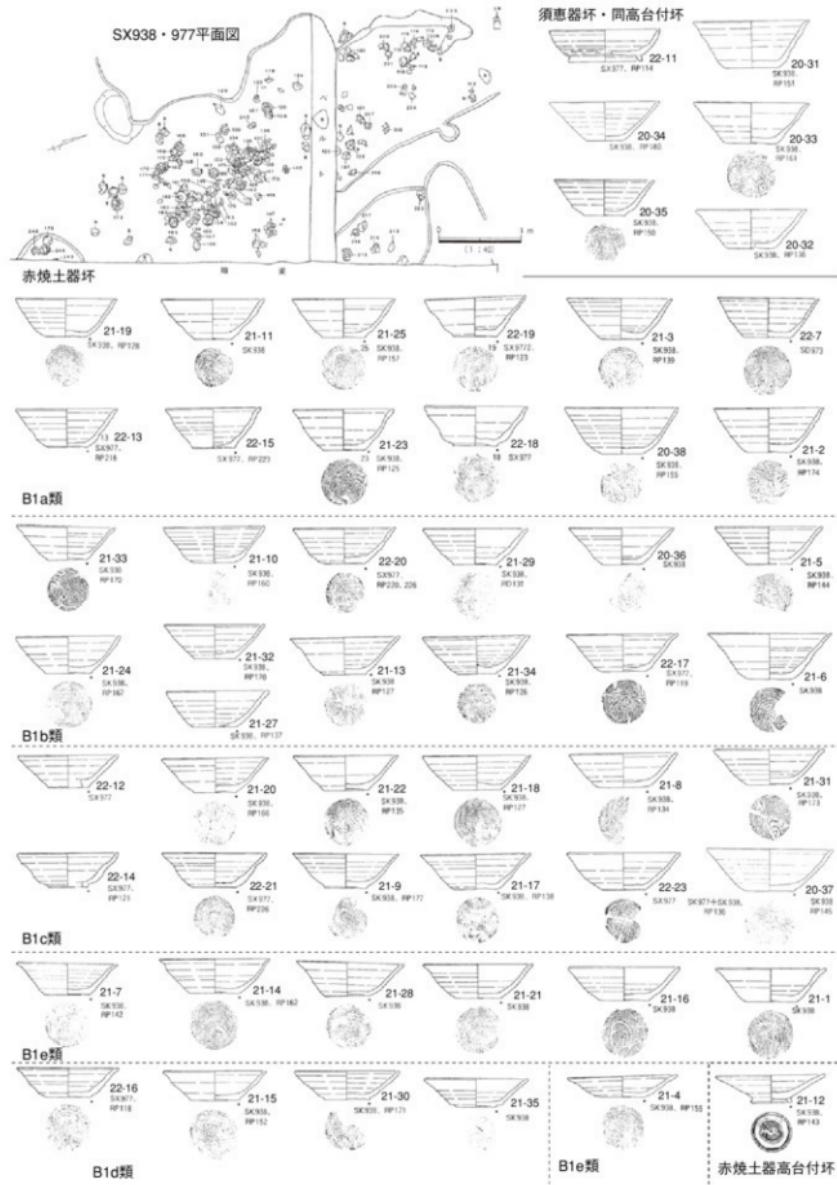
第4図 木原遺跡調査区位置図（阿部・植松1993）



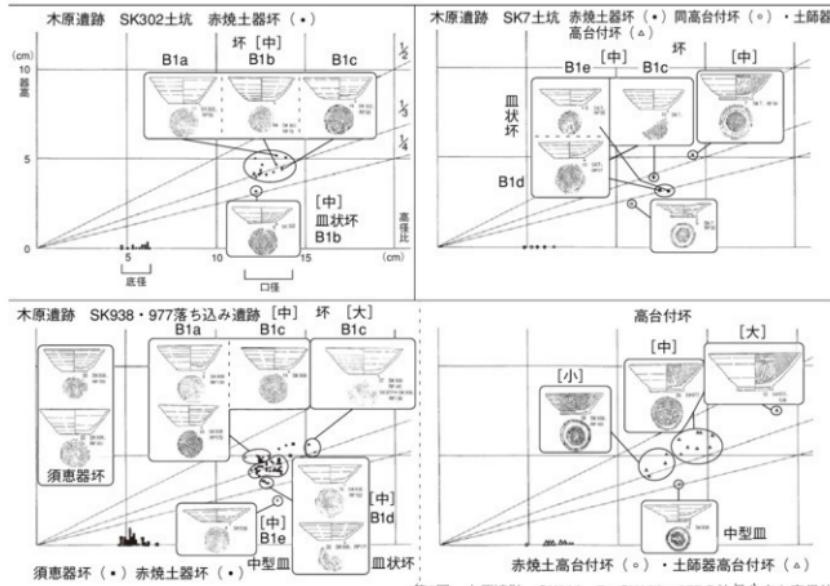
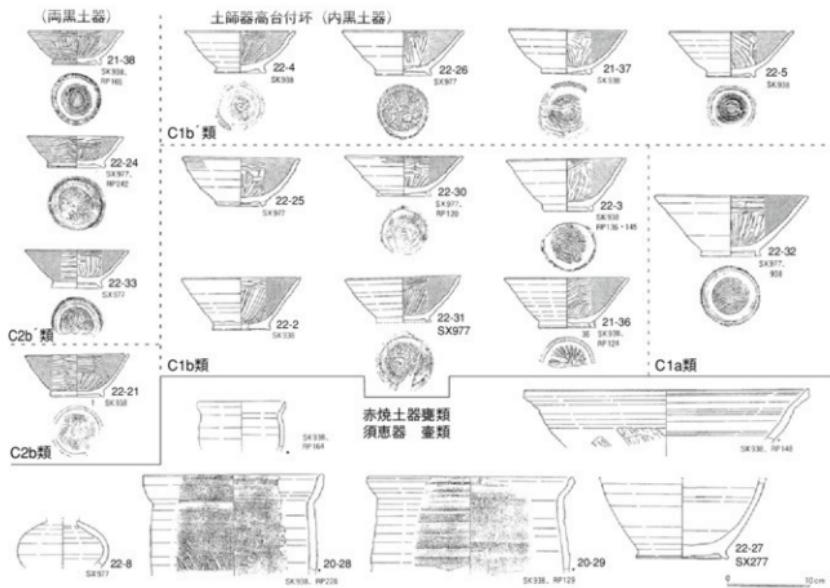
第5図 木原遺跡構造配置図（阿部・植松1993）



第6回 木原遺跡 SK302・SK7（阿部・植松1993一部改変）



第7図 木原遺跡 SK938・977出土土器 (阿部・植松1993)



第8図 木原遺跡 SK302、7、SK938・977の量的分布と高径比

図	番号	種別	器種	口径(φ)	底径(φ)	高さ(ℓ)	高径指数	出土地点	R.P番号	備考
17	11	赤焼土器	环	12.1	5.6	4.0	26.3	S.K97	R.P.17	
17	6	赤焼土器	环	12.4	4.9	3.3	26.5	S.K7	R.P.35	
17	10	赤焼土器	环	12.9	6.0	3.2	24.8	S.K7	R.P.17	
17	5	赤焼土器	高台付环	10.9	5.3	2.5	22.9	S.K7	R.P.35	
17	3	赤焼土器	高台付环	—	11.6	—	—	S.K7	R.P.19	
17	7	土焼器	高台付环	14.3	6.5	5.2	36.4	S.K7	R.P.34	内重
17	8	赤焼土器	環	11.4	—	—	—	S.K7	—	
17	9	赤焼土器	環	—	7.3	—	—	S.K7	R.P.17	
18	19	赤焼土器	环	12.2	4.7	5.0	41.0	S.K302	R.P.66	
18	17	赤焼土器	环	13.4	6.5	5.2	38.8	S.K302	R.P.58	
18	7	赤焼土器	环	12.6	5.3	4.7	37.3	S.K302	R.P.64	
18	15	赤焼土器	环	12.6	4.7	4.7	37.3	S.K302	R.P.78	
18	22	赤焼土器	环	12.4	5.1	4.6	37.1	S.K302	R.P.60	
18	7	赤焼土器	环	13.1	6.3	5.1	36.5	S.K302	R.P.76	
18	11	赤焼土器	环	12.5	5.8	4.4	35.5	S.K302	R.P.62	
18	14	赤焼土器	环	13.4	5.3	4.7	35.1	S.K302	R.P.78	
18	10	赤焼土器	环	12.1	5.6	4.2	34.7	S.K302	R.P.65	
18	19	赤焼土器	环	12.5	5.8	4.2	33.6	S.K302	R.P.52.70	
18	6	赤焼土器	环	13.7	5.5	4.5	32.8	S.K302	R.P.56	
18	20	赤焼土器	环	12.2	5.0	4.0	32.8	S.K302	R.P.78	
18	17	赤焼土器	环	13.7	6.0	4.5	32.6	S.K302	R.P.63	
18	16	赤焼土器	环	13.7	6.0	4.4	32.5	S.K302	R.P.68	
18	21	赤焼土器	环	12.8	6.1	4.1	32.0	S.K302	R.P.65.77	
18	8	赤焼土器	环	12.2	6.0	3.2	26.2	S.K302	—	
18	9	赤焼土器	環	26.7	—	—	—	S.K302	R.P.55	
18	24	赤焼土器	環	11.4	6.8	10.4	—	S.K302	R.P.70	
22	15	赤焼土器	环	11.6	5.1	4.9	42.4	S.K977	R.P.223	
21	23	赤焼土器	环	12.6	5.4	5.0	40.5	S.K938	R.P.25	
20	30	赤焼土器	环	13.9	5.0	5.0	40.3	S.K938	R.P.155	
21	2	赤焼土器	环	13.5	5.2	4.4	40.0	S.K938	R.P.74	
21	11	赤焼土器	环	12.6	4.6	4.9	38.9	S.K938	—	
21	3	赤焼土器	环	12.9	5.2	5.0	38.8	S.K938	R.P.139	
22	7	赤焼土器	环	12.4	5.7	4.8	38.7	S.K977	R.P.123	
22	19	赤焼土器	环	12.4	5.2	4.8	38.6	S.K977	R.P.97	
21	27	赤焼土器	环	12.5	5.4	4.8	38.4	S.K977	R.P.128	
21	19	赤焼土器	环	12.6	5.6	4.8	38.3	S.K938	R.P.157	
21	25	赤焼土器	环	12.5	5.2	4.7	37.6	S.K938	R.P.218	
22	13	赤焼土器	环	12.6	4.9	4.7	37.3	S.K977	R.P.216	
21	6	赤焼土器	环	15.2	5.4	5.6	36.8	S.K938	—	
21	24	赤焼土器	环	12.8	5.5	4.6	35.9	S.K938	R.P.167	
21	34	赤焼土器	环	13.1	4.7	4.7	35.9	S.K938	R.P.20	
21	10	赤焼土器	环	12.4	5.0	4.7	35.5	S.K938	R.P.60	
22	20	赤焼土器	环	12.5	4.9	4.4	35.4	S.K977	R.P.20.226	
20	36	赤焼土器	环	12.8	4.7	4.5	35.2	S.K938	—	
21	29	赤焼土器	环	12.8	5.3	4.5	35.2	S.K938	R.P.131	
21	33	赤焼土器	环	12.0	4.7	4.2	35.0	S.K938	R.P.70	
21	27	赤焼土器	环	12.6	5.4	4.4	34.9	S.K938	R.P.37	
21	5	赤焼土器	环	13.2	5.6	4.6	34.8	S.K938	R.P.44	
21	11	赤焼土器	环	13.4	5.4	4.6	34.4	S.K938	R.P.17	
21	32	赤焼土器	环	12.4	4.9	4.2	33.9	S.K938	R.P.70	
22	17	赤焼土器	环	13.6	5.3	4.6	33.8	S.K977	R.P.119	
21	22	赤焼土器	环	12.8	5.4	4.3	33.6	S.K938	R.P.35	
20	37	赤焼土器	环	15.5	6.0	5.2	33.5	S.K938.977	R.P.145.136	複合
22	14	赤焼土器	环	12.3	4.9	4.1	33.3	S.K977	R.P.21	
22	23	赤焼土器	环	13.9	5.2	4.6	33.1	S.K977	—	
21	20	赤焼土器	环	13.7	5.2	4.7	33.1	S.K938	R.P.166	
22	21	赤焼土器	环	12.6	5.3	4.2	32.8	S.K977	R.P.226	
22	12	赤焼土器	环	12.3	5.0	4.0	32.5	S.K977	—	
21	31	赤焼土器	环	13.6	5.2	4.4	32.4	S.K938	R.P.173	
21	18	赤焼土器	环	13.3	5.9	4.3	32.3	S.K938	R.P.27	
21	9	赤焼土器	环	13.0	5.2	4.2	32.3	S.K938	R.P.177	
21	17	赤焼土器	环	13.5	5.5	4.3	31.9	S.K938	R.P.38	
21	8	赤焼土器	环	13.5	6.0	4.2	31.6	S.K938	R.P.134	
21	29	赤焼土器	环	12.5	4.4	4.2	31.4	S.K938	R.P.142	
21	7	赤焼土器	环	12.4	5.4	3.9	31.5	S.K938	R.P.142	
21	14	赤焼土器	环	13.4	6.0	4.2	31.3	S.K938	R.P.162	
21	21	赤焼土器	环	13.5	5.5	4.2	31.1	S.K938	—	
21	16	赤焼土器	环	13.6	5.9	4.1	30.1	S.K938	—	
21	28	赤焼土器	环	13.6	6.2	4.0	29.4	S.K938	—	
22	16	赤焼土器	环	12.8	5.5	3.6	28.8	S.K977	R.P.118	
21	15	赤焼土器	环	12.7	5.9	3.6	28.3	S.K938	R.P.152	
21	32	赤焼土器	环	12.8	5.7	3.7	28.3	S.K938	—	
21	30	赤焼土器	环	12.9	5.3	3.5	27.1	S.K938	R.P.71	
21	4	赤焼土器	环	13.4	5.2	2.5	18.7	S.K938	R.P.155	
22	22	赤焼土器	环	—	5.1	—	—	S.K977	R.P.26	
21	12	赤焼土器	高台付环	14.4	4.9	3.4	25.4	S.K938	R.P.143	
22	2	土焼器	高台付环	14.2	7.0	6.3	43.4	S.K938	—	
22	4	土焼器	高台付环	14.2	6.1	5.3	43.5	S.K938	R.P.136.145	内重
22	25	土焼器	高台付环	14.4	6.0	5.9	41.0	S.K977	—	
22	32	土焼器	高台付环	18.6	7.3	7.5	40.3	S.K977.938	—	
22	1	土焼器	高台付环	12.7	6.5	5.1	40.2	S.K938	—	
21	36	土焼器	高台付环	15.3	6.9	6.1	39.9	S.K938	R.P.124	内重
22	4	土焼器	高台付环	13.5	6.2	5.1	37.8	S.K938	—	
21	37	土焼器	高台付环	14.2	6.5	5.4	37.5	S.K938	—	
22	20	土焼器	高台付环	14.9	6.9	5.5	36.8	S.K977	—	
22	33	土焼器	高台付环	12.6	6.2	4.6	36.5	S.K977	—	
22	5	土焼器	高台付环	15.1	5.9	5.5	36.4	S.K938	—	
21	38	土焼器	高台付环	11.6	6.0	4.2	36.2	S.K938	R.P.165	内重
22	24	土焼器	高台付环	11.7	7.0	3.9	33.3	S.K977	R.P.142	内重
22	29	土焼器	高台付环	—	6.6	—	—	S.K977	R.P.115	内重
22	30	土焼器	高台付环	14.3	—	—	—	S.K977	R.P.120	内重
22	31	土焼器	高台付环	14.3	—	—	—	S.K977	—	
20	34	須恵器	环	14.3	6.7	5.7	39.9	S.K938	R.P.151	
20	33	須恵器	环	13.5	4.7	4.8	35.6	S.K938	R.P.180	
20	35	須恵器	环	14.1	6.2	5.0	35.5	S.K938	R.P.161	
20	32	須恵器	环	12.2	5.1	4.3	35.2	S.K938	R.P.150	
22	11	須恵器	环	13.5	5.9	4.7	34.8	S.K938	R.P.136	
22	33	須恵器	高台付环	13.5	9.0	3.9	28.9	S.K977	R.P.114	

※図・番号は報告書番号を表す。なお、種別・器種・高径指数順に表す。

○直径・底径・器高は、推定値・推定底径・推定高を含む。

S X938・977落ち込み遺構（第7・8図）

調査区西辺部に土器の密集する不整形の落ち込み遺構である。長径約5.6m、短径約1.4m以上の南北に伸びる深い溝状で、確認面からは、深さ数～20と深い。

当初は、隣接する別個の遺構（S X938・977）として捉えていたが、浅い掘り込みや火山灰の塊を斑状に混入する覆土、土器の集中的な出土状況等の共通性から同一の遺構と判断したもので、所謂土器盛り状を呈する。

土器の主体は、赤焼土器の供膳器で、壺では200個体以上が確認された。その他、須恵器と土師器（黒色土器）の壺類も若干認められたが、双方でも一割に満たない分量である。両者の中では、土師器（黒色土器）の量的優位が特徴的にみられた。図化できた資料は55点である。

主体の赤焼土器壺は、B 1 a～B 1 d類がある。他に新しい形態や器種もある。

B 1 e類（21-4）：新しい類型の身が浅く口縁の大きく開く皿状形態を示すもの。

B 2類（21-12）：高台付の皿。

これら壺類は、平均的高径指数34で、前述S K302と同等である。しかし、浅身のB 1 d類の主体や、新しい形態器種（B 1 e類）が加わる組成からは、より後出の様相と判断された。

土師器（C類）では、台付の黒色土器碗があり、16点図化。出土数からは、供膳器組成の一一定割合を担うと推測される。内黒（C 1類）、両黒（C 2類）の大小で識別され、更に形態的に細分される。

C 1 a類（22-32）：大形で内黒の口径18以上もののもの。

C 1 b類（22-26）：中形で高径指数が40前後のもの。

C 2 b類（21-38）：小形で口径・器高ともに小振りな指數35前後のもの。

須恵器（A類）では、壺と高台付壺、壺などが認められたが、供膳組成ではほぼ拭拭されるようである。

須恵器壺類は、明らかに古相の箱型逆台形³⁾（21-12）があるが、主に口径13前後で、赤焼土器壺のB 1 a～b類に類似する形態（高径指数35前後）である。

煮沸具では、赤焼土器の壺と鉢があり、口縁部はS K302と同様な特徴だが、口唇部の肥厚はほぼ減少する。

時期的には、S K302と近接するが、赤焼土器の新しい類型や、覆土に火山灰を塊で混入する（明らかに2次堆積）等の状況から幾分後出の組成と判断し、報文で10世

紀第2四半期とした。

S K 7 土坑（第7図）

調査区東辺部の長径約2m、短径約1.5mの楕円形で深さは約68ある。覆土は9層からなり、遺物は4層を中心にもう1層で出土した。火山灰は未検出である。赤焼土器が主に出土し、図化は6点である。

赤焼土器の供膳形態は、壺類がB 1 c・d類の器高が更に低下したB 1 e類（17-6）に近い形態がある。高台付皿（B 2類：17-5）は、S X938（21-12）例よりも身が浅く口縁部の外反も強い。他に土師器の内黒土器は、中形で台付の椀状で口縁がやや開く。

煮沸具は、鉢・鍋があり、口唇の肥厚が無く頭部でやや外傾する程度である。貯蔵具は須恵器の壺がある。

時期的には、報告書で土器の形態などからS X938・977と同様の10世紀第2四半期とした。

5 木原遺跡の再検討（十和田a火山灰と法量分布から）

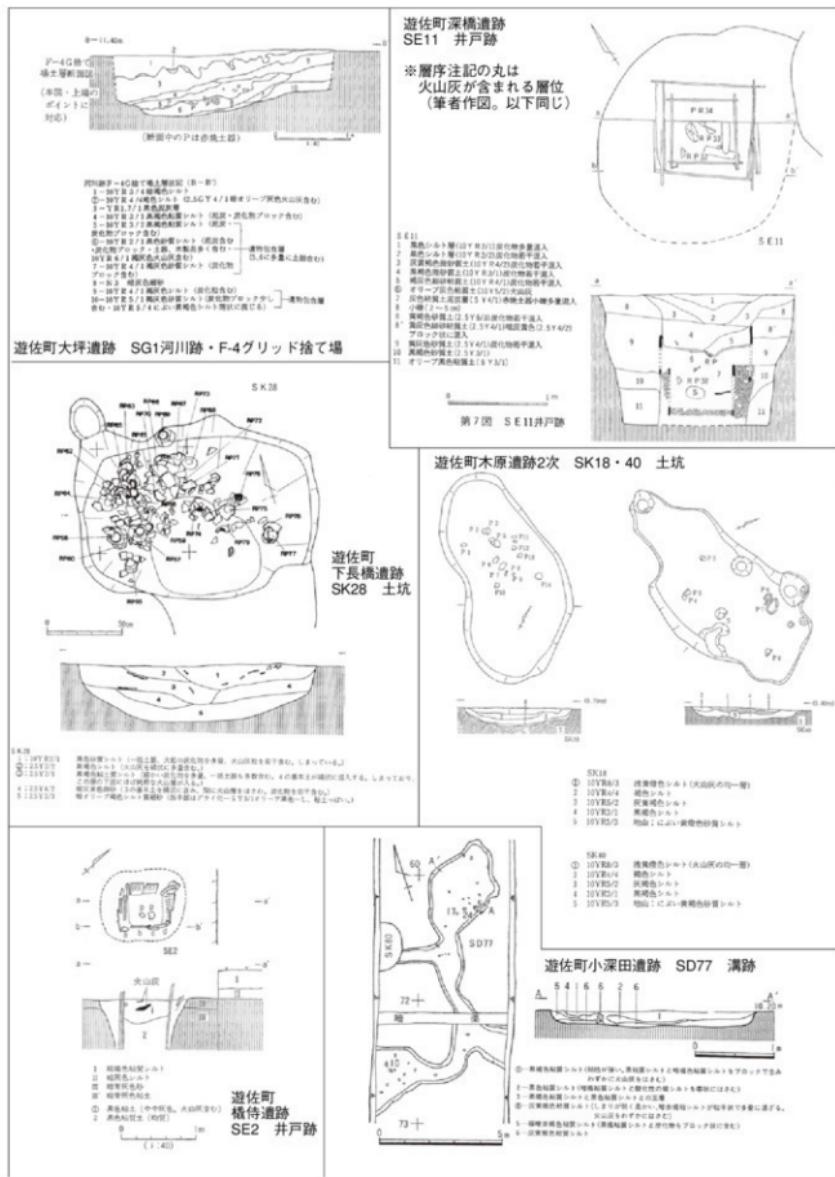
本項では、①本県で一般に915年降下とされる十和田a火山灰を含む周辺遺跡の遺構と、木原遺跡の一括資料が対応するか再検討したい。

具体的には、前述十和田aと考えられる広域火山灰の覆土の混入の仕方と土器の出土状況等との対比を試みた。以前の土器変遷作成時（植松1997）には、覆土に純粹な層準として入る火山灰降下時期に近時した遺構と、覆土に明らかに二次堆積^{4)・5)}にブロックや粒状に混入する火山灰降下以後の遺構に大別した。本稿では、更に前者の土器群が火山灰層の上・下のどちらかを注意し、木原遺跡との共通性を検討した（第10・11図）。

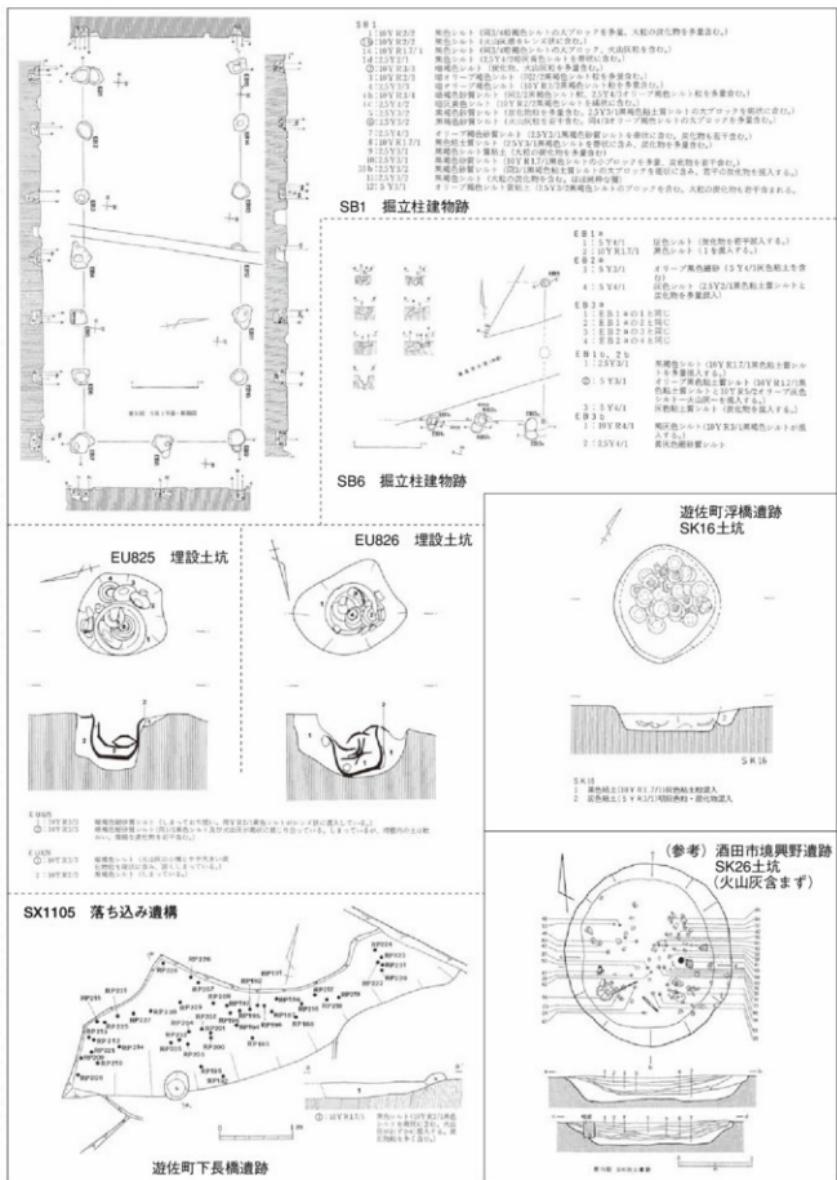
更に②上記遺跡出土の土器群の法量や高径比の分布と、木原遺跡資料を検討し、土器形態の変化を考えたい。

これは、土器の形態変化として、数量が一定量ある遺構を抽出し、土器組成の主体を占め、形態変化が著しい供膳器の壺・皿類を中心に口径と器高（法量）、底径の数量の分布図や高径比を検討した（第12～14図）。

そのため、供膳器は、壺・皿内での種別（土師器・赤焼土器）・器種組成（壺・皿類／無台・有台）や、口径（X軸）と器高（Y軸）・底径（X軸）の分布図（法量）を作成し、法量分布の大小や集中分布域の広がりや変化を検討した⁶⁾。また、口径と器高の高径比（器高/口径。高径指数：×100）も、1/2（高径指数50）・1/3（高径



第10図 庄内北部の白色火山灰を含む遺構群 (1)



第11図 庄内北部の白色火山灰を含む遺構群（2）

指標33)・1/4(高径指標25)の推移も含めて概観した。

なお、当該期の土器群の変遷を更に把握するため、当該期以前の筆者(植松1997)の9世紀後半の土器群(大坪遺跡)も同様に行い、一部阿部氏が指摘する当地域の山海窯跡資料(阿部1999)も補完した(第12図)。

結果①・②からは、主体の供膳器の種別組成では、時期が新しくなると須恵器の消失、赤焼土器への増加と集約、黒色土器が少量ながら古代末まで一定の組成を占める事などが改めて分かる(第12~16図)。

器種組成では、赤焼土器は壺から皿形態への変化と、有台の多様化(柱状高台・足長高台出現)と増加、土師器は無台から有台への変化と一定の数量や法量確保が上げられる(第13~14図)。

法量分布では、特に壺・皿類を中心に、時間が下るにつれて、口径と器高の集中域が左下がりに、底径は左側に分布が移動し、全体に小型化していく事が分かる。高径(口径と器高)比も徐々に低くなり、約1/3前後から1/4前後に移行していく(第16図)。

これらからは、全体に細かい形態変化を包む時期毎の法量分布(大・中・小)の変化(主体の交代や、集中や拡散)が窺え、それらを受容する当時の社会状況が反映しているのだろう。

さて、木原遺跡の資料を概括すれば、**S K 302土坑**は、浮橋遺跡S E 11や下長橋遺跡S K 28例(植松VI期)と近似し、後述の点から両者の中间的な様相も推測された。

木原S K 302の土器の出土状況は、火山灰層(F 4層)をほぼ挟み出土する。一方、浮橋S E 11・下長橋S K 28は同様に火山灰層(浮橋F 6層・下長橋F 3層底部)を含むものの、出土土器の主体は前者が火山灰層の下位、後者が火山灰の上位で(第10・11図)、その新旧が推定される。

S K 302の法量分布図の集中域からは、一部黒色土器を欠くが赤焼土器壺が主体で、前代の9世紀後半の大坪遺跡S G 1(火山灰層の下位土器群)より、全体に器高が低くなり、集中域が口径約8°前後に小型化し集約され、下長橋S K 28や浮橋S E 11に近い。

しかし、下長橋S K 28は、木原S K 302と高径比(高径比約1/3強)やその集中域は同等だが、底径が約5°前後に縮小化し、より新相の様相を呈する。浮橋S E 11は、赤焼土器壺が主体で口径や底径が木原S K 302と類

似するが、器高は概ね深身で高く分布域が異なり、前代の古相(9世紀後半)の様相を残す。

つまり木原S K 302は、全体では下長橋S K 28に近いが、新相の底径の縮小化までには至らない浮橋S E 11との中间的な段階と考えられ、数量や器種の欠落の課題はあるが、前述の出土状況等からも915年の火山灰降下期に最も近い遺構の一つと判断される。

なお、木原S K 302からは、新形態の高径比1/4に近い器高の低い皿状の壺が出土し、前段階では認められない新要素の出現も窺える。

次に、木原遺跡S X 938・977落ち込み遺構は、土器溜り状の出土状況で、覆土に火山灰を塊やブロックで多く含み、明らかな火山灰層下後の二次堆積の新相を呈する。しかし、土器の取上げ後の遺構完掘状況(報告書図版)からは、底面に火山灰層の薄い広がり等が看取られ、火山灰降下直後の時期とも考えられた。

実際、木原S X 938・977の赤焼土器の壺類の高径や底径の分布集中域・高径比(約1/3前後)は、前述火山灰層より上位に土器が出土し、同様の出土状況を示す下長橋S K 28例と近似する。土師器(黒色土器:内黒・両黒)も有台壺が主体で、無台壺類が中心の前代の大坪遺跡S G 1より、下長橋S K 28以降の有台が主体となる同様の器種組成の時期が窺える(植松VI期)。

他にS X 938・977の種別・器種構成では、底部糸切りの須恵器壺が若干認められるが、赤焼土器壺が明らかに主体を占め、下長橋S K 28では認められない高径比が1/4前後の皿状壺や皿も確実に存在し、新相の様相を示す。但し、次期の小皿はなく至っていない。

土師器も須恵器壺より數的に優勢で、両黒・内黒があり、法量は下長橋S K 28では明確でなかったが、全体に両黒の方が少なく、小さい事が分かる。

また、須恵器壺類は、下長橋S K 28等の同時期とされる遺構群から出土せず、数量的にも前出のものが混じった事も考えられる。しかし、阿部氏が同時期の須恵器生産窯とした山海窯跡S K 17・18・96より法量や高径比が大きく、最も新相の形態が残った可能性もある。

S K 7土坑は、覆土に明確な広域火山灰を含むかは明らかでないが、未だ赤焼土器壺と黒色土器高台壺から成る器種組成や、主体的な赤焼土器壺の口径が縮小化し、高径分布が高径比約1/3~1/4内に収まる低比率への

移行などから、当該期でも木原 S K302やS X938・977より後出の段階と考えられる。

これらは、数量的な課題はあるが、下長橋 S B 1・2・4（植松Ⅷ期）から S B 3・5・6（植松Ⅸ期）の赤焼土器の皿状坏や高台皿の高径分布や高径比と近似し、次期（植松Ⅹ期）の浮橋 S K16、下長橋 E U825・826、同 S X1105は、小型の皿類が主体を占める事から、この段階までには至っていない。

なお、筆者は、このⅨ期を以前、埋設遺構や性格不明遺構の特殊な性格上などから、10世紀後半~11世紀第初頭の長い時期幅を設定した（植松1997）。しかし、特に赤焼土器の坏・皿の法量分布の集中域からは、下長橋 E U825・826、同 S X1105が、浮橋 S K16より全体に小型化（口径約10・底径約5以下）が進み、新しい高台類の出現など新相を呈する事から、阿部氏も指摘するように（阿部1999）、両者を古・新相に分ける事もできそうである。

6 当該期の土器編年の再検討

前項までに広城火山灰層を含む遺構の土器、各時期の特に供膳器の法量分布や底径、高径比、新資料の木原遺跡の追加などから当地域の10・11世紀の土器相を再検討した。

結果、前項で示した通りで、従来大きな変動はないが、木原遺跡を補完する事で、一部器種の出現時期や時期毎法量・形態に、具体的な数値や集中域の変化を看取れた。

最後に、再度当地域の当該期の土器群を概観し、以前まとめた変遷に本稿の知見を含め、古い順に記す。

M~V期（9世紀3/4~4/4期）：大坪遺跡 S G 1 F -4、山海窯跡 S Q 3・1・12 b⁷⁾。

「供膳形態では須恵器の優位性が失われ、赤焼土器や黒色土器にその役割や形態が受け継がれ、歪みやロクロ目も同様に著しくなる。赤焼土器坏類は、まだ器高の高い法量のある形態で、以後徐々に小法量化」とした段階である（植松1997）。

供膳器主体は、無台の坏類で、須恵器はやや深身だが、赤焼土器・土器盤は明らかに深身である。後者は口径が大（15前後）・中（13前後）型の法量分化がある。

主体的な中型坏は、須恵器・赤焼土器・黒色土器があり、ほぼ口径が約13前後、底径が約5~6強の同等

を取る。しかし、器高は、須恵器が約4前後、赤焼土器と土器盤が約5前後と異なり、後者の器高が全体に高く深身である。高径比も須恵器が約1/3前後、赤焼土器と土器盤が約1/2~1/3の範囲で重なる。

有台は、須恵器や赤焼土器の台付皿の小振りのものがあり、高台や口縁部などに施釉陶器模倣が看取れる。他に前代から通有の須恵器と土器盤の深身の台付坏がある。

VI期（10世紀1/4期前半：火山灰降下期）：浮橋遺跡 S E 11・13 木原遺跡 S K302 下長橋 S K28・木原遺跡 S X938・977、山海窯跡 S Q 17・18・96。

「供膳形態として須恵器が払拭され、赤焼土器と黒色土器により形成。赤焼土器坏は外傾度が増し、口縁部も外反するものに変容。深身が崩れ出し、歪みやロクロ目痕が以後拍車かかる」とした段階である（1997植松）。

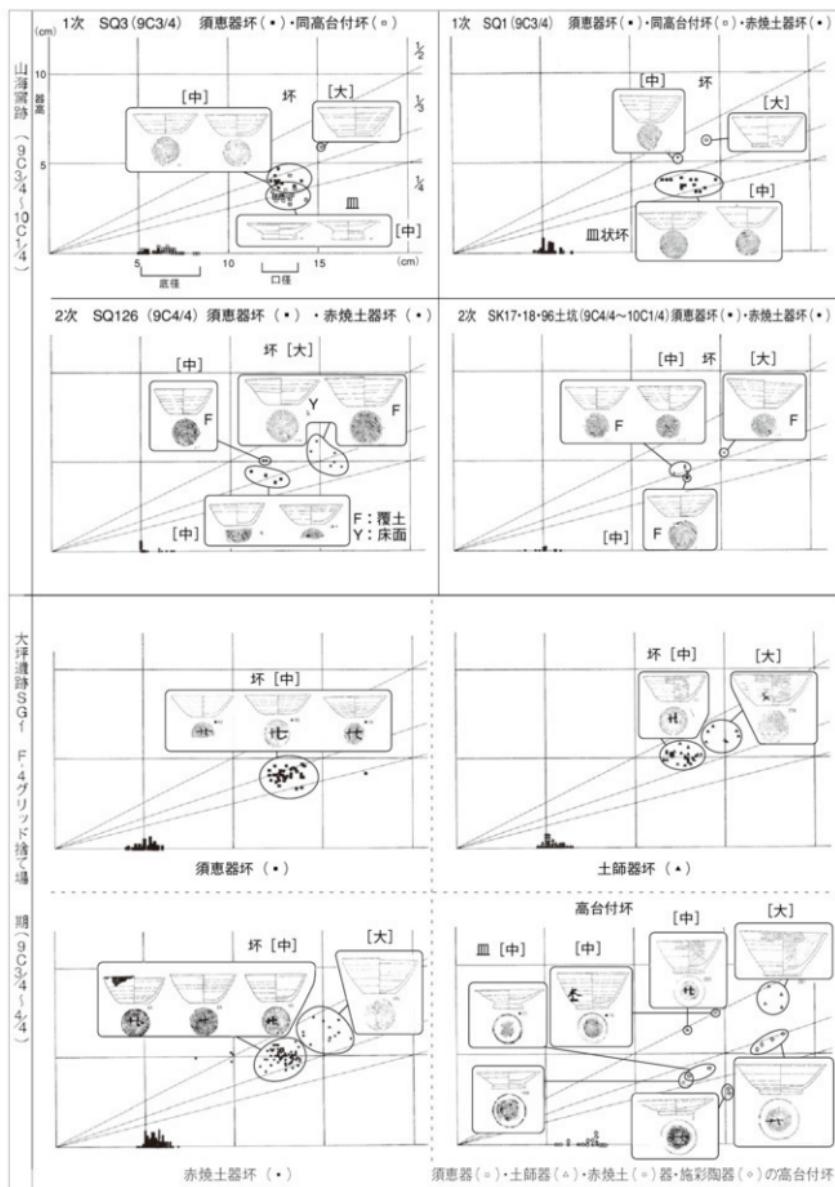
供膳器の主体は、この段階から確実に赤焼土器の無台の坏が主体を占め、前代のやや深身とやや身の浅いものがある。口径は前代（13前後）とそれほど変化はないが、器高の分布は明らかに低下し（4前後）、高径比も全体に約1/3に下がるものが多い。底径も下長橋 S K28・木原 S X938・977等は約5前後に集中が分布し、前代より小径化が進んだ事が看取れる。

土器盤の坏は認められないが、木原遺跡や大坪遺跡など前後の様相から、以降は基本的に有台の内黒坏に限定され、一定量存続する。

有台は、一部木原遺跡で赤焼土器の中型の台付皿が認められるが、主体は土器盤の台付坏に変わる。土器盤の台付坏では、前代の深身の大・中型品の他に、内外面黒色のやや小振りの小型（12前後）がある。前述の中型の黒色土器の台付皿も認められる。

なお、以前筆者は、火山灰層より上位の出土から、当該期に赤焼土器で「新たに高台付小型皿が出現（下長橋 S K27）」（植松1997）としたが、後述する同形態の小型化や主体的な時期等から、下長橋 S K27例は時期的に降る可能性があり、本稿では次期以降としたい。

新器種として、木原 S K302や同 S X938・977、浮橋の同一墨書き土器（S D101）から、一般的な赤焼土器の坏以外に高径比約1/3~1/4やの身のやや浅い皿状の坏、高径比約1/4以下の中型の皿が出現する。なお、下長橋 S K28では両黒土器の中型台付皿が未だある。



第12図 山海窯跡・大坪遺跡(9C後半)出土土器の法量分布と高径比

VII期（10世纪1/4期後半：火山灰降下以後）：下長橋遺跡SB1・2・4・木原SK7。

「組成が赤焼土器に集約。器種も単純化し、一部黒色高台付碗が残り以後継続。赤焼土器供膳類は、前期より更に外傾度が増し身は浅くなる。煮沸は赤焼土器甕が主で口縁・口唇とも厚みがなくなり立ち上がり弱い。」とした段階（植松1997）。

供膳器の主体は、前代と同じ赤焼土器の坏だが、前代のやや深身より、身の浅いものが多い。口径は前代の13前後より小さいものが全体に認められ、器高が3~4前後に明らかに低下し、高径比は1/3~1/4の範囲に徐々に移る過渡的な様相のものが多く、分布域が拡散する。底径は前代と同等で縮小化には至らない。

有台では、前述赤焼土器の小型台付皿が認められ、特に下長橋SB4は、口径10を切る坏身が浅い、高台がやや長い次期以降主体的な「足長高台」状を呈する。

新器種は、赤焼土器の有・無台の小型品の皿類が登場する。口径10内外で高径比が1/4を切る「小皿」（下長橋SB2）（渋谷1989）や下長橋SB4・木原SK7の坏身の浅い小型台付皿（足長高台状：下長橋SB4）がある。

VIII期（10世纪2/4期）：下長橋遺跡SB3・5・6。

「身の浅い坏を中心に小型皿、高台付皿。煮沸では赤焼土器鍋が残る。口縁形態は同甕と同じに変遷」とした段階（植松1997）。

供膳器の主体は、前代に続き、赤焼土器の浅身の坏が主だが、小型皿の増加、小型台付皿の微増が指摘できよう。主体の中型の坏は前代と口径（12.5前後）、底径（5~6前後）は同等だが、器高が全体に3~4に低下し、高径比は1/3~1/4の範囲には収まる。なお、坏類には、高径比は中型の坏類と同等ながら、口径が10~11前後の「小型皿（下長橋SB6）」が出現し、前述の小皿と中型の坏類と中间的な様相を示し、以降主体を占める。この坏・皿の器種組成は、時期以降の大・小の法量分化への過渡的な様相の始まりだろう。

有台では、小型皿は前代の形態を引きながら、一部次期以降に主体的な身が浅く、前代より更に小型で、高径比が1/4前後の器高が低い、次期に多い直立する高台のものが出現し、時期に随明確化する。この段階で一般的な全ての有台の皿類が組成に加わる。

IX期（10世纪3/4~4/4期）：「供膳類は前期までの形態に加え高台付坏・柱状高台付小型皿が出現。全体に「赤焼土器の小型皿が多い」（渋谷1989）段階（植松1997）であるが、10世纪後半~11世纪初頭と長い幅を持たせたため、変遷した造構を前頁で示したIX-1期（前半）とIX-2期（後半）に新たに分ける。

IX-1期（10世纪3/4期）：浮橋SK16・境興野SK159。

赤焼土器（身の浅い小型皿）が主体。土師器（深身の高台付坏）は若干。本段階で赤焼土器の小型皿の中で小型化と法量の集約が進行、底径も縮小化。赤焼土器有台の坏・皿類が概ね組成。赤焼土器の足長高台付坏出現。

IX-1期の供膳器の主体は、浮橋SK16は祭祀造構とされ資料の偏りも窺えるが¹⁰、前代からの流れから赤焼土器の中型坏と次期に主体的な小型皿の中間的（高径比低下など）な形態の小型皿と考えられる。特に、小型皿を主体とする次期以降（下長橋E U825・826・S X1105）より、法量や底径の面から古昔の段階と捉えられる。参考資料とした阿部氏が浮橋と同時期と指摘（阿部1999）する境興野SK159も、小型の坏が主体を成す。小型の坏は、全体に小型の浅身で、口径が10~11前後、器高が3前後、底径は5以下が多い。高径比は1/3~1/4だが、浮橋は1/4に近く皿状を呈し、次期の下長橋E U826との中间的な様相である。

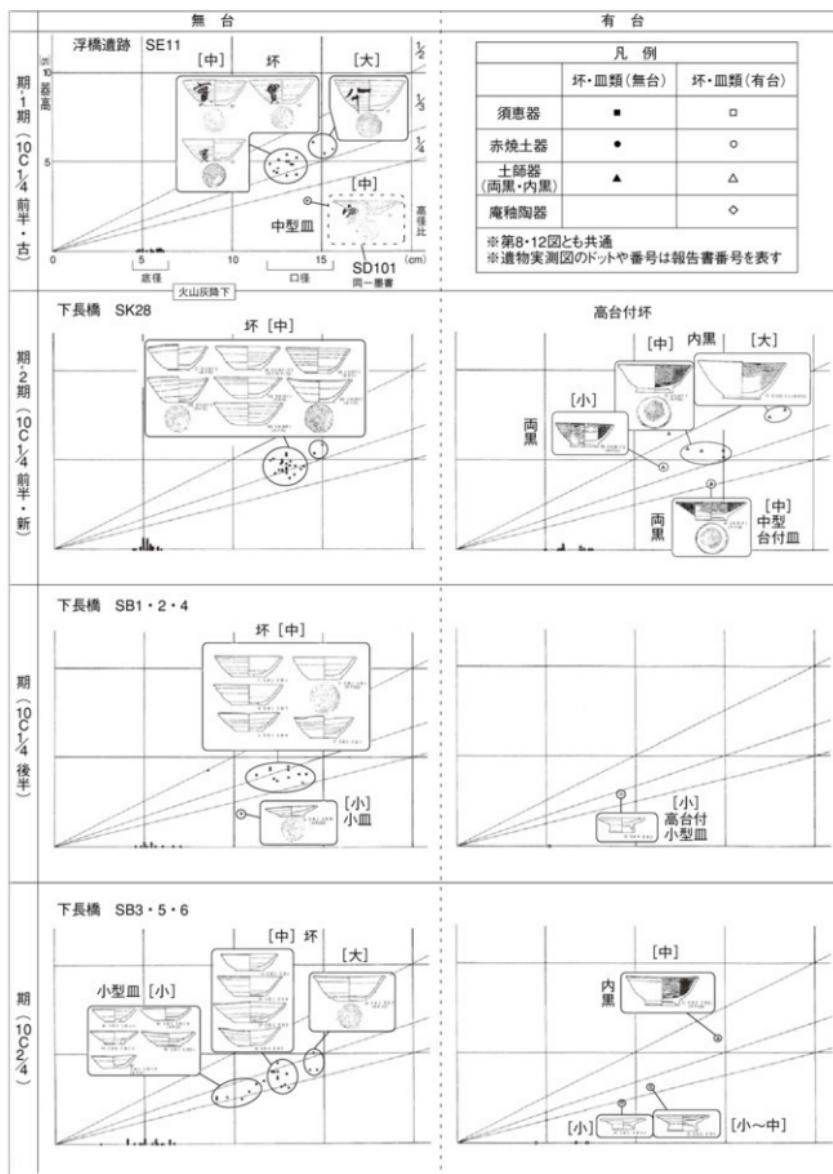
有台は、足長高台付坏の他に、土師器坏がある。法量は前代のV・VI期と同様に大・中あるが、全体に坏身は深身がやや失われる。ただ、高径比は概ね1/2~1/3で、組成的に安定する前期（VI期）の形態は崩さない。

新器種では、渋谷氏が前述指摘した新要素の内、境興野遺跡で赤焼土器の高台が長い所謂「足長高台」を呈し、坏部が体部→口縁部が直線的で大振りの深身な足長高台付坏が供伴する。

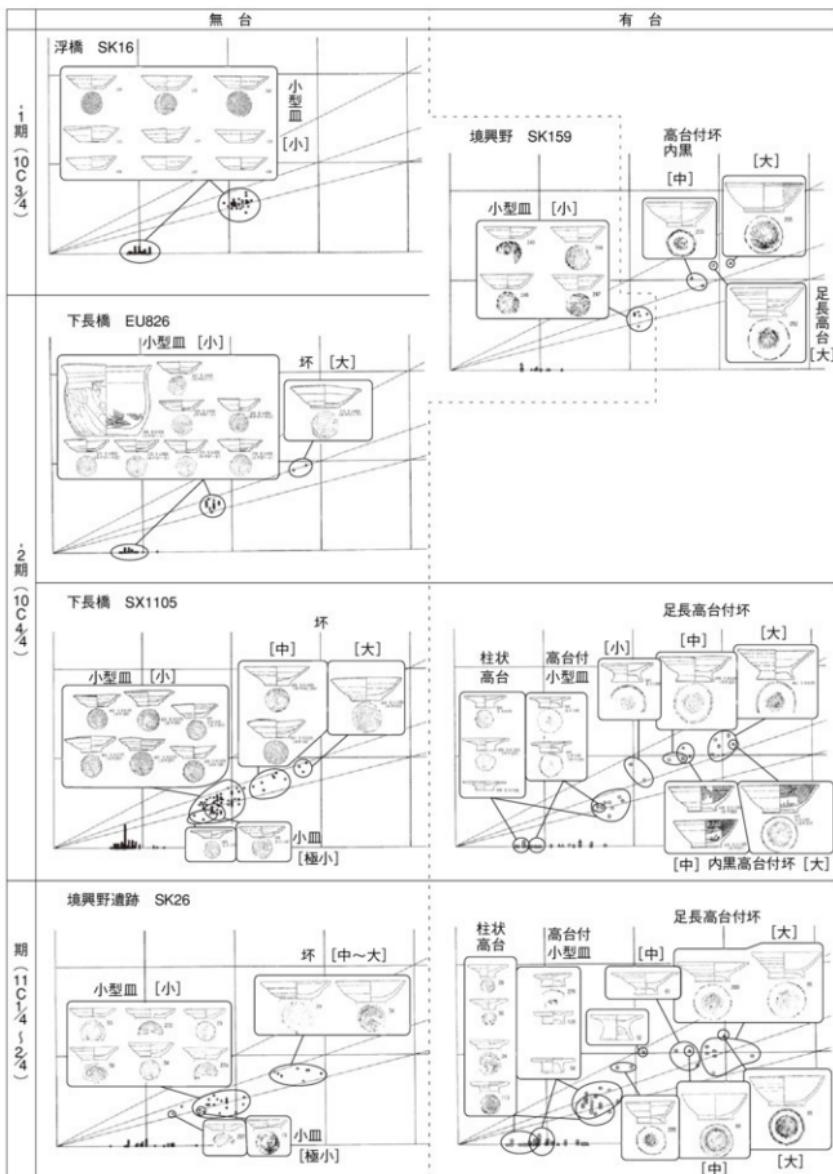
IX-2期（10世纪4/4）：下長橋遺跡E U825・826・S X1105。

下長橋E U825・826は埋納造構のため資料に偏りも窺えるが、S X1105も含め、赤焼土器の小型皿が主体を占める段階である。

新器種では、高台部が柱状の柱状高台付皿があげられ、VII期で認められた直立する小型高台付皿と同等の口径や器高を示す。他に小型皿の一形態とも考えられる



第13図 10~11世紀の土器の法量分布と高径比 (1)



第14図 10~11世紀の土器の法量分布と高径比 (2)

が、口径(8~前後)・器高(2~前後)が非常に小さく高径比が1/4以下の次代中世のかわらけ状の小型小皿も出現(変容)する。

供膳器では、前期の主体と同形の中・大型の坏類は残るが、減少し、小型皿が主体を成す。小型皿は、前期(Ⅷ期)より口径は8~9~前後に縮小し、器高も2.5~以下のものもあり、底径も5~以下に集約され、全体に小型化する。高径比は1/3~1/4前後だが、小型化に伴い1/4以下のものが散見され、非常に身の浅い低比率のものが多い。坏類では、中型の坏は前期より少なくなるが、身の浅い前期(Ⅷ期)からの大型のものが一定量認められ、前期までの古代の様相を残す。

有台では、下長橋S X1105で小型の柱状高台付皿や直立する小型高台付皿があり、他に前期(Ⅸ~1期)の足長高台付坏や土師器がある。法量的に前者は小(口径10~前後)・中(口径8~前後)・大(口径10~前後)で、後者は同等の中・大型に分化が残る。両者とも高径比は、前期(Ⅸ~1期)とはほぼ同じだが、やや坏部が全体に浅くなり、1/3に近い分布である。

X期(11世紀1/4~2/4期):境興野S K26。

「從来の坏・高台坏・小型皿・高台皿の食膳具の基本的器種構成が認められる最後段階。かわらけへの移行期。食膳具の組成のはほとんどを赤焼土器が占める。土師器高台碗は極めて少量確認され、次期に存続するか不明確。赤焼土器は各器種全般に器壁が厚く、厚ぼったい作りになる。小型坏(本稿は小型皿)は若干の法量縮小傾向が認められ、小型皿(本稿は小皿)は別タイプとして存在するものの、形態的に皿形に近いものが主体を占める」

(伊藤1998)段階である。

他に供膳器の法量や高径比等では、伊藤氏の指摘と重なるものがあり、全体を占める小型皿の口径約6~前後まで縮小するものがあり、全体に器高も低下し、高径比も1/4前後に集約される。坏では、中型の坏類が不明瞭になり、大型のみとなる。中型品の高径比は、前期(Ⅸ~2期)と比べれば1/3に近いものから1/4に近い比率に下がり、やや身が浅くなる。土器組成では、この段階で無台の供膳器が小型皿と中~大型坏に集約され、小・大型の法量の二分化が表れ、次の当地域の中世かわらけ(大橋遺跡)と同様で注目される(第15図)。

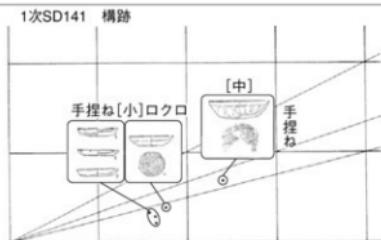
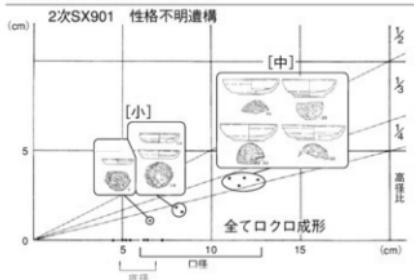
有台では、前期の柱状高台付皿や、直立する小型高台付皿の皿部が、非常に浅くなり一部所謂T字状を呈するものも現れ、口径・器高とも縮小する。足長高台の坏は、坏部が前期から更に浅身になり、高径比も1/3前後と低く、坏と同様の変化をするようである。土師器坏に前期からの大きな変化は認められない。他に、口径10~前後に測るやや大きめの直立する足長の高台付皿なども現れ、やや多様的である。

7まとめ

最後に、前項までの成果を基に、再度当地域の9世紀後半から12世紀前半までを、特に当該期の供膳器主体の赤焼土器と土師器黒色土器を中心に、土器組成や形態、新相の土器の出現期等を古い順に整理し、当時の時代背景との関連や期別などを検討する(第16図)。

9世紀3/4~4/4期:須恵器(やや深身の中型坏)・赤焼土器(深身の中型坏)・土師器(深身の中型坏)が

選佐町大橋遺跡出土のかわらけ



第15図 大橋遺跡の中世かわらけの法量分布と高径比

主体。赤焼土器壺・黒色土器壺・高台付壺が中・大型に法量分化、以後基本的に継続。須恵器高台付皿（施釉陶器模倣）一定量存在。中赤焼土器の中型台付皿出現。

10世紀1/4期前半：須恵器壺類が激減。赤焼土器（深身の中型壺・やや身の浅い中型壺）・黒色土器（深身の高台付壺）が主体。新段階で赤焼土器の深身の壺が低傾化。赤焼土器の皿状の壺・中型皿が散発的に出現。

10世紀1/4期後半：赤焼土器（身の浅い壺）主体。赤焼土器の小型皿・身の浅い小型台付皿が出現。

10世紀2/4期：赤焼土器（身の浅い中型壺）が主体。黒色土器（深身の高台付壺）は若干、減少化。本段階で主体の赤焼土器の中型壺の法量分化がやや拡散。本段階で小型の壺類が明確化。小型皿が一定量出現。

10世紀3/4期：赤焼土器（小型皿）が主体。黒色土器（やや深身の高台付壺）は若干。本段階で赤焼土器の壺・皿類の中で小型化が進行。この段階で赤焼土器の一般的な有台の壺・皿類が概ね整う。赤焼土器の足長高台付壺出現。

10世紀4/4期：赤焼土器（小型皿）が主体。赤焼土器（身の浅い中・大壺）少量残る。赤焼土器（柱状高台付皿・直立する高台付皿・足長高台付皿）が若干。黒色土器（やや深身の高台付壺）は若干。本段階で当該期の新器種が全て組成。多様な赤焼土器の皿類（極小皿や有台含む）の器種組成。柱状高台付皿出現。

11世紀1/4～2/4期：赤焼土器（小型皿・柱状高台付皿〔T字型含む〕・直立する高台付皿）が主体。赤焼土器（足長高台付皿）が少量。赤焼土器（身の浅い中～大型壺）が若干。黒色土器（やや深身の高台付壺）は若干。本段階で小型皿と中型～大型壺の法量分化。有台類新器種内での多様化（皿類の小型化含む）。中世的土器組成への変化。

11世紀3/4～4/4期：本地域で不明。伊藤氏は秋田県の大釜遺跡の大・小のかわらけと黒色土器の組成の可能性を指摘する（伊藤1997）。

12世紀1/4～2/4期以降：大柄遺跡の創建期の土器群（年輪年代）。中世かわらけと輸入陶器が組成。

さて、上記のように庄内北部地域の10・11世紀の前後を含む様相を概観してみた。当該期は、一般に律令制の崩壊期と言われ、筆者も以前言及した事がある。筆者は、土器相や集落分布等から「簡易な赤焼土器の増加や、

集落の減少と集約傾向」をあげ、「在地官人層や富豪層の台頭」に伴う「次代の莊官とされる大柄遺跡周辺への遺跡の集中」に繋がるものとした（植松1997）。

陸奥国では、9世紀後半（873年）の「三代実録」に、在地勢力の台頭や律令制の崩壊の記事がある。近年、県内の9世紀後半～10世紀初頭の米沢市古志田遺跡の文字資料等からは、「律令制崩壊に伴う在地領主や富豪層の台頭」（手塚・荒木他2001）に伴う給食や祭祀の行為の可能性も報告されている。

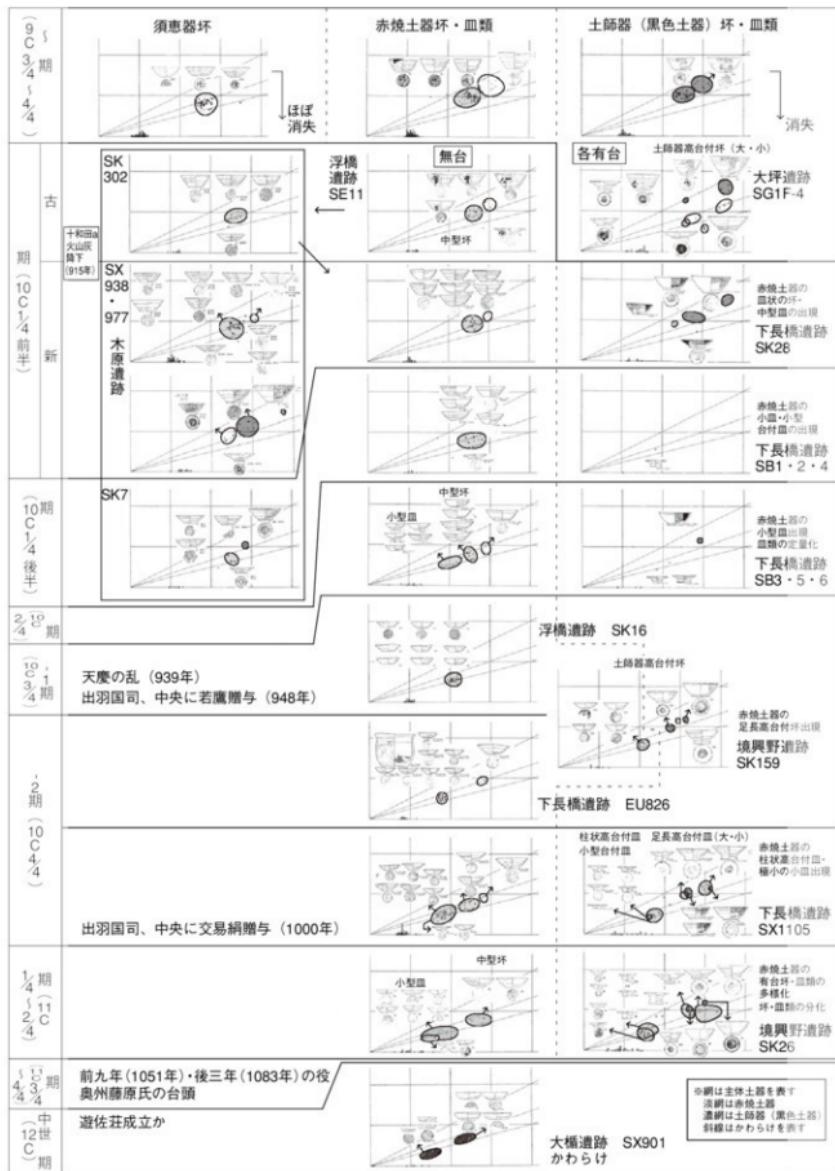
本地域でも当該期の浮橋S K16等の祭祀遺構とされる土器の一括廃棄土坑が、この時期多く散見されるのも、それらに類似した行為の表れと考えられ、前述土器相からは少なくとも10世紀2/4～3/4期には同様の状況が推測され、一つの画期（Ⅷ期）と捉えられる。

しかし、筆者は、本稿や近年の研究により、地域によって当該期が一様に律令制の崩壊期とはいえない面もあると昨今考えている。

当地域（遊佐町周辺）は、秋田城の文字資料や10世紀前半の「和妙類聚抄」（935年）等から、從来より出羽国飽海郡「遊佐郷」周辺と推定され、「延喜式」（927年）の「遊佐駅」が所在した地域とされてきた。また、当地は、鳥海山麓に位置し、9～10世紀中葉に連続して叙位（838年）される式内社の大物忌神社が存在し、全体に当地域は、県内にても律令制の官的要素が強く残る地域とも考えられる。更に当地域のすぐ南には、当該期の出羽国府とされる城輪構跡が設置され、その機能は概ね10世紀代にも機能していたとされる（小野1997）。

土器相からは、簡易な焼成施設で作られる小型の赤焼土器が主体とはいえ、少なくとも10世紀前葉までは前代までの須恵器窯と同じ窯場で赤焼土器は生産され、集落でも歪み等が著しいものでも受容する状況がある。また、前代から続く土師器高台壺（内黒）や赤焼土器壺も土器組成の一定量を占め、11世紀前葉まで存在し、古代の系譜を残す。

なお、文献資料では、10世紀中葉（天慶2年：939年）には、9世紀後葉の元慶の乱（878年）に続き、出羽国の秋田城周辺で俘囚（蝦夷）の反乱があった。中央や国府では、その鎮圧にあたり陸奥国への援兵要請や「（出羽）国内の浪人・高下・雜人を問わず軍役にあてる」として官符・勅符等で細かく対処する。他にも10世紀中葉～11



第16図 庄内北部の古代末～中世の土器変遷

世紀初頭には、出羽国司（守）級が、中央の閑白等に若鷹（948年）、交易網（1000年）を贈与しており、一部国司（出羽国府）と中央との密接な関連が窺える。

他に、筆者が以前本県内陸部の今塚遺跡を主とした官衙的な集落を検討した結果から、当該期にも「官的な面」と在地的な面を併せ持つ在地領主層」の存在が推測され、在地領主自体も官的な要素を受け入れることで、在地勢力を延ばす事ができた辺境独自の律令制度があつたためとも考えられる（植松2003）。官的な要素が多いとされる下長橋遺跡などもこれら遺跡に相当するかもしれない。

これらからは、少なくともこの時期までは、軍團制の凋落や須恵器供膳器の生産の中止等の官的要素の衰えも一部指摘できるが、全体に国府を中心とした律令的な機能がそれほど崩れない地域であった事も考えられる。

11世紀中葉～後半には、古代末の東北の戦乱として著名な前九年（1051年）・後三年の役（1083年）があり、陸奥国や出羽国北半（秋田県）が主戦場になった。この戦乱では、陸奥国北方の安倍氏や出羽国仙北の清原氏等の俘囚長の活躍がよく知られ、本県の様子は明らかでないが、この段階で同様に郡司層の自立が可能になったのであろう。他県の土器相からは、須恵器の貯蔵具の変遷も含め、明らかに律令的土器から中世的土器相に変容していく。

当地域ではこの時期は不明だが、土器相からは、前期（11世紀前半：X期）には、环・皿類に次代中世かわらけに特有の小・大の法量二分化が認められ、その萌芽としてもう1つの画期を与えられよう。そして、これが後述する本地域の特徴である莊園公領制下の日本海側北限の「遊佐莊」が当地に導入される下地となつたと推測される。

12世紀代に入り、当地域では、「遊佐莊」が成立する。12世紀中葉（1153年）の左大臣藤原頼長の本県莊園の年貢増徴の記録があり、奥州平泉の藤原基衡がこれを拒み減輕させている。これは、近年遊佐莊を管理した莊官は大橋遺跡とされ、在地領主は不明ながら、「遊佐莊は平泉の藤原氏に寄進され、さらに平泉から摂家の藤原氏に二段階の寄進、（中略）地方に成長してきた豪族と公権力との関わり、或いは在地豪族同士の連携と中央勢力と結びつく構造」（佐藤1991）が看取られる。

そして、前期で莊園公領制の北限に自立し始めたであ

ろう当地域の郡司層は、在地の主導的な役割を担い、確信的に律令的体制から外れ（選択か）て、この段階で本格的に次代の政治体制を取り込み、中世的在地領主層に成長していくのであろう。

最後に本稿を作成するにあたり、小野忍氏、酒井英一氏、佐藤庄一氏、阿部明彦氏には多大なご指導を得た。特に小野氏には、城輪柵跡に関する論考と、折にふれ「寒河江市平野山古窯の研究」を再読させて頂き、古代土器研究の視点を通観している。近年東北城柵官衙検討会等でお会いする機会を得て、古代を多面的に御教授を頂いている。深謝したい。

註

- 1) 川崎氏は、同報告書考察で最も新しい土器相として平形遺跡のSD4資料を提示し、注目されるが、平形遺跡報告書ではSD4の資料が明らかでなく、本稿からは除外した。
- 2) 所謂「赤焼土器」は、基本的に酸化炎焼成のロクロ使用、非黒色処理の土器で、東北地方各地では從来から「赤褐色土器」、「須恵系土器」、「土師質土器」、「土師器」等と呼称されて來た。本稿では、各地域の地域的特質や研究史を重視し、本県で一般的な「赤焼土器」とした。
- 3) S X938・977には一部明らかに古相の須恵器高台壺が散見されるが、同遺構の火山灰層下位から柱穴等が確認されており、それに対応するのかもしれない。
- 4) 以前も指摘した事があるが（植松1997）、一部火山灰を含む遺構に明らかに古相の土器群が出土する遺跡（例えば小深田遺跡SK等）がある。矛盾するようだが、文献にもある当地域の鳥海山の噴火（9世紀代）の火山灰降下も視野に入れる必要がある。
- 5) 理化学分析的には、火山灰の一次堆積は、10以上厚い堆積が必要との事である。しかし、広域火山灰降下の遠距離地では薄い堆積もあるだろうし、二次堆積だとしても火山灰層として覆土に広範囲に含まれる事を考慮すれば、少なくとも降下後間もない時期の堆積と推定はできよう。
- 6) 「小皿」「柱状高台皿」等の器種の名称は、10世紀代を通用する下長橋に準拠した。以前描稿の「小型の環」は「小型皿」に直した。なお、報告書では「小型皿」と「小皿」の区別が「極端に身の浅い皿」と全体に判然としないため、本稿では本文にも示した概略的な口徑、高径比の定義に従い、「小型皿」「小皿」「小型小皿」の名称を付し、一部変更した。
- 7) 土器編年には、一般的に窯跡の一括資料（生産遺跡）を併用して考える事が多いが、本県の10世紀初頭以降の赤焼土器を焼成したとされる窯跡や「燒壁土坑」（山海窯跡）等は未だ判然としない。そのため土器編年・変遷は、集落遺跡の一括性が高く、年代観を比定する併用資料を含む遺構を抽出している。
- 8) 埋納遺構等の特殊な遺構の性格上、土器形態にも形態がほぼ共通する等の特殊性も窺えるが、全体的な覆土や重複関係から概ね一括性の高い当該期を表す土器と判断した。

引用・参考文献

- 阿部明彦 山形県教育委員会『田中遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第72集 (1983)
- 阿部明彦・植松明彦 山形県教育委員会『木原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第186集 (1993)
- 阿部明彦 山形県埋蔵文化財センター『北日長田・穠待・堂田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第24集 (1995)
- 阿部明彦・伊藤邦弘 山形県埋蔵文化財センター『羽出の古窯跡(山形県)』課内学習会資料 (1996)
- 阿部明彦他「庄内平野」東北地方の古代集落』古代城柵官衙遺跡検討会 (1998)
- 阿部明彦・水戸弘美『山形県の古代土器編年』第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料 (1999)
- 伊藤博士「出羽における10・11世紀の土器様相」『古代北陸土器研究会』(1998)
- 岩見誠夫・能登谷宜康・船木義勝『山形県の須恵器及び須恵器系の編年』『山形考古』第4巻第2号 (1988)
- 植松英彦「庄内高瀬川と月光川流域の平安時代の集落変遷について」『山形考古第6巻』(1997)
- 植松英彦「今塚遺跡の再検討とその性格について」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』(2003)
- 小野 忍「城輪樋跡」「般夷・律令国家・日本海」日本考古学協会 (1997)
- 川崎利夫 山形県教育委員会『境興寺遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第46集 (1981)
- 古代の土器研究会『律令の土器様式の西・東』古代の土器研究会シンポジウム (1993)
- 佐藤庄一「城輪樋とその周辺村落」『庄内考古』第19号 (1985)
- 佐藤祐宏「大柄遺跡発掘調査報告書」道佐町教育委員会 (1991)
- 沼谷孝雄 山形県教育委員会『下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第130集 (1988)
- 高桑弘美「出羽のかわらけ」「中世奥羽の土器・陶磁器」(2003)
- 手塚一孝・荒木志伸他「吉田田東遺跡発掘調査報告書」米沢市教育委員会 (2001)
- 山形県教育委員会『山形県史』第1巻 (1982)
- 山形県教育委員会『地正面・前田・塙田・佐渡遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第51集 (1982)
- 山形県教育委員会『新青渡遺跡1次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第67集 (1983)
- 山形県教育委員会『大柄遺跡2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第139集 (1989)
- 山形県教育委員会『小深田遺跡2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第140集 (1989)
- 山形県教育委員会『下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第141集 (1989)
- 山形県教育委員会『小深田・下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第142集 (1989)
- 山形県教育委員会『大坪遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第166集 (1991)
- 山形県教育委員会『山海窯跡群第2次・山窯7・8遺跡・山種船跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第172集 (1992)
- 山形県埋蔵文化財センター「木原遺跡2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第8集 (1994)
- 山形県埋蔵文化財センター「大坪遺跡2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第23集 (1995)
- 山形県埋蔵文化財センター「上高田・木戸下遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第25集 (1995)
- 山形県教育委員会「大柄遺跡1次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第121集 (1988)
- 山形県教育委員会「大柄遺跡2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第137集 (1989)
- 山口博之「道佐荘大柄遺跡の成立」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』(2003)
- 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』(1994)
- 道佐町「鳥海山の火山活動」『道佐町の歴史』(1974)

山形県酒田市亀ヶ崎城跡出土の備前焼について

高桑 登

1 はじめに

亀ヶ崎城跡は最上川河口の酒田湊に隣接して立地する。中世には東禅寺城と呼ばれ、文明10年（1487）の築城とされる。天正11年（1583）、武藤家家臣の前森蔵人が最上義光と結び東禅寺城主となり、庄内地方は最上氏の支配下となる。天正16年（1588）、本荘繁長が攻め入り、庄内は上杉領となる。その後、志駄修理亮等が東禅寺城主となる。慶長5年（1600）の関ヶ原合戦後は最上領となり、慶長8年（1603）、最上義光が亀ヶ崎城と名を改めた。元和8年（1622）の最上氏改易後は酒井氏が庄内に入り、以後鶴ヶ岡城を本城とする庄内藩の支城となる。

現在、本丸と二の丸には県立酒田東高等学校が建ち、校舎の改築等に伴って5次に及ぶ発掘調査が行われている（図2）。第1～3次調査では主に近世の遺物が出土し、特に第2次調査では近世前半の色絵磁器が大量に出土した（山口2004）。平成15・16年に実施した第4・5次調査では、3,230件の調査を行なった。16世紀前半から17世紀前葉の3面の遺構面を確認し、遺構面間の遺物包含層から大量の遺物が出土した。慶長5年・天正12年の年号や、関ヶ原合戦前後の城主である「志駄修理亮」、「志

村伊豆殿様」等の人名が書かれた木簡を始め、大量の木製品の出土が注目される。（山形埋文2004・2005）。

本稿では、第4・5次調査で出土した備前焼について報告する（註1）。また北海道・東北地方で出土した備前焼を集成し、亀ヶ崎城跡出土資料の位置付けを行う。

今回報告する資料は、前岡山県古代吉備文化センター参事伊藤晃氏、備前市教育委員会石井啓氏、岡山県古代吉備文化センター重根弘和氏に実見していただき、遺物の特徴や年代観等について御教示をいただいた。また、備前市教育委員会において伊部南大窯跡東3号窯・西2号窯出土資料を実見させていただき、亀ヶ崎城跡出土資料と比較する機会を得た。記して感謝申し上げる。

2 亀ヶ崎城跡出土資料について

接合前破片数で40点（推定個体数24点（註2））の備前焼が出土した（表1・図3, 4）。器種（註3）の内訳は擂鉢19点（13点）、徳利6点（3点）、平鉢4点（1点）、大甕3点（1点）、深鉢3点（1点）、茶入2点（2点）、壺2点（2点）、変形鉢1点（1点）である。

擂鉢（3・6・7～10・15～21）は口縁帯が高く立ち上がり、外面に2条の凹線がつくものが多い。御目は直



図1 遺跡位置図（1/50,000）



図2 調査区概要図（1/5,000）

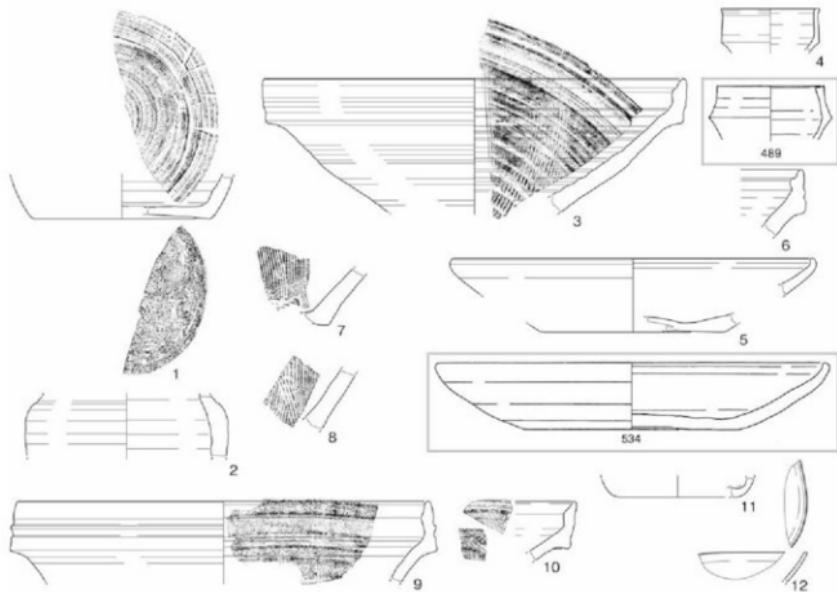


図3 鬼ヶ崎城跡出土備前焼1(図内には伊部南大窯跡東3号室)

No.	調査区	器種	出土位置<総合前縦片数>/ [接合後縦片数]	備考(凡例:(計) 計測値 (胎) 胎色土調 (底) 胎土混入物 (成) 成形 (調) 調整 (他) その他特記事項 (No.) 登録番号)	
				(計)	(胎)
1	A区 盆	4SD0097F<1>/1			
				(計) 亂れ (145) (胎) N5-/6K色 (底) 白色粒多量/砂粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ (No.) S1218	
2	A区 盆	FD5348H<1>/1			
				(計) 最大 (166) (胎) N4-/0K色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S1066	
3	A区 瓢箪	FD5346V<1>/1			
				(計) 11径 (342) (胎) 2.5YR6-/4Z5-6K褐色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (他) 内面42 直径12本の跡目 (No.) S1011	
4	A区 磁人	FD5345V<1>/1			
				(計) 11径 (78) (胎) 10YR5-/1輪灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S0709	
5	A区 平鉢	FD5644V<3>, FD5744V<1>/3			
				(計) 11径 (256) (胎) 黄褐 (150)/最高 (60) (底) 7.5YR6-/1赤灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ/底部スリズ (No.) S1026	
6	B区 瓢箪	4SD091第3号列直直 (FD3862)<1>/1			
				(計) NS-/0K色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S1213	
7	C区 瓢箪	FD3561V<1>/1			
				(計) 10YR4-/1褐色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ (他) 内面鋸目 (No.) S1097	
8	C区 瓢箪	FD3662V<1>/1			
				(計) 7.5YR5-/1赤灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ (他) 錐錐目 (No.) S1098	
9	C区 瓢箪	FD3764V<1>/1			
				(計) 11径 (336) (胎) 7.5YR5-/1輪灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (他) 内面鋸目 (No.) S087	
10	C区 瓢箪	FD3662V<III>1, FD3662V<1>, FD3663HV<1>, FD3664V<1>/4			
				(計) 2.5Y5-/1輪灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (他) 内面鋸目 (No.) S1086	
11	D区 漆器	5SX00607 (FD6006)<1>/1			
				(計) 亂れ (95) (胎) NS-/0K色 (底) 白色粒少量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S1125	
12	D区 瓢箪	FD4257V<1>/1			
				(計) 10YR5-/1輪灰色 (底) 白色粒少量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S1160	
13	D区 磁人	FD4256V<1>/1			
				(計) 亂れ (50) (胎) 2.5Y5-/1赤灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (他) 外面鋸目 (No.) S1082	
14	E区 漆器	FD5558V<1>/1			
				(計) NS-/0K色 (底) 白色粒少量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S1173	
15	E区 瓢箪	SSX2254K (FD5460)<2>, FD5461V<1>/1			
				(計) 亂れ (130) (胎) 2.5YR5-/1赤灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ/底部修復 (他) 内面鋸目27 直径11本 (No.) S209	
16	E区 瓢箪	FD5669V<1>/1			
				(計) NS-/0K色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (他) 内面鋸目 (No.) S1182	
17	E区 瓢箪	FD5559V<1>/1, FD5559W<1>/2			
				(計) 7.5YR5-/2輪灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ (No.) S1187	
18	E区 瓢箪	FD5669V<1>/1			
				(計) 7.5YR5-/1輪灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (他) 内面29 直径11本の鋸目 (No.) S1189	
19	E区 瓢箪	FD5669V<1>/1			
				(計) NS-/0K色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S1197	
20	E区 瓢箪	FD5667V<1>/1			
				(計) N4-/0K色 (底) 砂粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ/底部修復 (他) 内面鋸目 (No.) S200	
21	E区 瓢箪	FD5640V<1>/1			
				(計) 11径 (276) (胎) 5YR5-/1輪灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S2020	
22	E区 大盤	FD5460V<II>/2, FD5558V<1>/2			
				(計) 11径 (300) (胎) 2.5YR4-/1赤灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ナデ/内面ナデ (No.) S1185	
23	E区 漆器	FD5459V<II>/1			
				(計) 11径 (44) (胎) NS-/0K色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ/内面ロクロナデ (No.) S1194	
24	E区 建水	FD5660KH<1>, FD5669V<II>/1, FD5558V<1>/3			
				(計) 11径 (248) (胎) 亂れ (140) (底) 7. SYR6-/1輪灰色 (底) 白色粒多量 (成) ロクロ (調) 外面ロクロナデ デナケリ/内面ロクロナデ (他) 口縁端部詰め・削継後再調整 (No.) S2208	

表1 鬼ヶ崎城跡出土備前焼観察表

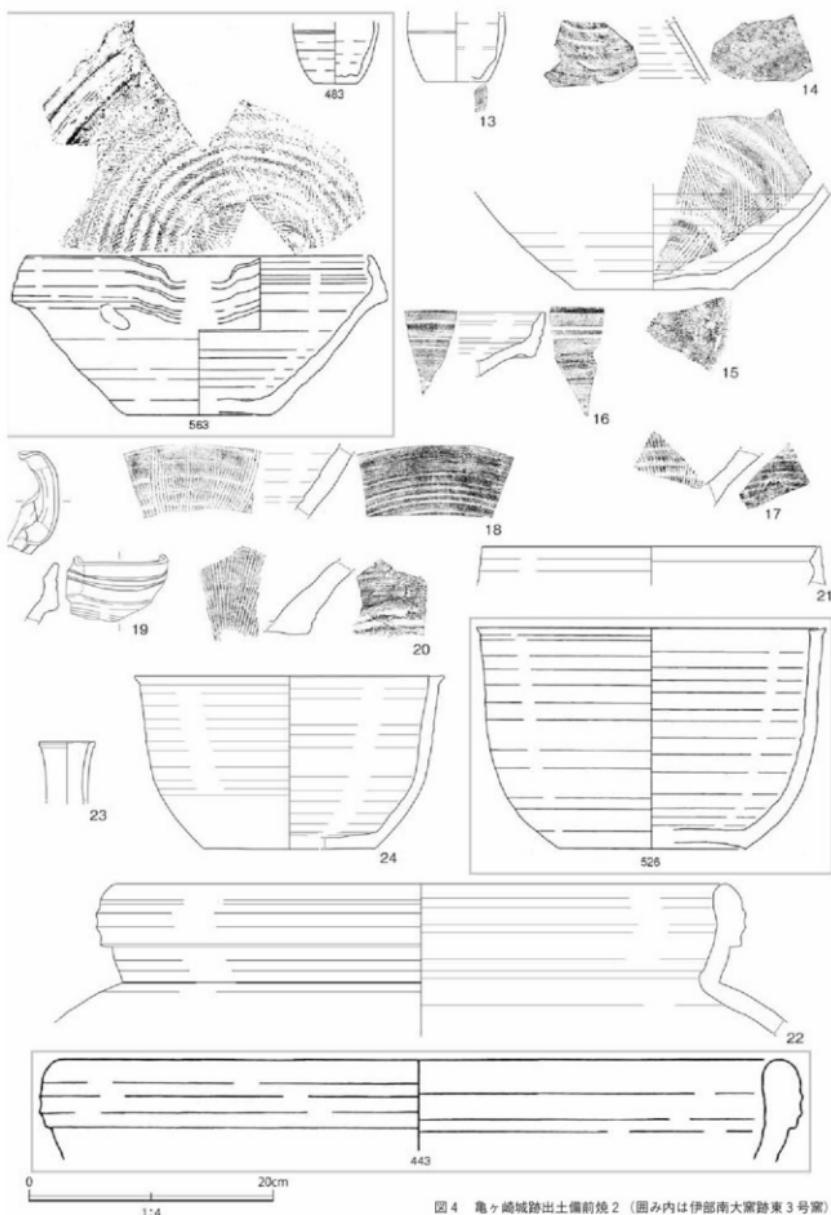


図4 亀ヶ崎城跡出土備前焼2（囲み内は伊部南大窯跡東3号窯）

線的またはやや湾曲した放射状で、鉢口同士が交差するものも認められる(8・15)。口縁内面のやや下がった位置に稜を持つものが多い。焼成が堅牢なため明確な使用痕が認められるものは少ないが、内面の摩減が顕著な個体(3・7・20)も確認できる。

大堺(22)は頸部が外反気味に立ち上がるが、口縁帶はやや内湾する。口縁帶の外面には、凸帯状に3条の稜が巡る。口縁帶の肥厚は顕著ではない。頸部と肩部の境界に細いヘラ状工具による調整痕が認められる。

平鉢(5)は口縁部が強く内側に屈曲する。屈曲部は丸みを帯びる。底部は胎土に空気が混入したことによって焼成時に膨らんでいる。内面に黄褐色のゴマ状の自然釉がかかる。

茶入は珠算玉型(4)、胴部に沈線を施すもの(13)があり、伊部南大窯跡東3号窯に類例が認められる(備前市教委2003)。

深鉢(24)は内外面にロクロ目が強く残り、外面下半はケズリ調整が施される。口縁部は外側が強く張り出し、内側には重ね焼きによる融着を剥離した痕跡が認められる。東3号窯に類例が認められる。

徳利は体部破片1点(14)、口縁部破片1点(23)が出土している。口縁部が玉縁状となり、ゆるく外反する。東3号窯製品と比較すると口縁部の外反が弱く、より後出の特徴を示す。体部破片の外面にはゴマ状の自然釉がかかる。

変形鉢(12)は薄作りで、ロクロ成形後に歪ませており、方形となると考えられる。口縁部内面が面取りされている。内面にゴマ状の自然釉がかかる。

亀ヶ崎城跡出土資料と東3号窯製品を比較すると、後出する特徴を示す徳利(23)や、類例の認められない変形鉢(12)、年代の特定の困難な体部・底部破片を除くと、大半の資料は形態的に類似し、ほぼ同時期と考えられる。東3号窯製品は乗岡福年1b期(乗岡2005)に該当し、文禄年間に入らない16世紀第4四半期と考えられている(石井2003)。この年代観は、亀ヶ崎城跡の第4・5次調査において出土した瀬戸美濃、越前等の陶磁器の年代や、天正12年(1584)・慶長5年(1600)といった紀年銘資料とも矛盾せず、この時期に比較的多数の備前焼が山形県の庄内地方に搬入されていることが明らかとなつた。

3 北海道・東北地方出土の備前焼

16~17世紀における北海道・東北地方において、管見の限りでは23遺跡で備前焼の出土を確認した(註4)。県別では北海道5遺跡、青森県8遺跡、秋田県2遺跡、山形県4遺跡、宮城県1遺跡、福島県3遺跡となる。遺跡の性格では城館・城下町が最も多い。集落・屋敷地も4遺跡で出土しているが、美々8遺跡や野監遺跡、浜通遺跡等、交易との関連が指摘されている遺跡が多い。一般集落の発掘例が少ないとてもよるが、大半が城館と流通関係の遺跡から出土していることを指摘できる。

器種は擂鉢が最も多く、21遺跡から出土している。次いで徳利(瓶類)、平鉢、水指・茶入れ等の各種茶道具が続く。

器種ごとの特徴を述べる。擂鉢は口縁帶下部が肥厚し断面三角形を呈するものが多く、乗岡福年近世1c期から2期に該当すると考えられる。根城跡出土資料(13)は口縁帶が高く立ち上がり、亀ヶ崎城跡と同時期、乗岡福年近世1b期に遡る可能性がある(註5)。

徳利の口縁部は近世追手門前通遺跡群(21)、城東町遺跡(22)から出土している。口縁端部が尖り、外面に稜を持つ形態は伊部南大窯跡西2号窯製品に類似する(石井2003)。

平鉢は守山城跡(20)、近世追手門前通遺跡群(21)から出土している。守山城跡出土資料は口縁部の屈曲が丸みを帯びるものと、屈曲部が小さくシャープな形態のものがあり、東3号窯と同時期か、やや先行すると考えられる。

次に一括性の高い出土状況を見ると、イルエカシ遺跡(1)では建物跡から出土し、初期伊万里皿、肥前陶器擂鉢が共伴する。(平取町遺跡調査会1989)。

十三湊遺跡(6)では青花皿、初期伊万里、肥前陶器砂目溝縁皿等1630年代を中心とした遺物と共に伴している。(関根2003)。

浜通遺跡(12)では遺物包含層から出土し、瀬戸美濃折筋皿、志野織部皿、肥前陶器擂鉢・碗・皿・向付等大量の陶磁器が共伴している。肥前陶器の主体は胎土目段階で砂目段階を少量含む。肥前磁器は含まない。慶長年間を主体とした17世紀第1四半期の年代が想定されている(青森埋文理1984)。

No.	遺跡名	所在地	器種	遺跡の性格	文献
1	イルエカシ道跡	北海道平取町	擂鉢	集落	平取町道跡調査を1989年イルエカシ道跡
2	笠加道跡	北海道千歳市	擂鉢	チャシ?	千歳市教育委員会1987千歳道跡調査
3	美々8道跡	北海道千歳市	擂鉢	集落	(財) 北海道埋蔵文化財センター1997「美々8道跡の遺跡群と、新千歳飛行場建設用地内青函電気財産調査報告書」(財) 北海道埋蔵文化財センター報告書1997年11月
4	瀬田内チャシ路	北海道瀬棚町	擂鉢	チャシ	磯根町道跡調査を1987年瀬棚町道跡調査報告書に記載松山教育委員会
5	上ノ国漁港道路	北海道上ノ国町	擂鉢	港湾	上ノ国教育委員会1987「上ノ国漁港道路」一期地盤調査58-60年度報告書に記載「上ノ国教育委員会」
6	十三湊道跡	青森県五所川原市	擂鉢	港湾	五所川原市1992「近世の漁場器との関連」(著者高島 貢、料理考) 4・中巻「近世」青森県
7	浪岡城跡	青森県青森市	擂鉢	城館	青森市教育委員会1994「浪岡城跡」(著者青森市教育委員会) 1-11月青森県道跡調査報告書に記載
8	坂越城跡	青森県弘前市	擂鉢	城館	弘前市教育委員会2006「全日本桜式鉢調査」(著者青森県道跡調査報告書V1)弘前市教育委員会 弘前市教育委員会2005「史跡津軽氏鉢調査」(著者青森県道跡調査報告書V1)弘前市教育委員会 青函電気財産調査文化財センター1992「防屈道跡発掘調査報告書」(著者青函電気財産調査文化財センター)参考
9	野屋道跡	青森県弘前市	擂鉢, 徳利	屋敷地	弘前市教育委員会2003「史跡津軽氏鉢調査(野屋道跡)」(著者青森県道跡調査報告書V1)
10	弘前城跡	青森県弘前市	擂鉢	城館	弘前市教育委員会2003「史跡津軽氏鉢調査(弘前城跡)」(著者青森県道跡調査報告書V1)
11	弘前城跡長勝寺橋	青森県弘前市	擂鉢	城館	弘前市教育委員会2003「史跡津軽氏鉢調査(弘前城跡)」(著者青森県道跡調査報告書V1)弘前市教育委員会
12	浜通道跡	青森県東通村	擂鉢	集落?	青函電気財産調査文化財センター1984「浜通道跡発掘調査報告書」(著者青函電気財産調査文化財センター)参考
13	根城跡	青森県八戸市	擂鉢	城館	八戸市教育委員会1983「根城跡」(著者青函電気財産調査文化財センター)報告書に記載
14	蘆本城跡	秋田県男鹿市	洗	城館	男鹿市教育委員会2003「蘆本城跡(1次)・第2次調査報告書」男鹿市教育委員会文化財保存部第28集
15	東根小辺町道跡	秋田県秋田市	擂鉢, 鉢, 壺	城下町	秋田県埋蔵文化財センター2005「東根小辺町道跡」(秋田県文化財保存部報告書)参考
16	亀ヶ崎城跡	山形県酒田市	擂鉢, 大鉢, 徳利, 平鉢, 深鉢, 变形鉢, 茶入	城館	(財) 山形県埋蔵文化財センター2004「亀ヶ崎城跡」(著者山形県埋蔵文化財センター)報告書に記載
17	鶴ヶ岡城跡	山形県鶴岡市	擂鉢, 盆	城館	(財) 山形県埋蔵文化財センター2004「鶴ヶ岡城跡」(著者山形県埋蔵文化財センター)報告書に記載
18	城南一丁目道跡	山形県山形市	擂鉢, 瓶	城館	(財) 山形県埋蔵文化財センター1999「城南一丁目道跡発掘調査報告書」(著者山形県埋蔵文化財センター)参考
19	反葉町道跡	(山形城三の丸)	擂鉢, 大鉢, 徳利, 平鉢, 深鉢, 变形鉢, 茶入	城館	山形市埋蔵文化財センター2004「反葉町道跡(山形城三の丸跡)」(著者山形市埋蔵文化財センター)報告書に記載
20	仙台城三の丸跡	宮城県仙台市	水槽, 徳利, 摔鉢	城館	仙台市教育委員会1990仙台城三の丸跡発掘調査報告書に仙台市文化財保存部報告書に記載
21	守山城跡	福島県郡山市	大皿, 徳利	城館	(財) 郡山市教育委員会2004「守山城跡」第一段2-2(著者郡山市教育委員会)郡山市教育委員会
22	近道手門前通	福島県三春町 (三春城下町)	擂鉢, 瓶, 徳利, 摔水	城下町	三春市教育委員会1995近道手門前通跡(三春城下町)「近道手門前通跡発掘調査報告書」(著者三春市教育委員会)参考
23	城東町道跡	(会津若松城下町)	擂鉢, 瓶, 徳利	城下町	会津若松市教育委員会1991「会津若松城下町道跡発掘調査報告書」(著者会津若松市文化財調査報告書)参考

表2 北海道・東北地方の備前焼出土遺跡

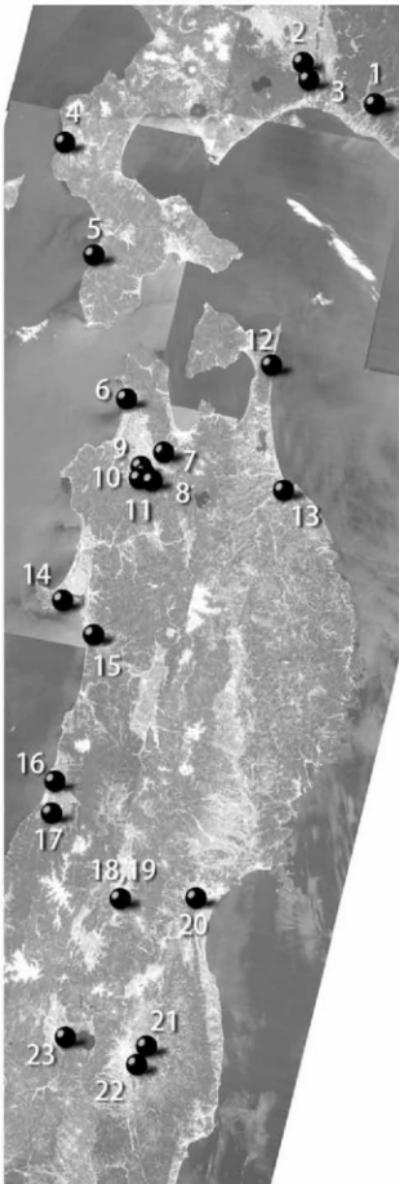
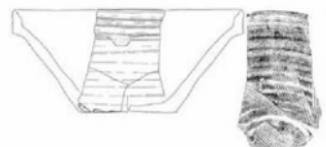
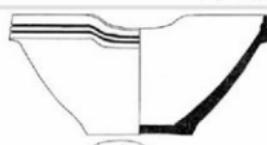
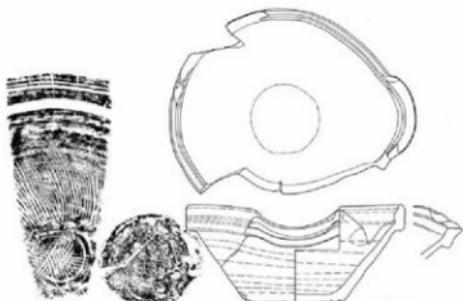


図5 北海道・東北地方の備前焼出土遺跡分布

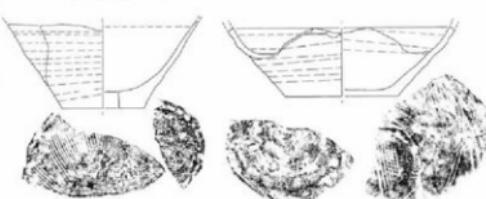


1 イルカシシ遺跡

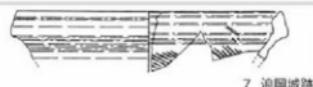


3 美々B 遺跡

4 湖田内チャッジ跡



5 上ノ国漁港遺跡



7 浪岡城跡



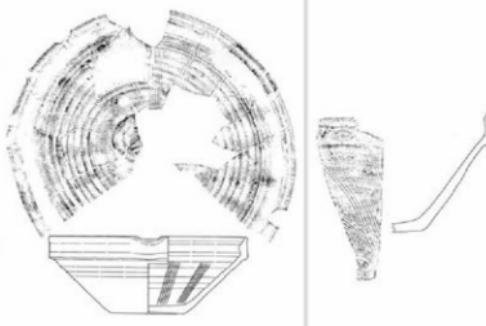
8 塚越城跡

10 弘前城跡



9 野脇遺跡

11 弘前城跡長勝寺構



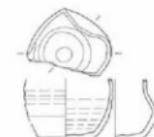
12 浜通遺跡

図6 北海道・東北地方出土の備前焼1

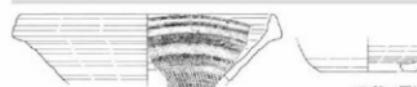
13 根城跡



14 桂本城跡



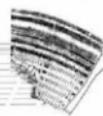
15 東根小屋町遺跡



17 鶴ヶ岡城跡



18 城南一丁目遺跡



19 双葉町遺跡



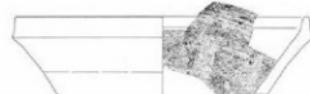
20 仙台城三の丸跡



21 守山城跡



22 近世追手門前通遺跡群



23 城東町遺跡

0 1:6 20cm

図7 北海道・東北地方出土の備前焼2

双葉町遺跡(19)の擂鉢底部は、底面に完形の陶磁器が並べ置かれた祭祀的な出土状況の遺構から出土している。肥前磁器皿・皿、肥前陶器砂目講縁皿等が共伴し、1650~1670年代と想定されている。他の備前焼も同時期の遺構から出土している(山形市教委2004)。

仙台城三の丸跡(20)の水指は一括廃棄土坑から出土しており、黄瀬戸皿・鼠志野大鉢・織部皿・向付・大平鉢・御深井袖皿、肥前陶器向付など茶道具の優品を含む多量の遺物が共伴している。寛永15年(1638)を下限とする年代が想定されている(仙台市教委1985)。

守山城跡(21)では火災整理層から一括して大量の遺物が出土している。白磁端反皿・青花内波皿・鈎皿・素三彩法花瓶・瀬戸美濃・かわらけ等が共伴している。肥前陶器・志野は含まれない。領主の交代等から慶長3年(1598)~同5年(1600)の年代が想定されている(郡山市理文2004)。

近世追手門前遺跡群(22)の平鉢・建水・徳利は焼土層から出土し、他の陶磁器等から1660年代を下限とする年代が想定されている(三春町教委2003)。

以上、遺物の形態的な特徴や一括資料の検討から、北海道・東北地方における備前焼の出土状況は以下のような特徴を指摘できる。

搬入が開始されるのは天正年間を中心とした16世紀第4四半期と考えられ、亀ヶ崎城跡・根城跡・守山城跡の資料がそれにあたる。この段階では点的な分布にとどまるが、17世紀前半になると日本海側を中心に面上に広がり、北海道まで分布範囲を広げる。

出土する遺跡は城館跡の他、港湾遺跡や交易に関係する集落が多いことが注目される。

器種は擂鉢を中心で、城館ではこれに茶道具が加わる。他の陶磁器の茶道具と共に伴する例も多い。17世紀には、特に日本海側で肥前陶器が擂鉢の主体となり多量に出土するが、備前焼は単独または数点のみの出土にとどまる例が多い。

4 おわりに

亀ヶ崎城跡出土の備前焼について、生産地の資料、周辺の消費地出土の資料と比較を行った。その結果、当地域で備前焼を出土する遺跡には、城館の他、流通に関係した遺跡が多いことを確認した。中世前半に点的に出土する滑石製石鍋・山茶碗と流通との関連が指摘されており(高橋2003)、備前焼も同様の性格を持つ遺物の可能性を指摘しておきたい。ただし、備前焼は茶道具として的一面も大きいことには注意を払う必要がある。

また、亀ヶ崎城跡出土の備前焼は、当地域に備前焼が搬入される初期の段階の資料であること、器種の豊富さや出土量とともに当地域では傑出した資料であることを確認することができた。特に東日本でもほとんど出土しない(註6)大壺の出土が注目される。亀ヶ崎城跡が酒田湊に隣接して立地し、城館と流通拠点の二つの性格を合わせ持った遺跡であることによると考えられる。

亀ヶ崎城跡の第4・5次調査では、出土した備前焼と同時期の大窯第3段階後半(藤澤2002)の瀬戸美濃皿が、完形のもの含め多数出土している。天正年間は、最上氏が庄内地方への干渉を強める時にあたる。この時期、出土遺物が量、質ともに充実することは、最上氏の酒田湊経営と関連すると考えられる。

今回は形態的特徴から年代比定を行ったが、今後報告書作成を進める中で、詳細な出土状況や共伴遺物の検討を行う必要がある。また、この地域で主体となる越前や肥前陶器との比率や使われ方の違いを検討し、備前焼がこの地域に搬入される意味を考えていきたい。

註

- 1) 今回の報告は報告書刊行前の中間報告であり、平成20年度に予定している報告書刊行をもって正式報告とする。
- 2) 個体識別法による。
- 3) 「変形鉢」以外の器種名は石井2003に掲った。
- 4) 報告書に備前焼と記載されているものを集成した。遺物は実見していない。
- 5) 22の城東町遺跡出土資料は、単純な口縁形態からより古い可能性もあるが、備前焼かどうかを含めて検討をする。
- 6) 東京、神奈川等で若干の出土例がある(伊藤2005)。

引用文献

- 石井 啓 2003『伊豆南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』備前市埋蔵文化財調査報告第5集
 伊藤 覧 2005『備前焼の流通』『備前焼フォーラム資料集 備前焼研究最前線Ⅰ』備前市歴史民俗資料館紀要7
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2004・2005『亀ヶ崎城跡第4・5次調査説明資料』
 高橋 学 2003『滑石製石鍋と山茶碗ー雄勝野町堀城跡出土の事例からー』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号
 乗岡 実 2005『備前』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』
 藤澤良祐 2002『瀬戸美濃編年の再検討』『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯
 山口博之 2004『亀ヶ崎城跡』『初期伊万里展』NHKプロモーション

執筆者（2007年3月1日現在）

菅原 哲文（すがわら・てつぶみ）	（財）山形県埋蔵文化財センター調査第一課
小林 圭一（こばやし・けいいち）	（財）山形県埋蔵文化財センター調査第一課
佐藤 祐輔（さとう・ゆうすけ）	（財）山形県埋蔵文化財センター調査第一課
吉田江美子（よしだ・えみこ）	（財）山形県埋蔵文化財センター調査第三課
山内 七恵（やまうち・ななえ）	（財）山形県埋蔵文化財センター調査第三課
植松 晚彦（うえまつ・あきひこ）	（財）山形県埋蔵文化財センター調査第二課
高桑 登（たかくわ・のぼる）	（財）山形県埋蔵文化財センター調査第二課

*論文等の表題英文表記については、早稲田大学准教授寺崎秀一郎氏に校閲していただきました。

研究紀要 第5号

2008年2月8日発行

編集・発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

T E L 0 2 3 - 6 7 2 - 5 3 0 1 (代)

F A X 0 2 3 - 6 7 2 - 5 5 8 6

U R L <http://www.yamagataibun.or.jp>

印 刷 アベ印刷株式会社

BULLETIN

OF

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

The fifth issue
2008.2

CONTENTS

Cultural Landscapes in Yamagata Prefecture: Settlements of the Western Yamagata Basin in Late Stage of Middle Jomon Period.	SUGAWARA Tetubumi	1
A Typological Consideration on the Specific Pottery Design so-called "Irikumi Sansa Mon" excuted on Pedestaled Dishes.	KOBAYASHI Keiichi	17
The Lids of Pottery from Northeastern Japan in Late Stage of Final Jomon Period.	SATO Yusuke	81
A Chronological Analysis of Haji Wares in Early Stage of Kofun Period: From the Viewpoint of Recent Investigations in Yamagata Prefecture.	YOSHIDA Emiko	113
A Corpus and Study of Wooden Effigies in the Shape of Pointed Board Excavated in Yamagata Prefecture.	YAMAUCHI Nanae	135
Pottery Transition from 9 th to 10 th Centuries in Northern Shonai Region, Yamagata Prefecture.	UEMATSU Akihiko	145
A Report on <i>Bizenyaki</i> from Kamegasaki Castle Site in Sakata, Yamagata Prefecture.	TAKAKUWA Noboru	169